
エキセントリック・ビューティ

炊飯器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エキセントリック・ビューティ

【Nコード】

N6490S

【作者名】

炊飯器

【あらすじ】

「2年前のあの日。僕は・・・

見てはいけないあの人に恋をした」

世間から疎まれる思春期の奴隷、漆根耕太。

彼が捜していた女性にはとんでもない秘密が隠されていた

僕をおもいつきり罵倒してくれ。・・・さあ、さあ！ 1（前書き）

「最高のエンターテインメントとは文学である」というモットーに基づいて書かれた小説です。

あくまで「読む側」ではなく「書く側」のエンターテインを追求したもので、意味不明な表現が多々ありますが、ご容赦ください

僕をおもいつきり罵倒してくれ。・・・さあ、さあ！ 1

今でもはつきりと思い出せる。あれは新学期最初の登校日のはずだから確か月曜日。あれ、火曜日だったか？とにかく桜の散り始めた2年前のあの日。僕は・・・

見てはいけないあの人に恋をした。

エキセントリック・ビューティ

・・・あるいはそれは何かの間違いだったのかもしれない。いや、今この場なら断言できる。これは間違いだ。そう、僕は間違いだ。

「ごめんなさい、漆根君」

そう、間違い。これは 僕は、間違えた。夢かとも思ったが違うらしい。いや、「胡蝶の夢」にあるように、今この僕こそが夢の産物なのかもしれないが、もしそうなら僕の夢を見ている人物は16年も寝ている事になる。そのうち僕の、つまり夢の方が長生きという事になるのかもしれない。

などという無駄な考え事にふけっているうちに彼女は僕の目の前から消えていた。

「かかか、お前またフられたのかよ」

教室の後ろでうなだれている僕を及川が勇気付けてくれる・・・はずもなく、僕はただけなされている。ああ、Mになれたらなんてステキなことだろう。

「しかし、お前の好みも分かりやすいなあ」及川は僕が今まで告白した（中には僕も既に忘れている人もいる）人を時系列順に指折

り数えていく。すぐに指の数が足りなくなつた。

「……つて全員綺麗どころで髪長いよな。よっ、面食い！」及川は自分のスキンヘッドの頭をぺちん、と叩いた。

「……」
「うっ、んそうだな。確かにお前は顔は悪くない。癒し系に見えなくもないしな。不本意だがそれは俺も認めよう。……ただ、名前がよくないな。漆根なんて黒っぽくて地味な苗字はダメだろ。言いくらい上に後半は『しね』じゃん？」

「……」
「まあ、多分フッタ子たちはこう思ってるね」

及川は大きく息を吸い込んだ。そこから発せられるのは煉獄火炎よりもダメージを受ける言葉だ。

「『漆根、死ね』」

「……」
「婿入りして苗字でも変えればいい。あつ、そうか。婿入りしようにも彼女がいらないんだっけ？残念！」再びパチン、と頭を叩く。

「……」
「更に、お前のコクリまくり症候群は有名だからな。自分以外に好きな人がめちやくちや多い男になびかないだろ、普通」

「……」
涙が出てきた。それも目に少したまる程度ではなく、ドバツと。告つてフられて、友人にけなされ、泣いている僕はさぞかし滑稽に見えるだろう。この場に2人しかいなくて本当に良かった。いや、どうだろう。そもそも僕がここにいる時点で相当最悪なのかもしれない。

「おいおい、泣くなよ。ほら、いいこともあるぞ。他の男子がお前のおかげで玉砕覚悟でコクリに行けるつてな。さながらスケープゴート……」

「わああああん」

僕は涙を煌めかせ走り去る。教室を出て、昇降口を出て、歩いて1

0分ほどの家の前を全速力で駆け抜けた。
16歳にもなる高校生が・・・。

僕をおもいつきり罵倒してくれ。・・・さあ、さあ！ 2

「・・・ぐすん」

僕は1人小川の橋の上で海に近く汚い川を見ながら涙を流す。

誰も分かってくれない。いや、分かってもらえらると思わない。別に僕は多感な時期だからとか、そういう理由で彼女を欲しているんじゃない（いや、それも否定はしないけれど）。

「あーあ、今頃あの人はどこにいるんだろう」

あれは2年前だったか。確かそうだ。・・・ともかくも新しいクラス編成にわくわくしながら家を早く出て、あまりにも早く出すぎたから遠回りしていた。そして、この橋の上で出会った。いや、実際はただすれ違っただけなのだが・・・。

あまりにも綺麗で、しかしあまりにも寂しそうな顔をしたあの女性に。。。

僕がそれを一目惚れと気付き、初恋を知ったのはその瞬間。そのとき僕はどれくらいここに佇んでいたのか覚えていない。多分長い時間、僕は放心したまま突っ立っていた。振り返ったとき、そこに彼女の姿はなかった。

「あの人は社会人・・・にしては若すぎたかな。制服を着てなかったらよく分らないけど」

あの頃は自分のことを大人だと思っていたが、高校生になった僕から見ればやっぱり子供だ。そのとき僕が子供だったばかりに年齢の推定など出来ず、ましてや声などかけようにもかけられるはずなかった。

「はあ、どうして諦められないんだろう」

今までいろんなことを諦めてきた。いろんなことから逃げてきた。

そんな僕をみんなはかつこ悪いと後ろ指を差す。そして、このことだけは諦めないからかつこ悪いという。まるでこの感情が悪なんだとでも言うように。

「えっと、あの・・・違います！」ようやく僕は声を上げることができた。

「僕は漆根耕太です」言った後は、心臓がバクバクして止まらなかつた。僕はそつと制服の上から自分の胸に手を置いた。鼓動を感じるくらいには掌の触角は回復していた。

「ん？僕は漆、猫、歌？なんだその名詞の羅列は。・・・ああ、わかつたぞ」彼女は小さく微笑んでみせる。

「ここに見事に言葉をいれて、文を完成させよという挑発か。ふふ、なかなか挑戦的な少年だ。そういうのは嫌いではないぞ。そうだな

「女性は顎に手を当てて考えるしぐさを見せる。

「その昔、麗しい漆色の猫が僕にこう言った『おみやあには歌うたいとしての才能がないにや』・・・といったところか」

彼女は笑い、僕は笑えなかつた。これは突つ込むべきなのだろうか。それとも真面目に言葉を交わすべきなのだろうか。しかしなんだろう、このありえない文構成。確かに僕の家では昔黒猫を飼っていたが、もちろん地毛だし、第一なんで猫に歌唱指導してもらってたんだよ。しかも諦められてるし・・・。

「ふむ、お気に召さないか？それではそうだな・・・」

「あの！」僕は震える足を奮い立たせて何とか立ち上がった。滑らないように足に力を込めて踏ん張る。既に靴の中まで、というかズボンから下はびしょぬれで、しかし呂律が回らないのは寒さのせいだけじゃないだろう。

「えっと、その、名前を・・・」

「名前を・・・変えたい、か？」僕の心中を知ってか知らずか、女性はその切り替えして来た。流すと話が進まなくなるので、名譽挽回もかねて僕は乗っかる。

「はい、じゃあ、漆根耕太で。漆の根っこを耕す男です」本来なら決して使わない名前紹介だが、相手に迅速に僕の名前を告げなくては確実に風邪を引いてしまうだろう。というか川から上がればいいだけなのだが、緊張のせい、身体が動かなかつた。なぜか僕の心

境は森で珍しい鳥を見つけたような感じだった。ようするに、動けば彼女が逃げてしまう気がした。

「あははっ、いいな、実に面白いぞ、少年。先ほどの問題を利用して自分を改名するとは。私は苅谷さつきだ。いや、苅谷さつきだったというべきか・・・」

僕は1つの石で2羽落とした喜びで、意味深な彼女の発言を聞き逃してしまった。

「それで、少年。君には会いたい人がいるらしいな」
「・・・」

僕は考える。彼女に会ったら何と言おうか、多分一日5回はシユミレートしてきた。よもや現実になるうとは思っていなかったけど。

「ええ、あなたに・・・」

震える声で告げた言葉はちゃんと彼女に届いただろうか。僕の渾身の決意を前にして、彼女は

とても悲しそうな顔をしていた。

「ああそうか。だからか。君は私を見たことがあるんだな？」彼女は表情を殺し、声から緩急を消し去った。その変化に驚きつつも、僕は無言で頷いた。

「そうか。それでは君は、私と同類なんだな・・・」

「は？」同類？僕と同類の人類がこの世に？まさかこの女性も異性に告白ばかりしているのか？と僕が首をかしげた瞬間、彼女は怪訝な顔をする。

「どうした？君と私は同類だ、と言っているんだ。簡単だろうか？」

彼女の後ろに1人の通行人。買い物袋を提げたおばさん。僕を怪訝そうに見ながらも、できるだけ関わらないように足を速め、橋を渡るうとした。彼女は、おばさんに向けて足を突き出す。おばさんは躓いて、しかし脅威のバランス感覚で持ち直した。そのことにも十分驚いたが、

「・・・ウン」

おばさんは自分が躓いたところを見て、首をかしげた。そして僕を

見て、早足で橋を渡りきっていった。僕は普通のおばさんの驚異的なバランス感覚に驚いたのではない。そうではなく、おばさんが目の前の女性に気付かなかったことに驚いていたのだ。自分に足をかけた彼女を、まるでないものとしていたことに驚いたのだ。おばさんがいなくなつて、そこに残っているのは僕と彼女。いや、本当は僕1人なのかもしれない。

「なあ、君も私と同じなんだろう？ そうだ、私はここにいながらにしてここにいない。人間に私を見ることは出来ない。幽霊というやつだ」彼女は笑う。シニカルに。しかしやっぱり目だけは悲しそうに。「……………」僕は言葉を発することが出来ない。

「ああ、なぜ君が幽霊だとわかったか、か。簡単だ。今の私は一時的にだが、人に姿を見せることが出来る。しかし、この力を得たのは最近だ。君の言うような時期に私の姿を見ることができたのは私と同じ、幽霊だけだ」

幽霊。

2年間。ずっと探して。ずっと求めて。何度も諦めかけて。ずっと諦められずにいた目の前の女性が……………。

しかし、ここで彼女に哀れみや軽蔑や恐怖を持つことは彼女に対する侮辱、冒瀆だと思った。だから僕は、唇を噛み締めながらも、拳を握り締めながらも、寒さも痛みも忘れながらも微笑んで、こう言った。

「いいえ、僕は生きてます。今、ここに生きてあなたを探していたんです」

彼女は僕をじつと見たまま固まっていた。ぼくはゆつくりと瞬きを繰り返す。目を閉じたら消えてしまいそうだったからさつきから怖くて出来なかつた瞬き。今この瞬間、彼女が1番消えてしまいそうなのこの瞬間に瞬きをしたのは、なぜか心に妙な確信があつたからだ。彼女は消えることはない、と。

「……………う、うそだ！ そんなはずない。じゃ、じゃあ、今の私が見えるか？」

欄干から身を乗り出す彼女。そう、彼女は確かにそこにいる。見えないはずがない。腰まで伸びる美しい髪に對称的な白い肌。そして僕を見る深い色をした双眸。まるで、生きている人と同じように。「君は自分が死んだことに気づいていないだけじゃないのか？突発的な事故だとそういう事もあると聞いたぞ」

僕はゆっくりと首を振った。そしてようやく足を踏み出し川から上がると彼女の目の前に立った。あるいは立ちはだかった。

「そこまで言うならいくらでも証明できますよ。例えば僕の家族、僕の友達、僕の先生。僕の写真。僕の映像」

目元を伝うのはどうして涙なんだろう。僕は嬉しいのだろうか、悲しいのだろうか。それとも本当にこれは涙なんだろうか。これは本当に僕なのだろうか。ただの壊れた人形なんじゃないだろうか。

「……そうか」彼女は息を吐いた。それは生きている人とまったく同じような温かみの宿る手を伸ばし、僕の頬を撫でた。

「そうか……残念だ」そっと目を閉じた。そこにある煌めきは涙なのかもしれない。いや、きっと違う。なぜだろう、そんな気がする。

「そして、僕はずっとあなたのが好きでした。あなたのが諦められませんでした。あなたの正体を知っても、それでも、僕は……あなたが好きです」

「っ！……」彼女は驚き、不思議なものを見る目で僕を見た。その視線の中には悲しみも哀れみも横たわっている事を僕は知っている。これは直感ではなく、ただの経験。彼女の手が僕から離れる。

「……少し、私がいいというまで目を閉じてくれないか」小さく、弱弱しい彼女の言葉。そして僕は目を閉じる。経験ではなく直感で、彼女がいなくなると知りながらも。

2年前のあの日に僕が立ちすくんでいた時間とどちらが長かっただろうか、言葉もないまま目を開けた僕の視界に、彼女　　苅谷さつきさんの姿はなかった。

僕は大きく息を吸い、そしてそれを静かに吐いた。体の感覚はまだ戻ってこない。全身が凍りついたようだった。さすがに4月の川は寒い。いや、そうじゃないのかもしれない。寒さを感じないのは身体の数十倍数百数千倍も心が凍えているからなのかもしれない。「・・・そうだ、海に行こう」意味もなく、間違いだらけの僕は、一人かっこわるく呟いた。

僕をおもいつきり罵倒してくれ。・・・さあ、さあ！ 3

夕暮れの春の海岸に人の姿はない。そこは僕の悲しみを引き出すためのだけの舞台。終わりに「ブラボー」と叫べるような素敵な話じゃないし、叫ぶ客もない。この広い世界に僕1人だけ。僕は1人悲しみに打ちひしがれる。

「・・・ぐすつ」本当に滑稽だ。涙に悲しみを溶かして流し出す効果があるのだろうか。あるのだとすればあとどれくらいこうしていれば僕の悲しみは消え去るのだろうか。僕は堤防に体育座りをして海を眺める。小さな太陽は大きな海に沈んでゆく。

あべこべだ。

そう、あべこべ。距離が離れすぎていて、地球にいと太陽よりも海のほうが大きく見えるように。僕と彼女の距離はあまりにも遠すぎたから僕は手を伸ばそうとした。

「・・・会わなければ、よかったのに」
知らなければどんなに楽だったことだろう。だってそうだ。彼女と出会うその前、僕はごくごく普通の少年だった。そしてこの2年間持っていたほとんどの物を僕は捨てた。及川以外の友人はみんななくなってしまうたし、誰もが僕を滑稽だとなじる。家族だって僕とまともに向き合わなくなってしまうた。それなのに僕が手に入れたものは何も無い。勝手に自滅しただけだ。

涙は止め処なく溢れてゆく。僕の悲しみを押し流すのにと千年は必要だ。これからどうしようか。僕は取り留めもないことを考え始めた。海に向かってまっすぐに歩いていくのもいいのかもしれない。人生にリセットボタンはないけれど、電源を切ることにはできるんだから。

「・・・あれ？漆根じゃん」バイクのエンジン音が僕の背後で止んだ。

「・・・及川」僕の唯一の友人。

「なんだよなんだよ。もうウン回目の失恋なのにそんな落ち込んでこんな所で黄昏てんのかよ」及川は原チャリ（学校にばれたら停学）から降り、僕の隣に座った。

「及川あ」僕の涙の堰は完全に壊れた。目に穴でも開いたように涙の濁流が頬を伝った。

「っおい、大丈夫かよ。・・・ちよつと待ってる。自販機でなんか買ってくるからな」

少し、ほんの少しして、涙の止まらない僕の頬に熱いコーヒー缶が当てられた。

「あつっ！」僕は思わず仰け反り、及川を睨んだ。

「かっかっか・・・少しは落ち着いたか？」

どうやら涙は止まったみたいだ。心の傷はまったく癒える気配がないけど・・・。及川は何も聞かなかった。僕は何も言わなかった。

そんな及川に僕は深く感謝する。もつべきものは友人だとか、この僕が柄にもなく思ってしまった。小さな夕日は大きな海に沈んでゆく。

ばいばい太陽。また明日、会えたらいいね。

そして辺りが暗くなった頃、ようやく僕は家路に着いた。及川とはそのまま海で別れた。目にはもう涙の気配は消えうせていたが、泣き腫らした目に潮風がしみた。風も僕を攻め立てているみたいだ。

「ただいま」僕は出来るだけ静かに玄関の扉を開けた。会いたくない相手の存在を確認するために、いつものように帰宅の合図を出した。普段なら何のリアクションもないのに、今日のそいつは気まぐれだった。

「おかえり・・・ってなに！？目、赤っ！そしてずぶ濡れな上にくさっ！！」今の僕の状態をたった一行で表してくれる優しい言葉に僕は小さく溜息をついた。

「また失恋したの？それで川に身投げでもしたわけ？」見事に言い当てられる。しかしその言葉は当たってはいるが、本質からは逆に

遠ざかっていた。

「勘弁してよ、耕兄。中学でも凄い噂になってるんだけど。お陰であたしまでとばっちりくらってんだよ」ジロリと仇のように僕をにらむ。そんな僕の妹である。

「……」返す言葉もない。いつもなら反発する僕だが、今日の僕にはそんな気力はなかった。気力はなかったし、反発する意味も、権利も今の僕にはない。

「……悪かったよ、つむぎ。でも、それも今日で終わりだ」僕は玄関に鞆を置き、重力に逆らえずそこに座りこむ。頭がぼーっとする。風邪を引いたのかもしれない。いやどうだろう。自他共に認められる大バカヤロウの僕が風邪を引いたりするだろうか。

僕の発言がよほど不気味だったらしく（いつもならここで「そんな僕の勝手だろ」と声を上げる僕）、僕の妹、漆根つむぎは幽霊でも見たような顔をしている。

幽霊でも見た、か。まったく、笑えないよなあ。

「本当にすまないね。妹にここまで迷惑を掛けるなんて僕は兄貴失格、いや人間失格だ。なあ、つむぎ。日ごろの恨みを込めて僕をおもいつきり罵倒してくれ。……さあ、さあ！」

本物の、真性の変態的発言だった。しかしあながち冗談ではない。なんせ、あの人が幽霊　死者だという事で僕の二年間はまるで意味のないものになるのだから。僕はまったく意味のないことで妹に迷惑を掛けていたのだから。

あーあ、僕が誰かの夢ならよかったのに。

そう、考える。普段から卑屈な僕だが、ずぶぬれな上に精神的には消滅寸前なのでいつもの2周り、いや3周りくらい輪をかけて卑屈になっていた。だが、滑稽な僕にはそれくらいがちょうどいい。むしろまだ足りないくらいだ。だってそうだろう？意味もなく人に迷惑をかけてきたこの僕なんて、最初からいないほうが良かったのだ。「ちよつと、ほんとに大丈夫、耕兄？」

いつも平和なこの田舎町で自分の妹をここまでおびえさせたのは僕

が初めてなんじゃないだろうか。その事実が更に僕の卑屈に輪をかけた。

「大丈夫だよ。．．ああ、今の僕は臭いんだったな。そうだ、ゴミ箱を持ってきてくれないか。今から入るから」人間の尊厳を完全に捨てた卑屈っぷりである。しかし、ここまで自分を卑下しないと、今の状態が当然のように思わないと、僕はこれから生きていく自信がない。そもそも今現在、僕は生きるつもりはない。

「ああ、もう！わかったから、シャワー浴びてきなさい。着替え持ってきてあげるから！」ついにつむぎが普段滅多に見せない優しさを見せた。そんなに哀れに思ったのだろうか。

僕はうなだれたまま動かない。やっぱり風邪を引いたのだろうか、全身がだるかった。

「早く！」

「．．．．．わかったよ」

僕はのろのろと立ち上がり、風呂に向かう。通りがかった居間のテレビはつけっぱなしになっていた。僕の家は両親が共働きで、夜遅くまで帰ってこない。夕飯のしたくは母さんの指令を受けたつむぎか僕がやる。しかし、僕の料理は僕の好みを反映していて、異常に薄味なのでつむぎが文句をいい、最近では基本的につむぎの仕事になっている。しかしこれが結構上手く、美味い。しかし、最近の女子中学生の特技が料理というのはどうなんだろう。

「．．．．．別にいいのか」

制服を脱いでおいをかぐと確かに臭かった。自分のにおいには気づきにくいものだが、ひとたび身体から離れると敏感になるものだ。自分の現状においてもそうだ。さっきまでの僕は周りに迷惑を掛けても、それでも別にいいと思っていた。そうやって2年を過ごしてきた。本当に滑稽だ。

シャワーのお湯が熱い。僕はさっきのように床に座り込んで、シャワーを見つめた。目を閉じると意識が飛びそうになる。もう一生目を開けたくないと思った。そして、落ち着いた後に襲ってくる特有

の倦怠感。重力がロープか何かになって絡みついてくるみたいだ。いや、まだ落ち着いてなどいないのに既に身体は休もうとしている。「耕兄、着替えここに置いとくよ」

「……」
僕にはまったく釣り合わない出来のいい妹に、僕は返事をしなかった。

「……あーあ」
着替えて、風呂場から出て、全身が鉛になったような倦怠感に抵抗しながら、階段を一段一段ゆっくりと上ってゆく。僕の部屋は2階の階段を上がってすぐだ。その隣がつむぎの部屋、そして2階のリビングを挟んだ向こうが両親の寝室。今年で築4年目だが、綺麗好きなお母さんは休みの日には必ず掃除をし、僕たちが散らかすとやたら厳しいので、新築の清潔感はまだ感じられる。そんな明るい色をしたフロアリングに暗い顔した僕が佇む。

「……寝よう」
明日は学校を休もう、明後日も休もう。もう毎日が日曜日だ。……などと無理やりテンションを上げようとしてももともと存在しないものは持ち上がりようがなかった。僕は部屋のドアノブに手をかけた。体を預けるようにしてゆっくりとドアを開けた。

僕をおもいつきり罵倒してくれ。・・・さあ、さあ！ 4

「おや、遅かったな」
閉めた。

ドアに体重を預け、頭を押さえた。おいおい。僕はついに幻覚まで見え、幻聴まで聞こえるようになったらしい。どこかの国で脳移植プロジェクトでもやっていないだろうか。僕という存在を消して、不釣合いに健康的なこの体を誰かが活用してくれないだろうか。僕は頭を振って、再びドアを開けた。

「ノーリアクションでドアを閉めるとはなかなかの腕をしているな。私の予想以上だ」
閉めた。

「どうしたの、耕兄」
「うわあっ！」

背後からの声に本気で驚く僕。それに対して本気でおびえているつむぎ。しかし、それを払拭するためではなく、僕は笑った。生まれて初めて笑った気さえする。

・・・いや、そんなはずはないんだけど。

「なあ、つむぎ。人生は素晴らしいな。人生つてのは実に素晴らしい」

つむぎの顔は引きつっている。僕は構わず片膝をつき、胸の前で手を組んで顔を上げた。

「ああ、神よ。天におわしめす大いなる神よ。ここに私を生かしてください。感謝いたします」

「いやあっ！」 ついにつむぎは悲鳴をあげて自分の部屋に逃げた。僕はそんなことはまったく気にせずその後30秒ほど偉大な神様へ祈りの言葉を綴り、ようやく部屋の中に入った。

「2度目はくどいぞ。いや、2回目だから、というのもあるのか。しかし3回目まで来ると流星にだめなのだろうか。いやはや、現代

の笑いと言つのは奥が深い」

現代の笑いについて真剣に考えているのは

そう、苅谷さつきさんだった。

僕は後ろ手でドアを閉める。聞きたいことは山ほどある。しかし、何よりも先に聞かなければならないことがそこにはあった。

「・・・どうして僕のポテチを食べているんですか？」

僕の迫力のこもった目に、彼女は少し申し訳なさそうに「これか？」とポテチの袋をつまんだ。

「それを言うのなら女性を待たせる君もどうかと思うぞ。まったく、こんな時間までどこをほっつき歩いてたんだか」

・・・待たせた覚えはないし、まだ8時も回ってない。今どき幼稚園児だつてテンションをあげてテレビに注目している時間だ。やつらはなにげにバラエティを好むのだ。

「むっ、そうか。これは失言だったな」

「ちよつとそこから降りてここに正座してもらつていいですか？」ちなみに彼女は僕のベッドの上でポテチを食べていた。後でベランダに行つて布団を払わなければならぬだろう。僕が部屋のカーペットの上に座ると、彼女はしぶしぶ僕に従つて対面した。ベッドは彼女の形にちゃんと沈んでいる。生きている僕が寝るときと同じように。

「・・・どうしてここへ？」僕は昂ぶる感情を可能な限り隠しながら尋ねる。もしもの時の為に最低限のイニシアチブはとっておかなければ。もしもの時というのがどういう状態なのかわからないけど。「その前に1つ、私は君に文句を言わなければならない」彼女は背中に鉄の棒でも入つてそうなしゃんとした姿勢で、鋭い視線を僕に向けた。

「君は私に嘘をついた。改名せずとも君の名前は『漆根耕太』ではないか。私を騙すとはいつたいどういつつもりだ！」

「・・・」
あなたこそその天然っぷりはどういつつもりだ。萌えてしまつじや

ないか、ちくしょう。

「君から逃げてきてしばらくぶらぶらしていたら漆根の表札を見つけて、こうして忍び込んでいたのだ」

「……」

赤の他人だったらどうするつもりだったのだろうか。あ、すいません、間違いました、とはいかないだろう。いや、幽霊だから構わないのか。

あるいは、構われない、か。

「……どうやって入ったんですか？」返答によつては漆根家のセキユリティを見直さなければならぬ。

「玄関から。居間から出てきた少女は妹かな？かわいらしいではないか。ドアが開いたが誰も入ってこないのが怪訝な顔をしていたがマジかよ。というか僕が帰ってきたときに様子を見に来たのはそれが原因か。1度目はいいが、2度目はひどい、ではないだろう。一度目だけで十分不気味だ。まったく、なんてことをしてくれたんだお陰で僕は妹におびえられたじゃないか。いや、そこは彼女のせいじゃないんだけど。完全無欠に僕のせいなんだけど。」

「もういいか、正座はいやなんだ。足が痛い」彼女は足を崩し、ベッドに背を預けた。

足が痛い、か。本当に、幽霊らしからぬことを言う。命とはなんぞやと疑問に思うくらいに。

僕は立ち上がり、窓から外の世界を眺める。ちらと窓ガラスに映るベッドを見た。そこにはちゃんと彼女の姿がある。ベッドも人の形に凹んでいる。僕は窓ガラスに数回頭を打ち付け、カーテンを閉めた。

「……透明人間とかじゃないんですか？」

「それだったら君にも見えないだろう？」彼女はぐつと無防備に伸びをしてどうでもよさげに答える。

「それって幽霊でも同じなんじゃ……」

「ん？それもそうだな。しかし私もこんなのは初めての経験だから

な。体よい話をすれば、靈感とかじゃないのか？」

「・・・・・・・・」

そうなのだろうか。彼女の発言ではないが、僕だってこんな初めの経験だ。生まれてこのかた幽霊なんて見たことない。そもそも幽霊なんて信じていなかった。テレビの番組を見て、良くこんな怖いこと創作する人がいるなあ、と感心していたほどだ。

それでもこうして実際に見てしまえば信じないわけにはいかないだろう。

「そうそう、ひとつ提案がある」彼女は再度ベッドを沈ませながら言った。

「放浪するのも些か飽きた。次に飽きるまで私はここにいる事にするよ」

空気が、止まった気がした。

「ん？どうかしたか」

「・・・・・・・・は」

「歯？」

「はあああああ！？」

絶叫。生憎と僕の部屋は防音仕様ではない。隣の部屋でつむぎが驚いたのだろう、椅子から転げ落ちるような物音がした。しかし、今の僕にそんなことを気にかける余裕はない。気にかけている暇も、その必要もない。そんなのは今の発言に比べれば本当にどうでもいい、些細なことだ。

「・・・・・・・・そんな顔するな、いいではないか」

言葉にならない歓声を上げる僕。いったい隣の部屋でつむぎはどんなことを思っているのだろうか。僕を精神科に入れようと親に提案をする準備を進めているのかも。それどころか今既に病院に電話しているかもしれない。・・・・・・・・やりそうだ。

「うんうん。それでこそ、だな。君なら二つ返事で了承してくれると信じていた」

彼女はニツコリと笑う。その笑顔は魅力的で大人っぽく、儂そうで

美しい。

「・・・それで」

一転、彼女は深刻そうな、極めて深刻そうな顔をした。僕も自然真面目な顔になってしまった。何か、彼女の体質に関する深刻なことだろうか。例えば僕が負わなければならぬ義務だとか。

「・・・このダブルクランキーというのを食べてもいいだろうか」
懇願するような上目遣いの前では僕の抵抗力は儂く塵芥となった。

「さっきも思ってたんですけど」僕の了承を待たず、おいしそうにお菓子をほおばる彼女を見ながら僕は疑問を口にする。

「幽霊つて食べるんですね」

「エネルギーを得ずにどうやって活動するんだ？」

「・・・」

そうだけど。そうなんだけどっ！

・・・なんか拍子抜けだ。

ともかくも、僕は見てはいけなかったこの人と、一緒に生活する事になった。

それは僕にスリーサイズを測れっていう振りですか？ 1

「ほら、起きろ。起きるのだ」

「・・・んっ」僕は胸に重量を感じつつ、目を覚ます。ああ、これはあれだ。金縛りの時に胸が重くなり、目を開けるとそこに幽霊がいるっていうやつだ。目を開けるな。目を開けるな。目を開けるな。目を開けてしまった。そこにいたのは僕の予想通り僕に馬乗りになる幽霊。・・・しかも顔が異常に近い。近すぎて焦点が定まらなかった。

「うわあああ！！」思わず幽霊を突き飛ばし、背筋だけで起き上がり、後ずさる僕。後ずさりすぎて壁に頭を打ち付けた。思わずうずくまる。

「・・・あいたた」彼女 苅谷さつきさんは僕が寝ていた布団の上に仰向けになっていた。ていうか幽霊に痛覚つてあるのか？

「当たり前だ。人のことをなんだと思っている」

「・・・」

「ちよつと、耕兄。朝からうるさい」僕以上に声を張り上げてパジヤマ姿のつむぎがノックもなく部屋に乗り込んできた。

「ん？どうして床に布団敷いてるの？ベッドに寝ればいいじゃない」幽霊なのに普通に睡眠をとるといふ彼女がどうしても譲らず僕はカーペットに來客用の布団を敷いて寝ていた・・・なんて言えないな。言ったら確実に今日から僕の部屋は病院だ。

「・・・ちよつと、気分です。たまには布団もいいもんだぞ」

「ふーん」つむぎはどうでも良さそうに言って、僕をじつと見る。その目にはいつものように実験動物を見るような憐憫と軽蔑が込められていた。

つむぎはひとしきり僕を観察すると、身を翻して部屋を出て行った。ドアを強く閉めるのも忘れない。僕はさつきさんを睨む。

「どついつつもりですか、さつきさん」僕の咎めるような発言にさ

つきさんは唇を尖らせた。あーやべ、超かわいい。

「何を言っているのだ。寝返りを打って目覚ましを壊してしまったから起こしてやったというのに」

僕ははっとして部屋中を見回す。僕の愛用している目覚まし時計だったものはなぜかベッドから僕の寝ていた布団を挟んだ更に向こうの壁の近くに転がっていた。

「……え〜〜〜〜、そんなバカな。」

目覚ましはものの見事に破壊されていた。もう、それがどんな構造をしていたのかもわからないほどばらばらだった。ご丁寧に壁が凹んでいる。ああ、絶対母さんに怒られるな。多分両足をつかまれて窓からつるされるんだろうなあ。

「さつきさん。絶対寝返りじゃないでしょう」そんな人間、僕は認めない。添い寝不可だ。……人間という定義が果たして彼女に当てはまるかどうかは別として。

「……てへっ」かわいく言って、頭をコツンと叩くさつきさん。いたずらっぽく舌を出すのも忘れない。僕は揺らぎそうになったが、何とか理性をフル動員してこらえ、目元に人差し指を当てて、古畑任 郎のような推理力を披露してみせる。

「え〜、カバールのアクリルにひびが入っていますが、辛うじて6時、いつもセットしている時間に止まったのだと推測できます。つ・ま・り、私はこう推理する」

上目づかいでびしつとさつきさんを指差す僕。びくつと怯えたさつきさん。そんな姿を見ても僕は揺るがない。揺るぎませんとも。

「目覚ましは耳もとで鳴り、あなたは目を覚ます。そして憤慨したあなたは目覚ましを掴み、全力で壁へと叩きつけた」

「……仕方がなかったんだ。つい……」

「じゃなくて？」

「ごめんなさい」しゅんとうなだれてさつきさんは言う。しかし、寛容的で心が広い……といいね、とよくみんなに言われる僕はそれを許した。床に散らばった破片を拾い集める。

「・・・だが、君は私に対して礼を言うべきだ。絶対に」破片を拾うのを手伝いながら、さつきさんはふてくされて言った。

「ありがとうございます。これで目覚ましを買い換える決心がつかしました」僕は壊されていない壁掛け時計を見上げた。どうやら壊してすぐ起こしてくれたいらしい。まあ確かに目覚ましですぐ起きなかつた僕も悪いからおあいこという事にしようかな。絶対に割に合わないおあいください。

「それは助かる。ときに」さつきさんはとても深刻な顔をしていった。

「私はとても腹が減った」

「・・・」

本当にこの人は。大人みたいで子供な人だ。僕は立ち上がって破片を袋に入れると、大きく伸びをした。カーテンを開けると、毎朝毎朝律儀に顔を見せる太陽が眩しかった。

それは僕にスリーサイズを測れっていう振りですか？ 2

「・・・学校では話しかけないで下さいよ、さつきさん」学校までは歩いてほんの数分。実際はさつきさんと連れ立っているのだが、傍から見れば僕一人いるようにしか見えないだろう。それでも別に構わない。僕は十分に幸せだった。

快晴も快晴。雲ひとつない。やはり綺麗な夕焼けの次の日はよく晴れる。昨日のあの時は夕焼け空をとてもじゃないが綺麗な形で形容できなかったけど。でも今から思えば、あれはとても綺麗だった。

「わかつている。そういえば君は私の事をさつきさんと呼ぶが、私はまだ君の呼び名を決めていなかったな」

そういえばそうだ。「君」としか呼ばれていない。

「うゝむ。漆根耕太。呼び名は短いほうがいいな。あだ名を考えるか」

なんだろう、わくわくするな。確かに耕太は普通すぎる気もする。

二人だけのあだ名を決めるなんてまるで恋人のようじゃないか。

「やはりここは笑いを追求しなくてはいけないし」

「・・・」

本気か？

「そうだ！閃いたぞ。漆根だから、『シネ』って言うのはどうだ？」

「それはダメです、絶対！ダメ、ゼツタイ！愛する自分を大切に！」僕は努めて冷静に答える。ものすごく頑張って表情を押し殺している。多分及川あたりなら僕の額の怒りマークを見つけられるだろう。

「違う、違うぞ。アクセントは『ネ』じゃなくて『シ』の方にある。

『イネ』と同じだ」

「・・・却下します」

「そうか、では頭文字をとって『うつこ』てのはどうだ？」

「・・・」

うわあ、この人本格的にダメだ。一体僕をどうしたいんだ。なぜそ

んな大して恥ずかしくもないはずなのに羞恥をかきたてる呼び方を
・・・？

「これもダメか。では・・・おっ、ひらめいた!!」

さつきさんは自信満々な顔をしている。今度こそ大丈夫か。

「漆「ね」耕「た」で、『ネタ』だ」

「それはあんたが今やってることだ!!」

はっ、しまった。つい突っ込んでしまった。周りから奇異の目が向
けられている。そうなんだよな。周りから見れば僕は今1人で突然
叫び出した人になるんだよな。僕はその目から逃れるためにうつむ
いて、遠回りになる脇道に入った。

「・・・耕太でいいですよ」うんざりした口調で言った。まったく
ただでさえ僕は変人というレッテル（それがたとえ正鵠を射ている
ものだとしても僕はそれをレッテルと言おう）を張られているの
から、これ以上のおかしな行動は慎みたいのだ。

「・・・まあ、いい。ただし！」さつきさんの人指し指が僕の鼻先
に突きつけられた。

「何かいい呼び名を見つけたら即座にそれで呼ぶからな!!」

「・・・」

臨むところだ。そうしたら僕はあなたを「さっちゃん」と呼んでや
る。

かなりぎりぎりに教室に入ったのに及川は来ていなかった。多分サ
ボるつもりだ。昨日自分がボロボロ泣いた席に着く。涙の跡など微
塵もない。まるでその記憶が夢だったみたいだ。いや、夢だったの
かもしれない。正直よく覚えていないから。その後の出来事に比べ
るとあまりにもどうでもいい、どうして僕は生きているのかという
疑問以上にどうでもいいことだ。今が楽しければそれでいい。

「耕太、君は好きなものは先に食べる派か？後に食べる派か？・・・
私は断然先に食べる。食事というのはマラソンと同じでスタートが
大事なのだ。最初に食事を楽しむ気分をつくっておけば食べ終わる

までおいしく食べられるからな」

「……………」僕は無視する。無視して「のたまう」に赤い蛍光ペンで線を引き、右側に「言う」の尊敬語「おっしゃる」と書く。

「耕太、君はベストセラーの本があると『みんなが読んでいるから』という理由で読んでしまうタイプか？私の場合はその作者によりけりだ。よりけりだが、大抵の場合は読んでしまう。話についていけないと悔しいからな」

「……………」僕は無視する。無視して「He devoted his life to studying biology」の下に「彼は人生を生物の研究に捧げた」と書いた。

「耕太、君は『身から出たさび』という言葉に対して恐怖を感じないか？言うならばそれは人体の酸化。すなわち老化現象だ。つまり自業自得を知るほどに年老いていくという事になる。…………その理論でいくと私に『身から出たさび』は使えないな。歳をとらないからな」

「……………」僕は無視する。ちよつと笑いそうになったけど。無視してノートに「原子は陽子と中性子からなる原子核と、その周りの電子から出来ている」と書いた。

「耕太、…………私のスリーサイズを知りたくないか？」

「……………」僕は…………無視、した。できた。頑張った、僕。しかし、そのせいで「 $8x + 13 < 4, 5x - 28 > 6$ 」という先生の質問に答えられなかった。

「耕太、…………いい加減にしろっ!!」

「……………」あんだこそいい加減にしろ、と思う前に僕の身体が後ろにのめった。

「いって〜」さつきさんが思い切り僕の椅子を後ろに倒したのだ。当然そこに座っていた僕は椅子と一緒に倒れる訳で。当然先生の目もクラスメイトの目も僕のほうに向く訳だ。そして当然サボりじゃなくて普通に寝坊していたらしく、遅刻して今僕の前に座っている

及川が爆笑する訳で、

「あつはっはっは！！漆根。お前小学生かよ」

「漆根君。放課後生物室までいらっしやい」

・・・当然授業を中断された生物担当にして担任の先生の怒りを買
うわけだ。

それは僕にスリーサイズを測れっていう振りですか？ 3

「・・・なんてことしてくれましたか、さつきさん」

というわけで放課後、無人の廊下。いまだに痛む腰をさすりながら僕はさつきさんに文句を言う。

「ふん、もう君とは口を利用してやらんっ！」さつきさんは拗ねてしまった。怖さは微塵もない。ていうか超かわいい。萌えだ。

「・・・僕は好きなものはとっとく派だし、読書自体ほとんどしないし、身から出たさびに恐怖は感じないし、スリーサイズは知りたいつー！」

さつきさんは頬を膨らめながらこっちをうかがうように見た。うわあ、すげえ。ドキドキしてきた。これはあれだ。ギャップだ。普段クールビューティーなのにどうしてそんな可愛らしい表情ができるんだ。

「・・・至極つまらない返答だな、うつつこよ」

「普通が一番ですよ、さくちゅきちゃん」

「その呼び方はやめろっ！！この辺がむず痒くなってくる！！」さつきさんは身もだえした。その悶え方にも品があるとは美しいってのはずるいよなあ。

「しかし読書をしないと・・・。ベッドの下にエロ本を隠してるのに」

「はっ、まさか。さつきさんは母さんが僕に送り込んだエロ本Gメンか！」

しまった。失策だ。処分しとけばよかった。突然のさつきさんの来訪でそんな暇なかったけど・・・。

「しかしなんだあのいかがわしいタイトル。女教師 放課後の・・・」

「あああああ！」僕は必死になってさつきさんの口を押さえた。

「言わなくていいですよ。わかりました。謝りますから。ごめんな

さい」

「・・・絶対僕は悪くないけど。」

さつきさんは口を抑えている僕の手をタップした。僕ははっとしてその手を離れた。そういえば彼女に自分から触れたのは初めてじゃないだろうか。もうこの手洗いのやめようかな。

「ぶはっ、ぜい、ぜい・・・何をするっ、苦しいだろう、ばか者！」

「・・・・・・・・」

苦しいのか？

「・・・なんか僕以外の全人類で僕にドッキリを仕掛けてるんじゃないかと思ひ始めました」僕は足を進める。生物室は4階だ。

「?・・・どうしてだ？」

「・・・・・・・・・・いえ、別に」

「あっ、そうそう。私のスリーサイズだが・・・」

「教えてくれるんですかっ!？」突然目を煌めかせた僕に対して、慄いたさつきさんは一歩後退しつつも言った。

「・・・測ったことないからわからん」さつきさんは胸を張る。結構大きめの胸を・・・。

くっくっく、しかし甘いな。こんなん僕がへこたれると思ったのか。僕はこの学校の生徒はもちろん先生の誰も知ってるコクリ魔だぞ。不本意だが僕以上の変人はいないとまで言わしめているんだ。「それは僕にスリーサイズを測れっていう振りですか？」

ゴッ

さつきさんの鉄拳が顔面にめり込んだ。・・・正しく、めり込んだ。

「ばっ、ばか者！私にセクハラをはたらくつもりかっ!」

さつきさんは叫んだが、僕の耳には届かなかった。・・・めっちゃくちゃ痛いのだ。鼻を押さえてうずくまった。悶絶して、決してきれいとはいえない廊下を駆けまわった。あ、でもこれ学校をきれいにするのに貢献してないかな。だとしたら結構いいことしてんじゃない僕。

「・・・さつきさんにこの手のセリフを言うのはやめよう。絶対次は

殺される。今度は拳が貫通するだろう。

「ほらっ、立てっ！生物室というのはここだろう」「さつきさんは無茶をおっしやった。

しかし、やっぱり目覚まし時計を壊したパワーは本物だ。帰りに買うのはものすごく頑丈なやつにしよう。

「失礼します」

先生は遅かったわね、と短く言っつて、僕に雑務を押し付けて、さつさとどこかへ行ってしまった。僕は溜息を小さく　僕の目の前で山のプリントが4、5枚飛んでいくほど小さく　ついた。このプリントをホチキスで止める、という事らしい。たかだか椅子ごと後ろに倒れただけでこの仕打ちはどうだろう。十分体罰なんじゃないか？

「ところで耕太よ、今日お前が相手をしてくれない鬱憤を晴らそうと学校中をウロウロしていたのだが、君は非常に評判が悪いな」

「.....」

返す言葉もございません。すべて僕のしてきた所業のせいでございます。

「君はあれか？盛りのついたチンパンジーに対抗しているのか？」
うゝゝん。まず間違いなく負けちゃいけないけど、確実に僕のほうが勝っているけど、これは黙っておこう。僕にも尊厳というものがある。

「オットセイ・・・というわけではないだろうな。なんせ相当づられてるらしいし」

どうしても僕を動物に例えたいらしい。確かに一夫多妻制のオットセイとは違って僕はつらればなしだけど。

「しかし、そんな多感な少年を素直に受け止められるほど私は許容的ではないぞ」

「いやいやいやいや」

お笑い芸人並みに頭の上で大きく手を振る僕。

「あれは・・・あれです。さつきさんのための予行演習です」

あれ？信じてない目だ。おかしいな、結構いいこと言ったのに。

「その割には大した告白ではなかったな」
グサツ

「……………」

ものすごく傷ついた。ともすれば、今すぐ窓ガラスを割ってノーロ
ーパンジーを初体験してしまいそうだ。

「私的には436番目に付き合ったケンジの告白が1番よかったか
な」

「そんな軟派な女こっちだって願ひ下げだっ！」

僕は窓を開け、フレームに足をかけた。あ、やばい。遙か下に広がる
コンクリートが天国に見える。わーい。今から僕は天国に行くん
だ！

「……冗談だ、本気にするなっ！」僕を羽交い絞めにするさつき
さん。

「いえ、信じません！」対して僕は大きく首を振った。その勢いで
首が吹き飛んでいってしまったそうだ。まあ、吹き飛んだっていつか
さあ、天国へ向かって飛び立とう。

「信じてくれ！信じてくれたら、そうだな……いいことをしてや
ろう」

「信じるー！！」

僕はすぐに窓から離れ、椅子に座った。機械さながらのスピードで
ホチキス进行操作する。終わった頃には肩が上がらなくなっていた。

明日は筋肉痛になりそうだ。やっぱりこれは体罰なんじゃないか？

「それで、いいことって言うのは？」

「うむ、掌のマッサージだ」

「……………」

「……………」

僕はプリントをまとめ、両手で抱えた。これを職員室にまで持って
いかなくってはならない。つくづく人遣いの荒い先生だ。しかし、さ
つきさんが聞いてきたその僕の評価なら、しょうがないといえればし

ようがない気がする。なんせ日ごろの行いが悪いのだし。大事だ、
日ごろ。

「さあ、帰りましょうか」玄関で靴を履き替え、誰もいないのを確認して、さつきさんを振り返った。

「・・・あれ？」

いなかった。もしや、昇天してしまったのでは、というマイナス思考をしてしまったが、ここはプラス思考で行こう。きっとさつきさんは先に帰ってしまったのだ。もしくは部活動を見学でもしているのだろうか。

ちなみに僕は部活には所属していない。というか（教員も含めて）全校から腫れ物のような扱いをされ、粗大ごみのような目で見られている僕に居場所なんて無いのだ。しかしそんなことまったく気にしない僕。やっぱり壊れているのだろうか。

「まいつか。とりあえず目覚ましを買いに行かなきゃ」

僕はひとりごちる。店員さんに「思い切り叩きつけても壊れない目覚まし時計ありますか」と聞いたたらどんなりアクションをするのだろうか。ちょっと楽しみだった。

それは僕にスリーサイズを測れっていう振りですか？ 4

「ただいま」

家につく頃にはすっかり日が暮れていた。近所の家電ショップには気にいったものはなく、結局電車で隣町にまで買いに行った。お陰でかなり信憑性のある頑丈な目覚まし時計を購入。「10メートル上空から落としても壊れません」だそうだ。ていうかあるんだ、そんなニーズ。

玄関で帰宅を示してもいつもどおり、つむぎのリアクションはなし。これが通常。ちょっと安心。僕は一度部屋に戻る。重い荷物を持って結構歩いたので、疲れた。

「やあ、耕太、おかえり」

「ただいま、さつきさん。・・・って、何読んでるんですか」思わず赤面する僕。

「ん？これか？君の弱みを的確に握っておこうかな、と」

女性のファッションとはいかなるものかを写真に収めてひとつにまとめた本をさつきさんは眺めていた。

「オブラートに包むな！どう考えてもエロ本だろう！」ついにさつきさんに突っ込まれてしまった。

その本は決して女性のために作られたものではない。というより普通の女性なら明らかに読んで嫌悪感を抱くだろうそれをさつきさんはベッドに足を組んで座り、読んでいた。エロ本を讀んでいても様になっている。一体何に愛されているんだろうか。

「ていうか弱みを握るとか、僕たちそんな一触即発な関係なんですか？そんな2人が共同生活とは、どっかの漫画みたいな展開ですね」「知ってたか、耕太？女性の性欲は男性のそれをはるかに凌駕しているらしい」

「・・・・・・・・」

熟読していらっしやる。

「ああつ、何をする」さつきさんから本を取り上げる。これは今から処分しに行こう。問題ない。内容はほとんどすべて頭に入っている。

「では私も行こうかな。どこにあるのか知っていれば好きな時に読みにいけるからな」

「……」

気に入っちゃったよ。

「……さつきさんが変な人になっちゃってる。ああ、僕はどうすればいい。これは僕の責任なのだろうか。」

「それで、どこに捨てるのだ？」

「エロ本を捨てると思ったら川原以外ないでしょう」

「なんと！」

僕がその危険物を全てバッグに詰め、靴を履いて玄関を出たところで、さつきさんが信じられない、というような顔をした。

「雨が降ったらどうするのだ！読めなくなってしまっではないか」

「読むなよ！」

突っ込む僕。まったく、さつきさんは凄い。僕の我慢の限界をことごとく超えてくる。この人はあれか、僕を一流のお笑い芸人にするために現れたのだろうか。

「ついでに言うと、川の中に捨てます」

「鬼！鬼畜！環境破壊者！」さつきさんの罵声を一身に受ける僕。

ああ、なんだろう、この感じ。全然いやじゃないや。……むしろ、いい。

「……有機物ですよ。ちゃんと土に返ってくれますって」

「私の残念なこの感情は決して土に返らない！」

「……じゃあお金あげますから自分で買って下さいよ。少しの間なら人前に姿を表せるんでしょう？」

再び信じられない、というような顔をするさつきさん。

「な、何が目的だ、耕太。私を辱めてよろこぶのか？よろこぶという字はもちろん悦楽の悦なのだろうか？悦ぶのだろうか？君は真性の変

態だな」

「……」それは残念ながら否定できない。僕にそのつもりはまったくないのに、周りの評価はそうなってしまふのだ。それを言うならさつきさんだって完全な臆病者じゃないか。いや、別にエロ本買うのが勇気ってわけじゃないけど。

「とにかく捨てますよ。……そういえば、今日はどこ行ってたんです？まさかあの後すぐに家に戻った訳じゃないでしょう？」

街灯が照らす通りを歩いていたさつきさんは足を止めて押し黙った。意識的な無表情を見るのは今日初めてかもしれない。その表情もやつぱり綺麗だ。

「……私にも用事があつてな。まあ、日課のようなもののだが」さつきさんは足を止めた。空を見上げる。残念ながら今日は昨日と違って空は曇っている。唯一月がどこにあるかわかるくらいだ。さつきさんは目を細め、自嘲気味に笑った。

「君に似ているのかもかもしれないな。……私はな、耕太」

風がさつきさんの髪をなびかせる。僕はそんな姿から目をそらすことが出来なかった。

「探している人がいるんだ。名前も顔も覚えていない。でも、その人はずっと私を待っていると約束した……許嫁というやつだ」

ずっと考えていた。どうしてさつきさんは幽霊なのか、と。一般的にいつて、未練を残した人が幽霊になるのなら、こんなさばさばした性格のさつきさんはこの世に何の未練があるのだろうか、と。でも、聞く事が出来なかった。聞いたらさつきさんがどこかへいつてしまうような気がしていたから。けど……

「もう待っているかは分からない。もう死んでしまったかもしれない。そもそもそんなもの私の幻想だったのかもしれない。でも

」

私にはそれしかないから。

僕は拳を握り締めた。目を閉じると、後ろ向きに倒れてしまいそうだった。地に足がつかない感覚。さつきさんはいつもこんな感覚な

あ僕はどうなるんだ？代替品としての価値しかない不良品であるところのこの僕に一体何の意味があるんだ？

笑い続ける。身体が波に流されている。残念ながら、このあたりの潮流では海岸に戻されるだけだろう。僕の知らないどこか遠くに誘ってくれればよかったのに。この苦しみから僕を解放してくれればいいのに……。

「何がおかしいんだ？」

「……」僕は答えない。応えない。応えるべき答えを持っていない。

僕は身体を起こし、足をつく。いつの間にか水位は腰の位置に来ている。このあたりの海岸はともなだらかなので、これだけでもかなり流されたのだと実感できた。

「……」はは、悲しいですね「僕の身体の前には白波がたつ。さつきさんの周りもそうだ。さつきさんはちゃんとここにいます。でもほかの誰にも見られず、生きてはいない。やはりそれは悲しい。やはりそれは苦しい。受け入れることなど出来ない。

「そうか？私は悲しいとは思わない」さつきさんは自分の腰辺りで波を立てる海水を見つめる。彼女が何を思っているかなんて、僕にはわからない。言葉と裏腹に浮かべているその悲しそうな表情が何を意味しているのかもわからない。

「いいえ、悲しいですよ」僕は笑わない。笑わないままさつきさんを見て言った。

「どうしてあなたなんでしょうね。どうして他の誰かじゃないんでしょうね。……どうして僕なんでしょうね。なんて、なんて滑稽なんだ」

「……」

「もし、待ち人なんて存在が幻想だったらそうするんですか？そもそも何の手がかりも無く探せるはずがないでしょう」

「……」

「それにどうしてそんなこと僕に言ったんですか？どうして僕の前

に現れたんですか？どうして僕に関わったんですか？どうして僕に話しかけたんですか？……こんなに、こんなに悲しいのならどうして僕らは出会ったんでしょうか」

「……」

「教えて下さいよ。僕はどうすればいいんですか？僕にどうしろって言うんですか？あなたは何がしたいんですか？……ねえ、教えてくれよ！！」

「………耕太」

パシン、と頬が弾ける音がした。僕は目を細め、さつきさんを見る。「……これが、あなたの答えですか？」僕はシニカルに笑った。自嘲して笑った。嗤った。ああ、なんて悲しいんだ。僕の人生には答えがない。どこにもない。ゴールの無い長距離マラソン。僕は走る。周りには誰もいない。僕は走る。ただ走り続けている。終わるのはいつたいつだろうか。案外もう終わっているのかもしれないけれども、それに気付いていないなら結局は同じことだ。ただ、無為に、無意味に走り続けるだけ。

さつきさんは、ほんの少しだけ僕らを照らす月明かりの下、泣いていた。

「私は、私は……ただ、寂しかったただだ。一人で生きることが、苦しかったただだ」

「……だから僕に探し人の代わりにしろと？かまいませんよ。どんな人でした？どんな性格でした？どんな喋り方をしました？そつくりになつてあげますよ」

僕に意味なんてない。だったら、意味のある何かになつてやろう。そんな人生も悪くない。

パシン、と今度は反対側の頬が弾けた。さつきさんは僕の胸倉を掴み、押し倒した。もちろん押し倒された先は海の中。それでも僕は抵抗をしなかった。悲しい。それこそ、一思いに殺して欲しいほどに。僕のマラソンをもう終わらせて欲しかった。情緒不安定な少年が春の海で自殺。うん、僕にふさわしい実に滑稽な死に方だ。

しかし、僕の身体は引き上げられた。

そして呼吸する間もなく、キスされた。

「……………!!!」

僕は目を見開いた。息が出来ない。そして何よりもほんの指一本分の距離にさつきさんの顔がある。

あ、ヤバイ、死ぬかも。

「ごほつ、ごほつ」ようやく開放された僕はさつきみたいに水面に仰向けになりながらむせた。そして放心する。さつきまで心に渦巻いていた黒い何かはどこかへと去ってしまっていた。

「どうだ、私の真正正銘のファーストキスをくれてやったぞっ!! これでもお前は誰かの代わりだと叫ぶのか。私と出会わなければよかったというのかっ!?!」

僕は立つ。自分の足で。幽霊だけど、さつきさんにもちゃんとこの感覚があるのだろう。

「……………すいませんでした」僕は頭を下げる。顔ぎりぎりを漂う水面から潮の香りが脳に伝わる。

海は好きだ。すべてを受け止めてくれる気がするから。

海は好きだ。すべてを受け入れてくれる気がするから
肩に掌がやさしく置かれた。

「さあ、帰ろう。風邪を引くぞ」

そう言っつて岸に向かうさつきさんの濡れた服の袖を僕は引つ張る。

「さつきさん。あなたの人探し、僕に手伝わせてくれませんか?」

さつきさんが驚いた顔で振り返った。

「いいのか?」

僕は笑う。ちゃんと笑う。

「はい!」

僕たちは家へと帰る。家の明かりがまぶしくて、思わず目を細めた。

「月よりも綺麗ですね」と言っつて僕とさつきさんは笑い合った。

…………ちなみに、この後僕は風邪を引いた。

だから僕は誓ったのだ。

将来、サーファーにだけはなるものか、と。

お前はいつからそんなメイド気質になったんだ。

1

幸運なことに今日は土曜日。部活に入っていない僕にとっては風邪を引いてもいい日だ。・・・いや、別に平日でも構わないのか。そういえばそうだ。

ちなみにさつきさんにとって風邪という概念はないらしい。そもそも幽霊なのだから外界とは無関係、と言い張られた。それならどうして食事をするんだ、と反論したが、「わからん」と一蹴されてしまった。

「食えるものは食えるんだ。引かないものは引かないんだ。私に聞くなっ！」

見事な逆ギレっぷりだった。まあ実際のところ、本当に分からないらしいから正当ギレっっちゃ正当ギレなのだが、しかし僕にキレるな。僕のほうが分からん。

「・・・でも風邪引くなんて何年ぶりだろ」

僕はひとりごちる。自他共に認める大バカヤロウの僕は風邪を引いた記憶なんてほとんどない。もしかしたら引いたのに気付かなかつたのかもしれない。そう考えると、バカも捨てたもんじゃないかな、とも思うが、できれば捨ててしまいたい。・・・ムリだけど。

「なあ、耕太。お腹が減らないか？」さつきさんはベッドに寝転んで足をばたつかせながら雑誌を読んでいる。もちろん今度はエロいのではなく、普通の高校生男子が読むようなファッション誌だ。それでも読んでて面白いのだろうか。そして突然顔を上げ、そう告げたのだった。ゴロゴロしたり腹が減ったり、この人は欲望の権化か？「そういえば減りました」

枕元の目覚まし時計を見た。無事だ。もつとも、まだタイマーをセットしていないからかもしれないが。明日にはなくなっているかもしれない。午後3時。昼は何も食べずに寝ていたし、あらかた熱も引いて食欲が回復してきた。僕は起き上がり、伸びをした。どうや

ら体のたるさは消え去ったようだ。バカなりの根性でさつさと治つてしまったのだろう。やはりバカも捨てたもんじゃない。

僕はパジャマ姿のまま1階に降り、冷蔵庫を物色する。つむぎは友達と遊びに行つてるし、共働きの両親は土曜日も関係なく共働きのので、今漆根家は安全地帯だ。僕は昨晩の残り物等々を適当に盛り合わせ、二人前をお盆に乗せ、自分の部屋に向かう。本当はおいが残るから部屋で食べたくないけど、さつきさんはそうでなきゃ嫌だというんだからしょうがない。女王様には逆らえないのだ。

僕が戻つてくると、さつきさんは目を輝かせて雑誌を投げ捨てた。小さなテーブルを出して、食器を並べる。

「・・・私は野菜と肉と一緒に炒めるのはよくないと思うがな」

あ、今この人僕の好物を否定した。肉野菜炒めは肉の濃い味を野菜が完璧に中和するからいいんじゃないか！

「文句を言うならいいですよ、ふりかけだけでも」むつとした僕がそういうとさつきさんははつとした。

「いや、嘘だジョークだ冗談だ。複数の物を一緒に調理するのは最高だ。今度はヨーグルトとイワシと一緒に調理しよう」

「・・・いや、それはどうだろう。というかどんだけご飯が大事なんだろう。ふりかけもたまにはいいものだよ？」

「ダメだ！それではメインが米ではないか！いいか、メインは常におかずの方だ！おかずだけでも普通に食べられるが、米だけというのはきついだろう？そういうことだ。ドラゴ ポールにおいて悟空やベ ータが延々と出てきてても文句はないが、天津飯やらヤ チャ が延々と出てきたらどうだ？さすがに辟易するだろう？」

「・・・僕ベ ータ嫌いです」

ていうかなんでドラゴン ール詳しいんだろう。少年誌でも流石にここまで有名な話は女性でも知っているものなのだろうか。

「では君はふりかけで我慢しろ！おかずは私がもらおう！」

「あんたの論理はめちゃくちやか！」突っ込んでしまった。不覚にも・・・しかしここまで僕のツツコミが戻ってきたって事は体

調もそれなりに回復してきたという事だ。

「ちよつと、耕兄。1人で何言つてんの？うるさいんだけど」ノックも無しに部屋のドアが開けられた。

「……………あ、ども、つむぎさん。おかえり」

……………気付かなかつた。いつのまに帰つてたんだ。思わず敬語で対応しちゃつた。後ろにいる二人はきつとつむぎの友達だろう。きつとというか友達じゃなかったらどうしよう。一体何者だ？部下か？

「……………部屋でご飯食べてるのは1万4千5百26歩譲つて許すとして、」

それは譲つてるうちに入りません。

しかしここは完全に僕が悪いので言葉には出さないでおく。漆根家の法律に違反している訳だ。母さんにばれたら懲役1時間半だな。懲役つて言うか夫役だけど。

「……………なんで二人分あるの？」

「……………」

はっ、しまった。つむぎは気味悪そうに僕を見ている。漫画だったら目の下に縦線が入つてるところだ。後ろの友達も同様。いや、待つてくれ違つんだ。決して僕は変人じゃない。……………変かもしれないけど変人じゃない！

「……………さっきまでルルがいたんだ」

ちなみにルルというのはこの家に引越す前に買っていた黒猫だ。死んでしまったときは僕たちはどんなに泣いたことか。

つむぎの目が見開かれた。漫画で言う背景が黒くなつてるところだ。あとイナズマフラッシュが出る。そして信じられないものを見る目で僕を見る。僕はそれに臆さずに続ける。

「やれやれ、お前がノックせずに入ってくるから逃げ出しちゃつたじゃないか」

ドアが閉められた。無言で。

……………ああ、僕は最後に妹が僕に見せたあの哀れみの目を生涯忘れ

ることはないだろう。

「さつきさん・・・寝ていいですか？」

つむぎの撤退とともにさつきさんは再び現れた・・・らしい。僕視点では、ずっとテーブルの向かいにいたのだけ。しかし、箸を再び進めたのはドアが閉まってからだから、多分そうなのだろう。

「ダメだ、耕太。そうふてくされてばかりでは人間強くなれないぞ。あなたのせいなんですけど、という言葉は飲み込んでおく。なんだか正体を明かせないヒーローの気分だ。彼らも周囲の人間に不審がられながら生きてきたのだろうか。でもあの人たちってだいたいばれるよな。ばれてないのはコナ 君くらいか。まあヒーローじゃないし、そのうち結局ばれるんだろうけど。」

僕は食べ終わって二人分の食器をお盆に乗せ、流しまで運ぶ。漆根家の家法その46『流し場に使用済みの食器をそのままにするな』があるのでスポンジに洗剤を浸し、洗う。これを怠ると懲役どころじゃない、発狂する。・・・発狂するのは僕のほうじゃなくて母さんの方なんだけど。

「・・・・・・・・」

こう考えると母さん異常に潔癖だな。及川の部屋とか見たらどう思うんだろう。多分スーパースーパー人になる。あいつ自体はきれい好きなのに、部屋に物が多すぎて整理整頓ができなくなっているのだ。

お前はいつからそんなメイド気質になったんだ。

2

しばらくして、ふと気付いた。

「ええ、マジそれありえない!？」

壁一枚挟んで聞こえる女子中学生の和気藹々とした話声。会話内容までは聞き取れないが、とりあえず盛り上がりだけは伝わってくる。「どうした、耕太?」雑誌から顔を上げ、さつきさんは怪訝そうに僕を見た。僕はなんでもありません、と首を振る。

「ええ、ウソ」

壁一枚だけでこつとも空気が違うものだろうか。しかし、なんだろう、この盗み聞きしているような気分。あれだ、夏の海で水着姿の女の子に目が行ってしまう罪悪感。ただし、この場合は受信拒否ができない上に僕はまったく悪くはない、という条件付き。罪悪感を感じてしまうのは僕が律儀すぎるだろうか。

「僕ちよつと出てきます、さつきさんはどうしますか?」

「ん?なんだ、家出か?家出はいいな。なんというかこつ、自分の無力さを鮮明に思い描けるといっつか。しかし、家出から戻ってくる時の気まずさつたらないぞ。しかも家族はまったく自分のことなんか気にならなかったときなんてもう。む、耕太の場合家族が家出したこと自体に気付かないかも」

「違いますから」長い。なんて長いんだ。この人は勘違いからの派生だけで本が書けるんじゃないだろうか。しかしよしなしごとを言葉にするというのもある意味才能かもしれない。吉田兼行に匹敵できる。

「とにかく、今日家から出てないんで、ちよつと散歩してきます」

「あははっ。引きこもりの耕太が『今日家から出てない』とは傑作だ」

「……泣きますよ」重く傷ついた。さつきさんの中では僕は引きこもりの分類だったのか。本気で家に帰るのやめようかな。

「私はいい。今夏の特集に目を通しているんだ。」

「……………」

「あんたのほう引きこもりじゃないか、という言葉をぐつと、ぐつと飲み込む。」

とにかくも僕は部屋を出て（服はさつき着替えた。さつきさんがいたので風呂場で）、階段を下りようとした足をぴたりと止めた。数秒考え、つむぎの部屋をノックする。なぜか、和気藹々と続いていた声が止まった。

「散歩ついでに夕飯の買いだし行ってくるよ、何がいい？」

つむぎはドアを開け、上目遣いに僕を見た。もちろん上目遣いだ。

睨んでる訳じゃない。

「…………別にいいよ、寝てれば？」

つむぎの部屋にいる友達2人はじつと僕のことを見ていた。顔半面の筋肉が少し吊りあがっていて、汚いものを見ているようにも見える。しかし、この家に汚いものはほとんど無いのでデフォルトでこういう顔なのだろう。言及するのはよそう。そもそも人の顔に付いて描写するのはあまり上品なことじゃない。

「そういうなよ。ここんとこずつと任せっきりだったから今日は僕が作るよ。」

「…………別にいいよ、寝てれば？」後ろで友達2人が爆笑した。何で？もしかしたら一定時間ごとに笑わなければ死んでしまう病なのだろうか。災難だなあ。これも言及するのはよそう。

「僕だつてたまには進んで働いてみたりもするさ。特に今日はずっと寝てたからな。」

「…………別にいいよ、寝てらば？」

「……………」

かんでしまったよ、つむぎさん。声を上げて笑う二人と少し赤面するつむぎ。僕らは少し見詰め合って、唐突につむぎはドアを閉めた。締めきる前に小さな声で「魚」と言った。

「ぶつ、やれやれ。」

ドアが閉まった後も笑いの波は消えていなかった。僕は構わず家を出る。

僕は歩くのが好きだ。走るの嫌いやないけど進んでやろうとは思わない。自転車にいたっては自分のものなんて持ってない。特に必要が無いからだ。駅も学校も近い上に、結構な田舎なのでほかに行くべきところもない。必要な時は家族共有の自転車を使う。そう考えるとなんか消去法的な感じになったが、歩くのは好きだ。ゆったりと流れる風景は僕に焦りを忘れさせる。16歳でこんなことを言ってる僕は怠け者に見えるのだろうか。それならそれでいい。卒業後の進路は「仙人」とでもしておこうかな。まず間違いなくムリだけど。ていうかそんなこと口走ったらそろそろ病院が僕を待っているかもしれない。

コンビニは近くにあるのだが、生憎コンビニに魚は売っていないので、歩いて15分ほどのスーパーに行く。それこそ普段は自転車で行くような場所だが、僕はわざわざ歩いてきた。特に考えがあるわけじゃなく、ぼーっとしたかったからだ。僕の人生はぼーっとしている時間の比重が大きい。常人の数倍はある。別に自慢する事じゃないけど。最近、というかここ2、3日はぼーっとしてる暇が無かったので、いい機会だった。

スーパーから出てきた僕の両手にはサバやらレタスやらニンジンやら風呂の洗剤やらおよそ高校生とは相容れないものがあつた。調子に乗って買いつぎてしまったが、別に構わないだろう。サバも焼く場合はだいたい1人一切れだが、煮付けるのは一度に沢山やっても全然不自然じゃない。というのももさつきさんの分まで何とかしなくちゃいけないからだ。今後つむぎが焼き魚を作る場合はどうしようか。

「・・・いつそのことふりかけでよししてもらおうか」

「だからそれはダメだ！」

「うわっ!!!」僕は飛びのいた。横1メートルくらい。反復横とび

だったら新記録が出せそうなくらい素早く。

「いつからいたんですか？」

「君がぼーっとしながらスーパーに向かって歩いてるところからかな」

「……………」もの見事に最初からじゃん。なぜ気付かなかった、僕。

「来ないんじゃないかったですか？」僕が歩き始めると、さつきさんも僕に並んで歩いた。荷物が重い。それでも手持ちぶたさじやないんですか、とは言わない。紳士ですから。

「うむ、あの雑誌最後のほうは全部写真だったからな。パラパラとめくって終わりだ。それに耕太の妹達が入ってきて部屋の中を物色し始めたから何となくいづらくてな」

「まじっスか!？」僕は声を張り上げた。妹よ、何が狙いだ。

「ベッドの下とか探ってたな。あと本棚の奥とかもチェックしてた」
「……………」

絶対エロ本探してんじゃない。きっと僕の痴態をさらすつもりだったのだろう。絶対つむぎの発案じゃないだろうけど。それくらいには僕は妹のことを信じている。しかし残念だったな！もうそんなものはどこにもない。昨日の僕とは違うのだ。

「今は大したものないから別にいいですよ。ちゃんと片付けといってくれれば」僕は大人だ。

「ああ、そうだな。君には昨日捨てた雑誌以外面白いものが何も無いからな」

「……………」
ひどい言われようだ。エロ本が僕のアイデンティティという事だろうか。今から海に行けば海岸に流れ着いてないかな。

「ああ、そういえば、今日は日課無いんですか？」僕は尋ねる。風邪引いてうやむやになってるけど、僕も手伝うといった手前、そのまま流すことは出来ない。

「につか？につか、ニツカ…………え〜と……………」

「……………」あれ？僕の夢だった？だとしたら悪いこと聞いたやっとな。

「ああ、思い出した、日課か！探し人のことか！」

「『ああ』ってなんだよ！昨日『私にはそれしかないから』とか言っただのはどこの苅谷さつきだっ！」流石の僕もタメ口で突っ込みたくもなる。あれだ、ルフィで言うところのピースを捜すって言う目的も無く航海してる感じた。多分読者の中には忘れてる人もいるだろうけど…………。大事だぞ、目標。

「……………」あれは、週休二日制だから今日は休みだ」

「仕事なのか！？義務なのか！？」僕のリミッター外れっぱなし。

「まあ、待て待て。過重労働は危険だ。ワーカホリックにでもなったらどうする。隣で働いてる人まで働かなきゃ、って気にさせるんだぞ」

「幽霊のあなたを誰が意識するんですかっ！」

「……………」あ、傷ついた」

「すいません」しゅんとするさつきさんと素直に謝る僕。

「……………」ぷっ」さつきさんは噴き出し、僕も笑った。

「さあ、帰りましょうか」夕焼け。そういえばさつきさんとの記憶は夕方が多いな、などと考えたりした。

「うむ、少々小腹が空いた」

「……………」

さつき食べたばかりじゃん。まったく、どんだけ食べるんだろう。太らないか心配だ。

…………改めて考えてみると、客観的に見て、僕は一人で突っ込み、一人で怒鳴り、誰もいない空間に向かって謝っていた訳だ。人…………いなかったよ、な？

お前はいつからそんなメイド気質になったんだ。

3

「ただいま」

玄関を見ると、さつきまでであった可愛らしい靴が2足なくなっていた。暗くなって帰ったんだろう。僕は両手に提げたビニール袋をダインングテーブルの上に一度置き、二階に上がる。さつきさんは少しぶらぶらしてくると言っていた。休日出勤と残業はしない主義なのだそうなので、本当にぶらぶらしてくるのだらう。

「……………おかえり」

なんと！ここは楽園か。僕はしばし放心する。いつのまに僕の部屋にメイドが……………。

「何で僕の部屋掃除してんの？」

「……………ついで」

つむぎは僕の部屋のテーブルを片付け、掃除機をかけていた。一体何のついでで兄貴の部屋を掃除するんだ。お前はいつからそんなメイド気質になったんだ。

「ほら、今夜は耕兄がご飯作ってくれるからそのお返しに……………」

「そうかい」つむぎは僕に似て嘘がとても下手だ。間違っても普段はそんな殊勝な考え方をするやつじゃない。しかし、嘘だと分かってもその真意を人に悟らせないのは僕と一緒にいるのも、僕は偶然この行為が証拠隠滅であることを知っているのだが。

「お気に召すようなものは無かったら？」僕はちよつと意地悪をする。

「え？え？なんのこと？あ、あたしまったく分からないし」すっげー早口。

「……………」

目が超高速で泳いでいる。オリンピックに出たら金メダルだろうな、あのスイマー。しかし、しらばつくれるのもここまで下手だとは……………。まあ、素直なのはいいことか。少なくとも人に好かれる性質で

はある。騙されやすいともいえるけど。

「じゃ、じゃああたしはこれで」つむぎは掃除機をもってそそくさと僕の部屋を出て行った。壊れるんじゃないかってほど勢いよくドアを閉めた。

「まあ、いつか。ラッキー」

僕は部屋を見回す。証拠隠滅なら片付けだけで済むのに掃除機までかけてしまったのは漆根家としての悲しい習性と言ったところか。ともかくもそのお陰で僕は掃除する手間が省けたわけだ。

「・・・君に似て面白い娘だな」

「うわっ！」

さつきさんがいつの間にか僕の後ろにいた。

「・・・心臓に悪いですよ」さつきさんは満面の笑みだ。どうやらこうやって後ろから僕を脅かすのが気に入ってしまっただけらしい。どうしよう、これからことごとく登場の度に驚かされるわけだ。

「どこから入ってきたんですか？」間違いなくドアからじゃない。少なくともドアから入ってきたら気付くはずだ。

「窓からだ。開いていたぞ、無用心だな」

泥棒だぞ、物騒だな、と僕は声を漏らした。壁の向こうで再び掃除機の音が聞こえている。それこそついででつむぎが自分の部屋の掃除を始めたのだろう。照れ隠しだな。まったく、かわいい妹だ。

「しかし、うるしねつむぎ。漆、熱、麦、か。随分と面白いな、君の家族は」

そういえばそうだ。今まで気付かなかった。ていうか普通そんなこと気にしないだろ。

「そして君の両親の名前はなんと言っのかな？」

「・・・・・・・・秘密です」言ったら絶対がっかりするから。母さんは入籍した立場だから別に構わないとして、父さんは和史だからなねか、ってなんだ、ずし、ってなんだ、って話になる。いや、後者は図誌とか厨子とかあるけど・・・。

話をそらすために僕は部屋を飛び出し、キッチンに立った。またま

た男子高校生には不必要なスキルだが、漆根家の性質として僕ら兄妹は料理が上手い。ここ最近はお互いがお互いを高めあっているといつてもいい。切磋琢磨しあっている。少なくとも僕はそのつもりだ。もしかしたら、本当にもしかしたらつむぎは僕をけなしてるだけかもしれないけど。いやいや、まさかそんなことはあるまい。

「この大根、形にはらつきがあるね。それにお出汁もちゃんとらなかったでしょ。あとサバ少し煮過ぎね。お父さんとお母さんも後で食べるんだから、加熱したらふにゃふにゃになっちゃうじゃない」
「……………はい、すいません」妹が一通りの料理に手をつけるまで箸を取ることもない僕。僕はあれか、妹に弟子入りでもしているのか。いやしかしこういう立場になったのはしばらく手伝わなかった僕にも責任があるわけで、受け入れるべきなんだろうけど。ただ、なんていうか、こう……………みじめだ。

「美味しい、これはなかなかだぞ。やれば出来るではないか、耕太」
「……………ああ、幸せ」

つむぎが部屋に戻ったことを確認して呼んださつきさんはうってかわって僕を褒めてくれる。そうだ、例えば実の妹にボロクソ言われたって僕にはさつきさんの褒め言葉だけで十分なんだ。……………なんて考える僕に向上は望めないだろうな。

感想を聞いて天に昇り、僕も食事を再開する。美味しい、実に美味しいぞ。やっぱり嬉しさは何にも勝るおかずだ。

「ただ1つ2つ言わせてもらつと、出汁のとり方がまだまだ甘い。あとサバは煮付けすぎだぞ。もつとも妹のために作ったというのならちようどよかったのかもしれないが」

「……………精進します」

ちえつ、同じこと言われた。ちなみに料理において「僕はこれくらいが好きなんだよ」という論理を使つてはいけない。料理というのはあくまで食べてくれる人のことを考えるべきなのだ。というわけで素直に反省する僕。その反省が生かされるのはいつになるのかわからないけど。

僕はたとえ日曜といえども惰眠を貪るのが嫌いだ。ぼーっとするのは好きだが、同じ無意識でも寝て過ごすのは少しいやだ。というわけで目覚ましを7時にセットする。果たしてこいつの寿命は明日僕が止めるまで持つてくれるのか。「10メートル上から落としても大丈夫です」という店員の言を信じるとしよう。しかしなんだ、その耐久性。こいつには念能力でもこもっているのか？そしてなぜあんなにそんなニーズ。なんだが存在しているだけで突っ込みどころだらけだな。さてはこいつ、さつきさんの回し者

「そんなわけないだろう。さあ、眠い。電気を消せ」さつきさんはベッドの上でごろごろしている。しかもパジャマ姿。そそのなあ、なんていったらまた鉄拳だけど。・・・って、あれ？

「そのパジャマどうしたんですか？そういえば普段着も変わってましたよね」えらくサイズがあっていない。丈は短すぎるし、パジャマにしてはびっちりしている。

「ん？ああ。・・・まあ、私にもその程度の当てはあるんだ。気にするな」

まあ、さつきさんがそういうなら本当に当てがあるのだろう。しかしなんだろう、どこかで見えたことあるような服だな。よくよく考えれば昼間の服も見たことあるような気がする。

「き、気のせいだろう。そ、そんなことはどうでもいい、寝るぞ」さつきさんは早口で言う。僕は大きく気に留めず（実際そんなに興味あることじゃない）、電気を消した。

「おやすみなさい」僕は昼間散々寝た布団にもぐりこむ。しかし、寝つきのいい僕でも流石に昼間あれだけ寝れば寝にくくなる。10分くらい経って、一度身体を起こした。カーテンが微妙に開いていたのが気になってちゃんと閉めた。ドアの向こうで足音がする。このゆっくり歩く感じは父さんだな。風呂上りだろうか。

「さつきさん」期待せず声をかけてみたが、さつきさんはやはりもう眠っていた。かすかな寝息が聞こえる。まるで生きているように。

彼女がいるところはちゃんと布団が盛り上がっている。触れれば体温も感じる。それでも彼女はここにはいない。カーテンを開けて電気をつければガラスにもちゃんと映っている。少なくとも僕には見えている。だけど本当は彼女の姿はそこにはない。

さつきさんは寝返りを打った。寝る際も縛ったりしない長い黒髪が顔にかかっている。某ホラー映画の子さんみたいだったが、全く怖くはない。僕はその髪に触れ、少しのけて彼女の顔を見た。好きな人の寝顔を見る。彼女は幸せそうに眠っている。それだけで僕も幸せだ。でも、彼女の心の隙間は埋まらない。どこかにいる探し人を見つけるまで彼女の心が晴れ渡る日は無いのだろう。そしてそのとき、多分彼女はいなくなってしまう。僕の心には雨が降るかもしれない。それでも僕は。

「あなたの力になりたい。あなたに幸せになって欲しい」僕は呟く。さつきさんの顔を見つめたまま、決意をちゃんと言葉にした。

「……う……ん……。私の寝込みを襲ったら殺すぞ、耕太」

「……ですか」

それが僕の決意に対するさつきさんの返事だった。

ちなみにあと2段階残している 1

次の日。僕は久々・・・といっても2日ぶりだが、に目覚まし時計に起こされた。その音を心地よく感じつつ、僕は目を覚ました。

「・・・何してるんですか、さつきさん」

「・・・てへっ」

さつきさんは時計を掴んだまま大きく振りかぶっていた。時計の強度を調べるためには申し分ない衝撃だろうが、そのために傷つくのは僕の部屋の壁で、そのせいで怒られるのは僕なのでぜひともやめていただきたい。

「仕方ないだろ、条件反射なんだから。ビックリしたんだ」さつきさんは目覚まし時計を机の上に置いた。

「じゃああれですか、もし僕がさつきさんを後ろから脅かしたら同じ目にあうんですか」

なんてことだ。脅かされるのに脅かせないなんて。あ、でも当然っちゃ当然か。幽霊を脅かしたりしたらこの国の心霊スポットがなくなってしまうかねない。僕は別に構わないが、そういうのが好きな人もいるんだ。楽しみを奪うのはやめよう。

「大丈夫だ。せいぜいハイキックぐらいだな。流石に時計みたいに頭を掴んで地面に叩きつけたりはしないから安心して脅かせ」

「できるかっ！」どうして朝からそんなぞつとするような話を聞かされなければならぬんだ。ていうか朝から突っ込みをさせるな。

朝は低血圧なんだから。ああ、眩暈が。

「さあ、朝だ、朝食だ」さつきさんはしゃっとカーテンを開け、東向きの窓から太陽を受けた。さつきさんが影になっているので、僕は太陽を享受できない。そう、さつきさんはちゃんとここにいる。いるはずなのに・・・。

・・・まあ、いいか、そんなことは。

「なんかごろごろしてるのに、ご飯はしっかりいただくって牛みた

いな生活ですね。大人としてなんか義務的なのはないんですか？」
さつきさんは少しむっとして振り返った。

「いいんだ。私は第二の人生を歩んでいるんだから」

「定年したんですかっ!？」セカンドライフ……。あ、確かにそういうえばそうだ。言い得て妙なり。

「そうだ。ファーストライフは短かったがな。ちなみにもあと2段階残している」さつきさんは2本の指をこれ見よがしに立てた。

「フーザなのか？あんたはフリーなのか!？」

「そういうえばフーザってあんな強かったのにメカになった後トラクスに瞬殺だったよな。」

「それにちゃんと仕事ならしているじゃないか」さつきさんは得意げに言った。

「人探しですか？」いや、あれは仕事というよりかなり個人的な。

「いや、手のマツサージとか」

「あつた、そんな特技。忘れてたよ。ていうかあんなのじゃ就業時間3日のうちで2分じゃん!」いいな、そんな仕事。ぜひやりたい。

「あとそうだな。耕太のお守りとか」

「それはいつも迷惑かけてすいませんねえ!」何となく僕としては僕がさつきさんのお守りをしている感じなのだが。まあそこは言及するまい。水掛け論はダメだ。

日曜日で誰も起きてないうちに(僕のこの日曜も早く起きる習慣は漆根家の習性ではない。僕固有のものだ)朝食をとり、昨日と同じように部屋でごろごろする。確かに、まったく生産的ではない。

「あ、そういうえば知らなかったかもしれないですけど、僕平日は学校なんですよ。だからさつきさんの人探しの休日を変えてくれませんか」僕が声をかけると、さつきさんは僕の部屋にある数少ない漫画本から顔を上げた。

「なに〜!ダメだダメだ。私は他人の都合で自分の予定を帰るのが5番目に嫌いだ!君が変えればいいだろう!」

「……………」

ムチャ言うなよ。学校だよ!?!しかも5番目かよ。それぐらいなら割愛しろよ!

「・・・まあ、いいだろう」「さつきさんはしぶしぶ承諾してくれた。・・・いいのかよ?」

「それで、なんか手がかりとかあるんですか?」

「言っただろう。顔も名前も一切覚えていない」

「そうですね。じゃあ今までどうやって探してたんですか?」というかそれは探していたというのか。ただぶらぶらしていたともいえる。

「なんとなくかな。雰囲気というか・・・。覚えている事はある。

年齢は私より5つくらい上だった。何となく君に似ていなくもない」

「・・・それってダメ人間ってことですよ」

あ、自分で自分のことダメって言っちゃった。る 剣時代の和 伸 宏じゃないんだから。

「そうだ、君はダメ人間じゃないぞ。どちらかというと人間ダメだ」
「・・・」

うん、もうどーでもいいや。

「・・・と、まあ冗談はともかく、なんとなくかな、私のポケを1つ残さず拾ってくれたな」

「ああ、それは凄いですね。僕にはまったくまね出来そうにない。

どこの大阪から来たお笑い芸人の方なんですか?」

「お笑い芸人?なんのことだ?・・・覚えている光景は・・・夏の日だな。山の中の豪邸。あれは別荘か。私は森で迷って泣いていた」

「いつの話ですか?」ていうか、そんなに裕福だったの、さつきさん。

「ん?あれは・・・10歳くらいかな。・・・まあそれであの人が私を探しに来てくれたんだ」

「・・・どれくらい昔の話ですか?」

「それがさっぱり分からん。生前のことで思い出せることなんてそ

れくらいしかない。気付いたら幽霊だったからな」

「そう、ですか」思い出がない。自分自身が何者かわからない。それは足元がおぼつかないという事だ。確かにそれは幽霊の定義にはぴったりなのかもしれない。あんなに驚いた。そしてかなりシヨックだったな。最強だと思っていた悟空がベータたちにはまったく歯がたたないと知ったときぐらいシヨックだった」

「……………」

微妙。

「うそだ。ドラゴボールを読んだのは幽霊になつてからだ」さつきさんは含み笑いをした。何を含んでいるかわからないが。

「まあ、そういうわけで見覚えのありそうな場所をウロウロして今はここにいるわけだ」

「見覚えがあるんですか？」だとしたらかなり近づいているのかもしれない。

「いや、わからないな。もしかしたら前に一度来た時の光景をそう錯覚しているだけかもしれない」

「結局記憶だけの手がかりか……」僕は黙って思考する。もちろんコン君みたいに90°に開いた指を当てたりはしなかったけど。しかしあれって現実でやるとかなりダサいよな。

「ああ、めんどくさくなってきた。やめないか？」

「なんだそりゃ。あんたはあれか？秋あたりにやる気が無くなる受験生か？」

きついんだよな、あれ。高校受験でもめんどくさくなった。しかもまだまだ受験まで時間があるってのがいただけない。大学受験はもつときついんだろうな。ああ、萎える。

「まあ、そんな焦ることはない。気長に行こう」

「焦らないと褪せるんですよ」僕の格言。結構いいな、今度学校で使って見るか。いちいち後者の漢字を説明しなくちゃいけないのが面倒そうだけど。

・・・ていうか僕には話す相手がいないか。ダメだ。

「大丈夫だ。なあ、耕太、一緒に老後を過ごそうじゃないか」さつきさんはベッドに寝そべってごろごろし始めた。ああ、なるほど。本気で面倒なんだ。

「いや、そりゃ僕にとってはそれはとても嬉しいですけど、そもそもいけないでしょう」

「む、まあそうだな」乱れた髪の間隙からさつきさんが僕を見る。怖いよー。

「まずはさつきさんのことについて調べてみた方がよくないですか？少なくとも名前は分かっているんだし。あ、苅谷さつきは本名ですよね？」

それが偽名だったらもうムリだ。諦めよう。

「ああ、それは大丈夫だ。私は生まれてこの方、死んでもこの方苅谷さつきだぞ」笑えない冗句だった。とりあえず苦笑しておく。

「しかし私のことを調べる、か」そしてさつきさんは体を起してコナン君のポーズをとる。あれ？何でだ？様になってる。くそう、やっぱり何かに愛されてるよ、この人は。

「・・・何か問題があるんですか？」僕は恐る恐る尋ねた。

「なんだかエロティックな響きだな」

「知るかつ！！」僕は叫ぶ。と同時に壁の向こうから物音がした。

どうやらつむぎを起こしてしまっただけらしい。ごめんよつむぎ。・・・でも絶対僕のせいじゃない。

「せめて亡くなった場所でもわかっていれば楽なんですけどね」もしくは僕が警官だったら、権限使って調べられるかもだけど。

「あ、そうだ。40年くらい待ってくれば警官になって出世して権力使って調べますよ」

「やだよ。そんなに君と一緒に」

「・・・あ、あはははは」

僕はまったく抑揚のない人形のように笑う。なんだろう、この頬を伝うしょっぱい水は。これはつまり僕に海に帰れといっているのだ

るうか。生まれ変わるならウミウシがいいな。あんな風にぼーつとしながら暮らせるなんて夢みたいだ。あつ、でもあんな派手な色はごめんだ。僕は地味に生きたいんだ。漆色のウミウシはいないだろうか。あとはナマコとか？

「あ、いや冗談だ。本気にするな、耕太。いや、泣かれても困る。あとでいいこととしてやるから。な？な？」

「なんですか！？」僕は飛びつく。あれ、こんなこと前にもあったような。デジャヴ？

「ああ、手のマッサージだ」

「……………しょぼ」

ん？このネタレギュラー化しつつある？

「まあ、しばらくはいいよ。私も少々疲れた。もう何年も探しているが手がかり一つ見つけられないんだからな。しばらく休んでもいいだろう？」さつきさんは笑う。

「そうですね」僕も笑った。

目的の無い人生にも意味はある。目的を一時保管してもやっぱり生きるだけで意味がある。だったら少しくらい休んだっていい。父さんも母さんもそんな働きづめで疲れてるだろう？たまには羽を伸ばしたらどう？…………と、家族思いの僕は思った。

「あれだ、私は育児休暇を使うぞ」

「子供がいるんですか！？」僕は跳び上がった。まいったな。それじゃあ僕は「耕太お兄ちゃん」と呼ばれる事になる。そして僕はなんて呼ぼうか。うーん、悩む。でもさつきさんの子供ならさぞかしかわいいんだらうなあ。

「いや、君を育てるのが大変だ」

「自分のことを『耕太お兄ちゃん』って呼べってか！？」

「なぜだっ！？」

妄想を膨らめ過ぎた僕に対して、ついにさつきさんが突っ込みに回ってしまった。すいません、ご苦勞様です。

「ちよつと朝から勘弁してよ」

つむぎはやつぱりノックもせずに入ってくる。ま、やましいことしてる訳じゃないから別にいいけど。ちなみに僕は携帯を耳に当てている。悲しいかな、常に妹を騙すための準備までしている僕。

「ああ、ごめんよつむぎ。・・・ん？ああ、じゃ」着信してもいない携帯を無意味に切って畳んだ。

「・・・そういえば、あたしのパジャマ知らない？あとお母さんも服が何着か無いって」

不自然に突然話を変えたつむぎは疑いの目を僕に向ける。

「おいおい、まさか僕のわけないだろう。それともお前は自分の兄貴が女物の服着て悦ぶような変態に見えるのか？」

つむぎは何も言わない。その沈黙がすべてを物語っている気がした。無言の視線が痛い。

「・・・ま、いいや。それと今日と明日お母さんもお父さんもいないから」

「へ？」
「最近働きづめだから2人であわせて有給とって温泉旅行に行くって」

「あ・・・そう」つむぎはビックリしている僕を怪訝そうに見て、ドアを閉めた。

いや、いいんだよ。たまには羽を伸ばしたって、別に。いや、ただなんだか僕の意識が仕込まれているような気がしただけさ。それよりも僕はさつきさんをジト目で見る。

「・・・悪かったな、耕太。服はちゃんと返しておく」

「やつぱり」僕は溜息をつく。どこかで見たことあるようなさつきさんの服は、母さんのものだ。当てがあるって言ってたのは僕の家族から拝借するという事か。

「許してくれにゃん」

「は？」突然の猫言葉に対応し切れない僕。ていうか、なんというか・・・萌え。

「ああ、いや、てつきり」この泥棒猫が！？」的なツッコミが来る

のかと「赤面するさつきさん。

「この泥棒猫が」抑揚のない声で僕は言う。

「ふん、ダメだ。1回限定だ」さつきさんはそっぽを向いた。

「ちえっ」

ちなみにあと2段階残している 2

さつきさんがしばらく休業（何度も思うがどうして仕事に例えるんだろう）をとるといので、僕1人で探す訳にもいかず（なんせ手がかりはさつきさんの記憶だけだし）、暇をもてあましていた。

「なあ、耕太。君は部活というものをしないのか？」

「えっ、何言ってるんですか、さつきさん。僕は立派に部活に所属していますよ」ちなみに暇をもてあましているのは僕ではない。さつきさんだけだ。僕は宿題という強敵を机の上で片付けている。気分はさながら勇者だな。味方に誰もいないけど。むしろ敵しいないけど。・・・それって普通に僕のほうが世界の敵じゃん。それでも魔王じゃないな。腐った死体あたりが妥当かもしれない。

「なにっ、知らなかった！」

「冗談もほどほどにして下さいよ。最初が『き』で始まって『く』で終わる部活ですよ」

あ、さつきさんの額に怒りマークが見える。これはまずい、僕は座布団を構えた。

「そんな三文字で真ん中が『た』の部活など聞きたくなかったわ！この引きこもりが！」

そういって、さつきさんは飛び出して行ってしまった。もちろん僕が顔の前で構えた座布団には拳の跡がしっかりと残っている。ていうかさつきさん、このパンチ力があれば世界狙えるんじゃないのか？あ、ダメか、怒りに身を任せて対戦相手を投げてしまうかもしれない。そしてジムから解雇されるんだ。でもでも返り咲いて最終的にチャンピオンになれるのなら万々歳だ。今度勧めてみよう。

僕はさつきさんの出て行ったドアを閉め、そして時計を見る。11時。せいぜいもって30分って所かな。僕はもうすぐで終わる宿題に取り掛かる。

「耕太、お腹が減った、昼ごはんにしよう!!」

「……………おかえりなさい」
さつきさんはやっぱり帰ってきた。しかしさつきから20分たつてないぞ。もうちょっと頑張れよ、さつきさん。

退屈な日はいとも簡単に過ぎ去ってしまう。せつかくの日曜日なのにかなり損をした気分になる。これはあれだ、発売日に漫画を買って、その後ブックオフに行ったらその漫画があっちゃったときの気分だ。あの時って「いいんだよ、新品が良かったんだから」とか言っただけで自分をごまかすしかないんだよな。まあ、僕はあんまり漫画買わないんだけど。

夕食はいつもどおりつむぎが作る。僕は「手伝おうか」と言ってみたが、「邪魔するのを『手伝う』というならいいよ」と言われた。相変わらず僕に敵しい。世間一般の皆さん、妹に余計な幻想を抱くな。「あたしおにいちゃんと結婚する」なんて言うわけないだろ！……………あ、でも幼稚園くらいの頃言われたな。あれが僕のモチ期のピークか。

「何ニヤニヤしてんの？」

「……………なんでもないです」どうやら遠い過去の栄光が顔に現れていたらしい。

「暇ならサラダ作って」つむぎは不機嫌そうに言った。

「はいはい」……………ってあれ？結局手伝ってんじゃん。……………ま、いつか。手伝わせてくれるんだし。僕はキッチンに入り、すっかりマスターしたキュウリの輪切りを披露する。

「……………これは……………」

目の端に映るつむぎはなんとスパイスからカレーを作っていた。おいおい中学生、一体将来何になるつもりだ。しかもそんなことされたら僕の立つ瀬がないじゃないか。この家から僕の存在意義を消すつもりか？最初から大した意義はないんだけど！

ちなみにカレーは絶品で、それだけに僕の適当なサラダは猫の餌くらいいに見えた。さつきさんは「いや、なかなかうまいぞ」と言っ

くれたが、カレーを3杯もおかわりしたので、結局残してください
ました。そして僕は夜食に皿いっぱいサラダを食べることになる。
いや、まずくないよ、決して。ちよっとしょっぱかっただけさ。

彼女を映画のヒロインとするなら僕は主人公じゃなく、ゾンビB役だな。

1

日曜日が終われば月曜日になる。月曜日になれば学生はプログラミングされた機械のように学校に行く。僕も例に洩れず、徒歩10分の学校へ向かう。今日は早めに起きたので、人通りは少ない。

「耕太、私は悲しいぞ」僕の横に並び、さつきさんは溜息をついた。心当たりがない僕はさつきさんの顔を見る。本当に落ち込んでいた。「君が私を信用してないとは・・・」

「何言ってるんですか。僕はさつきさんのことなら何でも信じてますよ。さつきさんが『明日地球が滅ぶ』って言ったら滅ぶんですよ」「本当か。じゃあ言うぞ、明日世界が滅ぶんだ」

僕は両手を挙げた。

「な、なんと。これは大変だ。じゃあ今日はこれから学校行って授業受けて、帰ったら宿題やって夕飯食べて夜は眠いから寝なきゃ！」全身で驚きと焦りをあらわにする。

「・・・・・・はあ」

あれ、ちよつとさつきさん、リアクションは？突っ込みは？・・・おかしいな、僕何もしてないのに。

「どうして目覚まし時計を自分の枕元に置いた！！」

3日目にしてようやく猫を追うより魚を退けよに気付いた僕は結構間抜けだ。しかしさつきさんはどうしてこつとも目覚まし時計を嫌悪するのだろうか。僕は密かに決してさつきさんを起こさないことを心に誓っていた。流石の僕でも目覚まし時計を壁に叩きつけて壊すような破壊行為を身に受けて愛と称する事が出来る自信はない。

「目覚ましを止めないと朝起きたって感じがしない！」

「めんどくさっ！っていうかあの破壊行為を止めたと言っんですかっ！？」

そんなばかな、レスラーじゃあるまいし。まあレスラーもそんなこと絶対しないけど。

・・・物は大事にしましょう。

「今度から朝は耕太の息の根を止めようか・・・」さつきさんはブツブツという。

「怖っ！ていうか僕毎朝死ぬんですか!？」

それに「息の根を止める」って・・・。言わないだろ、今日び。せいぜいドラ エのザラキぐらいだ。

「じゃあこうしましょう、さつきさん」僕は立ち止まり、人差し指を立てた。そして真剣な目でさつきさんを見る。さつきさんも自然真剣そうな面持ちになる。本当にノリがいい人だった。

「明日から目覚ましは2人の真ん中に置く。先に目覚めた方が止める権利を有する」
「さつきさんにもやり、と笑った。それはさながらチャンピオンの風格。」

「なるほどな。だが良いのか、私の寝起きは半端ないぞ」

そりゃもちろん知ってますよ。僕が起きるのはだいたい目覚ましで止まった後だったからな。言うならば今の僕は3連敗。今日だって実はさつきさんが目覚ましに手を伸ばそうとしてたし。

「さつきさんがいかに強敵といえども、僕には決して敵いません」
言いながら僕はさつきさんから隠した片手で携帯を操作する。アラームを目覚ましの1分前にセットした。ふっふっふ、卑怯と僕に後ろ指をさすがいい。僕は甘んじてその言葉を受け入れよう。だがこれも新しい目覚ましを守るため。この勝負、僕は決して負ける訳には行かないのだ!!

金曜日で状況を察してくれたのか、さつきさんはあまり話しかけてこず、学校中をウロウロしていた。あんまり、というのは何回か話しかけてきたからだ。また椅子を倒されたりしたらたまらないので、僕はルーズリーフとシャープペンというあまりにも高校生的なデバイスで筆話した。おかげで最終的には「うちはPS2じゃなくてパソコンで見ます」とか「駅2つ越えたところの風来軒って所のチャ

「シューメンが」とか明日見たら確実に意味が分からないと思われる言葉が所狭しと書き連ねられていた。

しかし、授業中なんかにはさつきさんが教室に戻ってくる姿は実に異様だ。しかも堂々と前から入ってくる。せめて後ろからこそ入ってきて欲しい。おかげで「どうした漆根」と何度先生に言われたことか。いや、まあこれは集中力の足りない僕のせいなんだけども。

そして放課後、いつもならまっすぐに家へと帰る僕だが、残念ながらそうは行かない日もある。というわけでさつきさんと別れた。さつきさんは部活見学をして入りたい部を決める、と豪語していたので僕は止めない。「お好きにどうぞ」と告げると、

「なにっ、君は私がホームランを打ったりハットトリックを決めたりしても構わないというのか!？」と言われた。僕としては構わないどころかそんなスターになるなら死ぬ気で応援したい。というわけで僕はさつきさんと別れ、職務を全うするためとある教室へと足を進める。

「あゝあ、いやだな」久々に本気の溜息をついた。何が僕をこんな憂鬱な気にさせるかというのはおいおい分かる。絶対に。しかしそれも僕がまいた種なわけで、僕がそれを憂うのは正真正銘、完全無欠にお門違いというやつなんだけども。

その部屋に足を踏み入れる。少し遅れてきたのが災いして、僕の方に20人以上の人間の顔が向いた。しかし視線はすぐに黒板に切り替えられる。仕事の人々というのはいつ見ても異様だ。個々の心中ではそれぞれに違うことを考えているはずなのに、表面上の動きだけはまったく同じ。そして、僕も空いている席　　僕のために空けられていた席に腰掛け、異様な集団の仲間入りをする。隣の人は何も言わない。というよりその彼女は始めから僕に目を向けることなどない。それどころか僕と空気を共有することさえ拒否していると思う。それもまた非常に憂鬱なのだが、しかしこれも異常な僕の身から出たさびだった。

「それでは、文化祭委員役員会議を始めます」

眼鏡の似合う委員長が切り出した。僕は黙ってそれを聞き、要所
要所でメモを取る。
そう、僕は文化祭委員なのだった。

彼女を映画のヒロインとするなら僕は主人公じゃなく、ゾンビB役だな。

2

「それでは解散です」

はつきり言って、会議の内容など聞いていなかった。いや、聞いてはいたかな。ただ右耳から左耳へ音波をきれいにスルーパスしただけだ。いや、脳は一瞬たりとも触れてないからただのスルーだな。そのスルーさえも結局誰も取ってくれなかったけど。ピッチに僕一人だけ立っている気分。

しかし、気付いたらなんと外が薄暗くなっていた。おかしいな、最近は特に日が長くなってきたのに。そして時計を見た僕は絶句した。もしかしたら僕は会議中ずっと寝ていたのだろうか。ついにぼーっとしているのと寝ているのの区別さえつかなくなってしまったのだろうか。100歳間近のおじいちゃんか、僕は。

あーあ、結構な時間になっちゃったよ。さっさと帰らなきゃな。つむぎが夕飯を一人で食べることになっちゃうじゃないか。ま、僕がいてもほとんど喋ることなんてないんだけどね。・・・と、ぼんやり考えていたら、眼鏡が素敵な文化祭委員長が僕と僕のクラスのもう一人の委員に近づいてきた。

「ああ、1年4組の2人でこれを倉庫に帰してもらえろ？」

・・・まじかよ。おいおい、頷くなよ春日井さん。そして今日初めて僕を見るな。重い荷物だけ僕に持たせようなんてなんて都合のいい・・・。

しかし素直に従いそれを持ち上げる僕。つくづく人に逆らえない薄弱さだった。このスクリーンに映像を映す装置はなんて言うんだろ。普通に投影機とかでいいのかな？とにかく重いんだよこれ。僕みたいな軟弱にして脆弱かつ虚弱の上さらに貧弱な男に持たせていいものじゃないぞ。

「体育館前の倉庫だから、はい鍵」

眼鏡が似合う委員長は笑顔とともに鍵を春日井さんに渡し、春日井

さんはそれを嫌な顔ひとつせず素直に受け取った。いくら男のほうがいいかあるといても鍵1つとこの重たい機械ほどの差はないはずだ。どこ行つた、男女共同参画社会基本法!!!

「これもね」委員長はさらにコードを上乗せした。しかもなぜか鍵しか持つていない春日井さんではなく、僕が持っている投影機の上に。大した重さはないけどバランスをとるという任務が増えた。僕のアからさまな拒否の表情には気付かないのか無視してるのか・・・絶対後者だ、などと穿つた見方もしてしまおうというものだ。

春日井さんは僕に一瞥もくれず、早足で教室を出て行く。体育館まではかなり距離があるが、どうやら歩調を僕に合わせてくれるつもりはないようだ。

それでも頑張つて歩く僕。こんな時ばかりは運動系の部活をやつて体を鍛えておけばよかつたかなあ、と思う。思いを更に膨らませていくと、練習後に後輩に片づけを押し付けられている僕の図がかなりのリアリティを持って現れたので、慌てて消した。そして頑張つたまま、息を切らしつつ、行程の半分ほどまで来たところで、僕は春日井さんに声をかける。というか音を上げた。

「春日井、さん・・・ちよつと、待って」

「話しかけないで!」

え~~~~~!!!

春日井さんは止まってくれることなく、むしろスピードを上げてくださった。僕は止まることもできず、何とか差がこれ以上広がらないようにする。あーあ、明日絶対筋肉痛だ。というよりも今すぐにも腕がもげてしまいそうだ。

この辺で少しばかり謎を解決しておこう。なぜこの僕が文化祭委員なんかやっているのか。そしてなぜ春日井さんが僕をこんなに嫌つて、嫌悪どころか憎悪までしているのか。

春日井若菜。 1年4組出席番号10番。 スマートな体型と黒い長髪。

そう、さつきさんに似ている。ここで問題、高校に入ったばかりの僕は一体どうしたでしょう。

はいそのあなた、正解。当然告白した。しかし彼女にとっては幸運なことに、彼女は僕の伝説を知っていた。ちなみに伝説と呼ぶのは及川くらいで、大抵のやつらは恥と呼ぶ。確かに今の僕から見れば当時は恥だった。しかし、当時の僕はそれを恥と分らないほど視野が狭く、必死だった。そして今なら言える。間違いなく彼女は僕の被害者で犠牲者だ。

当然さつきさんに似ている彼女にふられた僕は告白周期（命名及川）を2週間から5日へと加速させた。そして僕の評判はさらに地べたを舐めることになった。進歩しつつ退化できる人間なんて僕くらいじゃないだろうか。

今の僕から見ればすぐ分かる。中学2年の自分に対する周りの認識がある程度出来てからならまだ良いかもしれないが（いやよくなかったが）、高校初っ端からこれはまずい。恐らく1人の例外なくこの学校の女子は僕をごみのように見る。そして中でも春日井さんは僕を核廃棄物のように見る。

そう、残念ながら僕は廃棄処分すら出来ないのだ。せいぜい地下深くに埋めるくらいか。それでも安心することなかれ。地殻変動やら地震やらで地表に出てくるぞ、僕は。

そして協調性0・・・というか協調しようとする精神をたらい回しを超えて伝言ゲームのように回され、最後の人がゴミ箱にぶち込むという残念な扱いを受けている僕がなぜ文化祭委員なのか。これについては時間軸を少し前に戻そうと思う。

僕は真剣に悩んでいた。鉛筆の6角一つ一つに番号を振ったのは良いが、二択の状況の中、奇数偶数で分けようか。それとも123と456に分けるか。それとも別の分け方が良いか。手元の鉛筆は「早くしろ！」と僕を急かす。鉛筆の主張にはまったく動じなかった僕だが、「30秒後回収します」という春日井さんの言葉で瞬時に

奇数偶数で分けることに決め、鉛筆を振った。

5が出た。よし奇数だ。

「あ、しまった」僕は絶句した。分け方を考えたのはいいが、奇数になった場合どっちにすればいいのかを考えていなかったのだ。

「それじゃあ最後列の人、回収して下さい」

「ええい、南無三！」誤解しないで欲しいのは、僕がこんなセリフを口にしたのはこれが最初で最後だ。とにかく僕は紙に「おばけやしき」とひらがなで書いて4つ折にし、最後列の席だったので回収した。

きれいに紙を整える。その間、春日井さんは他の列の紙をお礼をいしながら受け取っていた。しかし、僕の渡した紙はつままれた。流石の僕でもこればかりは結構ショックだった。だって、春日井さんがこんな無防備な人だと思わなかったから。核廃棄物を扱う時は、決して素肌をさらしてはいけない。

・・・嘘だ。素で傷ついた。

結局僅差で喫茶店に勝利し、1年4組の文化祭での出し物はお化け屋敷に決まった。

次いで文化祭委員を決める事になった。春日井さんの場合は立候補だったので女子は決定。しかし、仕事量が多い文化祭委員の男子の立候補はなく、長い間保留になっていた。もちろん僕にやる気はなく、置物に見えるようにクラスの後ろで席に着いていた。恐らくクラスの大半は僕のことなど視界に入れようともしないから最悪押し付け合いになっても僕に振ってこられることはないだろう。僕は夕飯のおかずのことを考え、ぼーっとしていた。

だが、のちに悪魔と（僕に）呼ばれる及川がおもむろに口を開いたのだ。

「・・・漆根、お前部活やらないんだろ？じゃあお前で良いじゃん。はい決定」

お前も帰宅部だろうがっ！

長身で筋骨隆々。さらにスキンヘッド。これでサングラスでもかけ

たら180度360度、さらに上から見ても下から見ても過去も未来もヤクザにしか見えない及川に逆えるものなどいない。僕の抗議はクラスの視線に棄却され、そしてクラスの体裁を守るため、僕は立候補したというように改ざんされ、屈辱を味あわされた。しかし、それだけならよかった。ああ、まだなんとかなったさ。しかし、さらに僕に追い討ちをかけたのは春日井さんの表情。彼女の顔はこの世の終わりを見てもまだこんな顔をしないだろうといえるような絶望の色を呈していた。

彼女を映画のヒロインとするなら僕は主人公じゃなく、ゾンビB役だな。

「以上、回想終わり。それ以来今の『話しかけないで』以外、彼女が僕に向けた言葉はありませんでした、と」

僕はひとりごち、さらに喋って余計な体力を消耗したことに激しく後悔した。

腕が……、もう……。

しかし、僕の両腕を犠牲に体育倉庫が近づいてくる。重い顔を上げると、春日井さんは鍵を開けてくれた。彼女は責任感が強く僕なんかとは比べるのもおこがましい優等生なので、鍵を預かった以上返しに行くのは自分だと思っているはずだ。いや、そうではなく頼みごとでも僕に向けて話しかけるのがいやなだけなのだろうが、そんなものはどちらでも同じことだ。いつもなら感謝の気持ちを入れて土下座の1つくらいかますところだが、今の僕にそんな余裕は無い。僕は倉庫の一番奥にある棚の不自然に空いている所に機械をおく。そして、事故に見舞われた。

ガラガラガラガラ

「うわっ」

絶妙なバランスを保っていた棚の上の荷物が装置の重みで棚が軋んだことよってバランスを崩し、僕めがけて降ってきた。僕はそのまま後ろ向きに倒れる。ペンキがなかったことを真剣に喜ぶ僕。今のよるこぶは悦じゃない、喜だ。僕はそこまで変態なやつじゃない。信じて欲しい。

春日井さんはまるで倉庫ごと吹き飛ばすかのように肺にある空気をこれでもかって言うくらい吐き出してため息をつき、そしてそれだけでは飽き足らず、舌打ちもおまけしてくださいました。フルコースだ。ちなみに僕は両腕が乳酸漬けなので、自由に身体を起こすことが出来ない。春日井さんは間違いなく自分が早く帰るためだけに、僕が落とした荷物を拾った。

カラカラカラカラ・・・バタン。ガチャ

そして、倉庫の中の光源は一つ減ったのだ。

「・・・嘘、だろ」

と、今まで散々艱難辛苦を共にし、共に恐怖の大魔王を倒そうと心に誓い、時には命を助け、時には助けられた仲間が実は大魔王の手下だったと知った時の勇者のように僕は呟いた。

僕は両腕の疲労なんて一瞬にして忘れ、立ち上がった。消えた光源に向かって駆け寄った。人がやっと一人通れるくらいの戸は硬く閉じられ、恐らく外側から南京錠が掛けられている。多分見回りの先生が誰もいないと思って閉めたのだろう。確認すらしないなんて困った人だ。しかし、電気もなく広い倉庫の奥まで見なかったので、人がいるとは思わなかったのだろう。・・・ということは僕のせいだ。そういえばそうだ。

「・・・ハハハ、どうしよ」人間ピンチになると笑うしかないというのは本当らしい。僕は春日井さんに笑いかける。

「・・・」

無言で僕を睨みつける春日井さん。ああ、僕はまだ腫れ物に生まれたほうがよかったかもしれない。人間の目ってあんなに鋭くなるんだ。触れたら裂けそうですもの。これを学会で発表したら僕は博士号が取れるかもしれない。その前に間違いなく春日井さんに殺されるけど。

「ふう、まあ、まず落ち着こう」その言葉だけで僕は落ち着く。人間の心って結構単純だ。落ち着いてまず両腕のストレッチ。やつぱり身体は大事だ。次いで僕が落とした道具の片付け。人間たるもの、まずは身辺整理からだよね。その上僕はきれい好きだ。こんな惨状放って置けるわけないだろう？あつ、そう考えると僕殺人現場とか行くと落ち着かないな。警察にはなれないや。別の方法でさつきさんの探し人を探さなくちゃな。

「ねえ、何やってんの？」

委員になって二度目。彼女は口を開いた。その声はそれほど低くな

いアルト。あるいはあまり高くないソプラノといった感じで、倉庫には響かない。それが今この場所の静けさを更に演出している。

「ん？どこ もドアでもないかな？って」僕は倉庫の中をガサゴソあさりながら答えた。

「.....」

あれ？お気に召さなかった？だいたい突っ込みの僕にボケさせるな。ああ、そうか。今この状態においては僕がボケに回らなきゃいけないのか。流石に素人の春日井さんにボケは危険すぎる。火傷じゃすまないからな。最悪廃人になる。

僕は棚の上に道具を片付け終わると周囲を見回した。放課後の倉庫。先生が見回ったという事は間違いなくこれ以降人は来ない。つまりこの密室状態のまま、どうにかしてここから出る手段を見つけなければならぬわけだ。

「あつ、携帯持っていない？僕家に忘れてきちゃったから・・・」簡単だ。助けを呼べばいい。及川あたりを呼んで、ここの小窓から鍵を渡せばすぐ開けられる。幸い及川の携帯番号は覚えている。誤解しないで欲しいのは覚えてるのは頻繁にかけるからじゃなくて、他の番号なんてほとんど知らないからだ。せいぜい家族とほか数名くらいか。高校からの携帯デビューだし、交友関係を広げられる性格と認知のされかたじゃないし。

「.....電池が」

三度目のセリフはたった3文字。そして僕は落胆する。本当に使えない文明の利器だ。必要な時に限って役に立たない。実際使えないのは僕ら人間のほうなのかもしれないけど。

気を取り直して再び周りを見回した。もちろんドアはアウト。内側からじゃ開けられないし、非力を3乗してようやく軟弱さを言い表せる僕に力で壊すのもムリ。もちろん春日井さんにも無理だろう。

小窓はあるけどせいぜい換気用だ。しかも格子がついていて腕すら出せないな。せいぜい指くらいか。誰かが外にいればここから鍵を渡せるだろう。だが、これも今は意味が無い。

上のほうの窓はどうだろう。あれは内鍵式だな。あれなら通れそう
だ。しかし如何せん位置が高すぎる。この倉庫は体育倉庫とか諸々
を兼ねているからとにかく広い。全部の荷物を出したらバスケット
ができる。バレーをしたら天井サーブが打てそうだ。

万事休す。しかし、ここで知恵を出し、乗り切ってこそ小学生から
9年ちよつと就学してきたかがあるというものだ。

「・・・・・・・・」

ダメだった。

すぐに脳が音を上げた。僕の学歴なんてこんなもんか。もういいや。
ここに住もうかな。体育のマットで寝るのは結構快適だし。

そして自虐的に笑いながら春日井さんのほうを向くと、彼女はびく
つと肩を震わせ、身構えた。身構え方が空手のそれだった。まさか、
有段者か？・・・でもなんで身構えるんだ？僕は考察する。

彼女は武道の腕を上げるため、邪魔者が入らないところで勝負を仕
掛ける習慣があるのか？・・・いや違うな、よく見たら足と手がち
ぐはぐだ。普通左の手足を前に出すのに、左足と右手が前に出てる。
腰を捻って今から走り出す小学生みたいな姿勢でこちらを睨む姿は
面白かったので少し笑ってしまった。しかし、笑っちゃいけないと
いう良心とぶつかり合い、結局にやけ笑いになってしまった。

彼女の顔から一瞬にして血の気が引く。それはもう骸骨の標本に見
せ付けてやりたいほど真っ白に。その変化に僕は再び首をかしげる。
考察すること十数秒。ようやく解に辿りついた。なるほど、春日井
さんは僕を前にして身の危険を感じたわけだ。確かに週一で告白し
ている高校生を見たら体目当てだと蔑まれても仕方ないか。そして
ここは2人きりの体育倉庫。まさにそういう事が起こるのに絶好の
舞台というわけだ。それも無いわけでもなくはなくなかったが、コ
クリまくっていた理由のメインは違うんだ・・・なんて言って信じ
てくれるとは思わないけど。

春日井さんの目は潤んでいる。さっきの構えも含め、どうやら護身
術の心得はないらしい。しかし、こういう立場になっではじめてわ

かる。この状況、僕にとつても非常に危険だ。恋愛漫画でよくある知らない男女がこういう密室空間に閉じ込められるシチュエーションを見て憧れていた昔の自分をひっぱたいやりたい。もし誰かがここに来たら僕は少年院あたりに送られるんじゃないか。模範囚になれば少し早く出れたんだっけ。そうなると結構労働とかあるんだっただか。

と、僕は妄想の谷に陥りかけたが、なんとか頭をふって振り払った。少年院入りもできることなら回避したい。ここはあれだ。何とかこの場を和ませて春日井さんに警戒心を解いてもらうしかない。

「子供がこういった。『お母さん、アメリカカって遠いの?』そしたら母親はこう答えたんだ。『黙って泳ぎなさい』ってね」

「.....」

「はい、じゃあこのボールを使って一発芸やります!」

僕は落ちていた帽子と眼鏡をボールに取り付ける。

「ヘンリー君!」

「.....」

視線が痛い!

.....誰だよ、ヘンリーって。ああ、ダメだ。僕にボケは出来ない。助けて、さつきさん!

僕はヘンリー君を床にたたきつけた。

「いてっ!」ヘンリー君の反撃。床でバウンドし、僕の顎にアップアを食らわしてきた。僕は馬鹿か?

ほら、春日井さんの警戒度が更に上がったよ。誰だこんなことしたやつ。僕だ!

そして僕は追い詰められた人間の最終奥義を披露する。
すなわち、逃走。

ここに在る道具を上手く積んでいけば何とかあの窓に届きそうだが、外にさえ出れば後は何とかなるだろう。というわけで僕は無言で春日井さんに背を向け、せつせと使えそうなものを積んでいく。

「……………」

春日井さんが侮蔑の視線を僕に向けているのが分かる。そりゃそうだろうよ、女の子無視で作業を始めた男には蔑んだ目をして然るべきさ。しかしこの行為には僕の犯罪歴に丸がつくかどうかがかかっているんだ。言うならば人生がかかっている。出来ればリセットしたい人生だけど、ぎりぎりまで頑張らせてくれよ。

「……………ふう」僕は一息つき、努力の成果を見上げた。うむ、手を伸ばせば何とか窓に届きそうだ。上るまでの段も何とか確保した。あとは上手くバランスをとれば何とかなるだろう。

「……………私が行く」

「え？」僕は声が出た方を見る。4度目の発言で、初めて春日井さんの声を聞いた気がした。

「……………閉じ込められそうだし」

「……………」

さいですか。僕には監禁なんてする勇氣はないけどね。そんなもの持ってたらさつきさんに殺されてるもの。臆病者でよかったとつくづく思う。

とにかく、動機は不本意だが、そう言うなら止める理由はない。

春日井さんは一段目の椅子に足をかける。次いで机。僕はその上に更においてある椅子の足を持った。懐かしいな。中学時代の教室の掲示はこうやってたっけ。春日井さんは早くここを出たい一心でどんだん段を昇り、少し高い段に足をかけた。その時だった、

「あつ！」

春日井さんが声を漏らした。体勢を崩し、2メートル強の高さから後ろ向きに体が宙に浮いた。足元も崩れ、彼女は床に落ちてゆく。僕の体が反射的に動いた。ダメだ、間に合わないかも……。

どすつ

……という音はやはりレディに対して失礼だろうか。とにかく僕の体にはそういう擬音がふさわしい衝撃が走った。僕は咄嗟の判断で春日井さんと床の間にヘッドスライディングをしたのだ。ホントは受け止められたらカッコよかったんだが、これが僕の限界。ともかくも春日井さんのほうに怪我はないらしい。僕のほうも、幸い肋骨やら内臓やらに破損はないらしい。って、そんなのわかるわけないんだけど。

「ちよつと！」

春日井さんは飛び上がった。どうやら僕に対する感謝よりも台の不備と僕に触れたことへの嫌悪の方が勝っているらしい。やりきれない思いだった。理不尽なのは恐ろしい。しかし、人生そんなもんだ。本当の事を行ったのに信じてもらえなかった才オカミ少年もこんな気分だったのかもな。だとしたら教訓。日ごろの行いはとてつもなく大事だ。イソツプさんも深いことを考えたもんだ。

「……あつ」

僕が何とかして立ち上がると、春日井さんは一転、青ざめた顔で僕の額を指差した。不思議に思いつつも額に触れてみると手に血がついた。それも結構出ている。傍の椅子についているのも僕の血だろう。角がボロボロで尖っている。台の一部が落ちて、はねたんだろうな。目に当たらなかつたのは不幸中の幸いだ。結果として、まさに骨折り損のくたびれ損だ。

「ちよつと、あんまり動かない方が……」

「良いから、早く出るんだ！」僕は柄にもなく少し声を張り上げてしまった。学生服で額を拭い、再び台をセッティングする。今度は春日井さんも手伝ってくれた。血のついた椅子を手渡す時に手が触

れたが、何も言わなかった。まあそうだよな、こんな血まみれなやつとは一刻も早くおさらばしたいか。人気のない倉庫に2人の男女、彼女を映画のヒロインとするなら僕は主人公じゃなく、ゾンビB役だな。それも悪くないかも。映画に出られただけでも大金星じゃん。ようやく台が出来上がり、今度はさつきよりも必死で押さえた。ていつかやばい、血が止まんない。外人レスラー並みに出てるよ。あ、頭くらくらししてきた。早くしてくれ、春日井さん。と本気で願う他力本願な僕。

僕の願いが通じたのか、春日井さんは見事上りきり、窓から外へと消えていった。そこからどうするかはまったく考えていなかったが、何とかしてくれるように願うしかない。まずい、本当に他力本願だ。「…………あれ？」春日井さんが消えてから、僕は踏み台を片付けた。そして、しばらくしたけど戸の方は開かない。まさか、春日井さんのほうが僕を閉じ込められるつもりだったとか…………いや、頷ける。彼女なら僕に死んでしまえ位のことは言うだろう。それくらい僕を嫌ってそんな雰囲気だ。うーん、まいったな。とりあえず寝床はマットがあるからいいとして、食べ物飲み物はどうしようか。ネズミとかいるかな。あ、でも生はまずいか。感染症とかあるしな。真性のゾンビになってしまいそうだ。

しかし、どうやらそれは杞憂だったらしく、しばらくしたら戸が開けられ、月明かりが入ってきて、闇になれた目に眩しかった。月光を後光にして立つ春日井さんは無表情。基本的に無表情な彼女だが、今は完全な無を保っている。それが月光と上手く合っていて、冷たさと美しさを演出していた。西欧の女神像のようだ。

「ありがとう、春日井さん」僕は額を拭う。血はまだ固まっていな。参ったな、縫ったほうが良いかも。でも縫うと傷跡が残るんだよなあ。

まあいいや、とにかくまずは学校を出なくちゃ。そう考え、倉庫を背にする。春日井さんは無言で戸を閉め、南京錠をかけた。

「ちょっと待って」

鍵をかけたのを見取って、どうせもう校舎は開いていないから鍵は返せないな、と思って帰ろうとした僕を春日井さんが呼び止める。僕はそのありえない発言に貧血時における幻覚、幻聴について考察した。しかし、どうやら幻聴じゃなかったらしい。

「じつとして」

僕の額には、春日井さんの白いハンカチがあてがわれた。僕は目を白黒させる。

ああ、あれか。白いハンカチは気に入らないから赤く染めようって話か。確かに染物って結構値張るからな。それともハンカチに何か毒素でも・・・いや、やめとこ。

「あの、春日井さん。ハンカチは植物で染めた方が・・・。赤はなんだっけ・・・古典でやったよね？」

「いいから、動かない！」

「はい！」直立不動の僕。ていうか発言は全面無視ですか。まいったな。この人とどうやってコミュニケーションをとればいいんだろう。いや、彼女にとる気がないなら無理か。

しばらくしたら春日井さんは自分で押さえるように言って僕を解放し、すたすたと校門の方へ歩いていってしまった。僕は額のハンカチを自分で押さえつけながら後を追う。

時計を見たらもう8時を回っていた。部活はどこももう終わっている。夜の学校は暗くて静かで不気味だ。肝試しをする気も分かる。

しかし、今どきの学校は警備会社が徹底的に守ってるから肝試しをすると警備員の方に怖いところにご案内されることになる。まさに肝が冷えるというものだ。僕らは閉じられた校門をよじ登る。スカートでそんなことしていいのか、と思ったが、さっきも窓から外に出たし、ちらっと上を見上げてしまった（不可抗力だ、許せ春日井さん）ところ、スカートの下に短パンをはいていたから別にいいんだろう。

「そのハンカチあげるから」

「分かった、他人の血つてのは気味が悪いからね。ありがたかった

だいてくよ」

そう言うとなぜか顔をしかめた春日井さん。ちがうよ、「君が悪い」じゃなく「気味が悪い」だよ。悪いのは僕以外ないよ。イントネーションって大事だよ。

「送ってごうか？」僕と反対側に歩きだしたのを見たところ春日井さんは徒歩通学らしい。夜遅いし最近は何騒だ。僕としたら遠回りになるがそれくらいは呑もう。

「いい」

振り返った春日井さんは体よく断ってくださいました。確かにそうか。血まみれの僕のほうがよっぽど怖い。ちなみに僕は額だけでなくぬぐった両袖も真っ赤だ。

春日井さんは再び顔をしかめた。今度はどこに引つかかったんだろう。失言はないはずだ。そうか、彼女は血が嫌いなのもかもしれない。そういえば僕が額を切ったのを見て青ざめてたっけ。

「・・・私の家、あそこだから」
指差した先にあるのはおよそ50メートル前方の一軒家。かなり大きい。僕の家のは倍はある。

「いいなあ、学校まで全力疾走10秒じゃん。忘れ物しても余裕だし」僕も近いからそんなに羨ましがらる必要はないんだけど。

春日井さんは「まあね」と言って笑った。春日井さんの笑顔を見たのはこれが初めてかもしれない。普段笑わない人の笑顔というのはかなり魅力的なのだとき僕は初めて知った。僕は踵を返し、家路へ向かう。そのとき、後ろから春日井さんに呼び止められた。

「その・・・ありがとう」

ん？今日の一連のどこに感謝の対象があるんだ。ああ、あれか。僕のボケで和めたのか。だとしたら僕の恥もそれなりに意味があったのかもかもしれない。

そして、春日井さんはもの見事に全力疾走して帰って行った。女子ってあんなに足速いんだと僕は感心しつつ見てしまった。8秒かかったかな。

「やば」時計を見て焦る。僕の家は特に門限はないが、こんな時間に血まみれの男が帰ったらなんていわれるか分からない。僕については諦めている両親も流石にこれは何かを言わずに入られないだろう。もう一泊して来てくれ、父さん、母さん。

春日井さんに倣って夜道を全力疾走する僕。・・・5秒後、ダウン。原因は出血多量による貧血。当たり前だった。電信柱を背にして休養する事10分。ふらふらと歩きながら家路に着いた。

「ただいま」外から見ると、居間に電気がついていて、旅行から帰った両親がいるのだろうか。だとしたらどうやってかいくぐるうかと考えていたが、結局めんどくさくなってドアを開けた。

とたとたと続く足音。居間から顔を覗かせたのはつむぎだった。そして……

「きゃああああ!!」

僕は妹の悲鳴を一身に浴びることになる。とにかく僕はお隣さんが警察に通報しなだけで心配だった。

つむぎの悲鳴を聞いたのは二度目だ。一度目は確か中2の時。間違えてつむぎが入っている風呂のドアを開けちゃったときだったかな。しかしあの時は散々殴られたもんだ。しかも一週間蒸し返され続けた。

「ちょっと、耕兄!血、血、血が……!救急車……!」

「いや、いいよ、もう止まったし」春日井さんのハンカチでまだ傷口は押さえてあったが、血はすでに固まっていた。ハンカチを取って傷を見せるとつむぎが失神しかねないので、そのままにしておく。「いや、でも縫わないと」

「傷跡が残るだろ。『あつあの人類に傷あるよ、こっわい』とか言われて嫌われたらどうするのさ」いや、案外及川といいコンビになれるかもしれないけど。

つむぎは呆けた顔になった。わかってるよ、「えっ、これ以上どうやって嫌われるの?」って言いたいんだろ。皆まで言うな。

「とにかく」僕は気まずい雰囲気を開きたく声を張り上げる。眩暈がした。「大丈夫だから」

ふらふらしつつ階段を上る僕の背中につむぎが声をかけた。

「お父さんとお母さん、明日も会社休んでもう一泊するって」

「……………」

階段で一段踏み外す僕。振り返ってつむぎを見た自分の顔は鏡が無いので分からないが、つむぎのいぶかしむ顔でだいたいどういいうものか察しがつく。

なんだ、僕はサトラレか。しかも両親から限定の。だったらやだな。僕の変人っぷりが両親に全て露呈することになるじゃないか。

「まあ、いいや」僕はようやくそれだけ言って、自分の部屋へと急いだ。

「ほう、ほふぁえり」

「………ただいま、さつきさん」さつきさんはクッキーを頬張り、ベッドの上で足をばたつかせ、雑誌を早回しでめくりながらこつちも見ない。なぜだ、なぜ僕はこういう扱いの方が安心するんだ。

時計を見る。8時半。かなり時間を無駄にした気分だが、そんなに忙しいわけでもないし、夜遅く帰ってくるのがなんか高校生っぽかったので、これはこれでよしとしよう。

ようやく額のハンカチを取った。空気に触れると途端に痛み出す。顔をしかめながらクローゼットの鏡を見た。

「……うわあ」鏡の中の僕の顔は中心に向かって皺が寄っている。そして視線は真っ赤な額に釘付けだった。小指の関節二つ分くらいの傷が斜めに入っている。ハーパーポッターとどっちが大きいだろうか。ただ、見たところそんなに深い傷でも無さそうだ。額の怪我は浅くても出血量が多いというから、これはこれで僕にも立派に赤い血が流れている証明だろう。

「明日からどうしようかな」

「ん、どうした、耕太。人生相談か？良ければ1時間2万円から勉強してやるぞ」

背後でさつきさんが体を起こしたのが分かった。

「占い師だったんですか！？ていうか完全に詐欺じゃないですか、そのぼったくり」

ああ、だめだ。血が足りなくていつものキレが無い。それともさっ

きまでボケてたから鈍ったんだろうか。そう思いながら振り返る僕。「こ、耕太！どうしたその血は！？飛んできたカラスにでも貫かれたのかっ!？」

うるたえるさつきさん。こんなやり取りが凄く久々の気がする。懐かしい。

「いえ、闇の帝王が現れて、僕に死の呪いを・・・」

首を傾げるさつきさん。しまった、もしかしてハリー・ Potter を読んでいないのか。そんなバカな・・・。

「耕兄」いきなりドアが開け放たれる。つむぎは目線を下げ、僕の足をずっと見たまま、僕に乱暴に救急箱を手渡した。目線はそのままに、部屋を去ってゆく。

「ありがと、つむぎ」なるほど、つむぎは弱っている動物を助けるタイプか。道端に捨てられる猫を見るとほっておけないタイプだ。

「わが妹ながら、天晴れ」僕は眩き、鏡を見ながら自分で傷の手当をする。消毒液はひどくしみたが、何とかこらえた。大きめの絆創膏で傷口を隠すと、僕の胃がコンサートを始めた。テンションのままに騒ぐ胃を宥めようと、僕は一階へ向かう。ちよっとふらつき、扉に顔をぶつける。悶えること数分。

ぬめっとしててねっとしててふにゃふにゃしてるじゃない！！ 1

火曜日の朝はガッツポーズとともに始まった。どうやらさつきさんは携帯の方には気づかなかつたらしい。残念ながら長い髪が寝顔を隠してしまっていたが、起き上がったて目をこすったさつきさんは不機嫌そうに口を尖らせた。

「ちっ、今朝は私の負けか。だが覚えてろ、次は勝つ！」
うわあ。日常会話で『覚えてろ』なんてはじめて聞いた。ほんとにいたんだ、そんなこと言う人。

僕は制服に着替えて（もちろん学ランは昨日のうちに洗っておいた。流石の僕もゾンビB役を二日またぎで続ける勇氣はない）顔を洗い、張っておいた絆創膏をとった。

「・・・あちゃあ」改めて見ると結構大きな傷だ。あつ、でもこれをそのままにすれば威圧感みたいなのが増すかも。そうすれば暴力団系の仕事に就職できるかな。あ、でもそのためにはやっぱり力が必要か。手っ取り早く筋力をつけるにはガテン系のバイトが一番かな。いや待てよ。ガテン系の仕事をするなら建築の知識が必要だな。建築には木材の知識が不可欠だし・・・。

「よし、僕は将来植物学者になるぞ！」

「・・・好きにすれば」僕はその声にびくつと肩を震わせる。鏡の中にいる僕の向こう側でつむぎが僕を見ていた。つむぎも僕と同じで朝は結構な低血圧なので、目を細めて、かなり不機嫌なように見える。ていうか不機嫌なのだろう。

「顔洗いたいからどいてくんない？」抑揚のない声を出して僕をはね飛ばした。おかしいな、僕は今日はまだ何もしてないぞ。

じつとつむぎを見ていたら鏡の向こうのつむぎが僕を睨んだので僕はそそくさと洗面所を後にした。

「・・・いやだなあ、これ。かなり目立ちますよね？」登校途中、僕は隣にいるさつきさんに話しかける。

「ああ目立つ。お宝鑑定団の出張鑑定の松尾さんの蝶ネクタイくらい目立つ」

「……そんなに？」だってあの人ってネクタイの方がメイじゃないか、ってくらい目立ってるじゃん。要するにあれか、僕の存在は僕自身の怪我より希薄ってことか。いや、傷そのものよりも絆創膏か。

「絆創膏以下の存在感」

なんて空気のキャッチコピーだ。やめてくれ、変人でもいいから僕を世界から排除しないでくれ！

今日から僕は遠回りになるが人通りの少ない道を通って登校する事にした。無論さつきさんと話しながら学校に行くためだ。この道は夜になると不審者が出ると有名な場所なのでほとんどの生徒は避けて通っている。しかしこんな朝っぱらから出たら逆に健康的過ぎであらゆる意味で不審者から遠ざかるので出ることはないだろう。というよりも世間様から見たら僕が不審者だ。

「ところで文化祭では何をやるんだ？」さつきさんは唐突に尋ねた。僕が正直に答えると感心したように大きく頷いた。

「それならば私も手伝おう。お化け役が1人くらい増えても文句無いだろう？」

「……どうですかね」本物が紛れるのかあ。下手すれば騒ぎになって文化祭そのものが中止になるかもな。僕は心の中で8回葛藤した。ううむ、たしかにお化け屋敷と本物の幽霊は最高のマッチだな。これを逃すのは麻婆豆腐をフォークで食べるくらいバカみたいだ。あるいはご飯をナイフで食べるくらいかな。そういう文化の人々がいたら大変申し訳ないけど。

「じゃあ、一応お願いしておきます」一応、という言葉にさつきさんは少し引つかかったみたいだが、了承した、と言った。

文化祭か。これから忙しくなるな。昨日の会議の断片から推測するに今日からクラスごと活動が始まるみたいだし。最初は委員で話し合い、か。要するに春日井さんと話し合いだ。コミュニケーション

を取れないのにどうやって話し合いをしると？はあ、重ね重ね気が重い。まあ、すべては僕のせいなんだけど。

「どうした耕太。学校に行くのがそんなに憂鬱か？ならば私は一肌脱ぐ」

「解決してくれるんですか！？」というかさつきさんの「一肌脱ぐ」という言葉に敏感に反応してしまうのは僕だけだろうか。いや、健全な男子学生なら絶対反応するはずだ。しかしこの言葉、どうして「一肌」何だろう。表皮系を取り払うという意味だろうか。だとしたらそれはごめん被る。僕のためにそこまでしないで！

「うむ、今からさばおりで耕太の背骨を追って病院送りにすれば学校に行かなくてすむぞ！」さつきさんは笑っていった。そして僕は笑いながら引いた。素で怖い。何よりさばおりというチョイスが怖い。うっちゃりのほうがまだマシだ。うっちゃりで背骨を折るためには相当の勢いで投げなきゃならないだろうけど。ていうかこの場合の「一肌」はさつきさんのじゃなくて僕の「一肌」のようだ。

「・・・結構です」

「そうか、残念だ。入室して鍛えた私の技を披露できるチャンスだったのに」

「力士だったんですか！？かの有名な後輩いびりに耐えてきたのか！？」

「うむ、紙相撲部でちよつとな」

「紙相撲部っ！？そんなドマイナーな部が一体日本のどこにっ！？」というか今どきの紙相撲は相手にさばおりを決められるのか？それじゃあただのラジコンじゃないか。電子部あたりに行け！

確かに今おじさんたちの間で流行っているところもあるらしいけど・・・。

「うーん、まあ、自分でまいた種なんで自分で何とかします」

「ふふ。『自分でまいた種』か。君がまく種は気味の悪い奇形が多いからな。私の興味をそそらないでもない。こんなに私の気を引けるのは君くらいなものだぞ、耕太」

「・・・どうも」

何でだろう。聞きようによっては最高の褒め言葉に聞こえるその言葉だが、ぜんっぜん嬉しくない！いや嘘だ。ちょこつとだけ嬉しいしかし奇形か。よく言ったものだ。確かに僕がまいた種はおかしなことになるな。食人植物とかになつて僕に襲い掛かったりもするし。というのはもちろん例えだけど、的から外れてはいない。

「ならば私は隅から君を見させてもらう。一週間ほど経つがやはり思うな。君は面白い。見ていて退屈しない、とな」

「そう言ってもらえると僕も必死に生きてるかがありますよ」
退屈。長い間さつきさんを蝕んでいたもの。もう死んでいるのに長く生き過ぎている彼女にとって一番大きなもの。だから彼女はいつも飽きずに眺めていられるものを求めている。だから今のセリフはさつきさんにとって最高の褒め言葉なのだ。

「うむ。君が何かに苦悩する姿は最高だ！」

「あんたは最低だな！！」あ、最低つて言っちゃった。まいつか。痛みわけ痛みわけ。

そんなふうにもいつもどおりのバカ話に花を咲かせていると、いつの間にか校門の近くまで来ていた。そして前方で髪を揺らし歩いているのは春日井さん。僕は咄嗟に身を隠す。別に後ろ暗いことが・・・あるわけなんだけど。

「どうした、耕太。君が入るべき穴でも見つけたのか？」

「・・・」なんだか今朝のさつきさんの言葉には棘があるなあ、そうか、今朝は僕が目覚まし止めたからか。さつきさん、負けず嫌いっばいし。

「そ、そんなことはないさ。私は大人だからな。その程度の寛容さくらい身につけている。まったく、君は何をバカなことを。見当違いにも程がある。この私が早起きで負けたくらいで怒るわけはないか、ばか者！！」

怒っていた。目覚まし云々はともかく、指摘されたことに対しては怒っていた。寛容さなんて微塵もなかった。しかし、その怒りの才

プシヨンとして頬を膨らめた顔を見れたので結果オーライ。春日井さんの笑顔でも思ったけど、普段無表情な人が表情崩すといいなあ。なんかこう、ベールの向こう側、みたいな。

そうこうしているうちに予鈴が聞こえてきた。今朝も結構早く出てきたつもりだったのに話に花を咲かせすぎたらしい。あの世のお花畑も真っ青な花の量だ。

「やばっ、行きましよう、さつきさん！」僕は走る。さつきまでの憂鬱はどこかへ消えてしまっていた。さつきさんに感謝だ。

ぬめっとしててねっとしててふにゃふにゃしてるじゃない！！ 2

しかし放課後。やっぱり僕は憂鬱だった。時計の示す時間は4時。僕の時計の読み方さえ違えていなければ4時だ。決して終わらない仕事を強制的にやめられるのは下校時間の6時。つまりあと2時間、僕はこの拷問部屋もとい教室、いややっぱり拷問部屋にいなければならない。まだ30分も経っていない。

・・・そして春日井さんと2人きりだ。さつきさんももういない。今日は昼くらいにふらっとどこかへ行ってしまった。息が出来ないほど気まずいものがある。喧嘩別れしたカップルが数年ぶりに会った時だってこれよりはまだマシなはずだ。

僕は上目遣いに春日井さんを窺う。前髪をピンでとめ、きれいな額をさらしているのが額が絆創膏で埋まっている僕への嫌がらせだと思つのは穿ちすぎだろうか。そりゃ勿論間違いなく穿ちすぎだろう。シャープペンを走らせる彼女にはなるほど、優等生という言葉がぴつたりだ。集中力がまるで僕とは違う。ていうかこの空気、春日井さんにとっては大丈夫なのだろうか。

昨日の今日で怒ってるだろうから僕から話しかけるのもためらわれる。かといって春日井さんから話しかけてくる可能性は隕石が落ちてくる可能性よりも低い。うーん、あと2時間息止めてられるかな。・・・何してるの。ちゃんと考えてよ。

「！！・・・ええっ！！」声をあげる僕。そしてその僕の驚きに驚く春日井さん。

「隕石落ちちゃったよ！！」

「な、なに！？」僕の突然の発言についてこれるはずもない。春日井さんは縁がピンクの眼鏡をはずした。

「あ、いや。今僕のセンサーが世界のどこかの流れ星を発見したみたいで」

「あなたは全ての流れ星に願い事ができるというの！？」

すげえ。突っ込んできた。そういえば僕の調べた情報によれば、彼女が突っ込みのほうだった。昨日は緊急事態でその力が作用しなかったという事か。そして、僕の情報が正しければもう一つ、武器があった。

「絆創膏がメインみたいな額して何を言っているの？」

「……」そう、彼女は毒舌です。誰にでもというわけじゃないけど、かなりの。

「それよりも漆根君のほうはどうなの。内装の構想は「こういう所はやっぱりまじめな優等生だった。」

僕は出し渋る。一応考えているんだけど、100%反撃を受けるからな。

「ほら早く、その人間が描いたとは思えないのを見せてよ」

「……」

僕が返事をする間もなく、僕の手元から紙を奪い取る春日井さん。机に置いておいた眼鏡をかける。僕の字が小さいうえに汚すぎてよく見えないんだろう。ああ、だんだん眉間に皺が寄っていくよ。ま
ずいよ、怖い。怖い怖い怖い。

「……漆根君」

「はいっ！」

「やりなおし」

「……はい」うなだれる僕。しかし春日井さんは情け容赦なく死者に鞭を打つ。

「これじゃあ怖がらせるポイントが3つしかないじゃない。それに普通すぎね。そして、入り口がないのにこのどこから入るの？お客さんに天井からでも入らせるの！？そんなの超軟体動物の漆根君にしかムリよ」

「超軟体動物ってなんだ！？僕はぬめぬめしてないぞ」

「してるわよ！ぬめっとしててねっとしててふにゃふにゃしてるじゃない……！」

どうやら恐ろしいことに春日井さんの舌が乗って来たらしい。だが

しかし、それによって僕が乗ってくるのも然り。いつのまにかさつきまでの気まずさはどこかに消え去ってしまっていた。今日は風が強いからだろうか。

「どっちかって言う猿？しかも発情期の」

「う、ぐ、ぐ、それに關しては言い返す言葉はない！その節はすいませんでしたっ！」「ないんかい。」

心の中で自分に突っ込みを入れておく。しかし春日井さんがこの話題を出すなんて。ていうか春日井さんと攻防ができるなどとは思わなかった。僕はどっという夢を見ているんだ。

「・・・そういえば」春日井さんは再び眼鏡をはずした。どうやらデフォルトは裸眼で、文字を読むときにはかけるらしい。コンタクトにすれば良いのに。めんどくさくないのだろうか。

「及川君が言ってたわ、最近漆根君が何もしないからつまらない、つて。どっいうDNAの変化？」

「僕のさかりは遺伝子レベルか！？だがそれを言つと妹まで被害を受けるからやめてくれ」

春日井さんは僕に妹がいる事に若干の驚き（そしてなぜか向けられた憐憫の目はつむぎに対するものだろう）を見せたが、何も言わず僕を見ている。

「まあ、及川流に言う僕のその習慣には理由があつてね。その理由が先週解決したんだ。だからもう何もしないよ」僕は悪戯を叱られた子供のようにつた。春日井さんは説明の足りない僕の言葉にしばらく怪訝な顔をしていたが、しばらくして重い口を開いた。

「それを聞いて安心したわ。今週末に被害者の会で追ひ込みかけようと思つてたからね」

「こわっ！」僕、危機一髪。ああ、でも安心してくれたということ は心配してくれたんだろう。春日井さんはやっぱりいい人だ。ていうかなんだ、被害者の会つて。

「本当に安心した。私達が加害者にならなくて」

「前言撤回。あんたは鬼だっ！！」僕の褒め言葉を返せ。

「まあ、私はどっちでも良かったんだけど」

「どっちでもって、僕の生き死にが！？それとも自分が加害者になる事が！？」まあ、こんなの答えのわかりきってることだな。さすがに人一人の命を天秤にかけたりはしないだろう。春日井さんは僕と違ってちゃんと常識人のはずだ。

「うん、漆根君が死ぬか死ぬか生きるか死ぬかが」

「ちくしょう、あんたは常に僕の予想の上をいくな！そして僕の死んでもいい確率4分の3かよ」

「まさにデッドオア・・・デッドよ」

「ついに死ぬしかなかった〜！！」

改めて僕の罪の重さを実感した。ああ、神よ、僕の罪を許したまえ。・・・困ったときは神頼み。やはり僕は現金で罪深い人間のようにだ。時計を見ると結構時間がたっている。こういう時間はさっさと過ぎてしまいうらしい。傍から見ると僕がいじめられてるだけだけど。ていうか僕自身もそう思ってるけど。しかしなんだろう、この別にいやじゃない感じ。僕の中で何かが産声をあげていた。

話は戻って再び文化祭の話し合い。真面目にやりたいが、どうしてもダメだった。こういうちゃんとやらなきゃいけない雰囲気な身体が順応しない。僕はしだいに正座をしてる小学生みたいにそわそわして春日井さんに5回注意された。

「内装はこうかな。これを基本にして後はオプションを追加してけばいいし」

「・・・すいません」タバコの箱並みに小さくなる僕。結局僕は何もしていない。だから文化祭委員なんていやだったんだ。

「ああ、うん大丈夫。漆根君には最初から何も期待してないから」
「くっ」

「あれね、政権交代による新たな総理大臣くらい期待してないわ」
「それは失礼だ。あの人達だって頑張ってるよっ！」

「・・・ん？でもそれなら多少は期待されてたんじゃないか？だとし

たら悪いのは僕だ。なんだよ、またお前かよ。いい加減良いこともやれよ。

僕はブツブツ言いながら春日井さんの書いた案を写した。実際全て春日井さんが運営してくれるなら必要ないが、何かしなくては、という焦燥感に責められた結果だった。つまりこれが僕の出来る最大限。悲しくなる。

「しかし凄いね、春日井さん。こんな簡単に考えを出せるなんて」心からの完敗だったので、僕は素直にそう言った。しかし春日井さんはなぜだか俯いた。僕は首をかしげる。

「別に普通よ。かなりオーソドックスな配置だし、それを言うなら漆根君のほうが凄いわよ。まさか入り口を作らないという奇行に出るなんて驚嘆に値するわっ！」

「何で僕けなされたのっ!？」
褒め損だ。おかしいな、称賛に対して皮肉で返ってくるなんて。彼女の中で僕の発言はどう変換されたのだろうか。攻撃だとも思われたのだろうか。だとしたら僕の言葉は無為に人を傷つける性質があるというのか。超シヨックだ。

「と・に・か・く」春日井さんは一字一字区切るようにはつきりと発音した。ようやく顔を上げる。

「文化祭まで時間もないし、そんなに凝ってもいられないわ。ぱぱっと行くわよ」僕は頷くしかない。そしてその宣言は僕に口を出すな、と同義だった。結局その後も僕は適当な相槌をうつだけにとどまり、そのうち6時になってしまった。

「とりあえず今日はここまでね。私これから塾あるから戸締りと先生への報告、よろしく」

「……………はい」とんだ投げっぱなしジャーマンだ。僕は言葉を失う。相槌だけでろくに喋ってなかったのも言語が失われていたからかもしれない。

「アア、アー……………赤パジャマ青パジャマ黄ばんだ」よし、どうやらちゃんと話すことはできるらしい。春日井さんの背を見送りつ

つ、僕は安心した。

教室の窓を閉めて電気を消す。春とはいえまだまだ4月なので6時を回れば暗くなる。電気の消えた教室というのはとても静かで不気味だ。幽霊でも出そうだが、結局出なかった。・・・残念だ。

僕はすぐに教室を出て、先生に報告をし、幽霊がいる我が家へ帰ることにした。

ぬめっとしててねっとしててふにゃふにゃしてるじゃない！！ 3

「おお、耕太、遅かったな。まさか不良に！？ママはそんな子に育てた覚えはありません！」

「いいえ、子どもがどんな子に育ったかは全て親の責任ですよ。この僕が言うんだから間違いありません。覚えのない親のほうが悪いんです」ていうかさつきさんは親じゃないけど。自分の部屋でごろごろしながらお菓子を食べている親なんてこっちから願い下げだ。ていうかまだ6時半だ。

「・・・つまり」これだけは言いたかった。僕は後ろ手にドアを閉め、さつきさんを指差す。

「僕のこの性格は僕のせいじゃないっ！！」

あ、さつきさんが哀れみを込めた目で僕を見ている。お陰で後に引けなくなった。お願いだ、突っ込んで。

「やれやれ、最近は大人も子供も皆責任を他人に押し付けたがるな。日本はダメだ。私はアメリカ人になろう」さつきさんは溜息をつく。突っ込んでくれなかったので僕はまっすぐに伸びた指を下ろすことすらかなわない。人差し指はさつきさんを差したままだ。

「いやいや、アメリカもアメリカで民族差別とかありますからね。それにほら、今は世界中が不景気ですから、母国のほうが生きやすいと思いますよ」ていうかすぐに逃げることを選択するあんたも今どきの子供みたいだよ。

「ばか者、そんな受身な姿勢でどうする！生きやすい国がなければ私は新たに国を作ればいいだろうが！！」

「うわあ、スケールでけえ」

「さあ、段ボールを用意しろ！」

「それはただの籠城だ！」

僕も言ったことがあるなあ、幼稚園児くらいのときに。居間の隅に段ボール構えて「僕の国だ！」って言ってたなあ。懐かしい。

「そうしたら君も国民にしてやる。無論奴隷としてだが」

「人権侵害っ!?」なんて仕打ちだ。ていうかこの場合僕は望んでないから拉致するつもりか。あ、でもさつきさんの奴隷ならいいかもそれに奴隷になれば受験勉強とか就活とかしなくていいからな。

「……嘘だ。流石の僕もそこまで人生捨てちゃいない。リンカーン先生は偉大なのだ。」

「僕も高校生ですからね。遅くなったりもしますよ」

「何をえらそうに。どうせいても意味のないようなことのくせに」「見てたんですかつ!？」

「ほら、認めた」勝ち誇った顔をしたさつきさん。しまった、誘導か。こんな簡単に引つかかってしまうとは。浅はかなり、僕。

「ええ、認めますよ。認めますとも。置物のようにじっとしておりましたとも。それでも委員になっちゃったんだから仕方ないんです!文句あるんですか!？」逆ギレだった。こんな時はいつも思う。

僕って人間小さいなあ。

「耕兄、ごはん!さつきから呼んでるでしょ、まったく」

突然ドアが開け放たれ、仁王立ちをしているつむぎ。相変わらずノックをしない彼女には兄として注意すべきなんだろう。でも注意するとすごい反撃が帰ってきてそうで怖いなあ。

「……何で僕は妹に注意するのもビビってた。思わず自分自身に突っ込みをいれる。自分からとはいえ、突っ込みが来たので、ようやくつむぎから見て何も無い空間を指差していた僕の手が下ろされた。」

つむぎは不機嫌に眉間に皺を寄せたまま階段を下りていく。せつかの美人が台無しだぞ、妹よ。ひもじそうに僕を見るさつきさんを尻目に僕もその後を追う。今お菓子を現在進行形で食べてるじゃないか。どれだけ強欲なんだ。

僕はあなたをそんな子に育てた覚えはありません!!

向かい合って食事をしている間、つむぎは無言だった。僕はご飯の

量よりも多い両手いっぱい笑いを提供したが、笑うどころか反応すらしてくれなかった。漆根家では食事中にテレビを見るのは禁じられているので、沈黙が僕を針の筵となって覆い尽くしている。精神が大きな穴が開いたサンダルくらい磨り減っていた。僕に目を向けることもなくつむぎは俯いて箸をすすめている。そういえば僕を呼びに来たときも心なしかピリピリしていたな。何かあったんだろうか。

「もしかして、恋わずらい・・・？」その冗談が今夜の僕のつむぎに対する最後の発言だった。つむぎはカツと目を見開いて、半分以上残しているご飯をそのままに箸を置いて、椅子から力強く立ち上がるとチーターもびつくりの速さで階段を駆け上がって自分の部屋に飛び込み、家が揺れるほど勢いよくドアを閉めた。

「・・・」僕は固まる。今僕の目の前を過ぎ去ったのは台風だろうか。だとしたら随分と局地的だ。しかし、ここだけは誤解してもらっては困る。僕の妹は普段決してご飯を残すような子ではない。

「仕方ないな」僕はつむぎが残していったご飯を手元に運ぶ。妹の名誉のために彼女が残した証拠を隠滅しようという愛。そう、愛だ。素晴らしきかな、兄妹愛。

僕は・・・僕は、産業廃棄物になるんだ〜！！ 1

「よし」

僕が、この僕がこんなすがすがしい気持ちとともに目覚めている。これもさつきさんのおかげだろう。まあその理由は何かっていうと目覚ましよりも少し早く起きたっていうごくごくちつぽけなことなのだけど。ちつさいな、僕。まあ、いいぞ。

「つつ・・・まだ痛いな」額の絆創膏を取って鏡で見るとかさぶたになっていいる傷があった。めちゃくちや目立っている。同じように黄色い化膿止めを塗って大きめの絆創膏で傷を隠した。

ジリジリジリ

まづいっ！！

僕は音源に向かってヘッドスライディングを敢行して見せた。プロ野球の見よう見まねだったけどそこそこそれっぽくなったので自分でもびっくりした。しかし、それよりもびっくりしたのはさつきまで目覚ましがあった僕の顔の真横をさつきさんの拳が通過したことだった。恐ろしいことにこの人は目覚ましを殴って止めるつもりだったのだ。

「ちつ・・・」

顔を上げたさつきさん。

「何に対する舌打ちっ！？勝負に負けたこと！？それとも僕に当たらなかったことっ！？」心臓がバクバクと鳴っていた。さつきのあれは普通に死を覚悟した。

「決まってるさ。敵を殲滅できなかったことだ」

「戦場！？ここは戦場なの！？」ヴァルハラの大地ですか？

「何を言っている？この世に戦わずして生きられる場所などないぞ。楽園は朽果て、神は死んだのだ」

「何かっこいいこと言ってるんですか？」なんだ、何の影響だ？

「くっ・・・この戦争が終わったら、俺、結婚するんだ」

「死亡フラグっ!？」間違ひなく特攻に言っただけ死ぬパターンだよ。そのセリフを吐いて死ななかつたのはハガンのヒューズさんくらいだよ。」

「馬鹿を言っただけ!俺は死なないぞ。こんなところで死ぬわけにはいかないんだ!」

「やめて、やめてくれ。しゃべることにフラグがたまっていつてるよ!」
「・・・ってこういう気分だ、今」さつきさんは憂鬱気なため息をついた。

「支離滅裂っ!？」全く意味がわかりません。要するにどうやら壊れてしまうほどショックが大きかったよう。たかだか目覚ましなのに・・・。

「さあさあ、布団という名の敵を片付け、朝食という名の次なる戦場に向かおうではないか」と思っただけで急にテンションが上がっている。相変わらず欲望に忠実な人だ。

「いやいや、食事は大切だぞ。そもそも耕太がひ弱に見られるのはその卑屈な性格のせいも多分にあると思うのだが、やはり体が小さいことにあるのだと思う」パジャマ姿のままベッドに腰掛け、足をパタパタさせるさつきさん。

「はあ、何で突然僕分析を始めたんですか」布団を畳みながら僕は尋ねた。

「だいたい君は少食すぎるのだ。私に食べすぎだとか言うが、君が食べなさ過ぎなだけなんじゃないのか?」

「ああ、そうやって自己正当化に走るわけなんです。おかしいですよ!さつきさんって父さんよりも食量多いんですよ?ここんこ米の減りが早いって母さんに言われて、僕が夜食で勝手に食べてることになってるんですよ?」両親としても僕が小食なことを気にかけているので文句は言われてないけど・・・。

「なにっ、私の食事を君が奪うつもりなのか!?ばかものっ!」

「だめだ、日本語の問題だ・・・」

「どうだ、もつと食べて太ってみないか？」

「そんなビールもういっぱいどう？みたいなノリで太りたくないですよ。そもそも僕って太りたくても太れない体質なんですよね。ご飯食べ過ぎると気持ち悪くなっちゃうんですよ」ある一定以上食べると胃が受け付けなくなるのだ。食べ過ぎで即吐ける人種だ。

「あーあ、これだから現代っ子は。ご飯をお腹いっぱい食べる喜びを知らない。戦場で生きてきた私にはよくわかる。君はぜいたくすぎるー！」

「な、なんとあの死亡フラグのがんじがらめの中、生きて帰ってきたのか・・・！」さすがさつきさんだ。あらゆるフラグをもものもしない。

「でもでも現代っ子は昔と違って家計の心配をしなければなりませんからね、ご飯をおなかいっぱい食べるのもひやひやものなんですよ」

「ふむ、では仕方無い。椅子に縛り付けて無理やり食べさせよう」「いやいや、無理ですって。それよりもどうですか、二人羽織ってというのは。それなら僕は際限なく食べられますよ。そしてちよっと前のめりになっていたいただいても結構です。むしろ僕はそっちのほうが・・・」

「ば、ばかもの！ちよ、調子に乗るな・・・」そこからのさつきさんは高速だった。目覚ましを止めるスピードよりも早く、まばゆい光線のような右ストレートが僕の顔面を貫いた。

「い、今、鼻がメキって・・・。冗談すらも許されない・・・」床に転げまわる僕。学習というものを知らない。

「君はわざわざ冗談を言う必要などないのだ。君の存在が冗談なのだからな。漆根冗太だ」

「語感がダサイ！」涙目だけど必死に突っ込む僕。

「もういい、君はむしろご飯を食べるな！食べずにやせる、棒になれ！そして私に献上しろ」

「圧政だ〜。まだ食べるんですかっ!？」

「ふっふっふ、君はまだ私の真の恐ろしさを知らない。この私が本
気を出した時、それはこの国から食料という食料がなくなるときだ
！」

「ごめん、母さん。漆根家はもう終わりかもしれない・・・」これ
がうわさに聞く恐怖の大魔神か・・・。終端をもちたらずノストラダ
ムスか。まさかこんな地味な方法で世界の破滅をもくろむなんて・
。

僕は・・・僕は、産業廃棄物になるんだ～～！！ 2

今日は金曜日。金曜日である。要するに明日は週末。特に今週は放課後毎日残っているせいか、一週間が異常に長く感じたので待ち遠しさもひとしおであった。もっとも、僕はあまり趣味がないので週末にやれることと言えば気兼ねなくぼーっとできるくらいだ。

「つまらん、つまらんぞ耕太。いっそのこと人生も終末にしてはどうだ？」

「怖いわっ！」飛びのく僕。さもなければ本当にさつきさんの鉄拳が僕の身体を貫くところだった。無趣味は死刑になるくらいの罪なのだろうか。なんかつくろうかな。

「しかし、特技ゼロの君が趣味など作れるとは思えないな」

「・・・」ひどい物言いもあつたものだ。否定はしきれないけど。及川が言うには僕の唯一の特技はフられても凹まないことらしいからな。でもそれは特技じゃないし、僕はいつも十分凹んでいる！

「そこまで言うならさつきさんには趣味があるんですか？」僕は反撃を開始した。しかし、さつきさんはどことなく深刻な、そしてどこか悲しそうな顔をした。

そうだ、僕はなんてデリカシーがないんだ。さつきさんには過去がない。自分の趣味などあつたとしても忘れてしまったし、そもそも幽霊なんだからできる事なんか限られているじゃないか。最低だ、僕。

「・・・どうした耕太、キョロキョロして」さつきさんは憂鬱な顔のまま僕を見た。

「いえ、穴があつたら入りたいんですけど僕を収納できるような大きな穴がないんでマンホールでも・・・お、あつた」道を歩けば一定間隔であるものである。

「それじゃあ、入ってきます」笑顔で手を振って僕は足を一步踏み

出した。そんな僕をさつきさんは後ろから羽交い絞めにする。

「よせ、冗談だ。憂鬱げな顔の演技だ。だから、な！な！気にするな。ちよつと、止まつて……！」

「いいえ、なんぴとたりとも僕を止めることなんてできませんよ。

僕は……僕は、産業廃棄物になるんだ……！」

僕、暴走中。

「そんなことよりも重要なことがある！昨日家に帰ろうとしたらつむぎを見たんだが、制服を着た少年と手をつないで帰って来てたぞっ……！」

僕、一瞬にして停止、ていうか死亡。さつきさんが羽交い絞めしてなければ確実にコンクリートに寝そべっていただろう。さつきさんも僕がここまでふにやふにやになるとは思っていなかったのか、がくりと膝が崩れた。結局、2人して地面に倒れこむ。

「あいたたた……。耕太、おい、耕太。こーた、こーうーた！どこ行つた、帰つて来い」僕の目の前で掌をかざすさつきさん。しかし、彼女の言葉を僕の脳は受信する事はできなかった。

つむぎが？男と？手をつないで？

悪い男だつたらどうするんだ。いや、そもそもつむぎは脅されていやいやそんなことをしているかもしれない。

僕は意識もおぼつかないままに立ち上がった。ブツブツ言いながらふらふらと学校に向かう僕にさつきさんが声をかけているらしいが、反応できるはずもない。

「……シヨツカーみたいな感じで改造されるのかも。そうだったらヒーローとしてこの世に君臨できるのか。羨ましいな、つむぎ。あつはつはつは……」

ちなみに僕はこの日、何の授業があつたのか覚えていない。それも当然だ。明日世界が滅びるかもしれないってときに目の前の仕事を黙々とやるやつがどこにいる。

「漆根君。漆根君。はあ、もう……」

ぶすり、と春日井さんは容赦なく絆創膏の上から傷をシャープペンで押した。もちろん僕は月曜日に受けた傷を4日で治せるような吸血鬼でもないので非常に痛い。椅子から転げ落ちて悶え苦しむ。

「あら、気がついたかしら？」春日井さんはちつとも悪びれる様子もなく僕を見下ろした。しばらくして僕は我に返った。

「あれ・・・ここは・・・？」

教室だった。火曜日からの3日間と同じように机を向かい合わせている光景だった。

確か僕は今朝マンホールに突っ込もうとして、さつきさんに耳元で呪いの言葉を浴びせられて・・・。

「あれ？すごく額が痛い・・・」傷に何か硬いモノが突き刺さったような気がする。よく分からないけど。

「ああ、それはスナイパーね。見事漆根君の額に当たったんだけどなんと漆根君の額に仕込まれてた頭蓋骨が守ったのよ」春日井さんは顔を上げる事もなくそう告げた。

「スナイパー近っ！」もちろん目の前の春日井さんがやったのだと分かる。でもまあいつか・・・まだ痛いけど。

「まったく、朝からずっとそんな感じね。てつきり犬の死骸でも打ち捨てられてるのかと思った」

「ひどい物言いだ！」せめてまだ生きてるものに・・・でも僕はさつきまで死んでいた気がするな。臨死体験か。

「ごめんなさい、ひどい物言いだっただわね・・・犬の死体なら良かったのに」

僕、撃沈。机に突っ伏し、額をぶつけ再度悶絶。馬鹿な自分に嫌悪した。

「冗談よ。そんな喜ばないですよ」

「・・・」僕はそこまで人間やめてないぞ！何でだろう、今日の春日井さんはえらく苛々してるな。

「ダメね、漆根君が手伝ってくれなかったから全然進まなかったわ」春日井さんはそう言ってシャープペンを机に置き、腕を前で組んで

伸びをした。時計を見ると下校時間だ。

「あれ？暗っ！」僕は驚いて辺りをキョロキョロと見回した。おかしいな、さっきまで朝だったのに。今日の太陽はやる気がないのか？きつとそつだ。

しかし、目の前には春日井さんが（1人で）必死に働いた形跡がある。どうやらやる気がないのは僕のほうのようだった。

「ああ、もう！どうしよう。内容を全部まとめて月曜日の委員会で提出なのに」春日井さんは苛立ちを露にする。よっぼど怒っているらしい。

ちなみにこの学校では土曜日に隔週で午前授業がある。土曜日の午後と日曜日は一応部活動のために学校は開けられているが、校舎の方は閉められている。文化部は部室で部活をする事になるが、大半は休みだ。というわけで文化祭委員の仕事は今日中に終わらせなければならぬ。ちなみに下校時間を越えたらペナルティで、2回目ですのクラスは出場停止という厳罰だ。

「じゃあ明日授業が終わったら漆根君の家ね」紙や筆箱やらをバッグにしまいながら春日井さんはさらりととんでもないことを言い放った。

「えっ！？いやいやいやいや・・・冗談でしょ？」

眼鏡をはずし、じつと僕を見る春日井さん。ああ、これはドッキリの前触れだ。きつとそつだ。ねえ、何で腕組んで自信気な表情をするの？

「私が冗談を言うと思う？」

「言わないですよねえ。」

やっぱり僕の想像のはるか高みに行くお方だ。捉えることなどできない。

「いや、だってほかにもいろいろ場所はあるでしょ？」と、しどろもどろに言いつつ、いろいろを考えてみる。

「・・・ないわね。田舎だし。どこも電車を使うか自転車を使うかないと。・・・それとも女の子の家にお邪魔しようとも？」睨

まないですよ。怖い怖い。なんでだ。さつきさんと提携して心身ともに僕をすり減らそうという魂胆か？ちくしょう。そりゃあ勝てないよ。僕は運命を受け入れるしかないよ。

「・・・わかった。明日ならまあいいよ」両親とも仕事で家にいはいしね。日曜日になれば流石に休みで、今週こそは旅行に行かないだろうから明日には全て終わらせなくてはならない。必要ないかもしれないけど言っておきたいのは、春日井さんはそれでいいのか、という話だ。まあ、本人が言い出したのだから別にいいのだろう。校門の前で春日井さんと別れた。道すがら今朝何が起こったのかを再度思い返してみた。

「あつ、そうだ、つむぎだ！」僕の気が急いてくる。心臓がランナーだったらかのウサイン・ボルトよりも速く走りそうなくらい焦り出した。だが、残念ながらその心臓の持ち主は僕なのでムリだ。

僕は・・・僕は、産業廃棄物になるんだ～～！！ 3

「・・・ただいま」陰鬱だった。世界が終わってしまったようだ。いや、既に終わっているのかもしれない。そこまで考えてふと立ち止まる。今の僕ってシスコンすぎないか？僕とつむぎはもっと離れたプラトニックな関係のはずだ。ていうかなんでそもそも僕はそんなこと気にしてたんだ？別にどうでもいいじゃないか。

「おかえり」

既にご飯を食べていたつむぎはこっちを見ずにテレビを見ていた。うん、四方八方上も下も、どこから見てもいつものつむぎだ。ちなみにつむぎは制服以外スカートをはかないので、下から見ても良いのだ。

僕はほっ、と息を吐いて階段を上がり、部屋に入った。電気をつけるとベッドがこんもりしていた。首を傾げつつ布団を剥ぎ取るうとした。だがしかし、それ以上の力で押さえつけられていて、剥ぎ取ることではできなかった。

「・・・何してるんですか、さつきさん」

「・・・」返事はない。ただの幽霊のようだ。・・・って怖いなこの表現！

「ふん。耕太なんか嫌いだ！」
嫌われていた。

しかもはつきりと正面から言われた。流石の僕でもショックだ。サントクローズに扮した父さんがクリスマスに家にやってきた以来のショックだった。あれって結構死にたくなるよな。つむぎは大泣きしてたし。子供たちを喜ばせようとして頑張った父さんはかわいそうだったけど。当時は必死でそれどころではない。

「僕はさつきさんのこと好きですよ」

この『好き』は今まで乱用してきた『好き』とは格が違う。『プラトニック』と『プラスチック』くらい違う。

「嘘だ。今日は散々私のことを無視したくせに！決めたぞ、私はひきこもりを決行する！」

ひきこもりというか立てこもりというか蛹みたいだが、そう言うのはやめておこう。しかし随分狭い空間にひきこもるんだな。身動き取れないじゃん。

あれ？ていうか僕がさつきさんを見無視？いや、これは蛹とムシ（虫）が掛けられてるわけじゃないだろう。記憶を呼び覚ましてみるがそんなことした覚えはない。ていうか今日は記憶自体がなかった。

「・・・私のがほんとに好きというのなら2000字で謝れ」ムチャ振りだった。

「いやいや、ムリですよ。そもそも僕は国語が苦手なんですから。ていうか得意教科なんてほとんどないですけど。いや、確かに無視はしたかもしれません。でもほんとに今日のことは覚えがなかったんです。信じて下さい。普通僕がさつきさんを見無視するわけじゃないですか。だってさつきさんと話するのは何よりも楽しいんですから。正直神様を引きずりおろして代わりにさつきさんを据え置きたいくらいです。だから機嫌直してください」

「・・・1文字オーバーだ。0点」数えられてた。ていうか適当に喋ったのにニアピンなんて凄いな僕。

くそっ、こんなことなら「おろして」を漢字にしておけばよかった。「機嫌直してくれたら今度おいしいものご馳走しますから」

「・・・」あ、無言になっちゃった。そりゃあ尊厳ある人をもので釣るなんて恥知らずな行為だったな。まずい、ほんとにさつきさんに嫌われたかも。

「・・・駅前のシュークリーム3個だ」

「・・・」釣れちゃった！しかもわりと安価だ！なんて簡単な人なんだ！

「ばか者！あそのシュークリームを馬鹿にするな！中の甘いクリームをカリカリの生地で包み込んだそれはそれは一級品の・・・」布団を翻して出てきたさつきさんがいきなり早口でまくし立てたの

で、僕はそつとさつきさんに布団をかぶせなおし、ご飯を食べに一階へ下りた。

「あ、うん、わかった。じゃあね、シユウ君。日曜日に」

つむぎが電話していた。ちなみに中学生であるつむぎは携帯を持っていない。結果、リビングか2階の両親の部屋の子機を使うことになる。つむぎは僕を見ると、しまった、という顔をした。

「なに、誰と電話？日曜日にどっか行くの？」僕は極力感情を殺して聞いた。

「別に。耕兄には関係ないでしょ！」と、つむぎはマスコミからの質問に対して「別に」と言ったどっかの女優のようなセリフを残し、どたどたとレディーにあるまじき擬音を発生させながら階段を駆け上がって行った。

冷静な表情とは裏腹に僕は決意に燃えていた。しかし、これはもう少し先の・・・というか明後日の話。それよりビックイイベントが明日ある。

ああ、どうしようっ！！

じつと突っ立ってるから粗大ごみかと思っただわ 1

「今日は悪いが行くところがある。耕太のお守りはできない」と、土曜日の朝の登校時間。大多数の人が恐らくもつとも憂鬱であるだろうこの時間にさつきさんは宣言した。ちなみに僕は休日を楽しみを見出せない人種なので、そこまで苦じゃない。ただ、今日に限っては別の意味で憂鬱だった。そこにきてさつきさんのこの発言である。テンションも下がろうというものだ。

「涙を呑みましょう。でも行くところってどこですか？」確かに今日は春日井さんの件が・・・はあ・・・あるから都合が悪くない訳ではない。

「うん、古本屋に行って立ち読みだ」

「貧乏臭い！」

「立ち読みを舐めるなよ、耕太。私の場合はまずその漫画を読んでいる者を探るところから始めなくてはならないんだ」

「漫画なんだ。そしてそこまでして読みたいんですか？っていうかちよつとの間だったら姿を現すって言う裏技ありませんでしたっけ？」

「疲れるのだあれば。そして私の姿は防犯カメラに映らないからな、騒ぎになってしまふ。ふふ、防犯カメラに映らないからまずいって言うのも面白い」

「・・・」
「どうだろう。まあ、本人がそう言っているのならいいのか。うん、そうだ。超面白い。腹がよじれそうだ。」

「それなら僕が買ってあげましょうか？それくらいの金なら持ち合わせてますよ」

僕としてはなかなかいい提案だと思ったのだが、さつきさんはちつちつち、と指を振った。

「甘い耕太。まだまだスタンディングリーダーとしてのレベルが低い」

「・・・」
「やばい。「立ち読みをする人」っていう表現をち

よつと英語に置き換えるだけで一時代築けそうだ。・・・スタンディングリーダー。

「ちなみに私はレベル54だ。もう少しで進化する」

「その進化、見たくねー！」別に僕も立ち読みはきらいじゃないけど、そこまで入れ込むのはどうなのだろう。そう考えてしまうことが僕が無趣味な理由なのかもしれない。

だとしたらそれでもいいや。ていうか、うん、どーでもいい。

「それに耕太の金は私のおやつ代だからな」

「女王だ！」どちらにせよ搾取の対象というわけだ。某全国をサイコロで巡るゲームの貧乏神みたいだ。だが、ここはあえて言おう。憑かれて悔いなし。むしろ自分から付けに行くみたい。そして目的地からできるだけ離れた場所に向かうんだ。二人きりで何ヶ月も過ごすんだ。誰も来ない所という沖縄かハワイかな。

「とにかく、そういう事だ。最悪夜10時まで帰らないからな」

「全国のスタンディングリーダーも真っ青だ！」やばいだろ、それは。絶対レベル95くらいいってるよ。間違いなく既に2回くらい進化してる。もしくはレベルアップの度にBボタン押し続けてる。

そんな話をしていたら危うく遅刻をするところだった。ちなみに及川は今日学校に来ていない。まったく、仕方のないやつだ・・・
・僕の次あたりに。

土曜日は午前中の3時間だけ。だがしかし、時間がたつにつれて僕の心臓が痙攣を始めた。不整脈でまくりだ。僕が小学生の時に亡くなったおじいちゃんも不整脈持ちだったから遺伝かもしれない。

春日井さんを後ろからちらりと観察したが、実に優等生然とした態度だった。正直見習いたい。見習ったところで実行しないだろうけど。

普段は異常に長く感じる授業時間もなぜかこういうときだけは早い。僕は死刑を待っている。多分銃殺刑よりもキツイ。

「漆根君、さっさと済ませるわよ」3限目が終わり、みんなは部活

や塾や家に直行する。春日井さんと言えば僕の席に直行してきた。まだ帰らずにいた女子がこっちを見ている気がする。肝の小さい僕では確認する事はかなわないが、絶対こっちを見ているだろう。チラ見とひそひそ話の対象には全国の高校一年生の中でもっともされている自信がある僕だ。手に取るように分かる。

・・・必要のない技術だった。というかぜひとムクーリングオフしたいスキルだ。

「その前に色々やることあるから正門で待っていてくれるかしら。時間かかるかもしれないけど別にいいわよね、漆根君はどうせ無駄に生きてるんだから」

「ひどい！」僕だってちゃんと必死に生きてるよ！確かに無駄は多いけど！

それを捨てゼリフに、教室を走り去って行く僕。ちなみにさつきさんは2限目あたりでいなくなってしまった。古本屋の開店は10時からだったようだ。

そして、従順に校門で待つ僕。もしかしたら僕は春日井さんに騙されているのかもしれない。今頃校舎の影で僕が待ちぼうけしているのを友達と爆笑しながら見ているんじゃないか？

・・・ありえるな。

いかんいかん、春日井さんを疑うなんてサイテだ。ここは僕自身を疑った方がいいんじゃないか？たとえば、昨日とさっきの春日井さんは僕が見た幻で、僕は一人で喋り、勝手にここに立っているんだ！

・・・とか。

「・・・じつと突っ立ってるから粗大ごみかと思ったわ」

「・・・最近特にひどいぞ、毒舌が。というよりも舌が乗って来た感じ。それが素なら将来大変だぞ。などと、自分のことを棚にあげて春日井さんの将来を心配してみる。」

「あ、えっと、行くところか。そういえば昼ごはんはどうするの？」

「・・・無言。どうやら何も考えていなかったようだ。も

ちろん、僕としては家で食べてもらうのもやさかではないのだが、それでは春日井さんのほうが嫌だろう。お互いに家が近いから一度解散するという手もあるのだが。

「どこかで買って行きますよつか。漆根君ってファストフードが嫌いな人・・・じゃないわね、ファストフードに嫌われてる人だったわ」

「いちいち僕をけなさないと話進まないのっ!？」とんだオプシヨンだった。

「あ、でも漆根君の部屋はごみ屋敷だからとてもじゃないけどご飯なんか食べられない、か。・・・困ったわね」

「ちよつと待て!僕の部屋は清潔そのものだ。さながら天使の住処だ!」散らかすと母さんとかつむぎとかうるさいんだ、これが。それこそ極刑ものである。

「天使、ね。おあいにく様。私は自分の目で見たものしか信じないわ」胸を張る春日井さん。

「でも、神様はいるわ」

「見たの!?マジで!!」・・・まあ、僕も幽霊見てるけど。ていうか一緒に住んでるけど!

これは内緒だ。

じつと突っ立ってるから粗大ごみかと思っただわ 2

結局、道すがらここ近辺で唯一生存しているハンバーガーショップで昼食を買い、僕の家に向かう。今日つむぎは部活のはずだから2人きりになってしまふ訳だけど大丈夫なのだろうか。と聞くとなんか僕がそういう行為をしそうな人間と見られそうだから口をつくむ。そうそう、どうでもいいことだが、僕はつぐむのことをずっとつむぐだと思っていた。

口をつくむ

多分につむぎという妹がいるからだと思うが、一度間違えて覚える。と訂正に時間がかかるものだ。ちなみに中2まで。流石に恥ずかしかった。中2の僕は恥ずかしいことだらけだ。

そもそも僕に無邪気を演じるのはムリだ。そういう生き方をしてきた訳だし、春日井さんもそう僕を認識しているのだから。だとしたら僕程度組み伏せるという意思の表れだろうか。あれから空手辺りを学んだのだろうか。

「平均的な家ね」

と、春日井さんは僕の家をそう描写した。別にけなししてる訳でもないはずだ。それは僕の家族にはばかった結果なのだろうか。ともあれ僕はなぜか劣等感に似たものを感じた。そもそも春日井さんの家が大きすぎるのだ。僕の家が大きさだつて標準的なそれなのに、春日井さんの家は遠目に見てもその二倍はある。

「ま、どうぞ」そもそも僕にとって劣等感とは日常というか相棒なので(われながら嫌な少年だ)、対して気にする事もなく鍵を開け、春日井さんを招く。春日井さんは若干何かを考える節があったが、結局家に入った。もちろん「お邪魔します」は忘れない。基本的に春日井さんは礼儀正しい人なのだ。僕に対してはこんなだけだ。

「・・・天使はいないわね」

部屋に入って開口一番、春日井さんはそういった。僕にとっての天

使はいつもベッドに寝ているのだが、今日は残念ながらない。なんてったって生粋のスタンディングリーダーだから。

「・・・確かにきれいにしてるみたいね。ほんとに漆根君の部屋？」
「どういう意味さ」

「意地を張らなくてもいいのよ。汚い部屋を隠すために妹さんと部屋を交換したんでしょ？」

「おいおい僕を見くびってもらっちゃ困るよ。僕はありとあらゆるものを大事に使う男だよ。加えてきれい好きだ」胸を張る僕。わりと本当だ。

「ふうん、じゃあものを大事にする漆根君。どうして壁が凹んでるの？」

「・・・」盲点だった。でも・・・ああ、それは僕じゃない。だが言えない。ああ、正体を隠さなくてはならないヒーローの気分だ。

「まあ、いいじゃないか。さあ、座って座って。僕はお茶を持ってくるから」ドリンクもセットで買ったのだが、僕は客人を家に上げるとお茶を出さなくては安心できない男だ。もっとも、客を家に上げる事なんてほとんどないけど。

及川はちよくちよく来るが、あいつは客じゃない。

戻ってきた時、春日井さんは座布団に正座して待っていた。背筋がすっと伸びている。僕は天井から紐がつるされているのかと春日井さんの頭上に手をかざして確認してしまった。もちろん春日井さんは怪訝な顔をする。

「別に楽にしているのに」ていうか楽にできないならなんで僕の家を選択したんだ。あつ、違った。選択肢がもともたないんだった。何を勘違いしてるんだ、僕は。ばかか。

「もし私が足を組んでベッドに寄りかかってたらだらしなかったらどうかしら？」春日井さんはバッグの中をこそそとあさり、明後日締め切りの書類を何枚も取り出した。キャリアウーマンみたいな人だ。実際、将来そうなるんだろうな。養ってくんないかな。とか軽

く思ってみるダメ人間。

「・・・あrikaな」あながちないこともない。普段とのギャップと
いうのはなかなか破壊力があるのだ。

「そう、じゃあやっぱりしないわ」

「どつという意味っ1?」

「漆根君、「1」と「1」を間違えてるわよ。まったく、シフトキ
ーを押さないと『YOUTUBE』が『よつつぶ』になっちゃうじ
やない。確かにそういう動画まとめサイトがあるけど」

「無駄に詳しいっ!!」ていうか僕のほうはそれを知らない。動画
なんて見ないし。

「良いからそのお盆に載っていて、さつきから漆根君のリアクショ
ンに合わせて若干零れたお茶を頂戴。喉が渴いたわ」

「ああ、ごめん」こんなこともあるつかと布巾も一緒に持ってきた
のだ。少し拭いてお茶を渡す。春日井さんは一口だけ口に含んだ。

僕も座ってお茶をすすり、買ってきたファーストフードのハンバー
ガーを取り出した。

「ねえ、春日井さん」僕は頭にポツリと浮かんだ疑問を口にする。

答えによつては僕はこれまでの自分の認識を改めなければならな
いだろう。それくらい見覚えのない光景だった。

「このハンバーガーを包んでる紙ってこんなに赤かったっけ。てい
うかこの赤い液体若干スパゲティ食べる時に嗅いだことのある匂い
がするんだけど」

「?・・・ケチャップじゃないの?当たり前じゃない」春日井さん
は本当に分からないという表情をしている。なるほど、少しでも春
日井さんを疑ったのは間違이었다ようだ。僕はいつも間違える。
そりゃあそうだよな。スパゲティのミートソースもケチャップもメ
インがトマトだから似たようなにおいがするに決まってる。

「少し酸っぱいにおいがするんだけど・・・まあ、いいか」僕は大
きく口を開けてかぶりついた。途端に、かつてない衝撃が僕の舌を
駆け抜け、脳まで一直線に駆け上った。

「辛〜〜〜！！」口から火が出そうだった。最近のケチャップはなんて辛いんだ。

「大げさね、マスタードなんかじゃないの。ほら、漆根君。メロンソーダも買ったでしょ？」春日井さんも買って来たハンバーガーを食べ始めた。辛そうには見えない。おかしいな、僕の舌が子供なのだろうか。それに少し目もおかしいみたいだ。ジュースのカップにもケチャップがついてるように見える。まあ、いいや。このストロ―でジュースを飲めば晴れてこの辛さからも解放される訳だし。

「辛ええ〜〜〜！！」またしても口から火が出そうだった。あれ？というかメロンソーダってこんなに辛かったっけ。

「・・・うふふ」突然春日井さんが笑い出した。僕は何事かと春日井さんを見る。そして、その手に握られていた凶器に目が行った。

「・・・ひっかかった〜。こんなこともあるうかと思ってね」なかなか見せない笑顔で言う春日井さん。

・・・タバスコだった。

ちくしょう、どんなことがあるうと思ってたんだ。こんなことか！？やけに行儀が良いと思ったら、フェイクか。ていうかこんなお茶目な人だったっけ。

・・・ギャップだ。萌えてしまっじゃないか！

「・・・僕は君のお茶目な姿と最高の笑顔が見れて今とても嬉しいよ」僕は努めて平坦な口調で言った。だが、と僕は思う。こんな簡単に屈する訳にはいかない。

僕は大口開けてハンバーガーという名の悪魔を口に押し込み。メロンソーダという名の地獄を吸った。

「はあ、はあ・・・どうだ」涙が出てきた。多分辛いものを食べるたびにこのことを思い出すんだろうな。一級品のトラウマだ。からい、というかつらい出来事だ。両方とも同じ感じだけど

辛い

「よく頑張ったわね。さあ、熱いお茶でも飲んで」
鬼だ！

「なによ。そんな目で睨まなくなつていいじゃない。私だつてもし授業中にタバスコの栓が取れてバッグの中に溢れたら教科書とか全部真っ赤になつて、しかも私のあだ名が三年間タバスコ星人になるとか考えると気が気じゃなかったのだからお互い様よ」

「お互い様じゃねえ！」タバスコのキャップはかなり頑丈だ。春日井さんローリスク過ぎ。そしてどっちにしる僕にリターンがない！「大丈夫よ。3個のハンバーガーのうち1個にしかかけなかったから。ていうかジューズとそれにかけてはなくなっちゃったから」ホントだ。春日井さんの手の中のタバスコは確かに空き瓶だ。
ラッキー・・・じゃねえ！

「それつて僕のジューズとハンバーグに全身全霊が注がれたつてことじゃん！このことは二度と忘れないぞ！」びしつと春日井さんを指差す僕。もう行儀とか関係ない。それどころじゃない辛い辛い辛い・・・。

「私のことは・・・忘れていいから」
と、高校生にして始めて付き合つた彼女。しかし、彼女は重い病気を患つていた。次第に悪化していく病氣。そして、今際の際に少女の手を握つて「生きる」と応援する。しかし、少年がこれから将来自由に生きていくために言う言葉を春日井さんは言い放つた。「とてもいいセリフだが、でもそのセリフ今使っちゃ行けない！！」
くっ・・・。いい腕してんじゃねえか。そんな腕を見せられたら僕も矛を収めざるを得ない。

僕は恐る恐る。二つ目のハンバーグにかぶりついた。なんだ、てつきりてんどん（繰り返し）というよくあるネタが来ると思つてた。まあ、春日井さんもそこまで非常識じゃないか。それでこそ春日井さんだ。

「あれ？でもこれなんか甘くね？うわっ・・・気持ち悪い」

「あはははっ」と、嬉しそうに笑う春日井さんがバッグから取り出したのははちみつだった。

「うっ、くっ、そっ・・・。僕の褒め言葉を返せえ！」しつかりと

飲み込んで口の中をきれいにした後での今にも掴みかかりそうな僕を春日井さんは手を挙げただけで制した。それだけで僕は春日井さんに触れることすら許されない。なんだ今のは、気功か……？

「3つ目は……酸っぱいわよ」

そう言い放った春日井さんはとてもいい顔をしていた。そしてその手にはレモン汁。

「もう……好きにして下さい」「ついに白旗を揚げた僕だった。どうやら、というかやっぱり春日井さんは僕の想像のはるか高みを行くお方のようだ。」

じつと突っ立ってるから粗大ごみかと思っただわ 3

「・・・ああ、まだ口の中が痛い」そして気持ち悪い。よっぽど多く調味料を入れてくれたみたいだ。しかしこのためだけに持つてくるなんてなかなか笑いを分かっている。

「いい加減くどいわ」

「僕はネタでやってるんじゃない！」テーブルをばしんと叩いた。手が痛い。

報われない僕。一体どんな罪でこんな罰を受けているのだろう。・・・

「いや、罪はいつぱいあるけど。罪だらけだけど。」

「・・・そんなことより、これ、一応できたけど結構普通よね。漆根君の腐った脳ミソに頼るのもどうかと思うけど何か無いかしら」

「腐ってない！かびてるだけだ！」

「・・・何のフォローだ。」

でも「流れる水は腐らぬ」理論でいくと脳つてのは流れてないから腐る訳なんだよね。使えないな、昔ながらのことわざ。

「腐ってるつてのは冗談よ。ほんとは・・・ないんでしょっ？」

「あるよっ！」

「でも頭を動かすたびにころころうるさいわ。頭蓋骨の中にビー玉でもつまってるの？」

「くっ」勝てない。なんだこの人。僕をいじめることに関してはポキャブラリー無限か？

「冗談はともかく、何か無いかしら。やるからには一番になりたいじゃない。そのためにはやっぱりアクセントが必要だわ」

そう、クラスの出し物には順位がつく。来場したお客さんの投票によって決まるのだが、1年全クラスと2年希望クラス（毎年ほぼ全クラス希望しているらしい）が競い合うそれはそれは激戦になるのだそう。僕はこの目で見えたことないからよく知らないのだけど、かなりの一般の方々も集まるようだ。

「でもさ、そういうのは今決めなくても何とかなるんじゃないのかな？みんなの意見を聞いたほうが案は出るだろうし、今すぐに決めて提出しなくても細かいことなら委員会から文句言われなと思うけど」僕は思った言葉をそのまま述べてみる。久しぶりにまともなことを言った気がした。しかし、春日井さんのほうは啞然としていた。

「……まさか、漆根君の口から『みんな』なんて単語が出てくるなんて……」

「そんなところに驚いてたのっ!？」

僕のほうがびつくりだった。確かに僕は協調性0に見られている。でも実際のところ僕が伸ばそうとする協調の手を一人残らず払いのけられてるだけだ！

と、僕は勝手に思ってるんだけどいかなものだろうか。

「ああ、『みんな』ていうのを頭の中で変換ミスしてたわ。漆根君の脳内に存在している架空のキャラクターの名前ことね。『みんなくん』かしら？それとも『みんなちゃん』かしら？」

「僕の頭蓋骨の中にはビー玉しかない!」……ついに自虐になってしまった。いや、でもいいんだ。そんな友達一人もいないから架空の友達作っちゃってる残念な人間に思われるよりは。僕にはちゃんと友達がいる。今のところ及川だけだけど。

「……耕兄、明日なだけどさ」

と、何の前触れもノックもなくつむぎが部屋に入ってきた。

やはり部屋に入るときはノックをするように注意しなければならぬらしい。

「……」つむぎの視線は僕ではなく春日井さんのほうへ。そして数秒間見つめ合う2人。

「……ごめんなさい」ボタンと勢いよく閉じられる扉。僕の部屋は台風一過のような一瞬の静けさが漂った。

「……ごめんね、春日井さん。後でちゃんと人の部屋に入るときはノックをするように言っとくよ」もつとも、つむぎは頭が良いか

ら、今の失敗で懲りてノックをするようになるだろう。なるといいなあ。

「それで・・・あの可愛らしい子はどこからさらってきたのかしら。ああ、違ったわ。橋の下で拾われたのは漆根君のほうね」春日井さんはレポートに目を通しつつ、なんでもないふうに僕にとってはかなり大きなことを言い放った。

でもさ、そういうのって誰もが考えたことあるんじゃないかな。「僕はこのうちの子なんじゃなくてもっと違う家で生まれた拾い子なんじゃないか」ってやつ。というわけでここだけは反論できなかった。妹を「かわいらしい」と褒められたことだけ礼を言っておく。

「さて、と。じゃあここまでやれば問題ないかしら。私これから塾があるのよ。というわけでお暇する事にするわ」用紙をきれいなファイルに挟んで丁寧にバツクの中へしまった。

「じゃあ、妹さんにちゃんと弁解しておいてね」玄関で靴をはきながら、春日井さんは鋭い目つきで僕を見た。

僕は首をかしげる。仮につむぎが部屋に入ってきたときに春日井さんが変形でもしていたら弁解をするのだろうか、もちろん春日井さんはトランスフォームなんかしていない。いたって普通の振る舞いだった。いや、春日井さんは振舞い一つ一つに気品があつて様になつている人なので普通以上と言えれば普通以上か。でも別に普通異常というわけじゃないだろう。

「まあ、わかった。春日井さんが超人ではないことは僕がちゃんと言っておく」

「・・・なんでもないわ。別にいい。むしろ私のいないところであなただが私の話をするかと思うと鳥肌立つから止めて頂戴」

「・・・」最後まで春日井節フル稼働だった。しかし、いやだと言われてやめる僕じゃない。

「まあ、いいじゃないか。代わりに春日井さんは僕のいないところで僕の噂をしても良いからさ」

「あー、ていうか漆根君のいないところじゃないとできない噂

ばかりだから……」

「……やつぱりやめてください」多分丑の刻参りとかやってる。絶対やってる。僕の額の傷も誰かの呪いのはずだ。

ま、まさか……。闇の帝王か……！

いやいやさすがに闇の帝王には告白してないけども。

「何を勘違いしているの？もう傍にいたら聞いてられないくらいベタ褒めしているのよ」

「嘘だっ！それくらいは僕にだって分かるよ！」我ながら悲しくなるけど。

「じゃ、お邪魔しました、漆根君。楽しかったわ」

「そう言ってもらえると光荣だね」

「……漆根君の辛さに悶え苦しむ姿とか見られたしね」

「くっ」トラウマがよみがえる……。

「ああ、写メに撮つとけばよかつたわ。被害者の会でさぞかし高く売れたのに」

「本当にあるの僕の被害者の会！？」冗談だと思ってたのに。僕の寿命ももう長くはないのかもしれない。

「ええ、本部署はアメリカにあるわ」

「グローバル化っ！？」インターネットのせいなのか！？誰だ、インターネットなんて作ったやつ。ていうか悪いのは僕なんだけれど。

……ていうかいたかな、外国人の方。

多分いた。

「ちなみに軍隊を動かす権限を持っているのよ」

「まじでっ！？僕ん家でイラク戦争勃発！？」いやいやいやいや。

流星にそれはないでしょ。僕なんて棒切れ一本で何とかなるよ。

「嘘よ」

「ですよねえ！！」まったく、僕がそこまで恨まれてるわけないじゃないか。人畜無害……。じゃないけれど、ただ喋るだけの木みたいな男だぜ、僕は……。あ、それ怖いな。

「でも自衛隊は動かせる」春日井さんは親指を立てて僕に向ける。

ともすればそれが下を向いてしまいそうだ。

「似たようなもんじゃん！」

「違うわよ！自衛隊は国を守るための部隊よ。目的はあくまでも漆根君を生け捕りにして全世界にさらすことだわ！」

「怖っ！ていうかアメリカ軍も同じように独裁者を生け捕りにしてさらしたけどね！」

「まあ、これも嘘・・・じゃないわ」

「うんうん。まあうそだよ。いかに人民のための国家といえどただ一人のために自衛隊を使ったりはしないよね・・・って嘘じゃないの！？」思わず乗りツッコミ。

「やばい、僕の身の危険。しかしここは家族にも危険が及ぶかもしれない。どこかに逃げなきゃ。そうだな、まずは山に逃げて行方を完全にくらませる。そして追っ手が緩んだところまでできるだけ遠くへ逃げて一般人に混じって暮らすのが良いだろう。そして時効が来たところでその体験を小説にして出版。ベストセラーで僕は大金持ち！！しかしそうになると印税はどれくらい入るだろうか。それによつて出版社も考えなければならぬ。完全に利潤を追求するならば自費出版で少しずつ部数を増やしていくという方法か。しかしこうなると宣伝が難しいな。いや、それこそインターネットの時代か。さつき僕を苦しめたインターネットが今度は僕の役に立つ。なかなか皮肉だ。」

「嘘じゃないけど冗談よ」

「冗談じゃない！！」僕は織田祐 主演のドラマのタイトルのようにそう言った。

「ていうか知らないわ。私は先週被害者の会を脱退しちゃったから」「そーなの？」ていうか被害者の会自体は本当にあるんだな。かなりシヨックだ。

「ええ。やっぱり組織に頼らず自分の力で仕返しをする事にするわ」にやりと不敵に笑う春日井さん。超怖い。

「というわけだから夜道には気をつけておくのよ、漆根君！」びし

つと指差す春日井さんは爪の先まできれいだ。しつかりと気を遣っているのだろう。さすが女子高生。

「それは置いといて、夜は危険だからあんまり外に出ないほうが良いよ。君を危険にさらすわけにはいかないから用があるならむしろ僕のほうから行く！」ついに開き直る僕だった。しかし胸を張る僕に対して春日井さんは向こうを向いてしまった。てつきり「結構よ」とか「本当に止めて頂戴」とか言われるかと思ったのに。

「そ、それじゃあ私はもう行くわ。また明後日ね」最後はこちらを向くことなく行ってしまった。僕は首をかしげる。ひよっとして僕の顔を見るのも嫌になってしまったのだろうか。確かに耳まで真っ赤になっていたような気もするし。よほど怒っていたのだろう。やれやれ参ったな。こんな僕でも人に嫌われるのは結構凹む。やはり慣れるものじゃない。結局人は一人じゃ生きていけないという事だろう。

「・・・しょうがないか。僕は恨まれるようなことしたんだし」僕はひとりごちて大きく息を吸った。

よし、僕はまだやれる。

じつと突っ立ってるから粗大ごみかと思ったわ 4

何とか気を持たせて、明日の作戦を立てるために部屋に戻った。いや、その前に部屋の掃除をしなくてはならない。部屋で食事をしたんだから（しかもタバスコやレモン汁の臭いつき）換気もしなくちゃならない。

戻ると、僕の部屋のドアが開いていた。おかしいな、確かにさっきちゃんと閉めたはず。と思って、見て見ると、部屋の中心につむぎさんが立っていらっしやっただ。しかもただ立っただけじゃない、右手には包丁が握られていた。

「つむぎ・・・一体何を・・・」
しているの、と言おうとしたところでつむぎが振り返って僕に包丁を突きつけた。鋭いつむぎの目にはうっすらと涙が滲んでいた。

「どこに監禁したの!？」包丁を握る手に力がこもっている。よほどの覚悟があるらしい。

しかし、監禁という言葉に心当たりはない。せいぜい2年位前につむぎの大切にしていた人形を押し入れに隠したことがあるくらいだ。しかしあれは母さんにめちゃくちゃに怒られてすぐに返したはずだ。中2の分際で何してんだと思われるかもしれないけど、わかって欲しいのは2年前の僕はひどく不安定だったということだ。

「とぼけないで。髪の長い制服着た女の人をさらってきたでしょう!」ついに叫び出したつむぎさんは包丁の刃を僕のほうに向けて少し肘を引いた。1歩踏み込むだけで僕を切りつけることができるだろう。いや、なに僕は冷静にそんなこと描写しているんだ。やばいぞこれは。何がやばいって女子を家に上げただけでさらってきたと妹に思われていることがやばい。どんだけ信用ないんだ、僕。

「ちよつと待って、聞いてくれ、つむぎ」僕は両手を挙げて降参の意を露にする。しかしつむぎの身体から発せられる殺気はまったく消えない。ていうか中2の女子が殺気を発するな!

「言い訳無用！」

ええ〜〜。そんな馬鹿な。おいおいおい、なんで包丁を振り上げるんだ。重力を使ってより効果的に僕を切るためか。やめてくれ。そんな涙を流しながら僕をにらむな。僕は味方だったんだけど敵に捕らえられて洗脳され、敵として現れて元味方を苦しめるんだけど最後に奇跡が起こって一瞬だけ意識が戻り、再び狂いだす前に「頼む、殺してくれ」とか言うようなキャラじゃないぞ。

「ストップ、ストップ！僕にそんな度胸があると思うか？」

「あるわ。あたしは耕兄を信じてる。・・・信じてたのに！」

そんなところだけ信じるな〜！それくらいなら僕はまったく信用されなくても良いよ！

「クラスメイトだよ、クラスメイト。僕は文化祭委員だから今日ここで話し合いしてたんだよ」

話し「合つて」いたかどうかは別として、僕は弁解する。

つむぎは訝しげに目を細めた。1歩下がって包丁を下ろす。下ろしたもののまだ刃は僕のほうを向いていた。単純に振り上げるのが疲れただけだろう。

「嘘よ。耕兄がいなくてもそれなら1人でできるじゃない！」

確かにそうなんだけど！・・・つて、あれ。そういえばそうだ。別に春日井さんが1人で考えて後で「こんな感じ」って僕に伝えればいいだけの話だ。どうして春日井さんはわざわざ僕の家まで来たんだろう。

「だけど本当なんだ！及川に聞いてくれれば分かる。春日井さんは確かにクラスメイトだった」

「電話して、今すぐ」つむぎは僕に包丁を構えたまま道を開けた。携帯が机の上にあることは既に確認済みなのだろう。僕は包丁を突きつけられたまま携帯を手に取り、及川に電話した。

「耕兄は何も話さなくて良いわ。あたしが話す。貸して」

つむぎの空いている左手に携帯を渡す僕。つむぎは僕の携帯を耳に押し当てた。

「もしもし、あたしです、つむぎです」ちなみに及川はちよくちよく僕の家に来るのでつむぎとも結構面識がある。つむぎはつむぎでそれなりに及川を信用しているので（あくまで僕と比べて、という程度だが）及川がちゃんと話せば僕は解放されるだろう。

「正直に質問に答えて下さい。こちらには人質がいます。春日井さんという人は確かに耕兄のクラスメイトですか？」

頼む、頼むぞ及川。僕は両手をあわせて胸の前で盛大に祈った。

「・・・はい、わかりました。ええ、ありがとうございます」

通話終了ボタンを押して下投げで僕に携帯を投げる。そしてなぜか包丁を振り上げてすり足でこちらに寄ってきた。

「聞いたわ。確かに春日井さんというクラスメイトがいるらしいけど・・・」ほっと胸をなでおろす僕。及川を信じて正解だった。

でもおかしいな。だとしたら何でつむぎは包丁を振り上げたんだ。

「・・・最近学校に来ていないらしいわね。しかも原因が分からず連絡もつかないって」つむぎの全身から再び殺気があふれ出した。

及川あああ！！あの野郎おおお！！

ちなみのこの後涙なくして語れない兄妹の壮大な触れ合いがあるのだが、それは割愛させていただこう。結果として今日の夕飯のサラダから僕の血の味はしなかったとだけ言うておく。

じつと突っ立ってるから粗大ごみかと思っただわ 5

「・・・ふむ、それは残念だな。そんな面白い場面がこの家にあると知っていたのなら立ち読み・・・いやスタンディングリードを打ち切っても帰ってきたのに！」

と、さつきさんは予告どおり夜遅くに帰ってきて僕の愚痴を聞くなりそう言った。面白いかどうかはさておき、1つ突っ込んでおきたい。

英語で言い直した意味がわからねえ。

「いやいや、大事だぞ名称は。私はよく知らないが最近巷で流行の『モンスターハンター』というゲームがあるだろう？」

ああ、そうらしい。僕は良く知らないけど。ゲームとかあんまり好きじゃないし。

「ふん、無趣味が・・・まあいい。しかしどうだ、あのゲームの名称がもし『魔物の狩人』だったらあそこまで流行っただろうか、いや流行らない」反語だった。最近漢文の授業で習ったやつだ。あの時はさつきさんも教室にいたから使ってみたのかかもしれない。反語って結構かつこいい言葉の響きんだけど日常じゃ使いにくいんだよな。

「・・・確かに、流行らなかつたかもしれないですね。でも立ち読みは立ち読みでも良いでしょう」そもそもかつこよさを追求する必要はないんだし。

ちつつちち、と指を振るさつきさん。

「ある言葉を流行らせるには常にその言葉を使っている必要がある。少しずつ回りの人間を感化させていくのだ」だから流行らせたい理由が分からない。ダメだ、本格的に言葉が通じない。

「ふん、もういい・・・ところで話の途中だったな。一体全体どうやってつむぎは矛を納めたのだ？」さつきさんはベッドの上に座って白い枕をぎゅっと抱いた。やばい、あの枕使いたい。今度さつ

きさんがいないときに交換しておこう。・・・いや、だめだ。さつきさんはこう見えて所有欲がかなり強い。僕があげたお菓子でも、絶対分けてくれない人なのだ。もしばれたら天誅ものだ。

「・・・あんまり思い出したくないんですけど。つむぎが包丁を振り下ろそうとし、僕が死を覚悟したその時・・・」

「その時・・・？」さつきさんは真剣な表情でゴクリと唾を飲んだ。ああ、こうして僕の話を実剣に聞いてくれるだけで僕は幸せだ。春日井さんと話してるのも面白いんだけどやたらと神経を削られる。その点さつきさんの包容力は凄い。・・・包容かあ。ついでに抱擁力のほうも鍛えて欲しい。あ、だめだ。入室してまで鍛えたさばおりが強化される・・・。僕の背骨の危機だ。

「電話が鳴ったんです」

「ほう・・・電話。というベルが開発したあれだな」
僕は神妙な顔で頷く。

「そうです。昔はダイヤルを回していたあれです。ちなみに僕はダイヤル式の方はかけ方が分かりません」
さつきさんも至極真面目な表情だった。

「確かにあれは難しい。一言で説明出来るものではない。言うならば人をくすぐるのに近いものがある。もしくは指先で地面に穴を掘る感覚だな・・・ってもういい！早く話を進めろ！」

「さつきさんが最初に横道にそらしたんじゃないですか」わがままな人だった。しかし大人な僕は文句を言う事なく続けた。

「するとどういう事でしょう。つむぎの表情がさつと変わったんです。包丁を机の上に置くと電話のほうへ走っていきました」

「ほう・・・それで？」

「僕はその会話まで聞こえた訳ではありません。ただ、決して僕にむけることはないあの嬉しそうな顔とさつきとはまるで違う」

この「さつき」は「先刻」という意味で「殺気」ではありません

先ほどとはまるで違った、僕が聞いたこともないような明るい声で話していました」

「・・・相手は、誰だったのだ」

「・・・シユウ君、と」僕は目を閉じた。

「・・・間違いないな」

「・・・間違いないです」

「では、明日だな」さつきさんが拳を掲げた。

「ついに計画を実行する時ですね」僕も拳を上げた。僕たちは拳を打ち合う。

ここにつむぎのデート尾行同盟という近年まれに見る暇人たちによる同盟が結成されたのだった。

おお、さすが耕太だ。ストーカーのキャリアが違うな

つむぎが家を出たのは9時過ぎだった。宝くじを当てた人でもしないような幸せそうな笑顔だった。へえ、あいつあんな顔できたんだ、と感心してしまったほどだ。本来ならば兄として祝福すべきなのだろう。しかし、もしその「シユウ君」とやらがどうしようもないやつだったら？つむぎの笑顔は一体どうなる。だからこれは野次馬根性などではなく、兄としての義務だ責務だ。権利と義務は表裏一体。「おにいちゃん」と呼ばれる権利があれば妹を守る義務がある。

・・・あ、でも「お兄ちゃん」なんて呼ばれた記憶ほとんどないな。まあ、「耕兄」だからギリギリセーフだろう。

「さあ、早く行かないと見失ってしまうぞ、耕太」

「大丈夫です、焦りは禁物ですよ」ぼくの名前は漆根耕太。やることなすこと裏目に出る男と呼ばれている。両面とも裏のコイン（超レアだ。その筋のマニアの間では高額で売買されているらしい）に例えられたこともある。そんな僕のことだから慎重と万全を期さなければならぬ。

「待ち合わせはまず間違いない駅前でしょう」ていうかこの町にはデートスポットなんてないのだ。だからまずは電車で近くの繁華街まで行かなくちゃいけない。

「おお、さすが耕太だ。ストーカーのキャリアが違うな」

「ちよつと待って待てーい！さつきさんの中で何勝手に僕のスキルレベルをアップさせてるんですか！？しかもかなり嫌な方向で」流石の僕でもわずかに残った名誉のためにその一線を譲る訳には行かない。

「ちつ、中途半端が」

「聞こえてますよっ！」その発言はあれか？僕を犯罪者に仕立て上げたという事か？

「今頃気付いたのかっ！？」

「真顔で驚かれたっ！！」ちくしょうこんなところの被害者の会のスパイが・・・。

「なんのことだ？・・・まあいい。早く行くぞ」

さつきさんに腕を引かれる形で、シヨックを受けてうなだれたままの僕は家を後にした。まあ、後ろ髪を引かれるよりは良い。さつきさんはリアルに僕の短い後ろ髪を引き抜こうとするから。

両親はまだ寝ているので鍵もしっかりとかけておく。つむぎは既に出かけることを言っていたし、僕は両親に諦められている身の上なので、10時くらいに起きて2人ともいないと知っても驚くことなく一日を過ごすだろう。

そして、案の定つむぎは駅前にいた。シウウ君とやらは既に来ていたようだ。

ふむ、女性を待たせないという気構えは合格だな。さらさらヘアに幼さが残る顔。背は高くないな。つむぎより少し高いくらいだ。

「君はいつから人の容姿に付いて品定めできる身分になったんだ？」家政婦のごとく建物の影に隠れてシウウ君を見ている僕の後ろからさつきさんが声をかけてくる。

「・・・何か言いたいことがあるんですか、さつきさん」

いや、とさつきさんは首を振った。

「ただ、一つあるとすればその帽子と伊達眼鏡だな」

そう、僕は変装している。人間髪型と目さえ隠せば大概どうにかなるものだ。帽子はあったが、眼鏡は昨日思いついて昨日買ってきた。伊達なので安い。100円也。

「いや、似合うぞ。・・・馬子にも衣装と言ったところか」

「・・・それ、褒めてませんよ」

「知ってる」

「でしようね！」

などと、戯れているうちに2人は駅に入って行ってしまった。

「まったく。君がワーワーうるさいから尾行に集中できないではないか！こんなことなら1人で来ればよかった」

「ぼくのせいですかっ!？」

そこらへんを歩いていて僕と違って忙しい人たちにどちらのせいかわ判を下して欲しかった。しかし、それができないという事は裁判員制度の普及もまだまだ甘い。

早速僕らは2人の後を追う。券売機で切符を買っているのをさつきさんに偵察に行ってもらい、どこまで行くのかを知った。プランニングはシュー君だろう。まあ、妥当と言ったところだった。というかこの辺ではそこ以外遊ぶところがないというのが正しい。

さて、問題はこの電車に乗る時だ。見失わないためには同じ電車に乗らなければならないし、しかし気付かれないようにしなければならぬ。幸いにして、土曜日の朝と言う事で人が多い。これなら上手く紛れることができそう。僕はその駅までの切符を買った。

「ふむ、改札というのはいつ見ても面白い。じつと見つめている駅員の気持ちも分からんでもない」

「・・・いや、わかんねえよ。この無機質な機械のどこに面白要素があるというのだろうか。」

「いやいや耕太。急いでいる人が上手く切符を入れられなくて苛々するところなんて最高だぞ」

「・・・」最低だよ、さつきさん。ていうか本当に暇だったんだな。

「馬鹿にするな!忙しい時でも合間を縫って来ているわ!」

「・・・」それもどうだろう。というかさろそろこの不毛な会話を終わらせてしまいたかった。価値観が壊れてしまいそうだ。

「ああ、やっぱり人が多いと堂々と突っ込めないのがいたいな。ラストレーションたまりっぱなしだ」

「ふむ。そうかそうか」

「はい?」

「そうかそうかそうかそうか」さつきさんは少し嬉しそうだった。

自分の肩を揉みつつぐるぐる回している。僕は首をかしげる。かし

げすぎて折れそうだった。

「私が解消してやるう」

「手のマツサージですか？」

「いや、君を殴る。そうすればスカツとするだろう？」

「あんただけな！」あ、突っ込みじゃった……。ああ、周りの人々の視線が僕に集中している。僕は俯いて足を進めた。つむぎたちは既にプラットホームに出ているだろう。ここにいなくて本当に良かった。

「ふふふ。どうだ、少しは解消されたか？」

「……穴があつたら深く掘って空襲を避けたい気分です」しかもこの焼夷弾、僕限定にしか降ってこないというのが厄介なところだ。そういえばこの辺も戦時中は防空壕を掘ったという事だった。……まあ、今となつてはどうでもいいけど。

そう思えるこの平和な国を僕は誇りに思う。

流石に日曜日朝だけあつて、吹きさらしのプラットホームには人が多かった。幸運なことに2人は一番向こうの車両に乗るらしく、ぼくから遠く離れていた。ここに来た途端ばれたらどうしようかと思つたがその心配は無さそうだ。そもそも楽しそうにおしゃべりをしているので周りを見ることもしていない。今スリにあつたら確実に財布を持っていかれるだろう。

念には念を入れてつむぎたちとは車両2つ分けておく。というか車両が4つしかないのもこれ以上開けようがない。

「さらばだ、わが町」列車が動き始めた時、さつきさんは窓の外に向かつて敬礼した。僕は湧き上がる突っ込み魂を何とかこらえた。代わりに携帯を取り出して「特攻隊かよっ！僕のさつきの防空壕とかけてるんですかっ！？」と打鍵した。もちろんさつきさんは見えない。こんな小規模な突っ込みは受け入れてくれない厳しい人なのだ。しかしその突っ込みによって少々落ち着いた僕は窓から外を見た。

海しかなかった。

昨日ご飯にかけて食べましたよ

「ふむ。なかなか賑わいのある街だな。なるほど、確かにこんなに人がいれば愛を叫ぶのも大変そうだな。映画になるのも頷けるというもの」

「いや、べつにここは世界の中心じゃないですけどね」人体で言ったらせいぜい踝くらいか。それを言うなら僕の町は足の指先の産毛くらいなんだろうけど。

「ていうかさつきさんいろいろなところをぶらぶらしてたのならもつと人の多いところにも言ったことあるでしょう?」

「いや。ぶらぶらといつてもせいぜい自分の部屋とトイレの距離くらいだ」

「不健康だつ!」動くのが面倒だからって一日中ゴロゴロしてテレビばかり見ているおじいちゃんか!?

「それに、いかに人がたくさんいたとしてもきちんと向き合って話さない限り、会っているとは言えないだろう」正論だった。現代都市のコミュニケーションの問題点。だが今はどうでもいような気がした。くるぶしじゃあどんなに頑張っても都市にはなれない。せいぜい膝までは駆け上がらないと・・・って意味がわからなくなってきたな、このたとえ。

「ところで耕太。2人はどこへ向かうと踏んでいるのだ?」2人との距離は20メートルほど。人が多いのでともすれば見失ってしまうそうだが、さつきさんの視力はめっちゃくちゃいいらしいので、きっと大丈夫だろう。それよりも僕の傍に人が通るたびに避けなければならぬので、それが大変そうだった。

「映画館でしようね、きつと」僕の町にはない。ていうかこの辺だとこの街にしかない。正面にいる2人は話しながら歩いている。多分だが、シユウ君は会話が途切れないように気を遣っているのだろう。なかなか心得ている。

「さつきから偉そうだな。身の程を知れっ！」

「ミノホド？何言ってるんですか、知ってるに決まってるじゃないですか！昨日ご飯にかけて食べましたよ」

「ぶっ、・・・く、くそう。笑ってしまったではないか！」笑ったのに怒鳴ったさつきさんだった。僕もおかしくなつて笑ってしまった。その瞬間、さつと人垣が割れる。僕ははつとして俯きながら小走りになった。

2人は大型の映画館でチケットを買って中に入ってしまった。内容はアクションもの。確かに初デートでラブロマンス物は重いだろう。

「まあ、僕はラブロマンスものが好きなんですけどね。・・・アクションはちよつと」無愛想なお姉さんからチケットを買い、真ん中らへんに座つたつむぎたちが見えるがばれない少し上の辺りに腰を下ろして僕は言った。すると、今度こそさつきさんは全力で噴き出してくださった。

「こ、耕太が、恋愛もの！？あ、ありえない」最後のほうは咳き込む始末。苦しそうに胸を押さえていた。

「いいじゃないですか、あれもあれで恋愛の疑似体験つてやつですよ」

「ああ、そうだった。君はかわいいそうなやつだったんだな。今の私には雨に打たれる子猫がいささか幸せに思えるぞ」

「ひどい！」ああ、何でだろう。目頭が熱くなつてきた。アクション映画で、しかもまだ序盤なのに・・・。

「いやいやいやいや、ありえないだろう。瓶底眼鏡の学級委員が『ズバリ！』とか言うくらいありえない」

「さくら もこ大先生に謝れ！」幸いにして、この映画の音量は大きい。僕のつつこみをかき消すとはなかなかの猛者だ。

映画はそろそろ中盤に差し掛かり、主人公がライバルにやられる場面だ。きつとこれからパワーアップして最後に勝つんだろう。

「僕ってあんまりアクションもの好きじゃないんですね」

「ん？貧弱だからか？だからこそ好き、というのもありだと思うが」

「いや、まあそれはそれで否定できないんですけど……」

人が殴られたり人を殴ったりするのを見るのは苦手だ。アクション映画ではそれが正当化されてしまう。でも、ただ1回拳で殴るだけでその頬は治るまで時間がかかる。そして悪役は最後死ぬか重傷を負って終わる。それで終わってしまうのだ。本当に苦しい人生そのものの体現はその後に在る筈なのに

「まあ、見なきゃいいって言うだけの話なんですけどね」

「そこだ！殴れ！やれ！」

「……」僕の独白などまったく耳に入れないさつきさん。でも、スクリーンの光で目を輝かせて叫ぶ姿が一番さつきさんらしいと僕は思った。

「ん？なんか言ったか？」スクリーンには主人公がやられるシーンが映っていた。……もしかしてさつきさんは敵を応援していたのか？

「当たり前ではないか！スポーツでは選手だけではなくサポーターも戦っているのだぞ。ほら、私が応援したから勝ったではないか」ものすごい馬鹿っぽい発言だったが、僕は微笑んで流してあげた。

「いえ、僕ってアクションシーンの主人公無理だなんて」

「何を言っている！」さつきさんは声を張り上げた。まさか、もしかして、僕を励ましてくれるか？

「君が主人公？はっ、ちゃんちゃらおかしい！君はアクションもラブロマンもエキストラとしてでも出れない！」

主人公が敵の娘に助けられ、介抱されるシーンで涙を流す僕。

「いや、コメディなら……」さつきさんは顎に手を当てて真剣そうな面持ちでいった。

「もういいです！」

周囲の観客の目がこつちを向いた。映画が始まって一時間ほど、ついに映画の音量が僕の突っ込みに敗北した瞬間だった。

テントが血まみれになるくらいありえない

映画館を出ても、二人は僕の存在に気付いていないらしい。我が妹ながら周囲への注意力のなさはどうかと思う。でも絶対に気付かれたいけないジレンマ。

二人はイタリアンレストランに吸い込まれていった。それにしてもシユウ君とやら、なかなかセンスが良い。着ている服も遠目から見てもカッコイイと思う。ちよつと不覚だ。

二人が入ってしばらくしてから僕も入る。後から友達が来るという体でシート席に座る。こうしておけばわざわざ注文をする必要もないだろう。流石にさつきさんの前で僕だけがご飯を食べるのはいただけない。ただ、それだとウェイトレスさんに悪い気がしたので、僕はコーヒーを注文した。さつきさんはコーヒーが飲めないというかなり愛くるしいギャップをお持ちの方なので、文句を言わない。むしろさつきさん視点では僕は修業をしていて、わざわざ自分に苦しみを与えるためにコーヒーを注文しているとさえ思ってるだろう。ここは二人の位置が確認できる席だ。もちろんトイレの位置も確認してあるので、つむぎがトイレへ向かったとしても僕がへまをやらかさない限りばれることはないだろう。そもそも今の二人はさつき見た映画の話で盛り上がっているので僕に気付きそうもないのだけれど。

僕はおもむろにケータイを取り出して操作するふりをして耳に当てる。しばらくしてから口を開いた。

「どうですか？さつきさん」そう、これぞ僕が考え出した秘策中の秘策。名づけて『あれ、あの人なんか一人で喋ってない？気持ち悪いな。・・・と思ったら電話で喋ってんのか、ああ、納得』と見せかけて、実は通話していませんでした』大作戦。これを僕は一晩で考え付いた。欠点は常に何の音も流れていない携帯に向かつて相槌を打つかしゃべっていなければならないという事。それも今み

たいにさつきさんが偵察に行ってしまった時はなおさらだ。自分が悲しくなる。

「ふむ、あの2人、なかなか和気藹々と喋っていた。どうやらさつきの映画がなかなか楽しかったらしい。悪役は果たして最後に更正するのが正しかったのかで議論していた。・・・私はすべきでなかったと思うがな」

「そうですね・・・」僕は携帯を少し強めに握り締めた。もちろん携帯からは悲鳴どころか物音1つ聞こえない。

「しかし、確かに面白いが、私は少々罪悪感を感じ始めたぞ。もういいではないか。若い2人はそのまま放っておけば。自分が彼女を作るよりも妹が先に彼氏を作ったことに嫉妬をするなど低俗だぞ」さつきさんは僕の向かいにどこかのヤクザのボスのようにどかっと腰を下ろした。さつきさんは決してスカートを履かない人なので、その座り方から感じるのははしたないなあ、という事だけだ。

ちなみにさつきさんの服は昨日僕と2人で買ってきたものだ。結構遅くに行ったので、客はいなかったが、女物の服（しかも大人用）を1人で買う男子高校生を見た店員の目たるや筆舌に尽くしがたいものがあつた。ようするに死にたくなつた。

「いえいえ、それも言つてられませによ」

「嘔むな！しかもかなりかわいい感じで！」

「すいません。ちょっと動揺が・・・。いや、まさか僕がつむぎに嫉妬なんてありえない。ありえないありえない。そんなことは天と地がひっくり返つてもない。てんとう虫が地面を掘り進むくらいありえない。テントが血まみれになるくらいありえない」

「もはや何を言っているかわからんぞ！」ようやくさつきさんは姿勢を正して僕に向き直つた。そして、僕も自分で何を言っているかわからない。

「ああ、そうですね、こういうときはコーヒーでも飲んでちよつと落ち着きます。やっぱり良いですよ、コーヒーは。あ、あれ、地震でも起きてるんですか？コーヒーがちよつとも口に近づかないんで

すけど」

「震えているのは君の手と脳だ。しつかりしろ！悪かった。痛いところをつきすぎた」机に手をつけて平謝りするさつきさん。僕が言うべきでは決してないが、さつきさんはまったく悪くない。ようやく僕はコーヒーを口に運び、落ち着く。さながら心臓発作の薬のようだ。やれやれ、もっと落ち着こう。昔から落ち着きの足りないといわれる僕ももう高校生だ。子供みたいにそんなどうでもいい嫉妬とかで心を乱すのはもうやめだ。そう、今日この時点から僕はもう大人。大人だ。

「すいません、コーヒーあと5杯」

「まったく落ち付いていないっ!？」

近くを通りかかったウェイトレスさんの注文をするときもやっぱ僕は動揺しっぱなしだった。そんな僕に彼女は「飲み終わってから改めてオーダーして下さい」と大人な対応してくれた。

しかしそうか、僕のこのもやもやしたアフロで密林が形成されているような気持ちは嫉妬だったのか。てつきりつむぎの彼氏に対する不安かと思っていたのだが。

「うむ、自覚があるのはいいことだ。そういう感情はしつかりと覚えておけ。そしてそのまま海にでも突っ込んで頭冷やすが良い」

「え？海？そんなとこ入るわけじゃないですか。ていうかこんな寒い時期に海に入るやつなんているんですか？」

「記憶を改ざんするなっ!」机を勢いよく叩く。瓦割りの容量で机が真っ二つになるかと思っただ。

「そしてポケ役を私に返せ！君は黙って突っ込み役に徹していればいいのだっ!」

不当な要求だった。

ていうかさつきさんそんなにポケ役に愛着があったのか。それは悪いことをした。そう思って、今度は正確にコーヒーを口に運ぶ。うん、この店に来てよかった。お陰で僕はこぼさずに飲み物を口に運ぶというスキルを手に入れた。そんなもの3才の時に手に入れとけ

！って感じだが。

「お、そろそろ移動するみたいだぞ」僕が大人なウエイトレスさんに3杯目のコーヒーを注文しようとした時に、さつきさんが気付いた。一応僕は身を隠したが、見つかる心配は無さそうだった。2人は歩きながらも実に楽しそうに喋っている。あんなつむぎの笑顔は小3以来見ていない。ここ最近にいたっては笑顔をほとんど見てない。

・・・実の妹の笑顔は見ないし包丁は突きつけられるしで僕は一体何をやっているんだ。

「3年目のカップルみたいだな」

「流石に包丁は・・・。それに3年目のカップルだって結構仲いい人いるよ。ていうかそっこのほうが多いでしょう！そもそも妹との関係をカップルに例えるなっ！素で気持ち悪いっ！」突っ込み型、漆根耕太の再臨だった。ああ、やばい。人に突っ込むって安心するなあ。僕はSなのか？・・・いや、それはないな。Mだ。MMだ。やばいキノコなみにMMだ。

つむぎたちは外に出て行く。さて、僕らも会計済ませて外に出なくちゃと思つた時、耳元で激しい着信音が鳴り響いた。

一応言っておくが、今の僕は電話で話しているという体なので、どう考えても僕の携帯から着信音が鳴り響くことはない。すわ何事かと付近の客の目や大人なウエイトレスさんがこちらを向いた。

「やれやれ、君はやはりどこか抜けているな。店に入るときはマネーモードが基本だろうに」さつきさんは肩を竦めて当たり前のことを当たり前に言った。その当たり前が大事なんだなあ、と僕は身に染みてそう思つた。

・・・ちなみに電話は及川から。僕はあいつに心の底から逆恨みして、電話を取ることなく切つた。

私の肌を見たら、殺すぞ

次に2人が向かった先はゲームセンターだった。シユウ君は良いのか悪いのかごくごく普通の発想の持ち主のようだ。どことなく親近感を覚える。

「ありえない・・・」ついにさつきさんが引いた。ああ、わかってるさ。ジョークさ冗談さポーズさ。僕は普通を愛する異端児さ。立場で言うと妖怪人間さ。早く人間になりたいさ。

「でもあれなんですよ。僕も中学時代はゲーセンスキルを鍛えたもんですよ」

そう、いつか彼女ができた時、いいとこ見せるためだけに。

「お陰でクレイーンゲームなんか百発百中です。決して財布の悲鳴を聞かない男、それがこの僕、漆根耕太です」

「おお、カツコイイ！」

「まあ、そのために莫大な金を使って帰りの電車賃まで使って泣きながら歩いて帰ったこともあったんですけどね」

「ああ、かつこ悪い・・・」ちなみにこれは言えないが、一度や二度じゃない。ちなみにこの場所から家まで歩いて3時間。近年まれに見る悲惨な出来事だった・・・ていうか悲惨な少年だった。

「スタンディンググライダーとゲームマスターか・・・」

「確かに響きは無駄にかつこいいけどその実ただのオタクな2人だよっ！」ちなみに僕はここ半年ほどゲーセンに顔を出していない。

結局行き着くところまで行き着いたら飽きてしまった。更に、ある日僕は気付いた。

彼女ができねえ、と。

「・・・悲しい現実だ。だがまあそれでも友達とワイワイやるのは良いものだ」な、とさつきさんは僕を見る。彼女としてはフォロワーのつもりなんだろうが・・・。

「・・・1人でやってました！」凄惨な少年だった。

「号泣ものだ！」あまりの哀れさに、さつきさんはもう僕を直視する事すらかなわないようだ。何て罪深い昔のぼく。・・・といえるほど昔じゃないけど。

「しかしそうすると、新しいものはからきしという事か？例えばあの太鼓なんかはどうだ？」さつきさんが指差したのは音楽に合わせ、リズムミカルに太鼓を叩くあれだ。僕が中二の頃からあったから少しはやったものだが、確かに極めちゃいない。

「まあ、僕はリズム感がいいですからね、ああいうものは大体得意ですよ。僕は平成のマイケル・ジャクソンと呼ばれてますから」

「あ？なんか言ったか？」・・・さつきさんは突っ込んですらくれない。手厳しい人だった。

「・・・いえ、なんでもないっす」

「ダンレボ、ナイス？あれってまだあつたのか？」本当になんて言ったのか聞こえなかつたのかもしれない。しかしダンレボか。ないな。あれは場所をとるし、遊んでいる間に人に見られるのはかなり恥ずかしいから。・・・ちなみに僕は好きだったけど。ウォーター・イズ、憧れたなあ。5000円じゃ無理だったけど。「シンク口をやれっ！」って話なんだけど僕ほとんど泳げないし。僕の高校にはプールがないと知って喜びのあまり半狂乱したくらいだ。

「泳げないのか、では川に落ちたとき、大丈夫だったのか？」さつきさんはかなり心配そうな表情だった。

「流石に脛までしかない川じゃ溺れねえよっ！」ううむ、言葉遣いが悪くなってしまった。反省猛省。ちなみにもう携帯は使っていない。諦めた。

「だから今度マンツーマンで泳ぎ方教えて下さいよ」もちろんこの発言にはもしかしたらさつきさんも水着になつてくれるんじゃないかという下心が大いにある。

「私の肌を見たら、殺すぞ」

「僕にここから消えろと！？」法外な要求だった。「肌を見るな」って・・・。逆イسلام。

「しかしあれだな。君に得意分野があるというのは私としては……」
必死に目をつぶっていた僕だが、ようやく目を開けた。肌を見てしまったが、別に何も言われなかった。それほどに今から言う言葉が重要なのだろう。

「吐き気がするな。胸糞悪い、ぺっ」もちろん上品なさつきさんは唾を飛ばしたりしないが、その言葉だけで十分僕は死にたくなつた。「それでも読者視線キャラのつもりか!？」

「読者にも得意分野はあるよ!？」……それに僕が読者視線キャラだったら日本は一体どうなるんだろう。……少なくともほとんどの人がアメリカ辺りに移住しそうだ。高齡化が更に進みそうだ。「……ていうか現実の人間を捕まえてキャラなんていわないで下さいよ」

「……う、む。そうだな。言葉を失くした」

「……?」

「ああ、失言だった」

「いや、失言つてそういう意味の言葉じゃないですよ」字面は似てるけど。

「言葉を失くした」じゃあこの世界が小説じゃないことを知ってびっくりしたみたいに聞こえる。そんなことあるわけないのに。

「まあ、その話はいいだろう。君以外の人間は実はキャストとして生きている事など君は知る必要はない」

「怖っ!」……でも誰しも一度は考えたことあるかもしれない。自分は体よく騙されているんじゃないか、つてな感じに。僕も昔はそう考えていたが、ある日、傍と思いついた。「僕はエキストラなんだからキャストというなら僕がキャストだ」と。

「嫌な現実だな。君がそれを気付いたとなると……2年前くらいか?」

「いえ、5歳の時です」

「嫌な子供だっ!君はあれか、得意だったことをことごとく否定さ

れた過去でもあるのか？」

「……」ある。すげえある。幼稚園でもあるし、小学校でもあるし、妹にもあるしもちろん中学でも高校でもある。とにかく僕は「ランキングにすら乗れない」男なのだ。

ずっと前から分かってた、自分のための世界じゃない。漆根耕太は全国の才能人を応援します。

「……だから、寝てても良いですか？」

「……起きろっ！……まったく、君はもう少し前向きには生きられないのか？」

「なんと！さつきさん、それはいけない。その発言はいささかデリカシーにかけていますよ。卑屈さを除いたら僕に何が残るって言うんですか！」

僕 - 卑屈 = 0、よって僕 = 卑屈。

「……いや過ぎる方程式だった。でも、卑屈であること、それが僕のアイデンティティ。」

「そんなものは捨ててしまえ！」さつきさんが久々に本気で怒鳴った。風圧で後ろに倒れるかと思った。

「やれやれ。ああ、疲れた。しかしこれでわかったな、耕太。そんなものはゴミ箱にばい、だ」

「……うわぁ、表現が古い。」

「いや、でも僕と卑屈は同じなんですから、ついでに僕もゴミ箱にばいされますよ」

「良いではないか、地球のためだ！」

「僕は生きているだけで有害なんですかっ！？」ひどい物言いだ。

ああ、でも当てはまるかも。春日井さんにも言われそうだな。……明日辺りに。

「いや、お湯うがいだな」

「？」

「だから、お湯うがいだ。ちょっとイントネーションを変えると、『おっ、有害』になる」さつきさんはしたり顔だった。別に上手く

言えてない。というか意味がわからない。

僕は生きてるだけで「お湯うがい」なのか。僕の傍にいただけで喉がやられてきてお湯うがいをしなければならぬのか・・・。

「・・・って、それって有害って事じゃないですかっ!!」

「ちっ、気付いてしまったか・・・おや、耕太、あれは？」 雑談が長すぎて、危うく忘れるところだったが、僕たちはつむぎの尾行に來ているのだった。そして、今まで楽しく遊んでいた2人に変化が訪れた。

普通ゲーセンに一人じゃ来ないよな。

「誰だ、あれ？」知らない男だった。高校生くらいだろうか。背が高く、茶髪にピアスのいかにも「遊んでます」的なチャラ男が二人に声をかけている。つむぎたちは怯えているみたいに見えた。

「ちょっと近づいてみましょう」不穏な空気を感じ取ったのか、さつきさんは無言で頷いた。僕たちはクレインゲームの影に隠れてそちらを窺う。どうやら男の後ろには似たような感じの男が2人いるようだ。そうだよな、普通ゲーセンに一人じゃ来ないよな。ていうか1人で来ている奴がいたら普通に引く。

「突っ込まんぞ、耕太」さつきさんは拳を握り締めて衝動を必死にこらえているようだった。まったく、頭が下がる。

「だからさ、一緒に遊ばない？ね、いいじゃん。来てくれたら夕飯おごつてあげるからさ」

「・・・ナンパ、だな」さつきさんがぼそつと呟いた。

「あの、困ります」つむぎがささやかな抵抗を見せる。しかし、それは逆効果だったようで、男はつむぎの手首を掴み、つむぎは痛そうに顔をしかめた。

「いいんじゃないか、耕太。少し様子を見ようではないか。やはりいい男かどうかは彼女がピンチの時に助けるかだと私は思う。これは絶好の機会ではないか？」

「・・・」

僕は答えない。

「ちょっと、やめて下さいよ」シユウ君は声を上げる。

「あ？なんだてめえ！？ぶっ殺すぞ！！」定型句だった。しかし、そんな定型句だけでもシユウ君には十分効果的だったらしく、一瞬にして萎縮してしまった。男は睨んでいたその目を優しくして再びつむぎに向けた。その後ろでニヤニヤ笑う二人組。

「ごめんね、怖い声出して。行こっか」男は猫なで声を出す。僕は

ナンパというのを見たことはないが、なるほど、それは正しい手順だった。ただし、男からカーテンの無い新築の窓並みに下心が見えているのは大いに間違っていた。

「やめてください！」ついにつむぎが声を上げた。シュウ君は完全に萎縮してしまっている。男はそんなつむぎを見て舌打ちする。笑顔が消えた。

「黙ってついてくりやあいんだよ！」

僕の中で何かが切れた音がした。

「おい、耕太！」さつきさんの制止を振り切り、僕は行く。ここにはいけないはずなので、やはりそれは愚かな行動かもしれないが、僕は行く。たとえ普段嫌われていたとしてもいつも疎まれていたとしても、僕には絶対に守らなきゃいけないものがある。

僕は男を突き飛ばした。突然の僕の登場に驚き、対応できなかった男はつむぎの手首を放し、尻餅をついた。顔をあげ、僕を睨みつけた。

「耕兄！？」つむぎが驚きの声を上げる。僕は背後にいるつむぎを見ない。男と睨み合ったままだ。そのまま、声を上げる。

「シュウ君！」背後で息を呑む音が聞こえた。

「つむぎを連れて行け！」

背中越しに感じるシュウ君の一瞬の躊躇。何をしているんだ。君の仕事はつむぎを守ることだろう。守るといふ事は危険を避けるという事だ。危険を排除することじゃない。別に戦わなくたって、逃げたって、少しくらい諦めたって大事なものは守れるんだよ。僕みたくいにならなければ。僕みたいに愚かに諦めきれずにすがり続けたりしなければ。

「早く！」

「ちよつと、シュウ君。耕兄が・・・」今度はつむぎの躊躇。しかし、すぐに背後から気配が無くなる。どうやらシュウ君たちは行ってしまったようだ。僕の後ろに出口があった。そうでなかったら後の2人に回り込まれていただろう。

「なんだてめえ、ぶつ殺すぞ！」またしても定型句だった。小柄な僕とは比べるべくもないほど背が高い。横に大きくはないが、それでも力は非力な僕よりは強いだろう。飛び出したはいいが、それからどうすればいいかを僕は何も考えていなかった。考えも無く飛び出して、考えも無くつむぎを逃がしただけ。やはり僕は底なしの愚か者のようだ。

突然、僕の左頬に痛みが走り、僕の爪先が浮いた。リーチが違う。僕が手を伸ばしても男の肩にも及ばないだろう。そして、この男はそのリーチの使い方を熟知しているようだった。僕はそのまま後ろ向きに倒れる。ああ、まずいなこれ。これから僕は袋にされてボコボコかな。

やれやれ、生きるのってしんどいなあ。

だが、結果的に僕の背中が床に当たって肺を強打する事は無かった。痛いのは頬だけだった。倒れることもなかった。どうやら僕は後ろにいた人にぶつかったようだった。

「・・・お、漆根じゃん」

超長身にして筋骨粒々、スキンヘッドによく似合うサングラス。まったく、何てめぐり合わせだ。

「・・・やあ、及川。お前は昨日授業サボったから2日ぶりだな」
「・・・及川だった。隣にいるモデルみたいな人は彼女だろうか。ちくしょう、丑の刻参りでもしたくなる。」

「がはは、なんだお前その面。似合わねえ。草食系男子の癖に顔殴られてんじゃねえよ。ん？お前は肉食系か。ていうか肉食系か？・・・あ、食ってないんだった」彼女の隣でよくそんな発言できるな。しかし及川は昔はともかく今は絵に描いたようなワイルドな男だ。だからそれで良いんだろう。

男たち3人は、その及川を見て、明らかにたじろいでいた。

「おい、こいつ及川だ」後ろにいた男が言う。二人はその男を見た。そして戦々恐々とした表情に変わった。及川って有名人なのか、といまさらながら僕は思った。確かに中学時代にしてきたことを鑑み

ればそれも領けなくはない。けれど、僕にとってはどうでも良いことだ。昔と今の僕が違つように、及川も昔とは違つただから。それでも男たちにとってはどうでも良くないことのようにだった。

「ようよう諸君、この女食願望系男子となにがあつたかしらねえがどうせ女がらみだろ？」及川は定型表現を使わない。しかし、その声はどんな言葉よりも威圧感を秘めていた。そうなのだ。この男は人を威圧することにかけては誰にも引けを取らない。右に出る者はいない。

しかし、確かにつむぎがらみだから女がらみだけど、人間きの悪い事を言うな。言い方つてものが無いのか！

「だつたらやめとけ。こいつに関わるとろくな事がない、破滅するぞ……」

及川はカッコよく親指を立てて、それで自分を指したかのように一瞬見えた。

「……こんな風にな」僕を指しやがった。その親指を掴んで折つてやりたい。しかし、多分僕が掴んで手首を返すよりも及川の親指の力のほうが強い。僕の手首が折られそうだからやめておこう。この借りは明日早めに学校に行つてあいつの机の中に消しカスを放り込んでおくことで返そう。

……つて、ちっちゃいな、僕。

「ちっ」と、男たちは定型的に舌打ちをして、そそくさと去つていった。もちろん言葉に説得された訳じゃないだろう。単純に及川にびびつたんだ。

なんにでも突っ込みやがって。この寂しがり屋め

「・・・しっかし」及川はサングラスをはずして、イタリアのおじ様が着ていそうなシャツの胸ポケットに入れた。

「お前もよくやるよな。その顔一週間くらいそのままだぞ。額の傷と言い、お前は顔を怪我するのが趣味なのか？」

「・・・及川、そのサングラスを貸せ」突然無表情で要求した僕に対して及川は首を傾げたものの、胸ポケットからサングラスを僕に手渡した。僕はそれを床に落として、思い切り踏んづけた。

「おいしい！なにすんだコラ！」ドスを聞かせた声。だが、僕には決して通じない。僕はこいつを怖いと思ったことは一度もないのだから。

「うるせえ！昨日お前がつむぎに嘘をついたせいで僕は自分の部屋で妹と流血沙汰起こすところだったんだぞ！」

「昨日・・・ああ、あの電話か。お前からだったからしょうがねえなあ、出てやってもいいかな、と思って出たらいきなりつむぎちゃん冷めた声だもんな。流星の俺もびびったぜ」

この及川をびびらせたのか。凄いな、つむぎ。

「んで、いきなり春日井のことを聞いたろ？ほんとのことを言っちゃいけないと思ってよ」

「なんでだよ！何で僕の周りのヤツラみんな真実よりも笑いを追求してるんだよ！」

やっぱりアメリカには移住できないな。あそこは嘘つきを何より毛嫌いする国らしいから。そもそも僕は小説のキャラじゃないから移住する必要もないんだけど。

「ていうかそんな面白いことになってたのか・・・呼べよ！」

「呼ぶかつ！」さつきさんと同じ事を言うな！マツチヨのくせに！ちなみにさつきさんはさつきと同じくクレーンゲームの傍にいた。

なんだかいたたまれない感じでこっちを見ている。もしかしたら及

川に人見知りしているのかもしれない。

「それにさつき電話したろ！タイミング悪いんだよ！」そっちの方は十中八九及川は悪くないが一応言っておいた。

「そうだ！」突然、及川は声を上げる。そして嬉しそうな顔をして彼女のほうを見た。

「こいつがさつき言ってたクレーン王だ」

「やめろ、そのネーミングからはダサイ匂いがぶんぶんする」僕は土木作業でもしているのか。僕の夢は植物学者だっつの。

「クレーン殴打？」

「確かに殴られたけどクレーンほどのパワーは無かったよ！」やばいだろ、クレーン殴打って。一瞬にして首が胴体とさよならしそうだ。

「・・・たく。お前が割り込んでくると話がすすまねえ。なんにでも突っ込みやがって。この寂しがり屋め」

「くっ」屈辱だ。

「さつき電話したのはクレーンゲームで取って欲しいものがあつたんだよ。話してもねえのにここにいるとかお前は忠犬か？」

「殺すぞ」大体及川が主人だったら僕は獰猛になつてる。犬は飼い主に似るんだから。ていうか僕が家にいたらわざわざクレーンゲームの景品のためにここまで呼ぼうとしてたのか。ああ、及川の首がプチプチに見えてきた。あれってひとつにまとめてぎゅっと絞ると最高に気持ちいいんだよな。

「これなんだけどよ、少しやってみただがどうにもかからない」

及川は僕の心中を完全に無視して、見えていないさつきさんの方に近づき、やっぱり無視してアクリルケースに額を当てた。さつきさんは無言で僕の横に立った。ちなみに及川の彼女は僕を見ることもなく及川についていく。友達の彼女というのはどう接していいか分からないところがある。それは向こうも同じだろう。いや、むこうは僕が虫くらいにしか見えていないのかもしれないな。虫に声をかけるような人には見えない。

僕は及川が指差すぬいぐるみを見た。ゲテモノだった。・・・あれが欲しいのか？及川の彼女を見たら僕から目をそらした。恥ずかしかつているのかもしれない。

「多分いけると思う。その代わり明日学食な」及川は二つ返事です承し、僕に100円を渡す。一瞬の躊躇もないとか。これが男か。クレーンゲームにおいて大事なのは、商品の重心を見極めることと機械の性能を知ることだ。どちらかを怠れば決してとることはできない。そして僕はこの型の性能を熟知している。ぬいぐるみもくちはしが出っ張っている事を除けばおよそ中心に重心がありそうだな。僕は横ボタンを押してクレーンをスライドさせていく。よし、どんぴしゃり。続いて縦。

「・・・さつきさん、機械を叩かなくて良いですよ」暇だったのだろうか、拳を振り上げたさつきさんをぼそつと呟いて制止した。及川たちには多分聞こえていないだろう。二人はぬいぐるみの行く末に何よりも注視している。さつきさんは何か言いたげな顔をしたが、結局拳を収めてくれた。助かった。

そして、縦も完璧。だてに1万円も浪費しちゃいない。
「よっしゃ」「ぬいぐるみはきれいに穴の中に落ちていき、足元で商品が出て来る音が聞こえた。

及川はそれを彼女に渡し（やっぱりかわいくないぬいぐるみだった）、彼女は感激していた。笑顔で僕に礼をする。僕は「いいよ、別にとツンデレることしかできなかった。

「おう、漆根、飯一緒に食ってくか？」及川は上着の内ポケットから別のサングラスを出してかけた。随分と用意が良い。というかこれは買ったばかりのやつだろう。さつきのやつよりも高そうだった。「いいよ。僕もそこまで野暮じゃない」ていうか目の前にカップルがいるのに落ち着いてご飯が食べられる訳がない。拷問か？及川は僕に意味もなく拷問をかけようとしてるのか？

「そうか。んじゃあな。つむぎちゃんによるしく」及川は彼女と連れ立って行ってしまった。

僕は中世の騎士か！？

夕焼けが眩しい。明日はきつと晴れるだろう。僕はその輝きに背を向けて足を進める。だがしかし、僕の心中は空に反して次第に暗くなっていく。

「あーあ、どうしようかな。尾行してたのばれちゃったし。帰ったらまた僕の部屋に包丁持って立ってるかもな」

十分にありうる。昨日の一件がシユウ君関連で納まったのだから、露見した以上、その刃で僕を切り裂くことに躊躇しないだろう。

あ、でも大丈夫だ。今日はちゃんと両親ともにいるはずだ。流石に奔放な両親でも2週連続で旅行に出かけはしないだろう。朝はいたし。・・・改めて考えると漆根家は奔放一家だ。ちゃんとしているのはつむぎだけかもしれない。じゃあ僕がこんなふらふらしているのもちゃんと遺伝なのかもしれないなかった。

「・・・つまらんな。実につまらん」悩みを振り切った僕とは対照的に、さつきさんは憂鬱げな表情だった。心なし苛立っているようにも見える。

「あの、すみません。なんか無視するみたいなことしちゃって」さつきさんが怒っているとすればそれだろう。自分がおざなりにされるのを何よりも嫌うわがままなお姫様のような人だから。

「いや・・・そんなことはどうでもいい。実にどうでもいいな。明日の朝耕太が起きたら蠅に変わっているくらいどうでもいいことだ」「カフカ！？」

あんな傑作の小説を「どうでもいい」とか言うな！

「それは言葉の綾だ。だが、そうと言えるほどに比べるべくもないことだ」

「？」じゃあなんだ？他には何も無いはずだ。さつきさんの制止を振り切ってつむぎを助けに行ってしまったことか？しかしあれは他にどうしろというのだろう。

「それも違う。私がつまらんとするのはな、耕太。君がクレイーンゲームで成功してしまったことだ」

「なんでですか。別に文句はないでしょう」

「耕太と成功という言葉が1つの文の中で一緒に使われて良いものか！」

「僕は生まれながらの敗北者なんですか!？」

「ギリギリで落とすとかぬいぐるみが引かかって落ちてこないとか、笑いどころはいくらでもあつたらう!」

「僕はそこまで笑いに忠実になれませんか!」及川に忠実でさつきさんに忠実で笑いにも忠実つて、なんだその浮気性!僕は中世の騎士か!？」

「カツコよく例えるな!確かに中世の騎士は複数の貴族と契約していたが、君は確実に農民つて言うか浪人だろ」

「まあ、何とか及川がいましたからね」あいつはなぜか知らないけど彼女の前では決して恥をかかないというスキルがあるのだ。多分僕一人だつたらさつきさんが言つたような「面白いこと」になつてたかもしれないけど。

「しかし耕太はあの少年に対してだけは強く出るのだな。見た目は番長とそのパシリという感じだが、そういうわけでも無さそうだ」

「うわつ、ひどい例えですね」ひどいが、よく言われる。一緒に街を歩いてただけで警官に声をかけられたこともあるほどだ。あれ以来、あんまり及川と街を歩かないことにしている。及川は気にしないが、僕がショックだ。

「中学時代にいろいろあつたんですよ」などと、伏線を張ってみても、これが回収されることはきつとないだろう。それは及川のプライバシーの問題だから僕が語るべきではない。ただ少しだけ、日常とは違つた事件が起こつただけだ。

「そうか、別に興味はないけどな」

さつきさんは前を向いて、足を進めた。

「あ、いえ、さつきさん、駅はこっちです」

・・・あんなに大きな建物なのに。

「わ、わかつているに決まってるではないかつ！こ、これはあれだ、君を試したのだ！」

うわぁ、顔真っ赤。超かわいい。

一体僕の何が試されたというのだろうか。僕がちゃんと駅の方角を指差せるかどうか？それに試しただけなら何で怒っているんだろう。

・・・ちなみに、さつきから僕は周りから見れば1人で喋って突っ込んでボケてを繰り返している訳なので、通行人にちらちら見られている。

でもまあいいや。諦めてる。

電車に揺られながら、夕日の沈んでいく暗い海を見た。あそこから沈んだ太陽は明日はきれいになって反対側から帰ってくるのだろう。そう考えられるからこそ、人は明日に希望を持って生きられる・・・なんて、ちよつとたそがれてみたかった。

「黄昏時だからか？つもらん」

「・・・そんなつもりじゃないですよ」流石に電車内なので声のトーンは落とすが、あまり人もいないから大丈夫だろう。日曜日だから遊んで帰るにしてももう少し遅くなつてからだろう。

「そういえば、シユウ君はどうなのだ？お前としては合格か？」

さつきさんと僕は並んで座っている。僕たちはギリギリ触れないくらいを保っていた。僕とさつきさんは仲がいいが、決してくっついてはいけない。さつきさんには待ち人がいる。いや、待たせ人か。だからこれくらいの距離がちょうどいいのかもしれない。さつきさんは長い足を組みなおして僕を見た。

「もう、どうでも良くなりました。つむぎが良いと思うなら良いだろうし。・・・嫉妬しているなんて思われるのも心外ですしね」

「死ねって言ったな！」

「言ってねえ！」正面に座って本を読んでいた大学生っぽいお姉さんが僕を見て、すぐ目をそらした。

ていうかなんだその変換ミス。あんたは古いワープロか？しかも「死ね」って言う言葉を使い過ぎてるだろ、そのワープロ。変換の優先順位が上がってる……。

「ああ、必ず『売る死ね』になる」

「……」確かにシヨックだけど、それ以上にさつきさんが「うるしね」とタイプしてくれたことが何よりも嬉しい。

「……とにかく、特に干渉するつもりはありません。幸いシヨックカーに改造されてはいないみたいですし」

「シヨックカー？」さつきさんは首をかしげた。

「いえ、なんでもありません」しかしあれも考えてみれば壮大な話だよな。改造されたのに意識を残してその組織を殲滅するため一人立ち向かうなんて。力を正しく使う、なんていったいどれだけの人ができるだろうか。少なくとも僕には無理だ。……そもそも力が無いから。

ミミズを喉に押し込められている気分だ

電車を降りて、家路に着く。漆根家は駅から歩いて10分ほどの距離だ。正反対だが高校と同じくらい。ただ、中学だけは結構遠い。20分くらいだろうか。僕は去年まで大変だったし、つむぎは今大変だろう。

僕を出迎えてくれるはずの僕の家は明かりが灯っていないかった。家の前の車もない。母さんが買い物にでも行ったのだろうか。でも父さんがいてリビングに明かりが灯っていないというのはどういう事だろうか。それにつむぎはまだ帰っていないのだろうか。

「漆根先輩」

突然、僕の目の前に少年Aが現れた。少年Aは中学の時から帰宅部だった僕が今まで呼ばれたこと無い呼称で僕を呼んだ。僕は驚き戸惑った。

シウ君だった。りりしい顔だが、伏し目がちに申し訳無さそうに僕を見ている。その自信なさげな表情がどことなく僕みたいだな、と思った。

「あの、はじめまして」と、最初に挨拶から入る。ふむ、思ったよりも礼儀正しい子らしい。驚き戸惑ったままの僕はここでようやく自分のターンが来たことに気がついた。

「おお、耕太。コマンド選択はどうした。たたかうか？まほうか？ぼうぎよか？・・・それともにげるか？」

さつきさんの言葉を聞いて、僕は言葉を唱えた。

「シウ君、だよね？始めまして・・・つむぎは？」

シウ君は大ダメージを受けたらしい。伏し目がちだった目線を更に下げてアスファルトを見た。

「すいませんでした」がつくりと肩を落とし、シウ君は目線を下げた勢いのまま頭を下げる。茶色がかった髪が揺れた。ああ、髪の毛がサラサラだと寝癖の手入れが大変そうだな、と僕は思った。ち

なみに僕も髪質としてはそっちに近い。

「・・・はげてるのに？」

「はげてませんよっ！今までそんな描写は無かったでしょ！やめて下さいよ、マジで！」ほんとにはげてると思われたらどうするんだ！

「は？」条件反射の僕のツツコミに対して、シユウ君は驚いたように顔を上げた。僕は軽く咳払いをする。本当に、僕の本能を利用して貶めるなんて、さつきさんは策士だなあ。

「いやいや、『欠けてませんよ』って言ったんだよ。僕の君に対する配慮がね」

「はあ」と、曖昧に、わからなそうにうなずくシユウ君。うん、正しい反応だ。これでわかられたら、僕は自分が本当にサトラレなんじゃないかと疑わなくてはならない。

「ちゃんと家まで送り届けてくれたんだね。ありがとう」僕はつむぎの部屋の窓を見ながら言った。だけど相変わらずその部屋に電気は灯っていないが、さすがにつむぎが家にいないのにシユウ君がここにいる理由がないので僕はそう言った。

「というよりも怒って帰っていくつむぎさんを僕が追って行く形だったんですけど・・・」シユウ君は諦観した眼差しを僕に向けた。

それは、中二の男子にしてはあまりにも大人びすぎている表情だった。

「怒る？何で？」

シユウ君の仕事はつむぎを危険から遠ざけることで、それには成功しているはずだ。そこに怒る理由はないし、怒る意味もない。

「それは・・・」シユウ君は言いよどんだ。随分と言いつらそうだったので、僕は突っ込んで聞かなかった。しかし結局、シユウ君は重い口を開いた。

「先輩を助けに戻ろうとするつむぎさんを僕が止めたんです」シユウ君は再び俯いた。

ああ、なるほど。そういう事か。僕の軟弱さを誰よりも知っているつむぎは僕が袋にされると思っただけで戻ろうとしたのか。でも、結局説

得されてつむぎは帰るほうを選択したのだろう。

「君は間違っていないよ。僕は君のほうが正しいと思う」

だってさ、もし、つむぎが戻ってきたとしても何ができた？誰か人を呼んでくるくらいか？そんなの騒ぎを聞きつけた店員さんの方が断然早い。そしてそれでも十分遅い。人にはできる事とできない事がある。それは誰にも平等に振り分けられている訳じゃない。

例えば及川。あいつは喧嘩も強いし男らしい。けれど僕はあいつがそんなに強い奴じゃないことを知っている。

例えばさつきさん。多分及川より強いし面白いしきれいだけど、彼女にはできない事が多すぎる。

例えば僕・・・は、長所が見つからないから割愛。

「でも・・・」シユウ君は僕の顔を見る。

「ああ、これか」僕は腫れ上がっている頬に手を当てた。痛みはあまり無いし、そんなに大きく腫れ上がっているわけでもない。1週間といわず、3日もすれば消えてしまっただろう。絶対額の方が治るまでに時間がかかる。

「大したことないよ。上手く和解できたからね。それも本当に偶然だったんだけどね。偶然がなかったら僕は今頃どうなってたかな・・・。だからさ、僕は間違いないんだよ。正解は君のほうなんだ」

そう、僕は間違いだ。世界は僕以外を中心に回っている。僕はいつも勝手に空回りするだけだ。

だけど、僕は後悔はしたくないから躊躇をしない。それこそが間違いの元だと知っているのに身体が勝手に動いてしまうのだ。じゃなければ額にこんな傷はない。でも代わりに春日井さんが無傷だったのだからまったく後悔はしていない。こんな傷ぐらい負ってもかまわないと思う。

だけど、やっぱりそれは間違っているんだ。本当の本物は犠牲もななく上手く、何の後悔も無くやってみせる。本当はどんなことだってできるやつがやるべきなんだ。それに抗う僕は間違っているんだ。

「そんなことありません。先輩は正しいです！」シユウ君は、初め

て僕の目を見て、力強くそういった。

「僕は・・・僕は・・・逃げることでできませんでした。足がすくんで、頭が真っ白になって・・・。先輩がいなければ今頃・・・」
眼力は次第に弱っていく。それは捨て猫みたいな目だった。憂いの中、どうすればいいかわからず、ただがむしゃらに生きるだけ。そんな目だ。

だったら、この子はきつと僕だ。あの時に道を踏み外さなかった僕の姿だ。方法も分からず必死になっていたあの頃の僕だ。だからこそ僕は言わなくちゃいけない。

「君は、今の君を否定すべきじゃない。必死になるのもがむしゃらになるのも良いけれど、それは今の自分の上に培われるべきものなんだ」

・・・なんだろう。少しシリアスになりすぎている。うーん調子狂うな。

「僕の中学時代の話は聞いているかもしれないけど、道を間違えると本当にこんなになっちゃうんだぜ」つむぎが噂になっていると言っていたからシユウ君も多分知っているだろう。僕は茶化すようにそう言つと、シユウ君は情け無さそうに笑う。

「あのあとすぐ帰ったのならもう1時間くらいここにいるんだろう？今は帰ったほうが良いよ。遅くなるし、それに・・・」

思い出すなあ、僕もこうして人の家の前で待ち伏せして近所のおじさんに咎められたことがあったっけ。あのおじさんかなり怒ってたもんな。・・・というのはやっぱり言わないでおこう。

「でも、つむぎさんに一言謝りたくて」シユウ君は折れなかった。憂いを帯びた目を僕に向けた。

「わかった。僕が説得しておく。こっちから電話をかけさせるから、待ってて」

「・・・はい」シユウ君はしばらく黙考したあと、頷いた。
本当に素直な良い子だと思う。非の打ち所がない。僕と重ね合わせたのはかなり失礼だったかもしれない。

「……さて」とぼとぼと歩くシユウ君の小さな背中を見送って、僕は家に向かう。

「……まずいですね、さつきさん。シリアスな調子が戻りません。なんか面白いこと言っただけで下さい」法外な要求をした。

「そうだな。耕太がシリアスだと調子が狂うというか純粹に気分が悪いな。ミミズを喉に押し込まれている気分だ」

「最悪な拷問だ！！ていうかそんなハイレベルな気持ち悪さなんですか!？」

ちくしょう。僕に一生おどけているというのか。24時間365日ピエロか、僕は。

「あつ、でもなんか元気出てきました」

「傷つけられて元気が出るなど、君は変態か？」

「ああ、気持ち良い。もっと言っただけで下さい」

「無敵か君は！」さつきさんは声を張り上げる。うん、やっぱりこうでなくてはならない。

……ちなみに僕はがつり傷ついている。しばらくの間真剣になれそうにない。テストの記名欄に「漆根・M・コウティ」とか書いてやうかもしれない。そのレベルで真面目になれない。だって学校の先生にミミズ踊り食いさせるわけにはいかないし。

生意気、耕兄の分際で

「ただいま」

家の中は暗かった。鍵は開いていたものの、電気はどこにもついていない。どうやら父さんと母さんはいないようだ。じゃあこの薄暗い家にはつむぎが1人だけいるんだよな。僕はとりあえず荷物を置いてからつむぎの部屋に行こうと、自分の部屋のドアを開けた。

「……おかえり」

「……ただいま」

……つむぎがいた。薄暗い部屋で特に何をするとするわけでもなく、カーペットに正座していた。眼光が異常に鋭い。だって真つ暗な部屋のはずなのに光ってるもの。ホラームービーみたいだ。おかしいな、今日見たのはアクションムービーのはずなのに。

「えっと……父さんと母さんは？」僕はとりあえず軽いジャブから入る。

「……同窓会。置手紙があった」

「……あ、そう」うわあ、気まずい！最悪の事態が起こっちゃったよ。何で図ったように同窓会があるんだよ！……ってそれは前からから計画されていたんだろうけど。

図られたのは僕の運命の方だ。

部屋は暗くて、もう夜と言って十分な時間だった。僕は電気をつける。

うわあ、すげえ。電気をつけたのに闇のようにつむぎの表情が暗い。シユウ君といいつむぎといい2人揃ってやばい表情を僕に向けるな。中2つてもつと馬鹿みたいなテンションじゃないのか！？

「……座って」つむぎはほとんど唇を動かさない。天井から声がしたかと思った。つむぎには腹話術師の才能があるのかもしれない。

「……の前に、ちよっとトイレ行って来てもいい？」

「……………」無言のつむぎ。それを了承と受け取って、僕はそくさと部屋を出た。トイレの方向に向かうが中には入らない。

「……………さつきさん」

案の定、さつきさんはわくわくした子どもっぽいや表情をしていた。思わず見とれてしまったが、目的を忘れてはいけない。

「しばらくの間、ミミズを呑んでもらっても良いですか？」僕は尋ねる。さつきさんは無言になった。しばらく考え、口を開いた。

「……………ふむ、いいだろう。ミミズを呑みつつ、固唾を呑んで見ていてやる」

「無駄に上手い！」まさか、ミミズのくだりはこの伏線だったのか！？あなたは神か！

「神？ああ、この前道路で交通整理やっていたな」

「不届きだ！」……………ともかくも、僕はつむぎと向き合わなければならぬ。普段は無愛想なつむぎだが、今は表情が無い。これは大きな違いだった。その違いが僕には耐えられない。

僕はドアの前で大きく息を吸って、ドアを開けた。つむぎはさつきとまったく同じ格好で座っていた。巻き戻してもしたのかと思った。僕はその正面に何となく正座で座る。二人とも正座だったので、今から百人一首かなにかの勝負をするみたいな格好になってしまったが。

「……………説明して。何であのタイミングであそこにいたの」
相変わらずの殺気。こいつの前世は間違いなく武士だ。

「その前に、1つ。僕の友達に渡仲いずむって言う奴がいるんだけどこれって『トナカイずむ』、『トナカイ、済む』って感じでクリスマスにおいてサンタがそりを引くトナカイを解雇して、飛行機とか家用車でプレゼント配る、見たいな感じになって、幻想をぶち壊そうと思わないか？」

「耕兄に友達なんかいないでしょ」
「ばつさりだった。」

出会い頭にばつさり一刀両断だった。こいつの前世は武士というよ

り人斬りか通り魔だ。

「・・・悪かったよ」僕は頭を下げる。正座のままなので妹に向かって土下座しているみたいになってしまった。

「どうして」さっきからつむぎに対しては描写がいらぬほど表情が変わらないし、声の調子も変わっていない。氷河に覆われていた今のつむぎを北極辺りに連れて行ったら、案外それだけで北極の氷の消失を食い止められるかもしれない。シロクマに神と崇めたたえられることになるだろう。

「心配だったつてのが一番かな。いや、違うな。僕もさっきまで気づかなかったけど嫉妬が多分一番だ」

一番と二番で、心配が三番。暇だったのが四番と五番かな。と茶化す僕。もちろんつむぎの前ではすべてが凍結、床に落ちて粉々になった。

頑張れ、僕。これ以上空気を悪くするな。

「シユウ君は良いやつだね。なかなかいないと思うよ。つむぎに謝りたいって僕が帰ってくるまでずっと家の前にいたんだから」

「・・・」つむぎは何も言わない。その無表情からは何も読み取れなかった。

「本当にごめん。邪魔するつもりは無かったんだ。実際あの時も帰ろうとしてたんだよ。ただ、さ・・・」

つむぎはようやく唇以外の身体の部位を動かして僕を見た。ようするに僕の頬を見るために顔を上げた。

「・・・なんで助かったの」

「ちょうど及川がいたんだよ」まったく、あれはかなりの幸運だった。じゃなければ僕は今頃ボロボロだろう。店員さんの制止が入る前に僕の生死が左右されていたかもしれない。頭を強打すれば命が静止する事もありえる。

「・・・あたしつてさ、男運ないのかなあ」つむぎの声に、初めて感情が宿った。そして読点も返ってきた。その声は小さな肩と一緒に震えていて、弱々しくて、儂げだった。

「それは・・・」

つむぎの目からポロポロと涙が落ちる。膝の上で握り締めていた拳に落ちた。

「・・・それは、本気で言っているのか？」自然と僕のこぶしにも力が入る。

「え？」つむぎは顔を上げる。涙に濡れたまつげが光った。

「それはだめだ。お前はそんなことを言っちゃいけない。男運がない？シユウ君はあんなにお前のことを思ってるのに？」自然、僕は詰問をする口調になる。

だってそうだろう？ふざけるな。こいつは何を言っているんだ！

「だって、あたしがピンチだったのに、助けてくれなかったんだよ？助けてくれたのは耕兄だったじゃない！」

「違う。違うんだよ、つむぎ。仮にシユウ君があいつらに立ちはだかったとして、それでどうなる？お前はシユウ君がアメコミのスーパーヒーローで瞬間間にあいつらを倒せるとも思ってるのか？あの時シユウ君がすべきだったのはお前を危険から遠ざけることで、お前にかっこいいところを見せることじゃないんだぞ！」

人は、そんなに強くない。守ろうと思っても、守れるのは手の届く範囲だけだ。せいぜい一人抱えられるくらいのちつぽけな存在だから、精一杯手を伸ばして、手をとって、それを引くことの何が悪い。大事なもののだけを守ろうとして何が悪い。

僕は、ただ愚かなだけだ。策も無く飛び出して、意味もなく殴られただけだ。一体その行動がなんだというんだ。目的を達成できないなら、立ち向かうことに意味なんてないのに・・・。

「シユウ君は正しいことをしたんだよ。正しかったからこそお前は怪我をする事なく帰って来れたんだよ。それなのにお前はそんなことを言っではいけない。男運が悪い？それは冒涇だ。ヒーローになれるはずの人の人に対する冒涇だ！」

あの場でヒーローになれるのはせいぜい及川くらいのもんだ。だとしたらつむぎは及川以外の男はお断りとも言うつもりだろうか。

そんなもん願ひ下げだ。あんなやつに妹をやれるか！

「あたしが言いたいのは、そういう事じゃなくて……。ああ、もう！何でわかってくんないのよ！」つむぎは声を張り上げて立ち上がろうとした。

「ひゃん！」次の瞬間、尻餅をついた。どうやら正座のし過ぎで足が痺れてしまったらしい。それにしても随分可愛らしい声をあげる。実の妹じゃなかったら萌えてるところだ。実の妹なので、その足をつつく。

「あつ、ちよつと、やめ……。やめてよ！」

蹴られた。しかも腫れてる頬を。悶絶する僕。完全無欠、完膚なきまでの自業自得だった。

「ねえ、耕兄、あたしどうすれば良いのかな？」つむぎは袖で涙を拭つて、伸ばした両足をさすりながら僕を見た。

「さあね、それはおまえ自身が考えることだ」僕は立ち上がつてつむぎに近づく。今度は足をつつくのではなく、つむぎの頭に手を置いた。つむぎからの抵抗はない。

「これからいっぱいケンカして、いっぱい話をして、たくさんのことを知つて、そんでその代わりにたくさんの事を知ってもらえよ。

シユウ君はそれをちゃんと受け止めてくれる男だよ」

シユウ君みたいになれたら、僕もまだマシな人間だつたらうな、などと、2歳年下の少年に嫉妬する僕。……ださい。

「生意気、耕兄のくせに」

「おいおい、くせに、は言いすぎだろう」

「生意気、耕兄の分際で」

「何でそれ以上いっちゃうんだよ！」ブレーキとアクセルを踏み間違えたのか？チキンレースぶつちぎりの優勝か！？

「うん、分かった……。電話してみる」おぼつかない足取りでつむぎは立ち上がった。ちよつと生まれたての小鹿みたいだった。

やれやれ。まったく手間のかかる妹だ、などと、常に迷惑を掛けている兄は思った。

「ああ、そういえば、耕兄」つむぎはドアノブに手をかけたまま言った。

「ええっと、その・・・助けてくれて、アリガト！」

「ト」が聞こえる前にドアが勢いよく閉じられた。僕はカーペットに仰向けに倒れて天井を見た。蛍光灯が眩しい。眩しいけれど見ていたかった。その明るさは僕には決して届かない選ばれた者たちに似ていた。

「・・・耕太、洗面器はないか？」

「・・・ぶち壊しですよ」

僕は身体を起こした。さつきさんはベッドに腰掛ける。

「ふふふ、そう怒るな、冗談だ。そうだな、今日の耕太はなかなかカッコよかった。私がカメレオンだったら恋していたかもな」

「僕は爬虫類に好かれたくない！」カメレオンだったらって。どんな前提だそれは。

「ふむ、そうだな、腹が減ったな」

「洗面器が欲しいっていったのに・・・」ジト目でさつきさんを見る僕に対して、だから冗談だとさつきさんは肩をすくめて笑った。

「今日はピザでも取りましよう。なんだかとっても疲れました」

僕は再び仰向けに倒れる。蛍光灯は眩しくて選ばれた者たちに似ている。それでもそれは立ち上がって手を伸ばせば触れることができる高さだ。僕は少しだけ笑みを漏らした。たまにはこんなふうに満足とともに一日が終わるのも悪くない。

こうして、長い長い一日は僕の類以外の全ての輪が円満に閉じて、ようやく幕を下ろしたのだった。

そこに込められているのは敬意じゃなく僕への刑罰だ！ 1

次の日 月曜日だ。僕はいつも通り携帯のアラームで起き、目覚まし時計が鳴った瞬間に止め、不機嫌なさつきさんの猛攻を何とかかわし、1階に降りて顔を洗おうと洗面所に向かった。

「・・・オハヨ」つむぎがいつもどおりの仏頂面で鏡を見て髪を梳かしながら言った。

「おはよう」つむぎが少し空けたスペースに割って入って、顔を洗つてうがいをする。

「・・・シユウ君のこと、許してあげることにした」

「そっか」僕は短く答える。

「シユウ君が耕兄にお礼言っというってさ」

「なんで？」僕は鏡越しでない生のつむぎを見る。彼女は朝は低血圧なので、目が眠たげだった。

「なんでって・・・まあ、いいや」つむぎは櫛を置いて出て行ってしまった。僕は首を捻る。おかしいな、シユウ君との会話には場を和ますギャグも一切入れてないわけだし。

「それはあれだろう、つむぎを説得してくれたことに対する礼だ」僕の後ろについてきて、機嫌の治ったさつきさんが言った。

「それこそ僕は何もしていませんよ。問題はつむぎとシユウ君2人のもので、そこに僕が関与する隙はありませんでしたし」

僕はただ背中を押したただけだ。そんなことは誰にでもできる事で、そんなことで礼を言われてたらあれだろうか、教室でプリントが前から回ってくるたびに前の席の人に礼を言わなくちゃならないのだろうか。

「君は本当に・・・いや、何も言っまい」さつきさんは行ってしまった。

「？」さつきさんの後を追って、僕も洗面所を後にする。へりに躓いて、転んだ。少しだけ腫れが引いた顔を床にぶつけて悶絶する。

「……僕には学習機能がついていないのか？」

「……なんと言うか、昨日あれだけ刺激的なことがあると、平凡な日常というのが至極つまらなく思えてくるな」

「通学中。さつきさんは突然そんなことを言い出した。」

「そんなこと言ったら罰が当たりますよ、さつきさん。この平和を手に入れるために人間は醜い争いを繰り返してきたんですから」

「正直隕石でも落ちれば良いと思う……君に」

「百億分の一つ!？」もはやそこまで来ればとんだ幸運だ。奇跡の人だ！

「……最高に笑えるのに」

「僕が笑えねえ！」

ああ、もう、この人は。本当に面白いなあ。

「頭に小さな隕石が刺さったのに奇跡的に生きていて隕石の力で人間ならざる力を手に入れて、その力で後に落ちてくる大隕石を食い止めるというんですか!？」

「なぜ全28巻の漫画の最終巻に掲載されている読みきりを引き合いに出したのだった!？」

いや、つい……。昔スタンディンググリードしていた時の遺産というやつだ。

「ていうか僕にはたとえ超人的な力を手に入れても地球の危機を未然に防ぐことは出来ないでしょうね。ほら、僕って草食系男子じゃないですか？」

「ん？草食？君が？いやいや、違うだろう」さつきさんはあっさりと僕を否定してみせる。ま、まさか、及川に加えてさつきさんまでも僕を女食系男子とかいう気か？だとしたら僕は終わりだ。

「君は生殖系男子だ」

「学校で呼ばれたら一発で自殺したくなる表現だ！」

棘のある言葉というのは確かにあるが、ミサイルが補填された言葉というのに僕は始めて行き会った。

「星食系男子のほうがお好みか？」

「スケールでかつ！」どんな男子だよ。そんなやつ同じクラスにいたら引くわ。・・・ああ、だから僕は引かれているのか。納得。

昇降口で靴を上履きに履き替える。中身の確認を忘れない。一回だけ、あれが入っていたことがある。

「あれ？・・・ま、まさか、画鋏のことか！？そんな悲劇のないじめが現代にも残っていたのか！？」

「現代はいじめの宝庫ですよ。それに画鋏なんて古いものじゃありませんでした。ハリセンボンでした・・・」

「近藤春菜か？」

「ちげえよ！？」

箕輪はるかでもないよ！そんなもんいたら素で怖いわっ。あっ、どうも、いつもテレビで拝見しています、ってなるわっ！

「・・・まさに身体を張りたいじめだな」

「自分の身体を張れよっ！」

・・・さつきさんって結構テレビ見てるんだな、とか思ったり思わなかったり。・・・いや、思うんだけど。

教室に入る。結構朝早くに来たのでまだ誰もいない。ここは僕とさつきさんだけの空間だ、なんて調子に乗ってみる。

あれ？机の配置がいつもと違う気がする。僕は自分の席の前で立ち止まった。

「なんだ？椅子がなくなっただわりに机二つになっただのか？そんなときは言っただけやれ！」机がもう一個足りねえだろうが」とな

もう一個机が会ったときの組み合わせを考えてみる。机の上に立って2段重ねた机で勉強している僕のイメージが浮かんできた。

「・・・目立ちますね」クラスメイト大迷惑である。まだ一番後ろの席だから救いようがあるが、僕の前の席の人は常に落下に気を付けなくてはならない。

あ、及川だ。じゃあ大丈夫だ。

「じゃなくて、隣の机が離れてないんですよ」僕は左隣の席を指差

す。その席はいつも全教科の教科書を忘れて隣に見せてもらってるんじゃないかと思うくらい離されていて、もはや向こうは対岸、と言っていていくらいの広い空間があった。もちろん女子であるのだが、今はその席と僕の席との間隔が右隣と同じくらい（こちらは男子、別に普通だ）しかない。先生も何も触れない辺り、自分がそういう目で見られてるんだなあ、って思わされているものだ。

最後にこの教室を使ったのは土曜日だから掃除は無かった。そもそも担当番がその配置にオートするので掃除はほぼ関係ないのだが。では誰かが直したか。・・・いや、それも違う。授業が終わったあと、その生徒は春日井さんと一緒に教室に残っていた。僕は先に出たから断定は出来ないけど、生徒のいたずらじゃない限り直す人はいない。そして、いたずらの可能性も低いだろう。この机の配置、はつきり言っていたはずじゃすまない。流石に高校生にもなってるんな鬼畜じみたことをする人はいない。

「・・・たかだか机が通常の配置になっただけでこんなに熟考できるなんて、君は真正の暇人だな」さつきさんは言う。とても悲しそうな顔で。

「そんなかわいそうなものを見る目で見ないで下さい・・・」ぜひとも別の機会にとっておいて欲しい表情だった。そして僕が更なる推理を展開しようとした時、背後から声が聞こえてきた。

「朝から教室が騒がしいから誰か来てるかと思ったら、誰もいなかったわね。・・・漆根君がいたけど」

春日井さんが降臨した。月曜日の朝早くだというのにその表情は眠気など微塵も見せない無表情。朝は別に低血圧でもないのか、それとも常に低血圧なのか。そして僕を「誰」に入れてくれない冷徹さ。髪の毛から爪先まで春日井さんだった。

「・・・あれ？勝手に机動かしたの？あーあ、これはいじめね」

「断じて僕じゃない！犯人は別にいる」あ、いじめってことは認めちゃった。僕って今もしかして日本で一番かわいそうな高校生なんじゃないか？

わーい、日本一だ……なんて、絶対思わないけど。

「知ってるわ」と、春日井さんの毒舌の嵐の到来に身構えていた僕に降りそそいだのは乾いた陽光だった。

「？」僕は首をかしげる。

「それをやった人を知っているもの」春日井さんは自分の机の横に荷物をかけて、筆箱を取り出す。どうやら一勉強始めるらしい。その言葉の真意がわからずたずねようとした僕だったが、「黙って」の一言で戦闘能力が皆無になったので、教室から退散せざるを得なかった。

そこに込められているのは敬意じゃなく僕への刑罰だ！ 2

昨日がかなり大変だったしわ寄せだろう、身体がいつもより重く、授業はいつもより長く感じられた。

ちなみに今日のさつきさんとの会話ノート。「つり革に手が届いた時ですかね。ああ、僕って大人になったんだなあって」とか「小学生の時に友達に騙されてイチゴは種をとって食べるものだと思ってました。そのことを家に帰ってつむぎに話したら馬鹿にされました」とかが書かれている。

学食は昨日の約束どおり及川におごってもらう。もちろん遠慮なんて微塵もない僕で、デザートまで頼んだのに及川は涼しい顔だった男だ。これが僕との違いかな、とは思うが金銭的な差だけはどうしようもない。こいつは何気に金持ちなのだ。

実は毎日二つ作って持っていった弁当は今日はさつきさんの分1つだけで、彼女は1人で食べると言ってどこかに行ってしまった。普段は人が決して来ない校舎の影に隠れて2人で食べているのだが、流石に及川にさつきさんの分までおごらせることはできなかった。で、僕は頭を下げるばかりだったが、さつきさんは「別にいい。代わりに駅前のシュークリームを二つ追加してくれればな」と大人だか子どもだかわかりにくい飲み込み方してくれた。ああ、そんな約束もあったな、と僕は財布を確認する。月末なので、多少寂しかったが、まあ、なんとかなるだろう。

放課後、僕は家に帰るでもなく、自分の席にぼーっと座っていた。いつもならただ無為に時間を過ごしているだけなんだろうけど、今回ばかりは違った。さつきさんが飼い猫のようにまだ帰ってこないしかしそのうち戻ってくるだろうとふんで僕はこうして何をすればでなく待っているのだ。おお、さつきさんと飼い猫というワードがやけに背德的に当てはまる。さつきさんの前で言ったら即効で粉々にされそうだ。

・・・あれ、結局これって無為に時間を過ごしてるだけじゃないのか？クラスメイトのほとんどは部活に出かけ、僕のような帰宅部や今日部活が無い人たちはさっさと家に帰って趣味や勉強に勤しむか友達と集まって和気藹々と話しているというのに。

まあ、いいか。どうせ僕には趣味がないし、勉強なんてしたくもないし、友達は・・・やめとこう。悲しくなるから。

そんな感じに、勝手に1人でブルーになっていたところに、春日井さんが近づいてきた。相変わらずの無表情で何を考えているかわからない。だからこそ怖いのだ。だって、あの無表情の下にはタバスコやらを平気で仕掛ける悪魔の表情が宿っているんだから。あの後、僕は家に常備してあるタバスコを決して見つからないところに隠した。しばらくは見たくない。食卓に出てきたら机をひっくり返すだろう。

「さあ、漆根君、早く行くわよ」相変わらず平坦な声色だった。

「？」首を傾げる僕に対して春日井さんは隣のクラスまで聞こえるんじゃないかというほど大きな溜息をついた。僕というちっぽけな存在など吹き飛ばされてしまいそうだった。あるいは彼女なら、溜息をついたことで逃げていく幸せと入れ替わりでやってくる不幸さえも吹き飛ばせるのかもしれない。

「まったく、キングゴブラ並みの脳ミソね」

「無駄に格好いいー！でもしつかり馬鹿にされてる！？君は毒舌の天才か！？」1つのポケに対して3つのつつこみを入れないと割に合わない。サバイバルでは間違いなく僕のほうが先に倒れるだろう。何のサバイバルかわからないが。

「声が大きいわ。知り合いだと思われたら大変じゃない」

「クラスメイトであることを否定されたっ！」

「早く行くわよ、漆根君。漆根、耕太君」僕の名前を再確認するように呼んだ春日井さん。もしかしたら本当に存在を忘れられていたのかもしれない。

「・・・しね、耕太君」

「意図的トーン調整!？」

いや、これはきつと僕が「うる」を聞き取れなかったただけだ。まったく、春日井さんを疑うなんて僕は一体何をやっているんだ。

「・・・消える、耕太君」

「ただの願望になっちゃった!!」

僕のつつこみを無視して、春日井さんは教室を出て行った。突っ込みがないのな人だった。僕は慌てて荷物をまとめ、立ち上がったところで思い出した。申し訳ないがさつきさんを待つことはできない。まあ、彼女は彼女で僕がいないとわかったら家に帰るだろう。いや、案外もう家に帰っているかもしれない。とにかく、僕は急ぎ足で春日井さんの後を追う。

今日は文化祭委員の出し物発表があるんだった。

そこに込められているのは敬意じゃなく僕への刑罰だ！ 3

文化祭において定番の出し物と言ったら喫茶店とお化け屋敷が挙げられるだろう。しかし、そうは言っても近年では痴漢問題とかがあるので後者は禁止されている学校も多い。

珍しいことにこの学校では禁止になっていない。しかし、内装や当日の仕事が多くて大変なので人気は少なく、今年は1年2年合わせて僕らのクラスだけだ。

「しかし、やっぱり凄いなあ。まさか8クラスも集中するなんて」というわけで、今談義が進行中である。喫茶店は事前の内装はそれほど凝らなくてもいいし、当日は昼時に集中的に人員を割けば後は分担でどうにかなる。

ただし、問題はひとつ。調理室はひとつしかない。さらに、校庭に各部活もまた屋台を出すので、そんなにたくさん喫茶店があってもしょうがない。というわけで毎年喫茶店は2クラスまでと決められている。

8引く2は6だよな。というわけで、僕らの目の前では今この世でもっとも残酷は引き算が行われているわけだ。毎年毎年権利は2年の方に行ってしまうようで、一年ができる事はそうそうないらしい。今年もきつとそうだろう。と、考えていると、僕の目の前にA4紙が差し出された。僕は首をかしげて隣を見る。春日井さんは僕を見ない。まあ、いいや、と僕は紙を見た。何か大切な書類だろうか。

「お化け屋敷にしようとしてよかったわね。割と僅差だったのよ」
筆話！？隣じゃん！！

・・・と思いつつシャープペンを走らせる小心者の僕。

「じゃあ、僕の一票も無駄じゃなかった訳だ」もちろん丁寧に。走り書きじゃ多分読んでもらえない。

「字が汚かった・・・ていうか汚かったから読んでないわ」

汚かった？紙が！？・・・それとも僕が！？

「僕の葛藤を返せ！」あれのために鉛筆を一本犠牲にしたというのに。生まれて初めて「南無三」って言葉を使ったというのに

「そんなものもう捨てたわよ。もちろんお被いも済ませたわ」

そんなものって紙？それとも僕の葛藤？いずれにせよ、シヨックなことに変わりはない。

ややあつて、ようやく引き算の計算が終わったようだ。外れた6クラス（もちろん1年生は全員この中だ。年功序列）の面々は皆落ち込んでいるようだったが、彼らも彼らでだめもとで、既に第二希望を募つてあるだろうから問題ないだろう。

「あと質問がある人は個別に聞きに来て下さい。これから準備が始まる訳ですが、準備は必ず定刻までに終わらせてください。規約にあるとおり2回破ったら出場停止ですので」

眼鏡が似合う委員長は笑顔で恐ろしいことを言う。しかし聞いたところによると、毎年出場停止になるクラスはないらしい。厳罰があればみんなちゃんと気をつけるのだ。学校の制服だつて、崩したら停学、と決めればみんなちゃんと着るだろう。そんな学校通いたくないけど。

「漆根君だけ出場停止になってくれないかしら」筆舌でもハイレベルの毒舌を吐ける春日井さん。僕だけ出場停止になるってどういう状態だろう。

「・・・以上で会議を終わります。それでは、頑張つて下さい」そう言つて会議は散会になった。ざわつきが次第に教室から出て行く。

「・・・僕だけ出場停止つてのは無理じゃない？」僕は喉まで出掛かっていた言葉をようやく解放する。大体それは文化祭規約じゃなくてただの停学だろう。さすがの僕でも停学になるようなことはない。・・・理事長には告白してないし。

「いいえ、ありうるわ」春日井さんはようやく口を開いた。どうやら会議中には喋つてはいけないという優等生ルールが彼女の中にはあるようだ。

「例えば・・・委員長を・・・」

春日井さんは質問に来た生徒に答えている委員長を横目で見る。

「・・・怒らせたり?」

「いやいやいやいや。流石の僕でもだれかれ構わず怒らせることはできないよ」春日井さんも失礼なことを言う。この人畜無害・・・じゃないな。人間には害があるから・・・「畜無害」な僕を捕まえて。

「それはごめんなさいね。それじゃあそうね、今度から漆根君のことを敬意を込めて『畜』と呼ぶわ」

「そこに込められているのは敬意じゃなく僕への刑罰だ!」

「・・・似たようなものじゃない」

「似てない!クララと占い師クララくらい似てない」結構前は割とテレビに出てただけだけど覚えている人いるかなあ。僕結構信じてただけだ。ていうか今でも信じてる。

「そうね、漆根君は未来どこるか今すら見えてないし・・・立てないものね」

「立てるよ!」

この通りだよ!!

「あれ?それって地に這いつくばってるのかと思った」

「僕はエクソシストか!」それに今の僕の状態が這いつくばっているならば春日井さんも這いつくばっている事になるのだろう。それとも僕と春日井さんは生命体からして違うというのだろうか。

「ひどいことを言うわね。万死に値するわ」

「器が小さいっ!」ねえ、だとしたら僕は!?僕めちやくちや罵倒されてるよ?僕の周りで死屍累々になるよ!?

「・・・まあ、そんなことは置いといて。本当に覚えがないの?あの委員長さん現在進行形で漆根君のこと睨んでるわよ」そう言われた僕は向こうに気付かれない程度に眼球のみを移動させる。

「・・・っ!」目が合っちゃった!バツチり睨まれてた!眼力だけで僕を殺しそうだ。

「まったく周囲の人はいい迷惑ね」

「・・・ごめんなさい」何も思い出せないけどとりあえず春日井さんに謝っておく。

「え？いい迷惑ってのは褒め言葉よ？ちゃんと『いい』って言うてるじゃない」

「学力の足りない僕でもそれが皮肉だったのはわかるよっ！」

「分かればいいのよ」

「分かればいいのっ！？」もう春日井さんが会話をどこに持っていくこうとしているのかわからない。さつきから蛇行しまくっている気がする。でも蛇の道は蛇というから僕らみたいのがこの後を通るかもしれない。と思っていると、道が急に途切れた。

もちろん突然何かが起こって会話できる状態じゃなくなったと言う事ではない。委員長が僕らのほうへまっすぐ歩いてきたのだ。目つきは相変わらずであった。僕は「やられる！」と思つて身構えた。

「1年4組ね。これを倉庫までお願いできるかしら。いいでしょ、当番制なの。今日は君たちの番」一瞬で笑顔が出来上がっている。さすがだ。

「・・・・・・・・」

僕だけでなく春日井さんも絶句していた。この人、もしかして先週僕らに押し付けたの忘れてる？天然なのか？狙っているのか？それともそのローテーションには僕たちしか組まれていないのか？それなら確かに僕らの番だけど。なんせ僕ら以外には番がないわけだし。「あ、でも・・・ええと、春日井さんよね、お化け屋敷をやるにあたって2、3注意事項があるから残ってもらえる？」

ん？おかしくないか、それ。僕じゃなくて春日井さんに注意事項を伝えるのはまあ正しい判断だとして、その上僕らに荷物を運ばせるなんて。いや、違う違うこの場合は僕ら、じゃなくて僕。。。ってあれ？これって結局僕一人に荷物を持って話だよな？ああ、やっぱり春日井さん素直に頷いていらっしやる。多分腹の中では爆笑してんだらうなあ。

「少し多いけど・・・友達でも呼べばすぐよね」

ひどっ、と僕は心の中だけで嘆いた。友達？何それおいしいの？というのが僕のキャッチコピーなのに・・・。

だいたいこの時間帯、みんな家に帰ってしまっているだろう。この委員長、天然なのか？策士なのか？くそっ、笑顔と眼鏡でうまくカモフラージュしていらっしやる。

「ああ、下校時間までにできなかつたらもちろん罰則あるから」
策士だ絶対！僕は確信した。鍵を受け取り、備品説明に使った道具やらを眺めて2回に分けて運ぶことにした。何とかなりそうだ。時間も・・・ギリギリかな。委員長も春日井さんも絶対手伝ってくれなさそうだし。僕はそう思いながらとりあえず持てるだけの荷物を持つ。アクリル製の大きな箱に入っているので、持ちやすいのは助かった。ただ、ものすごく重い。アクリルが掌に食い込むし、肩が抜けそうだった。

委員長と春日井さんの話し声を背に受けつつ、僕は教室を後にする。そこでようやく思い出した。そうか、僕はやっぱり恨まれるようなことをしたらしい。忘れるなんかどうかしている。だから僕は『畜』なんだ。

あの眼鏡が素敵な委員長は僕の中学のひとつ上の先輩で、中学生の時に告白した人だった。

そこに込められているのは敬意じゃなく僕への刑罰だ！ 4

というわけで、僕は大した悪態もつけずに階段を2階分下りて校舎をぐるぐる回り、途中で4回休みながら倉庫にたどり着いた。鍵を開け、中に入ると、西日が差し込んでいた。急がないと危ないかもしれない。そういえば先週僕と春日井さんがここに8時近くまで閉じ込められていたんだけどそれはいいのだろうか。まあ、ばれなきやいいのか。

積んだ机やら椅子やらはあの後あらかた解体したが、若干散らかっている。

「・・・うわあ、赤い」ちゃんと僕の額の血付き椅子もご健存でいらっしやった。床にも少し点々としている。僕は額の絆創膏をさすつた。目立つのでそろそろ取りたいのだが、まだ傷がくつきりと残っているの、迷うところだ。ううむ、今更僕はなに人の目を気にしているんだろう。

僕はすぐさま踵を返して教室に戻る。こんな状況になったのは誰のせいかと言えばやっぱり僕のせいなのだろう。

「あれ？」教室に戻る前に、僕ははたと立ち止まった。薄暗い学校の廊下を向こう側から2人の人物が歩いてくる。ああ、そうか。春日井さんと委員長か。注意事項が終わってこれから帰るところなのか。まあ、僕はこれからもう一回重い荷物を運ぶんですけどね。・・・

・そう思っていた僕は、すぐに自分の間違いを思い知ることになる。「リアカー・・・じゃなかった、漆根君。重いだけけど」感激だった。春日井さんと委員長は2人でアクリル製の箱を持ってこちらに歩いてきているのだった。この際僕の名前をどう間違えようが気にしない。僕は堰が切れて暴走しそうになる涙腺を何とか抑えた。

「遅いよー。じゃあ私はこれで。鍵ちゃんと返してね」二人で箱を僕に押し付けるようにして、自由になった委員長は手を振った。

「あ、委員長」僕が声をかける。委員長は立ち止まったが、立ち止

まったくで、僕の方を見なかった。

「えっと、2年前でしたよね・・・あの、なんていうか、その・・・すいませんでした」

謝るのも変な話だが、それでも僕は謝るべきなのだろう。純粹に一人の人を好きになつたわけではなく、ある人の代替を求めていただけなのだから。それは人の人格を一切無視したと言ふ事で、ならば僕は『畜』じゃなくて『鬼畜』なのかもしれない。

「何の話かな？」委員長は笑顔で振り返った。あれ？覚えてないのか？いや、違う違う。額にちゃんと怒りマークが見える。あれは怒りながらも必死で笑顔を取り繕っている顔だ。だって眼鏡の向こうの目が笑ってないもの。委員長もそれに気づいたのだろう、僕のほうに身体を向けた。

「んん、別に怒ってないよ」やっぱり目が笑ってない。この人は案外自分に嘘がつけない人なのかもしれない。

「怒ってない、怒ってない。完全無欠、富士山の噴火なみに怒ってないよ」

・・・かなり怒っていらつしやる。はいは一回だが、怒ってないも一回なのだ。日本語って難しい。

「猪木ぐらい怒ってないよ。亀田ぐらい怒ってない」

「格闘技ファン!?」・・・しかもどれも激怒しているの代名詞だ。亀田は最近更正したみたいだけど。ここで長州を出してこないあたり相当キレている事が分かる。僕の驚愕の表情を見て、委員長は「あはは」と快活に笑った。

「うん、怒ってたけどね」

「やっぱりっ!?!」なんだ、この人。

6回も「怒ってない」って言うておいて、急に掌を返した。まあ、怒るのも当たり前か。

「君と同じ空気を吸うだけで頭の血管切れそうだったよ」
「.....」

そこまですか。なんだろう、僕は毛穴という毛穴から有害物質で

も出ているのだろうか。

「被害者の会で追い込みかけようとしてるくらい」

「ねえ、ほんとにあんの!?」素早く春日井さんを見ると目をそらされた。

「今は構成人数530人くらいかな」

「多っ!」

流石の僕もそこまでは……。

「リーダーは猿なだけどね」

「濡れ衣だっ!」誰だ、そいつ。どう考えても便乗じゃないか。

猿……いなかった……? よな?

「……でも謝ったから許したげる。……投げっぱなしジャーマン4回で」

「死ぬる!それは死ぬる!」絶対許してねえ!!

「あはは、冗談冗談。じゃあね、後はよろしく」そう言って委員長は踵を返し、行ってしまった。

結局ジャーマンが冗談なのか、許すのが冗談なのかは分からずじま이었다。

「早く行くわよ、私のガスマスクもそろそろ限界がきそうだわ」

「やっぱり僕から出てるのか!?……って、春日井さん手伝ってくれるの?」先に歩き出した春日井さんに並ぶ。ずっと持っていたが、もともと後半は軽くしておいたので、何とかなりそうだ。それでもきついけど。

「まったく、切腹ものの犯罪者ね。漆根君が破ったら私も迷惑なのよ」

そりゃあそうなのだろうし、僕が武士だったらあまりの恥に切腹しててもおかしくないとは思うけど。でもあまり関係ないんじゃないかな。稼げる時間はせいぜい僕一人だったら脇に箱を置いて、鍵を開けるくらい若干のタイムラグくらいだし。

「……馬鹿ね。私が言ったのは時間を破ることじゃなくて法律を破ることの方よ。……どうせまた、女の子を連れ込むつもりなので

しよう？」

「そこだけは、断じて僕の、せいじゃない」あ、五、七、五だ。

「ところで漆根君、ヘンリー君って誰？」

「ぐわっ！！」やめてくれ、そんな昔のめちやくちや滑ったギャグを持ち出さないでくれ！あれはほんの一瞬の気の迷いだっただ。

「いえいえ、爆笑だったわ。滑っておたおたしている漆根君の姿を見るのわね」

「くっ」・・・勝てない、刃向かうのはやめておこう。どう頑張っても僕の傷が広がるだけだ。

でも、爆笑するならそのガスマスク取れよっ！外見は無表情のまま爆笑するな！

そこに込められているのは敬意じゃなく僕への刑罰だ！ 5

いつの間にか倉庫についていた。誰かが入って閉じ込められることがないようにかけておいた鍵を春日井さんが開ける。

「はい、漆根君、3秒以内ね」

「無理っ！」といつつも走る僕。忠犬のようだった。中世の騎士か僕はっ！

昨日もした突っ込みを心の中だけでして、さっき置いたアクリル製の箱の横において、振り返ったときには3秒経ってしまったらしい。ドアが勢いよくスライドして閉められた。そこで僕は一計を凝らす。「・・・冗談よ、そんなに泣かなくてもいいのよ」

1分ほどたつて、春日井さんが再びドアを開けたとき、そこに僕の姿はなかった。もちろん煙になつて消えたのではなく、隠れたのだ。「まったく、いくら存在感が薄いからつて存在まで消えなくてもよかったのに。ご家族には私から話しておくわ。『お宅の息子さんは蒸発しました(笑)』ってね」

「笑えねえっ！」あ、つい突っ込んだじゃった・・・。

まあいつか、さっさと鍵を閉めて帰ろう・・・と思つて春日井さんを見た僕は息を呑んだ。これは、まずい。先週まで僕を見続けていた目と同じ目で僕を見ている。三白眼が僕を見てるうう。ガスマスクの上に更に仮面をかぶっている感じだ。完全に表情はなし！目だけが人を殺しそうな怒りをたたえている。

「あ・・・、ごめんなさい」謝つてしまう僕。しかし春日井さんは何の反応もせず外に出た。扉を閉める。

「わあっ、待つて、待つてくれ！」僕はギリギリ扉の間に手を入れる。挟まれなかったが、春日井さんはなお力を込め続けている。今どちらかが力を緩めれば扉が壊れてしまうだろう。しかし、この扉が閉じられれば二度と開かないという確信が僕にはあった。

ていうかこの人他人のいたずらに対するキャパシティ低すぎない！

？自分はメロンソーダにタバスコ入れたくせに！！

ようやく春日井さんが力を緩めて僕は外に出ることができた。扉が壊れるのも何とか阻止できた。心臓がマラソン後のように痙攣している。これは多分春日井さんと争ったせいではない。命の危険を感じたせいだ。

「まったく、漆根君ったら私が妹さんを人質にとっているのを忘れたのかしら」

「つむぎを！？それは許さないよ！」僕は強い口調でそういう。春日井さんはそのことに面を食らったようだ。

「・・・漆根君って、シスコンだったのね」腫れ物でも見る目を僕に向けた。

「いやいやいやいや、違うよ違う・・・・・・多分」だんだん声が小さくなっていく。妹のデートを尾行するあたり否定できない気がする。でもそんな称号はごめんだ。

「無駄に時間を使ってしまったわね。漆根君のせいよ。早く鍵を返しに行きましょう」

それから急いで鍵を返して、僕は学校の外に出た。

「それじゃあ漆根君、ごきげんよう」

「あ、うん」・・・もうちょっと気の効いた挨拶のしかたを考えようと思った。春日井さんは振り返ることなく家に向かう。別に毎日全力疾走で帰るわけじゃないらしい。僕も反対方向に向かつて歩き出す。とりあえず家を通り過ぎて駅前のシュークリームを買わなければならぬ。

そこに込められているのは敬意じゃなく僕への刑罰だ！ 6

「好きだ、耕太！」家に帰ると、さつきさんは僕の部屋にいた。僕がシュークリームの箱を見せると抱きついてきた。昇天しそうだった。僕はついついにやけてしまう。ああ、幸せだ。今なら隕石でも受け止められそうだ。

「無論シュークリームの次にだが」

「負けてもいい！」無論とか言われちゃったが、嬉しさが中和してしまった。

「あれ？だが3つしかないな。あとの2つはどうしたっ！」と、さつきさんは本気でキレた。突然キレた。夕飯前なのにシュークリームを頬張りながらキレた。超かわいい。

「一度にそんなに食べるよりも幸せは分割したほうがいいじゃないですか」本当は僕とつむぎとさつきさんと1つずつのつもりだったんだけど、どうやら奪還は不可能なようだ。だってわが子のように大事に抱えていらっしやるんだもの。取り上げたら多分僕が食い殺されてしまうだろう。さつきさんならやりかねない。

「そうかそうか。これは失礼した。私は耕太を見くびっていたようだ。てつきり金が足りなかったのかと思ったのだ」

「……うん、まあ、そうなんだけどね。でもこれは言わないでおこう。見くびられるのは面白くない。」

「だが耕太。あんまり返済を滞らせておくと利子がつくぞ」

返済！？利子！？僕はさつきさんに借シュークリームでもしたのかわかる計算。まあ、それまでには払えるだろう。

「いや、1日3個だ」

「闇金融っ！？」なんてことだ。僕は15歳にして借金……じゃなかった借シュークリーム持ちになってしまった。最終的に支払え

なくなつてコンクリート詰めになされて東京湾に捨てられるのだろうか。それともマグロ漁船で働かされるのだろうか。シュークリームのせいで！

「そもそも1日3個じゃ利子でもなんでもないじゃないですか！ただの『今日のペナルティ』ですよ！」5個たまつた昨日からスタートだとして、今日3個増えたから僕はペナルティ分しか払っていないことになる。ああ、こうして債務者は苦しんでいくんだな。

「ばか者！通常の金融会社は社会的信用がないと貸してくれないから、高額貸してくれる闇金融がなければやっていけないこともあるんだぞ！」

「だからなにっ！？そつだとしても僕が引つかつたのは完璧に詐欺だ！」いけないいけない、ついタメ口が。自肅自肅。でも本当に「だから何？」つて言う感じの論理展開だ。

僕はテレビのニュースくらいでしか知らないけど法外な利子の換わりに普通じゃありえない額を貸してくれるのが闇金融なんだつて。多重ローンを抱えた債務者は闇金融に手を出すしかないつて言う泥沼化が結構多いらしいよ。破産宣言すれば踏み倒せるらしいけどそうすると二度と金融で金は借りられないし、就職も難しいんだつてさ。日本つて怖いよね。

・・・などと、誰にもなく説明してみる。

「仕方ないではないか。食べたい物は食べたいのだ！」

「ジャインですか？おうの太、これくれよ状態ですか？」だとしたら随分美しいガキ大将もいたものだ。そりゃあのび太くんだつていろいろ献上しちゃうよ。

「身体はしずか、心はジャイア！」

「風呂覗くのも命がけです・・・」

「そういえば耕太、君はのび太君を変態にした感じだな。あれだろっ？しずかちゃんのお風呂覗いちゃうのもわざとやっているんだろっ？」

「僕にそんな度胸はない！」言い切る僕。昔つむぎの風呂を覗いち

やったこともあつたけどあれはただの失敗だ。流石の僕でも妹は射程距離外だ。

まあ、のび太君を見て「ああ、僕って人から見たらこんな感じなんだろうなあ」とか思うことも多々あるさ。シンパシー感じまくってるさ。でも僕の傍にはドラえもんがないのさ。ジャ アンやスネ夫だらけさ。

「どうだ耕太、机の中にタイムマシンがあるかもしれないから入ってみないか？」

「かわいそうな少年だ！」でもしつかりと自分の姿で想像できるあたりが悲しくなる。僕よ、目をそらしても現実からは逃れられないんだぞ。

「なんだ、やらないのか。写メ取って被害者の会に売りつけようと思っていたのに」

「ねえ、だから本当にあるの？」いい加減はつきりさせて欲しい。最近本当に町で人とすれ違うのが怖くなってきている。

「冗談だ。私はメカに弱いからな。・・・メールって羊の一種だろう？」

「残念すぎる！」しかも弱さも20世紀中盤レベルだ。

ていっかなんでメールが分からないのに写メは分かるんだろうか・・・。

「写メは、まああれだ。アメリカ人の写真家、メイプルソープの略だろう？」

「ねえよ、そんなピンポイントな略語！」あるとしてもつくった本人も絶対忘れてる。

ボタン！

突然だった。大きな音がしたかと思うと、つむぎが部屋の外に立っていた。一昨日の教訓を生かしたノックはつむぎの辞書にはないようだ。今度ドッキリでも仕掛けて本気で習慣付けたほうがいいのかもしれない。兄として結構切実だ。だが、注意をしようとした僕に、つむぎはたった今降臨した悪魔のように、まるで口から煙でも吐く

かのように言った。

「ご飯だつて何度も呼んでるでしょ！一人芝居やってないで早く降りてきなさいよ！」

どうやら僕一人しか喋ってない状況をつむぎは一人芝居と解釈したらしい。確かに都合のいい解釈だが、どちらにせよ意味もなく1人で芝居しているような変な兄と思われる事はある事はないわけだ。ていうかお玉とフライパンもって呼びに来るとか、お母さんか。というセリフは僕が悪いので口をつむぐ・・・じゃなくてつぐむ。ややかしい！

「元気そうじゃないか」さつきさんはシュークリームの余韻に浸りながら言った。

「まあ、いつもどおりではありませんね」いつもどおりという事はいいことだ。安心した。

あんまり遅いとまたつむぎに怒られそうだったので（実の妹にびびる僕）、さつきさんをおいて1階へ降りた。さつきさんはほっぺたにクリームをつけつつ、シュークリームの箱の匂いをかぎながらもだ余韻を楽しんでいた。

やめてくれ、さつきさんはそんな卑しさを装備しないでくれ。

夕飯は麻婆豆腐だった。もちろん市販のソースを使ったのではなく、調味料からつむぎがつくったものだ。頭が下がる。僕は自分の分をよそって正面に座る。漆根家法のせいで食事中はテレビが見れないというわけで僕は気まずい沈黙を打破するために切り出した。

「なあ、写メって何の略だと思う？」

「え？写メール・・・写真付きメールじゃないの？」ちなみに言っておくとつむぎは携帯を持っていない。ただ、最近の携帯ブームがあるので、両親と交渉中らしい。

まあ、写メくらいは知っているだろう。

「うん、まあそうなんだけど。仮にそれ以外につけるなら」

つむぎは麻婆豆腐をすくった手を止めて熟考した。あれ？おかしいな、と僕は首を捻る。いつもなら「どうでもいいことで話しかけな

いってくれる？」とかデレ0%、ツン100%の応対をするのに。さつきさんの前ではいつもどおりと言ったけれど、もしかしたら機嫌がいいのかもしれない。

「写実的な・・・メガネザル？」

「ねえよ、そんな略語！」はっ、しまった。さつきさつきさんにしたつつこみと同じものを妹にしてみました。

「じゃあ何よ」

つむぎもそんな略語はないと思ったのだろう。唇を尖らせて言った。僕は衝撃を受けた。なんせ振っというて自分では何も考えてなかったのだ。

「・・・写真家のメイプルソープかな」

「そっちのほうがないわよ！」

「・・・おお」僕は感動することしかできなかつた。生まれて初めてつむぎにつっこまれたのだ。このボケ殺しつむぎにだよ？明日は雪が降るんじゃないだろうか。

「写メは写メよ。写メ以外にはない。・・・ああ、声上げたら疲れちゃった。だからあたしの分の食器も片付けよろしく」

そう言い捨てて2階に上がって行った。したたかな妹だった。僕はしぶしぶ了承する。ここで僕がつむぎの食器だけ洗わなければ漆根家法46条違反でつむぎに夫役が課せられることになるのだが、間違いないその後僕がつむぎに殺されるので僕は素直に従った。その後、さつきさんと呼んで、さつきさんは麻婆豆腐を頼張った。さつきシュークリームを3個食べたのにそんなに食べて太らないのか、と尋ねたら殴られた。

「君にはデリカシーがないのか！」と怒鳴られたが、そんなものを僕に求めるほうが無体だと思う、と返したら哀れんだ目で見られた。

翌日、僕はもう何度目か分からない勝利のガッツポーズをさつきさんにして、さつきさんの猛攻をかわした。さつきさんは今日も「どうして耕太は目覚ましの前に起きられるんだ。鳥なのか、君は？」と首をかしげていたが、メールすら分からない彼女にこのからくりが分かる日は来ないだろう。もちろん僕は内心罪悪感でいっぱいなのだが、そうでもしなければ僕の部屋が戦場になるのだから仕方無い。きつとコ ン君もこんな気持ちで蘭姉ちゃんに嘘をつき続けているのだろう。

「いつてきます」ここ最近はさつきさんと話がなら学校に行くので僕はつむぎより先に家を出ている。鍵をかけ忘れないか心配だが、しっかり者のつむぎに何をか言わんやというものだ。僕は肩にバックを掛けて、両手に大きな袋を持って家を出た。ごみ収集場所が僕の学校の通学路にあるので、火曜日のごみ出しは僕の役目なのだ。

「ああ、それはそのままごみとして出されるということか。君も腕を挙げたな。まさに命がけのギャグ」

さつきさんは朝とても機嫌が悪い。これは血圧が低いせいではないだろう。ああ、何でだろう、涙が……。

「あっ、しまった。これは申し訳ない、君を処分したら環境汚染になっちゃいますよ。だから精一杯生きる」

「……中途半端なフオロ ーならしてくれなくて結構です」僕はむすつとして収集場所に二つともおいた。放っておけばどんどんたまっていて母さんを発狂させる物質がこうして収集場所に捨てるだけで持って言うてくれるなんて本当に凄いことだと思う。文明最高！「そうかそうか、だからと言って収集車に乗りたいとか言うなよ。いくら君でも収集車の中に入ったら潰されてしまうだろう」

「……僕一度でも不死身なこと言いましたっけ？」

そう振り返った僕にさつきさんは何も答えなかった。代わりにそこ

には知らないおばさんが立っていて、怒った顔で僕を見ていた。

「・・・いや、ちがうよ。僕このおばさんには告白とかしてないよ。」

「そんな置き方したら崩れてきちゃうでしょう。やりなおしなさい」

「・・・はい」僕は素直に返事をした。制服を正すように、しっかりとゴミ袋を正した。

「・・・あれ？あなたこの間一人で川で遊んでなかった？」

正し終えて振り返ると、おばさんを僕の顔を覗き込むようにしていた。年のころは50代前半と言ったところか。実に平均的な体格で、大阪のおばちゃんのようにではない地味な格好をしている。

「やっぱりそうだ。えっと・・・3週間前かしらね」

「ああ」僕はようやく思い出した。このおばさんは僕とさつきさんが始めてあったとき不運にも橋を通りかかって僕に奇異の目を向け、さつきさんに足をかけられたが脅威のバランス感覚で持ち直したおばさんだった。

「風邪とか引かなかったか心配だったのよ。その制服あそこの高校でしょ？おばちゃんあそこのOGでね、花山っていうんだけどね」おばさんは他のこの年齢のおばさんに違わず、早口でまくし立てた。僕は「はあ」としかいう事が出来ない。昨日も春日井さん相手に思ったが、もう少し気の聞いた言い回しを考えようと思う。ちなみに風邪は引いたが川とは無関係で、もっとスケールの大きいものが原因だったので引いてないといっておく。心配させてもなんだし。

「最近新しい私立学校がどんどんできてるでしょう？でも知ってるかもしれないけどあの学校は長くてねえ。おばちゃんが学生だった頃はまだ木造だったのよ」

正直言って退屈な話だった。だって絶対に突っ込めないんだから。母さんの実家のおばあちゃんもこのおばさん（そろそろ花山さんと呼ぼう）と同じくらいよく喋るが、相槌を打つくらいしかできない自分が本当にもどかしい。年をとるとみんなこうなってしまうのだろうか。

ああ、もう、さっさとボケてくれないかなあ。いや、痴呆とかじゃ

なくてね。

「でもねえ、おばちゃん卒業アルバムなくしちゃってねえ。あ、おばちゃん20回生で卒業した時は片岡だったんだけどね。どこかの資料室か図書室かに当時の卒業アルバム残ってるはずだからこっそり持ってきてくれないかしら。おばちゃんの家あそこなんだけど」などと、花山さんは法外な要求を僕に突きつけた。この状況で僕にどうしろというのだ。持ち出しはめちやくちゃ校則違反だったが、そろそろ待たされているさつきさんの魔の手が（僕に）降りかかりそうだったので、了承して花山さんと別れた。やれやれ、面倒な約束をしてしまった。断れないことは僕の弱さだ

「・・・M K Kだな。朝から元気のいいことだ」さつきさんは笑いを噛み殺しながらいった。M K Kってなんだろう。N T Tみたいな響きだな。

「マダム・キラー・耕太、だ」

「マダムを相手にしたことはない！」

「・・・はずだ。」

「む、そうか・・・。しかしそれならば・・・そうだな・・・」さつきさんは若干考え込む。僕は嫌な予感しかないので、突っ込みの用意をした。

「H K K・・・ヒューマン・キラー・耕太だ」

「ただの人殺しになっちゃった〜！」本格的にダメだ。しかし人殺しといわれて寛容に接する僕は大人なのだろうか。それともただ壊れているだけなのだろうか。

「・・・まあ、後者なんだろうな。」

「ふん、君なんか、耕太だ」さつきさんは唇を尖らせていった。

「???」・・・まあ、僕は耕太ですけど・・・それがなにか？

「ふん、君なんか、耕太だ。・・・H K Kだな。この言葉は悪口としてスタンディングリードとともに私が広めよう」

「全力を持って阻止します！」そして何でそんなに広めたいんだ、スタンディングリードを。

「そういえば、昨日の朝私たちを追いやったのは何者なのだ？私に匹敵するくらいのスキルを有しているようだったが」

本当に突然の「そういえば」だった。しかしそれはいつものことなので別に気にしない。

「ああ、春日井さんですね」別に僕らを追いやった訳ではないのだけれど。とうかさつきさんに匹敵するというスキルとは一体何のスキルだろうか。

「耕太にいかにも精神的苦痛を与えるかというスキルだが、それがどうした。どうもしないだろう」

「……………」

どうもするよ！どうももしかしないよ！そんな unnecessary スキルいつ使うんだよ。

「何を言っている！私がストレスをたまったらどうするのだ！」

「だから僕をいじめていいのっ！？」ああ、なんとということだ。ついにこの日本でいじめが正当化されてしまった。僕は一体どこで生きればいい。

「ああ、すまない。最近耕太のリアクションがよくなっているから ついつい言いすぎてしまうのだ。君のせいだ」

「僕のせい！？」身から出たさびなのか？老化現象なのか？もしかして春日井さんの毒舌が最近乗って来たのも僕のせいなのか？ああ、僕は何という罪深いことを……………
いや、待て待て、絶対僕のせいじゃないぞ。

「春日井さんはなんと言いますか……………高校初の僕の被害者で……………」

「なんと！指名？1か」

「いえいえ、指名？1は常にさつきさんです」僕は胸を張って答える。

「やめてくれ。吐き気が……………」

「あっ、ゴミ収集車来た。すいませーん、乗せて下さーい」僕は笑顔で大きく手を振った。

業者の方は何を思ったか手を振り返してくれた。おおっ、これは乗ってもいいって合図かな。

「ま、待て、耕太。冗談だ。私は君のことが大好きだ」さつきさんは僕を羽交い絞めにする。その間に収集車は次のゴミ捨て場に行ってしまった。

「どれくらいですか？」と、バカップルのように尋ねてみる。

「そうだな・・・シュークリームの・・・皮ならくれてやる」

「大躍進だ！」

・・・多分。

シュークリームの皮つてのは銀に換算するとどれくらいの値打ちになるのだろうか。僕の身体を構成できるくらいだろうか。

「被害者か。それにしても仲が良さそうではないか」

・・・そうかな？僕としては一方的にいじめられてるだけに過ぎない。・・・悪い気はしないけど。・・・罵倒されてうれしいとかそういう事じゃなく、今までみたいに無視されるよりはいいというだけだ。

「春日井さんからすれば僕は核廃棄物ですからね。ガスマスクとかしてますし。嫌悪感を溜め込むのをやめてぶつけるほうことにしただけなんじゃないですか？どっちにしても嫌われている事に代わりはありません」

嫌われるのも憎まれるのも辛いことだ。だけど、それは僕への罰なのだ。ならば受け入れるほかない。

連れ立って歩いていたらさつきさんが足を止めた。僕が振り返ると、さつきさんは呆けた顔をしていた。

「どうかしたんですか？」忘れ物だろうか。でもさつきさんはいつも手ぶらだし。

「君は・・・いや、いいんだ。君がそう思っているのなら私は何も言わない」

「・・・？」さつきさんは立ち止まった僕の何を何も言わずに横切って歩いていく。僕は早足でさつきさんに追いつく。

「・・・まったく。君は本当に私を退屈させない」
その言葉の真意は周りに人がたくさんいるせいで尋ねることはでき
なかった。

今日からクラス展示の準備が始まる。とはいえ本格的な準備はまだ先で、まずは部門を分けて人員割り振りをして、部門の代表者と春日井さん（とおまけで僕）で計画を立てていく。このなんとも合理的な体制は発案施行ともに春日井さんだ。僕は何もしていないというか、何も知らせてもらっていない。へえ、そういう仕組みでやるんだね、とさつき知った。

さつきである放課後のホームルームで会計、内装、衣装、大道具の4部門の代表者を募った。なんと既に声をかけておくという異例の手際の良さを誇っていたので、一瞬だった。それどころか零瞬だ。本当に僕が瞬きもできないほどの素早さだった。彼女は将来政治家になるに違いない。総理大臣になっても間違いなく任期満了するだろう。もしかしたら二期連続とかもいけるかもしれない。

・・・そんな甘いものじゃないとは知っているけど、実際それくらいの手際の良さだった。担任の先生でさえ言葉を失っていたのだ。ただ、その選挙を省く手順はどこか相撲部屋の理事決定法に似ているのかもしれない、と心の中で皮肉った。

というわけで他のクラスでまだワイワイやっているころ、僕のクラス（という括りは不本意な人が多いかもしれないが）は既に解散していて、代表者だけでさつき第一回の会議が催されていた。

「・・・なぜだ。なぜなんだ」

そして僕はさつきから何度も呟いている言葉を再び呟いた。

「うるさいわよ漆根君。進行の邪魔だわ。荷物は荷物らしく椅子に引っかかってなさい」

僕の期待に反して春日井さんはいつもどおりの毒舌だった。僕以外の人は若干驚いた顔をしていた。そう、彼女は誰に対しても毒舌というわけではないのだ。普段はちゃんと優等生だ。それでもせめて人前では毒舌を使わないくらいの方美人性を有していて欲しかった

た。確かに素直なのはいいことなんだけど。

「そつだぞ漆根。俺たちは忙しいんだよ。気利かせて人数分のジュース買ってくるとかしろよ」

「誰がするかっ！」

「じゃなくて、

「何で及川がいるんだよ！」
である。

この制服着たヤクザこと及川と文化祭の部門責任者という言葉には一切つながりが見出せない。それなのにこの男がここにいるのはただの野次馬ではないのだ。

「おいおい何言ってるんだよ。学校創立以来の問題児のお前が文化祭委員やってるほうがおかしいだろ」

「創立以来っ！？」今朝花山さんも言ってたけどこの学校伝統校だぞ？花山さんでさえ20回生だぞ？

「そして僕を文化祭委員に追いやったのはお前だ！」しかもほんの気まぐれで！

「漆根君・・・暇なら掃除でもしてれば？」

「ごめんなさい。静かにしてます」なんだろう。春日井さんの言葉には逆らえない。彼女は生まれつきの支配者なのだろうか。それとも僕が生まれつきの被支配者なのだろうか。

とにかく僕はおとなしく黙って椅子に引っかかっていることにする。

ちなみに及川以外の3人の責任者は全員女子だ。もちろん僕と目をあわせたりはしない。僕と普通(?)に会話している春日井さんにすさまじい驚愕の表情を呈していらっしやっただ。しかも3人のうち1人は僕の魔の手に引っかかってしまった哀れな方なので、僕にのしかかってくる重苦しい空気がとにかく痛かった。それもあって自然と僕は無口になる。

話し合いは着々と進んでいるようだった。ようだった、というのは突っ込みどころは皆無だったので、僕は話し合いに身が入らず、理

解する事が出来なかったからだ。つくづく奇特的な脳の構造だ。

「なあ、漆根。机とか暗幕の貸し出し申請ってどうやんだ？」

突然の及川の質問に僕は答えることができなかった。「えっと・・・

」とか口ごもりながら春日井さんに助けての視線を送ると、春日井さんはおなじみの不幸すら吹き飛ばす溜息をついて、及川に説明を始めた。

「ちっ、使えねえな、漆根」という及川の言葉が痛かった。

「なあ、漆根。仕切り板なんだけどよ、もう少し小さいやつないのか？」

うつむく僕。及川は大きく舌打ちをして春日井さんに同じ質問を繰り返した。僕の目線は机の模様に釘付けになった。

「おい漆根・・・じゃ無理だな。ホント使えねえ」

泣くよ！僕泣くよ！もうクラスメイトの前とか関係なく大声あげて泣くよ！

・・・ギリギリこらえた。

まったく、咄嗟に返答できないなんて人間失格ね 3

話し合いはひとまず終わって、解散になった。春日井さんの手際によさのお陰で教室の中はまだ明るい。文化祭委員・・・というか春日井さんにはまだ仕事が残っているので僕も残っていくことになる。

「春日井さん。及川が僕をいじめるよ」あ、僕のびだ。

春日井さんは不機嫌そうに僕を睨んで、やっぱり大きく溜息をついた。

「自業自得ね。・・・いえ、自縄自縛かしら」
多分両方だ。

「まあ、こんなこともあるうかと漆根君用のマニュアルを作ったのよ」

ドラえんいた！こんな身近に！・・・いや、失礼だ。春日井さんは暖かい血の通った人間だぞ。冷静伶俐な人だけだ。

春日井さんはバッグの中からプリントの束を取り出した。それこそバッグの中は4次元ポケットなんじゃないかというほどの量だった。確かにそれならタバスコや蜂蜜やレモン汁を入れるのも簡単だろう。

「ここ5年の文化祭のお化け屋敷の構想と事後アンケートの結果。」

これは先生にもらったもので、これが私の分析結果。そしてここから文化祭規則。最後のほうが今年の構想と役割。分担はこれから各部門でやってもらおう。お化け役や受付なんかも割り振らなくちゃいけないわね」

改めて見ると凄い量だ。僕は自分が恥ずかしくなった。この仕事の半分は本来僕がすべきもので、他のクラスでは当然そうになっているはずだ。なのに僕はこの1カ月間何をしていたんだろうか。パートナーが春日井さんで本当に僕は幸運だった。・・・春日井さんにとつてはものすごく不幸なことなんだろうけど。

「・・・ああ、ありがとう神様」

「神より私に感謝なさい」

その通りだと思った。

思っただけでなく、ちゃんと春日井さんに頭を下げる。

「ありがとう春日井さん」

本当に、心の底から感謝する。それでも全然春日井さんの苦勞は割に合わないだろうけど。

「・・・漆根君が委員になるという人類史上もつとも最悪な出来事が起こったときからこれくらいは覚悟していたわっ」及川をはるかに上回る毒舌っぷりだったが、怒る気にはならなかった。今の彼女の口調にはそれほど毒がこもっていなかったからだ。春日井さんは無表情だけど、口調には心理状態が出る。声が上がっている時は本心ではない、と僕は勝手に解釈している。それが演技だったら僕はもう帽子を脱ぐしかない。

僕はさっそく積まれたプリントの上から目を通していく。春日井さんは僕の向かいに座って、自分の仕事に入る。

「・・・及川君ね」

「ん？」受験勉強以来久々に集中していたので、春日井さんの言葉を聞き逃していた。

春日井さんはペンを走らせながらも喋れるらしい。僕には無理だ。というわけでプリントから目をはずして春日井さんを見た。

「だから及川君。・・・何で及川が、って言ってたでしょ？」

「あ、うん」まったくもって謎だった。僕と違って協調する気も0のやつなんだ。僕は協調したくても拒まれるタイプだけだ。

「特に男子に多いんだけど、高校生ともなるところというみんなで何とかするっていうのが恥ずかしいっていうのかしら、そういうのがあるじゃない？」

「ああ、あるね」僕もそういうのが分からないでもない。実際文化祭委員じゃなかったら何もやっていないだろう。「なんかクラスでみんな頑張ってるけど僕は隅っこで見てるよ。どうかお気になさらず続けて下さい」っていう感じになるはずだ。このクラスにもそういう雰囲気を持った人が結構いる。とくにここは進学校なので「僕

は勉強で忙しいからそういうのパス」みたいなのが近隣の学校よりも多いんじゃないだろうか。

「私はそういうのが嫌いな。温度差があるとお互いやりにくいし、そういう確執って残っていつちやうじゃない？」

春日井さんは顔を上げない。ずっとシャープペンを走らせたまま。だから、その言葉をどういう心境で語っているのかは分からなかった。顔を上げたところで表情なんか分からないんだけど。

「まあ、全部漆根君に当てはまることなんだけど」

「そういう事は言わなくていい！」机をバンと叩く僕。痛い。

なんだよ、真剣な話じゃないのか？いいよ、無理して僕をいじめなくても！

「それで及川君に頼んだのよ。ほら、及川君が言えばみんな従うでしょ？」

ああ、成る程そういう事か。だからさつき及川は部門分けで立候補しなかった男子を強制的に大道具にしたのか。あんなヤクザな男に命令されたら従わざるを得ないだろう。

「まあ、そういうのは漆根君が委員になったときに実証済みだったしね。あれは本当にびっくりしたわ。いえ、感動したのかしら。私もついつい驚愕の表情を呈してしまったもの」

「違う！君は僕が選ばれたことに対して絶望してた！」
忘れるものか！・・・僕のせいだけ。

「はあ、いちいち揚げフットをテイクするわね。こっちはウォータ―にフロ―してあげようとしているのに」

「ルー語！？」まさか春日井さんにこんな持ちネタがあつたなんて！やめてくれ、僕の存在感がまた薄れていく。

・・・あれ？今「水に流す」って言わなかったか？

・・・聞き間違いだよな。そんな都合のいいことはありえない。

「確かに私も及川君があんなあつさり了承してくれるとは思わなかったんだけどね。何でかしら？」

それは僕にも分からない。及川の気まぐれかもしれないし何か理由

があるのかもしれない。

「でもあんまり信用しない方がいいよ。飽きつばいやつなんだ」

「ええ、知ってるわ。本当に良く知ってる」春日井さんはシャープペンをノックしながら呆れた様子で言った。

「あれ？春日井さんって及川とそんなに親しいの？」そういえば僕が告白しなくなったのも「及川君に聞いた」とか言ってたし。

「え？及川君？今って漆根君が飽きつばいってという話なんじゃないの？」

「どんな話の流れっ！？」わかれよ！

仮に僕の話だとしたら何で僕は突然「僕の話は信用しないで下さい」とか言っただんだよ！

「でも漆根君は飽きつばいわっ！」

「怒られた〜！！」確かにそうであることはこの2年間で十分すぎるほど証明したけども。もう十分も十二分も通り越して百分過ぎるほど証明してしまったけども。

「・・・それにしても」ようやく春日井さんはペンを動かす手を止めた。

「やっぱり漆根君と及川君の関係は分からないわ。ガキ大将とパシリとか言う関係には見えないし・・・。ダメじゃない、お金で友情を買っちゃ」

「買ってねえ！」買ったっつたらもつと人間できてるやつにするよ。そういえばそういう事を一昨日さつきさんにも言われたなあ。よっぽど異質に見えるのだろうか。筋トレでもしようかな・・・ダメだ、すぐにやめちやうだろう。

なんたつて飽きつばいから。

「まあ、2年前なんだけど、いろいろあつただよ」

いろいろあつた。でもそれは全部過去の話だ。それに人に話すにはいささかプライベートすぎることもある。

「いろいろ・・・というと、女Aは男Bのことが好きなんだけど、男Bは女Cのことが好きで、友達としてしか見ていない女Aにその

ことを相談したというようなことかしら？」

「どこの三角関係っ!？」

脱線どころの話じゃない。電車が空飛んじやった、くらいのまったく違う話である。

・・・月9か？

「それはそれとしてさ、よく及川に頼もうと思ったね。あいつって近寄りがたい雰囲気出してるじゃん」一般的に言ってるさだろう。少なくともあいつが同学年の女生徒に話しかけられているところを僕は見たことがない。僕が見たことないだけかもしれないけど。

そして僕は同学年の女子に半径3メートル近づかれないけど！

「そうかしら・・・？」春日井さんは首をひねる。「人がどうこう言っただけだよ、私はそうは思わないけど」

「かつこいいい!・・・ああ、そういえば『私は自分で見たものしか信じない』とか言ってたよね。・・・でも神様はいるんだよね？」

「ええ、昨日コンビニでバイトしてたわ」

「神様ただけ就職難なのっ!？」

「昨日はさつきさんが交通整理してたとか言ってたし、もしかしたら本当にいるかもしれない。それにしても世知辛い世の中だ。なるほど、ラーメン屋でボックスラーメン作ってるのも頷ける。」

「私の場合はそうね。漆根君で慣れてしまったのかもしれないわね。でも、及川君のほうはひどくはないでしょう？」

「ひどいってのは僕と比べたのか!？」今まで言われた言葉の中で一番深く僕を傷つける単語だった。人間をこんな文字で形容していいものだろうか。

「まあ、それは僕もそうだと思うけどさ」

それでもあんなヤクザみたいな見た目のやつに「責任者になつてくれない?」なんてなかなか言えることじゃないと思う。それはただ春日井さんが素敵な人だという話なのだろう。

「どっかの誰かさんみたいにつじうじしないで二つ返事で承してくれたわ。ああいうのを男らしいというのでしょね」

「……………」

「……まあ、僕のことなんですけどね！委員にされたときに必死に抵抗したものです。」

「……………無駄だったけど。」

まったく、咄嗟に返答できないなんて人間失格ね 4

春日井さんは再びシャープペンを軽やかに動かし始めた。僕もプリントの山に目を戻す。

「男らしいといえば、授業中に携帯の着信音がなったとき、どう振舞うのが男らしいと思う？」

とうとうまったくどうでもいい雑談になってしまった。そもそも校則で学校内では電源を切るようになっていているんだし、鳴っちゃう時点で男らしくないんじゃないか？

「まったく、咄嗟に返答できないなんて人間失格ね」

「人間の足きりラインが高すぎる！」

もはや人類の半分は人間失格になっちゃうよ。

「・・・そもそも漆根君は人間じゃないからいいんだけど」

「くっ！」ことごとく僕をいじめるなあ。しかも本当に楽しそうに表情は変わってないのに楽しそうだとわかる。

「私が思うに、男らしいといえばそうね。授業中に取り出して・・・」

「人目を気にせず使っちゃうってこと？」

・・・確かにワイルドではあるかもしれないが、それこそ人間としてどうなんだろう、である。それとも僕と春日井さんでは「男らしい」の定義が違っただろうか。

「違うわよ。それじゃあただの傍若無人じゃない。傍らに人無きがごとしよ」

「わざわざ訓読した理由は僕にはさっぱり分からないけど、じゃあどうするの？」

「折るのよ。』うるさい』とかつてね」

「それはただの八つ当たりだっ！」確かにワイルドであるが、そんな人がどうやって現代で生きていけるといっただ。現代において多少の我慢は必要なのだ。

「でもあれって結構スカツとするのよ」

「やったの!？」春日井さんは現代で生きていけない人なのか!？」

「人のだけどね」

「どんな過去が!？」

「あれ?漆根君の携帯ってパカパカ部分が逆に曲がりそうじゃない?」春日井さんは机の上においてある僕の携帯を指差した。

「僕の携帯は体操選手じゃないんだよ!？」あるいは中国雑技団。あんなことできるか!

「?・・・やってみなきゃ分からないじゃない」

「何そんな本当にわからないみたいな顔していい感じに首傾げてんの?!?分かるよ!春日井さんが僕の携帯でストレス解消しようとしてる魂胆さえ分かるよ!!!」

見え見えだよ!!

「いいじゃない。どうせ着信なんて来ないから男らしさをアピールする機会さえないんでしょう?・・・友達いないんだから」

「ひどい!」

「でも本当でしょう?」春日井さんは間髪いれず僕の傷口に塩を塗るばかりではなく塩酸をかけようとする。というか今現在かけている。

「本当だけこの世には言っていないことと悪いことがあるはずだつ!」

「真実というのは口をついて出てくるものよ」

「・・・」

昔から日本にある格言も春日井さんにかかれば一瞬だった。そして僕も一瞬で切り捨てられた。

「だから・・・」春日井さんはシャープペンを置いて僕を見据えた。西日がちょうど差しているからだろうか、その姿は眩しすぎた。

「私のアドレスを知っておきなさい」

「それは・・・」

それは、僕と友達になってくれると言っている、というのは穿ちす

ぎなのだろうか。ただ文化祭委員と言う事で連絡とれるようにというだけなのだろうか。だけど、どっちだって僕の返事は同じだった。「それは、願ってもないことだけど」

なんて、そんな気の効かない言葉しかいえないんだけど。それでも僕は心の底から嬉しかったのだ。ほんのアドレスを交換するという高校生にはありがちな行為さえ、僕は今まで人並みにできなかったんだから。

「そう」

相変わらずその表情は読めない。春日井さんは短く答えて僕の携帯を取った。ロックをかける必要もないものなので開いてそのまま操作できる。恐らく噂の赤外線なるものを使って交換するのだろう。

「・・・あれ？これ本当に漆根君の？」春日井さんは首をかしげる。「そうだけど、何で？」別におかしなことなんかはないはずだ。

「エッチな画像が一つもないじゃない」

「見るなよ！」

操作すると見せかけてなに勝手に捜査してんのっ!？

「見るわよ！」

「なんでっ!？」

「私が嫌悪感を抱けばこの携帯を折る理由ができるでしょう？」

「できないよ！百歩譲ってあつたとしてもそこまでして僕の携帯を折りたい意味がわかんないよ！」

現代の悪のとりこなのか!？ストレスたまりまくりなのか!？

「百歩も譲っていただかなくても結構よ。五十歩で十分こと足りるわ」

「五十歩百歩だ!!」

「でもこの言葉っておかしいわよね。五十歩でも百歩でも逃げたことには変わりないけど五十歩だったら観戦出来るでしょ？戦わずしてショーを見れるなんて・・・」

「ちよっとどうしたの春日井さん、戦争だよっ!？」

黒春日井が現れちゃった!

「ああ、ごめんなさい。戦争ゲームにはまりすぎて現実と仮想がごちゃごちゃになっちゃったわ」

「現代っ子!?」女子高生が戦争ゲームになんてはまるなよっ! それも含めて僕のせいなのか?僕と関わったせいで春日井さんがおかしくなっちゃったのか?僕の皮膚から出る毒素にやられちゃったのか?

話しながらも春日井さんはアドレス交換を終えたらしく、僕の携帯を閉じて渡してくれた。開いてアドレス帳を見ると「春日井若菜」の名前があった。嬉しくなっついでついほころんでしまっつ。

「やったわ。これで名簿業者に売れる」

春日井さんはガッツポーズなんて決めてくれた。

「そんなつもりだったの!?僕の感動を返せ!そして犯罪だ!警察に捕まっつてしまえっ!」

「大丈夫よ・・・泣き落とすから」

「国家権力を舐めるな!」許されるかあ!

「まあ、でも謝っつたら許してもらえんでしょう?」

「いやいや、謝っつてすむなら・・・」

「警察はいらないうて言いたいよね。うん、その通りね。警察は要らないわ。だから私は許してもらえ。違っつ?」

「違っつよ!完全無欠、完膚なきまでに違っつよ!それに警察は大事だよ!ちゃんと僕らの日々の安全を守っつてくれてるよ!」

「まあ、冗談よ」

「だよね、よかつた」てつきり春日井さんは無法者なのかと思つた。

「私も昔はお世話になつたものよ」

「まさか人の携帯を折つたことで・・・とかじゃないよね?」

「いえ、そうじゃないわ。これは言いにくいんだけど・・・少し前に性的嫌がらせを受けてね。その相談に・・・」春日井さんはうつむきながら言つた。

「あ・・・」

僕はなんてデリカシーのない男なのだろう。昔のことなんてわざわざわ

ざ掘り返すほどのことでもないのに。聞いたところで僕の好奇心を満たす以外のことは何も出来ない。出来たところで僕にできる事なら誰にだってできることなのに……。でも、それでも僕は口を開かずにはいらなかった。

「相手は誰？アメリカの大統領以外なら総理大臣でも天皇でも殴ってくる」

僕は湧き上がってくる怒りをこらえながら言った。

春日井さんは俯いたまま、肩を震わせている。泣いているのだろうか。よっぽど辛い過去だったのだろう。

「……………ぷっ、あはははっ」

と、思ったら春日井さんは声を上げて笑い出した。呆然とする僕。多分彼女が声を上げて笑うのを見たのは初めてだ。なぜか品があった。ずるいなあ。

「じゃあお願いしようかしら」レアな笑顔のまま春日井さんは言った。

「……………できれば居場所が分かると助かるんだけど。無理なら人相だけでも……………」

僕は困惑しつつも尋ねる。

春日井さんは唐突に指を上げ、僕を指した。僕は首をかしげる。本当に意味がわからない。

「犯人は漆根君よ。殴ってくれる？」

「僕かよ！って、性的嫌がらせなんてしてないじゃん！」

胸を張って言おう、僕にそんな度胸はない！

「したわよ！乙女の純情を弄んだくせに！」

「うっ、くっ……………」

それを言われると何もいい返せない僕。でも嫌がらせのつもりはなかったさ。もういい加減やつつけにはなってたけど一応本気で告白したさ。

「……………嘘よ」

「どこからが!?!」……………長い、長いぞ、春日井さん。たっぷり喋

つてたぞ、僕たち。まさか携帯のくだりは嘘じゃないよね。この番号どつかのおっさんのとかじゃないよね？「おやすみ〜」って送ったら「あんた誰？」とか返ってこないよね！？」

「そんな瑣末なこととはどうでもいいじゃない。今言うのもなんだからあと10分したら抜き打ちテストやるから。8割取れなかったら帰れないわよ」

本当に今言うのもなんなタイミングだった。それなら本当に抜き打ちにしてくれたほうがよかっただろう。はっとして時計を見るともういい時間だった。

「でも春日井さん、下校時刻のオーバーを2回すると出場停止だよ？」必死でプリントに目を通す僕。春日井さんは既に笑顔を封印していて。

「何を言っているの？2回目で停止という事は1回は大丈夫という事よ？」

「……」確かにそうなんだけど。

つまり今の僕はそこまで深刻という事らしい。お恥ずかしい。僕の思考はそれを最後にプリントの中身に注がれた。

抜き打ちテスト（春日井さん作、一問一答式）で僕は8割ちようどという快挙を成し遂げ、何とか帰宅することができた。

まったく、咄嗟に返答できないなんて人間失格ね 5

「おう、おかえり」家に帰るとさつきさんはやはりゴロゴロしていた。

「・・・2日目は朝9時から4時半まで、その後4時45分から閉会式。式次、開式、結果発表、表彰、講評、片付けの諸注意、閉式。その後はクラスごと撤収に入る」

「どうした耕太・・・？」さつきさんは身体を起こして心配そうに僕を見た。

「・・・ついたて5枚。暗幕、上段4枚に下段5枚。人数割り振り、お化け役9人受付1人をローテーションでまわしていく」

トランス状態の僕だった。さつきさんは首をかしげていたが、何か得心がいったらしく、ぼんと手を打った。

「ほっほう、暗記か？それなら私も負けてられないな。私は日本史年号暗記のスペシャリストだぞ」胸を張るさつきさん。

この辺でようやく僕は我に帰った。いや、別に決して強調された胸部に目が行ったわけじゃない。

「・・・NATO(710)軍、占領できない平城京」

「・・・そりゃあできないでしょうねえ」

だってNATO軍って戦後の組織だもの。いかに国際軍だといっても1250年の時間の隔たりはどうしようもないはずだ。

「なくし(794)た物はここにある、それがこの場所、平安京」

「どこだっ!？」回りくどいけど微妙に語呂がいい。覚えてしまいたい。でも別に平安京じゃなくてもいいじゃん。

「いちいち国(1192)つくる必要があったのか？地方一都市で我慢しろ！鎌倉幕府」

「源頼朝が否定されてしまった・・・」もはやさつきさんにかかれば歴史上の英雄もばっさりだった。この人、宮本武蔵でも斬れるんじゃないだろうか。

「ふふん、どうだ。私の勝ちだろう。それとも私の語呂合わせに匹敵するものが君にもあるか？」また胸を張るさつきさん。

そのしたり顔と胸とどっちに目を持っていくべきか迷う。あ、そうだ、目は2つついているんだから1つずつ見ればいいじゃないか。頭いいな僕。・・・などと馬鹿なことを考えた後、僕はにやりと笑った。

「ありますよ。考えてみたはいいいけど友達がいらないから決して披露する事が出来なかったものが」

「疲労できなかったのか？それは羨ましい体質だな」

突っ込むのはやめた。僕はこれを早く疲労したくてしようがないのだ。

違う！披露したくてしようがないのだ。

「以後ヤニ（1582）吸えない本能寺の変！」

「・・・・・・？」あれ？反応が薄い。この首傾げてる感じは絶対演技じゃないようだし。

「・・・えっと、ほら、本能寺の変って放火じゃないですか。ヤニって言うのはタバコの俗称のことで、今後火が怖くなってタバコが吸えないっていう感じなんですけど」だんだん声が小さくなっていく僕。ああ、持ちネタの解説しなくちゃいけないこの感じは凄い嫌だ。

「・・・織田信長は喫煙者だったのか？」

「いや、それは知りませんけど」

「ばか者！ちゃんと時代を考慮しろ！それでは歴史を間違えて覚えてしまうではないか！」

「・・・・・・」

「いやいやいやいやいやいや」

NATO軍と平城京のありえないコラボよりはマシでしょ！それこそ知らない人は同時期に両方あったのかと思っちゃうじゃん！

「駄作だな。君にはどうやら歴史の才能がない。理系に行け！」

はい、僕の進路決定。

「そういえば文化祭の準備か？いろいろなクラスで話し合いが行われていたが」

さつきさんは放課後学校内をウロウロしていたらしい。しかしどのクラスも似たような光景だった。たろろから面白くなかった。たろろ。

「面白いかどうかは置いといて、ホラーなことはあつたな」

「えっ、なんですか？」お化け屋敷をやる身としてはそういう情報は少しでも入れておきたい。ましてやそれが校内での出来事ならば十分に使う余地はある。

「あまり言いたくないんだがな。思い出すだけで鳥肌が立つ」

幽霊のさつきさんでもそんなに怖いのか……。これは僕も聞かないほうがいいのかもしれない。夜中にトイレに行けなくなってしまうかもしれない。だが、怖いから見たくないんだ。どつい惹かれてしまつのがホラーなので、聞かざるを得ないジレンマ。

「耕太がな……。クラスで話し合いをしていたんだ」

「僕かよ！」

さつきもしたよこの突っ込み。何で僕は学校でも家でもいじめられ続けなければならぬんだ。

「宿命だ！」

「宿命っ！？」そ、そんな……。僕がいじめられることは生まれた時から決まっていたというのか……。

「いやいや、そんないじめられるほうが悪いみたいな加害者擁護な発言されても……。」「いじめるほうが悪いに決まっているんだ。古今東西そういうものだ。魔女狩りだって文化大革命だってやったほうが悪いんだ！」

「何を言っている。縛られて火をつけられるのは快感なんだぞ」

「魔女なの！？」

「ああ、いつでも耕太を浮かせることができる」

どうやら言い始めてしまったので後には引けなくなってしまうらしい。もちろん僕は乗ってあげる。優しい男ですから。優しい男と書いて優男ですから。

「ちちんぷいぷい、耕太よ、浮け」

「・・・・・・・・」

うわあ、古い。でもかわいい。この辺にホバークラフトがあったら間違いなく飛び乗っていただろうに、残念ながらそんな便利なものはないので浮けなかった。

「何を言っている、浮いていてはいないか」

もちろん首を傾げる僕。不安になって足元を見たが、どう考えても浮いてない。

「ほら、常に」

「教室でっ!？」

浮いてますよ、そりゃ。それが何か？

「ていうかそれ魔法関係ないじゃないですか」

そういうと、さつきさんはむっと唇を尖らせた。

「しかたないではないか。マグル界で魔法を使うと学校を退学になっってしまうのだ」

「ホグーツ生!？」前に闇の帝王のことを知らなかったのはフェイクなのか？

「ああ、あれってヴォルちゃんのことだったのか？そんなご大層な名前で呼んでいたから別人だと思っていた」

「気安い・・・」相手は魔法会最悪とまで言われた魔法使いだぞ。

「最悪なんていうんじゃない。ヴォルちゃんはいいやつだ。よくジューズとかおごってくれるしな」

「パシリじゃん!！」なんだこの構図。さつきさんは帝王の更に上に位置しているのか？

「うん、まあ、最近つむぎの部屋にあったのを拝借して読んだのだが」

「ああ、それでこの前僕がつむぎに意味も分からず怒られたんですか」

あれはびっくりした。突然「勝手にあたしの部屋に入らないでって言ってるでしょ!」だもんなあ。もう僕は「すいません」しか言え

なかったよ。つむぎは何気に所有欲が強いのだ。物を大事にすると言いかえると聞こえはいいかもしれないが、シユウ君は大変かもしれない。

「さつきさんって読書スピード速いんですね。あれって全部あわせると5000ページは越えますよね？」そんな時間に時間はなかったはずだ。さつきさんが読んでいるところを見た事がないから僕が学校にいつている間に窓から侵入したか（僕は夜以外窓は開けっ放しにしている。泥棒がないレベルの田舎だから出来る芸当だ）、僕のバッグの中から鍵を奪って（あ、泥棒だ）入ったかだ。

「大丈夫だ。私は数回高速でめくればもう内容がつかめてしまえるからな」

「スーパー小学生!？」右脳鍛えまくりのやつ。あれってにわか信じがたいけど、読解力というよりも記憶力の問題なんだって。見たものを頭にとっておけて、スロー再生とかも出来るらしい。凄いとは思うけど、脳は鍛えるのやめるとすぐ退化するから維持するのが大変だろう。僕はやりたくない。

「私はそこまでではないがな。なにせ1時間経てば君の顔と名前を忘れてしまう」

「それは記憶力云々じゃなくて痴呆始まってますよ……」

「君の名前限定なのにか？」

「意図的過ぎる!!」記憶力さえも僕をいじめるのに一役買っているのか?ていうか僕の平凡な顔はともかく名前は忘れにくいと思うんだけどな。

「え〜と、確か・・・漆根・・・剛田武、耕太？」

「ジャ アン!？」

ジャイア がミドルネームになっちゃった。

でも漆根と耕太の間に入れたら全国の剛田武さんに怒られちゃうよ。しかし本当にさつきさんは記憶力がいいのだろうか。若干痴呆が来てるんじゃないかと心配になった僕は問題を出してみる。

「じゃあさつきさん、明治維新は何年ですか？」

「1868年」

即答だった。本当に記憶力は達人なようだ。まあ僕にはそれがあつ
てるかどうか分からないのだけど。

まったく、咄嗟に返答できないなんて人間失格ね 5 (後書き)

次の話は作中で1ヶ月ほど時間が空きます。

なので更新も間をおいてからすることにします。

その間は番外編と称して『エキセントリック・ビューティ
談編』を投稿するので、機会があればぜひどうぞ。 雑

僕は全人類の敵なのか!? 1 (前書き)

お待たせしました……………か?

……………再開します

「だから教室で机使うなら事前に申請しとかなくちゃいけないわけで、それなら僕が春日井さんに言ってくればやっつくから」

春日井さんによる漆根耕太育成計画は今のところ成功しているようで、僕はいまや突然の質問に答えられるようになったのだ。ていうかそれがもともと当たり前だし、質問をしてくるのも及川しかいないわけなんだけど。ただ、最近は僕が質問に答えられるという事が広まったようで、多忙な春日井さんではなく、「漆根、さつき聞かれたんだけどよ」「という感じで及川経由で質問が僕のところへ来ることもある。

「・・・なんで僕のところへ直接来ないんだろう」わかっているけどね。嫌われているってことは。それが自分のせいだってことも。

「あれだろ。新鮮なみかんの横に腐ったみかんを置いとくと両方腐るっていう」

「僕は腐ったみかんじゃない!」

「言えた! ついに言えた! このタイミングが来たらぜひいつてみたかった言葉ナンバー1を!」

おお、凄い達成感。夢を叶えるっていうのはこんな気分なのか。

だが、そんな達成感でいっぱいなのは僕とは違って及川は首をかしげていた。なんだ、あの3年B組の有名なセリフを知らないのか。確かに僕も総集編で見えたことないけど。

「いや、それは知ってるんだが、お前は腐ったみかんだぞ」

「言い切った〜!!」なんという男だ。僕に一生達成感を味わうなどでも言うつもりか? 鬼畜だ。悪魔だ。

「おいおい、何言ってるんだ。鬼畜はお前。悪魔はお前。・・・ってさつき春日井が言ってたぞ」

「死にたくなつた!」

そこらへんで及川は僕いじりを満足したらしく、持ち場に戻って

った。ちなみに今教室は非常に騒がしい状態だ。クラス全体での準備も本格的にやっていて、部活に所属していない、あるいは所属していても暇な人は全員動員されている。特に大道具の人たちは鬼監督及川の下、大戦中のように必死になって働いていた。若干かわいそうだったが、それを口に出すことはできない。僕だってそれなりに忙しいのだ。

そして、一番忙しいのはもちろん春日井さんである。マジシャンのように高速で手を動かしている。やっている事はもう僕には理解不能で、多分聞いても教えてくれないだろう。

しかしそんな忙しい合間でも僕を鬼畜だ悪魔だという余裕はあるのか。それともそれによってストレスを発散しているのか。しかし、僕でストレス発散が出来るのならば、僕はそれでいいと思う。それは人の役に立てるといふ事だから。さあ、もつと僕をいじめるんだ！

「・・・最近本格的にダメ人間になってきている気がする」どうしちやっただんだ僕は。さつきさんと春日井さんにいじめられすぎて脳みそが壊れてしまったのか。あるいはもともと壊れていたのか・・・。

「漆根、暇なんだろ。気利かせて全員分のジューズ買って来いよ」「いかねえよ！」暇じゃないって言って・・・ってあれ？そういえば僕に仕事はない。せいぜい及川経由で回ってくる質問に答える程度だ。僕の仕事は質問に答える程度か？僕はボックスマンを愛する神様か？2100年の2月に隕石が落ちてくるのか？それなのに大地震は予言できないのか？もじゃもじゃなのか？

その時だった。

「もういい加減にしるよ！」

及川の監獄エリアから声が上がった。手に持っていた業務用の大きなポンドを床に叩きつける。ただし、しっかりと蓋は閉められていたし、たった今自分がつくっていた大道具にも当てていなかった。なかなか律儀な人なのだなあ、と僕は状況もわきまえず思った。そんな僕とは違い、まともなクラスメイト達にはわかにかに静まった。全員の目がそちらに向かう。監獄の囚人は立ち上がって叫んだ。

「こんなの勝手にやっつけてればいいだろうが！いちいち俺たちを巻き込むなよ！」

ついに反乱が起こった。だがそれは当たり前のことだ。古代ローマの剣奴しかり、大戦中のレジスタンスしかり、力で押さえつけられれば、反発は必ず起こるのだ。だが、そんな反乱の成功例は著しく低い。ポーランドの独立は大変だったのだ。

というわけで即座に及川が近づき、胸倉を掴んだ。

「もう一度言ってみろ」及川にしては普通の言葉だな、と僕は思う。らしくない。突然の反発に動揺しているのだろうか。

あ、でも凄い怒ってるみたいだ。だって、ほら、相手が物理的にちよつと浮いてるもの。ものすごく苦しそうだもの。周りの女子が軽く悲鳴あげてるもの。空気がとても不穏なもの。

「ちよつと、ちよつとやめて、及川君」ついに、春日井さんが割って入った。及川は怒り心頭の表情を変えないまま手を離し、クラスメイトは尻餅をついて咳き込んだ。だが、すぐに若干の涙目で春日井さんを睨んだ。

「うるせえな。お前はいいよな、自分の好きでやって、好き勝手にするんだから。だったら1人でやってるよ。俺たちを巻き添えにするなよ！俺とお前は違つんだから勝手に自分の物差しで計るんじゃない！」

再び空気が凍りつく。同時に僕の限界も訪れた。

好き勝手？巻き添え？そうじゃない。僕は知っている。春日井さんがどれだけ周りのことを考えているか。そのためにどれだけ自分を犠牲にしているかを。

しかし、そう言われた春日井さんは睨まれたまま何も言い返すことができないように。

「私は……」言いかけて、春日井さんは教室を飛び出してしまった。表情を見ることはできなかつたが、どんなものかは想像できる。

「ため……」再び及川が胸倉を掴んだ。

だが、公開処刑が始まることは無い。そんなことは僕がさせない。勝手に賭けさせてもらうが、春日井さんの名に賭けて。

「放せ、及川」僕は及川に言う。及川は素早く僕を睨んだ。

その睨みは世間一般の人々には効果靦面なのだろうが、僕には効かない。僕には及川が怖くない。そして僕の表情を見て察したのだろう、及川は思いの外あっさりと手を放した。僕は拳を握り締める。自分の爪で掌が切れてしまいそうだった。

その拳で殴った。拳が痛い。今度こそ辺りで悲鳴が上がる。だが、及川ならともかく僕程度の腕力じゃ殴ったってせいぜい後ろに倒れる程度だ。大したことじゃない。だからこれは別に相手を苦しめたくて殴った訳じゃない。この場を收拾させるためでもない。

ただ単純に許せなかっただけだ。

「お前、おかしいよ」と、誰よりも間違っている僕は言う。いや、僕だからこそ言う。間違っている僕から見ても、お前は間違っているんだと。そう諭せるのはきつと僕だけだと思っから。

僕は相手の反応も見ずに教室を出る。春日井さんを追わなくてはならない。春日井さんは間違っていないことを伝えなきゃいけない。だが、どっちに行つたものだろうか。

ちくしょう、こんなことだったら春日井さんが落ち込んだ時にどこに行くのかストーカーでもして調べておけばよかった！

「漆根君！」聞きなれない声がして、僕は振り返る。声を上げて僕を呼び止めたのは衣装の責任者の人だった。告白した人ではないが、全世界の女性の例に洩れず、漆根耕太を毛嫌いしているはずの人だ。「・・・多分、テラスに行つてると思う」と、彼女は小さな声で言った。僕は今の精神状態でつくれる精一杯の笑顔を向けて礼を言い、駆け出した。

僕は全人類の敵なのか!? 2

テラスというのは学校の校舎の2階の端にある、無意味な出っ張りのことだ。ベンチがあつて、昼休みはカップルが弁当を食べているらしい。僕が鳥だったら間違いなく糞を落とすであろう、決して足を踏み入れたことのないそのスペースに春日井さんはいた。夕日を浴びながら、山と民家しかない町を見ている。僕は息を整えつつ、近づいた。

「・・・私はね、自分で何かを決めて成し遂げた事がないの」と春日井さんは唐突に言う。僕の姿を確認したわけでもない。後ろに目でもついているのだろうか。

「高校だつて、家から近くてそれなりのランクの進学校っていう理由だし、中学の時の部活だつて友達に誘われて入つたし、将来の夢だつて特にないし・・・」

春日井さんは振り返る。やはり感情を感じさせない表情で言った。「だけどね、これだけは自分で決めたのよ。去年ここの文化祭を見に来たときにね。だから私は、どうしてもみんなと一緒に成功させたいのよ」

文化祭を成功させたい、ではなく、文化祭をみんなで成功させたい。これが春日井さんの決意だ。だけど、簡単なようでなんて難しいことだろう。16年間それぞれ全く別の道を歩んできた40人近い全員が、同じ方向を向いて歩くなんて。

だから、僕はそう言い切ることができる春日井さんがあまりにも凄いと思つた。僕には手が届かないくらいかっこいいな、と思つてしまった。

「手伝つよ・・・」僕なんかじゃ役に立たないかもしれないけど、それでも僕は純粋に、春日井さんの背中を押そう。

考えて言つたことじゃない。だから、これはきつと僕の本心だ。

「ありがとう」そう言つて微笑んだ春日井さんは、本当に綺麗だつ

た。

だけど、それはあまりに綺麗過ぎて、決して手が届かない女神に似ているのかもしれない。僕はその感覚を必死に振り払う。

笑顔を鞘に納め、春日井さんは大きく息をはいた。

「戻りましょうか。ダメじゃない、漆根君も教室抜けてきたら。私がいけないときはあなたが指揮するんだから」

「いやいや、こういうときは及川がやることになってるんだよ。

お化け屋敷だけに暗幕の了解ってやつ……」言ってるで自分で寒くなっちゃった。

どうしてボケようなんて思ったんだ。僕はあれか？キャンプファイヤーに近づいて燃えていく蛾か？まだ春だって言うのに。

案の定、春日井さんは僕の前をツカツカと横切って校舎の中へ入ってしまった。寒いギャグにはノータッチ。かなり厳しい人なのだ。

そのまま鍵を閉められそうだったので、慌てて僕も後を追う。すると春日井さんは校舎の壁に手をつけてうずくまっていた。心なしか肩が震えているように見える。やっぱり傷ついていたのだろうか。

校舎に入ってさっき言われた言葉を思い出して……。

そう考えておたおたしていた僕だったが、近づくと、春日井さんは苦しそうにお腹を押さえて、笑いを噛み殺していた。

ええ~~~~~!!今のがツボ!?何この人!?おかしいよ。

「カニさん、おにぎりは今食べてしまえば終わりだけど、この柿の種類なら植えればたくさんの柿がなるよ」と、猿は言った。カニは少し考えてから言った。『確力二!』

「や、やめて……」

絶対変だ!認めない!!確実にヘンリー君のほうが面白いのに……。

しばらくして、春日井さんの腹筋強制トレーニングが終わったところで、僕たちは教室に戻った。

教室に戻ると、さっきよりも及川が更にはきはきと監督していた。

頑張りや認めるが、働いている者たちにとつては迷惑極まりない。さっきのやつはいない。帰ってしまったのだろうか。

「どうしようか、春日井さん」春日井さんの目的が全員で成功させることの以上、1人のドロップアウトも出す訳には行かないのだ。「そうね・・・ここは1つ色仕掛けで・・・」

「色仕掛け!?」やつは僕か?僕のように単純な細胞で形成されているのか!?

「というわけで今からデパート行って女装してきてくれない?」

「しかも僕が仕掛けるの!?’この人は、クラスメイトを何て目で見ているんだろう。」

どう見てもそつち系の人ではなさそうだが。

「いえいえ、人は総じて見かけによらないものよ。だからやってみなければ分からないわ」

「いるよ!広い世の中には見かけによる人だつていっぱいいるよ!それにやってみたところで、え、何いきなり・・・ってなる確率山の如しだよ!」

「大丈夫よ、何かあつても責任はすべて漆根君のところに行くから」僕が大丈夫じゃねえ!」ていうか同級生に女装を勧めるなよ。

「なによ、漆根君が女に目覚めれば世界の女性が安心して、世界の男性が面白がるのに・・・」

「僕は全人類の敵なのか!?’」
「いつのまに・・・」

僕のつつこみが大きすぎて会話が筒抜けだったのだろう。なんとクラスメイトの視線が全員こつちに向いて、うんうんと頷かれた。ちよつとしたホラーだった。それよりもクラスメイトに注目されるといふ事実には僕は赤面する。やめてくれ、僕にスポットライトを当てないでくれ〜。

「あいつのことは気にしなくてもいいつちゃ。ただちよつといづらくなつただけつちゃ」

と、何弁なんだか、そもそも方言なのかさえもわからない口調で1

人が突然声を上げた。

何てインパクトの強い人なんだ、と感心してしまう。これも才能なのだろうか。なぜこんな面白い人と1ヶ月以上も会話せずにいたんだろう。もったいない！！

「あいつも本心ではそんなに嫌がってないっちゃ。しばらくしたらまた参加するだろうからそれまで待つてほしいっちゃ」

やべえ、この人超おもしろい。惚れてしまいそうだ。

しかし、その超面白い人は、残念ながら口を閉ざして作業に戻ってしまった。

「・・・だ、そうよ。分かったかしら、赤鬼の漆根君」

僕の赤面はまだ治まらない。茹蛸のように真っ赤になっている。本当に何事もなかったように仕事に取り掛かる春日井さんとは対照的に、僕はとりあえず頭を冷やそうと教室を出た。

僕は全人類の敵なのか!? 3

廊下はすっかり薄暗くなっているが、僕がいるにはいささか明るすぎた。いつそのことトイレでも行って花子さんに会おうかとも考えたが、アポをとっていないのでやめておいた。彼女だって全国の学校をはしごしているので忙しいだろう。スケジュール帳はびっしり埋まっているに違いない。

花子さんには会わないが、トイレに行くことにした。学校のトイレは結構不気味だ。なにがでてもおかしくない感が漂っている。なにがでてもとというのは生理現象の話ではない。

下品だが、念のため。

「・・・男子トイレですよ」

ほんとに幽霊が出たっ！

「いいではないか。ここがサッカー部を見るのにベストなポジションなのだ」

・・・さつきさんだったけど。さつきさんは男子トイレの窓から校庭の方を見ていた。

「いつからサッカー部のファンになったんですか？」女子高生か？いや、女子高生の観戦場所は男子トイレだけはないはずだ。

「サッカー部というか、大杉君だな。サッカーに関しては全く興味がない。キーパーの存在理由もわからないほどだ」

「よっしゃ、大杉君を夜道で襲えばいいんですね？」いつもは襲われる役だが、ここばかりは譲るつもりはない。よし、じゃあひとまず柔軟体操を・・・。

「嫉妬心だだもれか!? そういう犯罪めいたことはやめるんだ。捕まるぞ！」

「そうですね・・・。じゃあ完全犯罪になるようにここから狙撃でもします。どれが大杉君ですか？」

「えっと・・・キーパーだな」

「大杉君の存在理由がわからない！！」なんでファンやってるんだ！？ノリか？ノリなのか！？2つあわせてノリノリか？

「いや、実は放課後の学校をぶらぶらしていたらよく見知った顔のやつが同級生殴って「お前おかしいよ」とか言っていたからな。私は「いや、お前も十分おかしいよ」という突っ込みもできぬまま吐き気を催して・・・」

「それで男子トイレに？」意味がわからない。ここは男たちの聖域。どんな理由があっても女性が入ってはいけないところなのだ。

「知らなかったのか？ここは定期的に男女の交換をしているのだぞ」「温泉かよっ！？」いや、でもトイレに「両方を楽しめるように」なんて理由は必要ないはずだ。

「もういいから出ましよう」いい加減トイレで掛け合いをする事に限界を感じ、ギブアップする僕。対してさつきさんはさすがチャンピオン、余裕の表情だ。

「そうだな、では次は第2ラウンド。女子トイレと行くか」

「あなたはこの世から僕の居場所を消したいんですか！？」「ひどいよー！」

「いや、君の存在を消したい」

「こわっ！」さつきさんなら本当にやりかねないので逃げ出した。さつきさんは何でかしぶしぶ出てくる。

「やれやれ、最近の君は真面目ヴァージョンが長くなりすぎていると思っぞ」

「うーん、ですかね」頬をかく。

僕も本当にそう思う。僕はどうしてしまったんだろうか。少し前までこんなのは煩わしいだけだと感じていたけれど、実を言うとそんなに嫌だとは思っていない。

「ふふん、私の教育の成果だ。いや、調教の成果だな」

「僕は猛獣なんですか！？」そんな、雨に濡れた子猫のような僕になんてことを・・・。

「君は盛りのついたチンパンジーではないか」

「昔の話を・・・」

て言うほど昔じゃないけど。その時の罰で今の僕は構成されているけど。

「ていうか人がシリアスになっているのを『気持ち悪い』なんていわないで下さい！」

「ツッコミが遅すぎる！君は前時代のパソコンか!？」

さつきさんに元気を分けてもらい、パチンコ玉くらいの元気玉を出せるようになった僕はまた教室に戻ることにする。さつきさんはそろそろ帰るそうだ。

「おい、漆根！サボってねえでこっち手伝えよ！お前のせいでこっちは一人人数が足りねえんだからな。蟻のような労働力をこっちに回せ！」

蟻のような、が蟻のように従順かつ効率的な、なのか、蟻程度の力なのかはわからないが、僕は反論できる立場にないので、大人しく従うことにする。教室の隅でくすくす笑う声が聞こえた。僕は耳を真っ赤にしながらか聞こえないふりをする。

「漆根、さつきの『お前、おかしいよ』ってもう一回言ってくれねえか。ボイスレコーダーで録って毎朝それをアラームにするからよ」
「おいおい、そんなことしたら起き抜けのお前の脳が自分がおかしいと勘違いして窓からダイブするかもしれないだろ。お前の部屋の高さからのダイブなら軽く昇天できるぞ」
「ていうか蒸し返すな。かなり恥ずかしいんだから。ほら、事情を知らない春日井さんは近くの女子に聞いてちゃってるじゃないか。あーあ、きつと大爆笑するんだろうなあ。よし、うつむけ僕。教室の床とお見合いだ。そして結婚して幸せに暮らすんだ。」

「なんだよ、ケチだな。おい、誰かあれムービーにとってないのかよ。編集して合成して警察署に送るからよ」

「お前は僕を犯罪者にしたいのか!？」 冤罪過ぎる。

「あつ、悪い。そうだよな、お前みたいな小物は万引きあたりの小

罪で捕まるべきだな」

「おいおい、何言ってるんだ。万引きは立派な犯罪だぞ。社会的に裁かれてしかるべきだ。僕が警備員だったら万引きしたおばちゃん
の事情なんて聞かないね。バケツリレーの要領で警察にスルーパス
だ。そして警察にもスルーされてそれがそのままゴール。得点者、
漆根選手」

・・・わけがわからない。僕は何が言いたいんだ？

「・・・しかもうまい棒一本」

「小物過ぎる！！」僕はどうしてそんなものが欲しかったんだ。1
0円くらい持つてるよ。そこまずカツカツの生き方してないよ！

「ま、お前は世間から線引きされてるけどな」

「・・・」

万引きだから線引き（千引き）か。無駄にうまい・・・。

もちろんこの応酬の間にも聞こえている忍び笑いは完全無視。いや、
耳だけは過敏に反応していて、常に耳の裏に焼き鑊があるような気
分なんだけど。

大隕石襲来っ！？ 1

翌日、例のクラスメイトは朝からクラスの誰に話しかけても無言で春日井さんを指差されると言う苦行を繰り返された結果、春日井さんに謝って、トラブルは収束した。別にいいんだろうけど、「しばらく待つて欲しい」という意見はどうやら完全無視のようだった。まあ、でもこういうのって引き返すなら早いほうがいいからな。僕みたいに引けなくなったらもうアウトだ。文化祭まで日もそんなにないし、本人も今日はちゃんと頑張つて働いているからこれでいいんだらう。

及川からの質問に答える以外何もやることのない手持ちぶたさにようやく気付き、昨日のように手伝おうとした手を払われ、所在無げにしている僕だった。皆さんに申し訳なく思う気持ちはいっぱいなのだが、でもしょうがないだらう。唯一僕から近づくことを許されるのはこのクラスでは及川だけで、その及川に拒否されてしまったんだから。案外ジャ アンに見放されたス 夫はこういう気分になるのかもしれない。じゃあやっぱ僕は及川の下っ端なのだらうかところが、だ。そんなやることもなく、かといって座っているのも申し訳ないような気がするので窓際でぶらぶらしていた僕に忍び寄る影があった。他人の視線には人一倍敏感な僕だ。その視線が僕に向けられている事は経験則からすぐに気づいた。

「漆根君、ちよつといい？」

ああ、春日井さんか、と僕は振り返る。そこに思い当たったのは至極単純な理由。

ここで僕の間人関係とその呼び方をおさらい。

漆根 及川か先生（後者にはほとんど呼ばれない。「お前」とか「その」とかだ）。

耕太 両親かさつきさん。

耕兄 つむぎ。

漆根先輩 シュウ君。

漆根君 春日井さん。

僕の間関係つてこんだけだ。まあ、例外的に及川の姉につけられた変なあだ名があるが、それは割愛させていただこう。

だがしかし、僕の思考はその影に焦点が合ったところで止まった。思考だけじゃない。データを詰め込みすぎたパソコン並みに僕はフリーズした。

「聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

影は一人分ではなかった。そして春日井さんの姿もそこにはなかった。彼女は依然として忙しく働いていた。僕の脳内細胞がようやく活動を再開し始めたので、彼女達の顔を見て、記憶から誰なのかを探り出す。すぐに行き当たった。そう、クラスメイトの女子3人。しかも一人はクラス内で僕が告白した5人のうち、春日井さんと内装の責任者に次ぐ3人目。そこに行き会ったところで僕は混乱を始める。脳内にウイルスでも感染したのかもしれない。

「あ、ちよつと待って」

僕程度の読心術では判断がつかないが、彼女達の表情に嫌悪感は見られないように見える。僕はもう一度窓に向き合って、スライドさせた。顔を出して田舎町を眺める。肺いっぱい息を吸った。

「大隕石襲来っ!？」よし、落ち着いた。

彼女達に向き直る。総じてあっけにとられた表情をしていた。話しかけたのを後悔しているのかもしれない。

そしてようやく僕は正解を見つけた。なるほど、彼女達は肝試しをやっているのだ。確かに僕に話しかけることはお化け屋敷よりよっぽど肝が冷えるだろう。いや、何僕は自分捕まえてお化け屋敷より怖いと言っちゃってるんだろう。

僕が突然大声を出したことでちらちらとこちらを見て来る目があるが、そんなことよりも僕には気になる事があった。辺りをキョロキョロ見渡す。

「どつしたの・・・？」

「カメラはどこ？」そう、ようやく得心がいったのだ。間違いない、これはドッキリだ。彼女達も体を張ったものだ。

「……………」

迫真の演技だ！誰がどう見ても僕が何を言っているのか分からないようにしか見えない。だが、僕は騙されないぞ。きつと内心ドッキリだと気付かれたことに焦っているに違いないんだ。

「言っておくけど僕は引つかからないよ。風呂に入ったら底が抜けて設置してある滑り台を滑って行って御輿に載せられてワッショイワッショイやらないし、女性のマッシュロンに行こうとしてその前の道を歩いていたらそこに落とし穴があつて、スチロールだらけの穴に落ちたりもしない」

「長いよ！」

突っ込まれた！吃驚だ。思わず漢字使っちゃうくらいびっくりだ！！

だつて突っ込みの半分や優しさでできているんだよ！？ちよつと今のはダメ出しチックだったけど、それでも突っ込みは突っ込みだ。だけど優しさだつて、全部が全部良いわけじゃないからな。

“バファリンの半分は優しさでできています”

ばかやろう！ちゃんと有効成分を使えよ！

大人はいつだつてそうだ。いつだつて優しさでごまかすんだ。子供はいつだつて犠牲者さ。

……………さて、そろそろいいかな。

「で、聞きたいことだっけ？」

さっきまでさんざん挙動不審だった僕が急に落ち着いたせいか、彼女達が吹きだした。あるいはそれは嘲笑なのかもしれないが。

「あ、うん。近年の中国における経済発展の犠牲者となった貧困層と環境問題についてなんだけど」

「時事ネタっ！？」なぜ、僕に！？僕を中国の官僚か何かと勘違いしているのか？

中国か……。漆根家は食事中に新聞、テレビは禁止だから必然的

に新聞を読んだりニュースを見たりする機会は少なくなる訳で、そんなわけで僕は時流を解していないという高校生にあるまじき存在なのだった。

「あ、えっと、うん、そう・・・あれだ、みんなで頑張った後、頑張って立て直すとか・・・」ああ、僕ってダメだなあ。突っ込みならスラスラ口から出てくるのに。蜘蛛の子を散らすように出てくるのに。

「ああ、なるほど、今はそういうのを全部犠牲にしちゃって未来の子供たちに全ての責任を押し付けるのね？」

「あつ、違う違う。やっぱり今でできた問題は今解決しないとけないから・・・」

「目先のことに捉われて大事なことを見失ってしまふのね？」
「僕にどうしろって言うのさ！」いじめだ。

僕の苦悩をよそに彼女達は笑い合っている。その表情にはやはり嫌悪感は見られない。むう、どうやらドツキリではないみたいだし。肝試しという線は当たっているかもしれないが、だとしたらこの人たちは肝試しに来て爆笑しているのだろうか。お化け泣かせな人たちだ。さつきさんが怒るかもしれない。

「あつ、そうそう。質問なんだけど・・・」

最後にはちゃんとした質問が僕に来て、僕は持てる（春日井さんに植え付けていただいた）知識をフル動員して何とかそれに答えた。そして訳が分からないままに3人とも行ってしまった。

「????？」

首が折れるんじゃないかと思うほど傾げてみるが答えは出てこない。振り返って窓の外の夕焼け空を眺めてみる。そこには赤く染まった雲の切れ端以外何もなかった。

大隕石襲来っ!? 2

「・・・という事があつたんですよ」

放課後、自宅にて、せかせかと何かを作っているさつきさんに僕は相談を投げかけてみる。さつきさんは大きなシーツを裁ちばさみで丁寧に切っていた。若干なれない感じであつたので、代わりにやるうかと申し出たが、自分でやると言い張られたので僕としては手を出すことはできない。代わりに口を出すことにした。

さつきさんはゆっくりと動かしていた裁ちばさみを止めて脇に置いた。僕に向き直ってすべてを許す母親のような微笑を浮かべた。

「それは素晴らしい。実に素晴らしいことだな」

「さつきさん・・・」これはつまり、僕の評判が人から話しかけられるくらいに上がったという事なのだろうか。だが、そんな夢みたくない・・・。

「素晴らしいことだ。・・・だから、今から一緒に病院に行こう?」

「幻覚+幻聴じゃないです!」

・・・久しぶりに優しくしてくれるなあ、と思つたらこれですか。もういい。グレル、グレてやる。そして紆余曲折経て警察に捕まり、グレた理由をさつきさんのせいにしてさつきさんの社会的地位を貶めてやる。

「どう考えてもそれは幻覚だろう。ほら、あれと一緒にだ。磁場の強いつとところに行くといえるところ・・・」

「それって幽霊は脳内作り出した幻覚って言う研究じゃないですか! 何自分の存在否定しちゃってんですか!??」

「ところで、君はいつも1人でブツブツ何を言っているんだ?」

「やめてくれー! 自分を貶めてまで僕をいじめようとしなくてくれ!」

「耕太が四苦八苦するのなら、私などどうなってもいい」

「いっそ潔い!」男の中の男だ。

ん？さつきさんはまごうことなき女性だから女の中の女？あれ？違うな……。男の中の女？女の中の男？

……。まあ、いいや。

「幻覚ではないとしたらもつと大問題。いや、大事件だぞ。間違はなくその三人はいじめを受けている。明日担任に言っておけ。『クラスでいじめが起きてます。なんと僕に話しかけてきた女子がいるんです』ってな」

「……ってな、じゃないですよ！そんなこと話したら僕のキャッチコピーが変人から異常者になっちゃうじゃないですか」

「異常車か。恐ろしいキャッチコピーだ。リコールでまくりだな」

「回収騒ぎだ〜！」

さつきさんは再びはさみを手に持って布を裁ちにかかる。めっちゃくちゃ肩がこわばっていた。不器用な人だった。

「そろそろなに作っているか聞いてもいいですか？」

「話しかけるな！」

なんとさつきさんに春日井さんと同じことを言われた。僕はゆっくりと部屋の隅に移動して膝を抱いた。

「ふう、こんなものだろう。どうだ、耕太。……って、あれ？耕太？」

残念ながらうつむいている僕の目にさつきさんの姿は映らない。

「おっ、なんだ。そんなカオスな場所に同化していたのか。何のかわれんぼのつもりだ？おい、反応しろ。耕太、こーうーたー」

僕の後頭部がぺしぺしと叩かれている。それでも僕は顔を上げない。今さつきさんの顔を見たら涙が収まらないだろう。それぐらいのシヨックだった。傷口に塩化ナトリウムをぶち込まれた気分だ。

「それは普通に塩と言え。おい、どうした。君はこの程度でへこたれるような弱い男ではないだろう。ちゃんと100キロマラソンだつて走りきったではないか。忘れたのか？このわたしが延々と『負けないで』を歌っていたのを」

「……………」

「しかしこの曲、前向きなようで微妙に後ろ向きだな。普通に『勝つて』でいいではないか。人生は勝たなければ意味が無いのだから」

「さあ、そろそろ顔を上げるんだ。さつきから私が1人で喋ってるみたいになつてしまつていないか。そんな苦行を私にさせるな。そうだ、ここが私の一級品のギャグを聞かせてやるう、どうだ？」

「……」

「う……む……、とりあえず聞かせてやる。 とある村の

少年が作った林檎を町の業者に持つて行ったんだ。その業者はいつも少年から林檎を買ってくれる人でな、ただ、最近天气が良すぎて林檎が良く取れるからあまり売れなかつたんだ。だから業者は少年に言った。『林檎で支払つてもいい?』」

「ダメに決まつてんじゃん！」

あつ、やつぱり突つ込んだ。まいったな、突つ込みは何にも勝るカンフル剤だ。

「だいたいふりが長いのに大したギャグじゃないですよ！」と、顔を上げてさつきさんを見た。

「へぶつ!？」

ピンタをくらつた。

「????」なんだ、何が起きた?なぜ僕は殴られた?そう思つて僕は顔を上げた。

「……あ」

目を潤ませていらつしやつた。

どうしよう!どうしよう!無視したからだ!さつきさんは誰ともかかわれない日々を過ごしてきて、だから……ああ、この世の終わりだ!!まさかハルマゲドンがこんな形に訪れるなんて……!

「……グーをお願いします」

などと、ついに僕は超真性Mの発言をしてしまった。いや、実際は

嫌だよ。いつも言ってるように僕は殴られたり殴ったりが嫌いなんだから。しかし、こうしなければさつきさんの気がすまないのだからしょうがない。世界が破滅するのを僕が止められるのならば、喜んで僕はこの命を捧げよう。 。
もちろん、悦んで、ではない。

「許さん・・・」

世界が！世界が！！・・・もうさつきさんたら肩を震わせてこういう状況でもなかったら見とれて、更に写真に収めて一日中眺めていたいぐらいの表情だったけど、こういう状況なのでそうも言っていない。

「許さんぞ、耕太。私のギャグがつまらんだと！！」

「そつち!?!」

ば、ばかな。どんだけこの人今のネタに自信持ってたんだ？そしてそれは否定されたくらいで人殴って涙目になるぐらいのネタだったのか・・・。

「そこまで言うならば君が私を笑わせてみる！・・・さもなくばもう口を利いてやらん」

世界一厳しい振りキターー！

大隕石襲来っ！？ 3

ごくりと、僕は唾を飲む。

「そうですね・・・僕の人生で一番不幸な出来事を教えてあげましょう。僕のつられ回数が100回を記録した時のことです。流石の僕でも三桁の人につられるともう自分自身の存在意義が見出せなくなります。このまま死んでしまおうかとも考えたんです。しかし、そこで僕は思いました。今僕が死んだら悲しむ人がいるんじゃないかって。そう、家族です。だからやっぱり僕の家に戻ることにしました」

ごく、とさつきさんも唾を飲む。審査員のように鋭い目が怖い。さあ、僕の不幸を存分に笑うがいいさ。

「家に戻って、僕は部屋に入りました。しかし、何となく違和感がある。なんだろうかと思ってみると、僕の部屋から金目のものがすべて消えていました」

「泥棒か、それは追い討ちだな・・・」

「いえ、この話はそれだけでは留まりません。絶望している僕の背後でノックもなく、ドアが開きました。つむぎが入ってきたんです。そして、つむぎは僕に一言

「あれ？耕兄、何でまだ生きてるの？と・・・」

「号泣ものだっ！！」

「ええ、そうでしょう。目の前が真っ白になりましたよ。流石の僕も妹に怒鳴り散らしましたよ。泣かせてやりましたよ。兄妹揃って泣いてましたよ。するとつむぎが言ったんです。だって、耕兄もう死ぬから金目のものはすべて持って行っていいって言ったじゃん・・・・・・夢で、とね」

「え、え・・・？あの娘はそんなキャラだったのか？てつきり私はすっかりものの代名詞かと・・・」

「いいえ、あいつはやばいです。たまに僕でもついていけないくら

「いやばい娘です。しかも、この話にはまだ続きがあるんです」

「まだあるのか・・・」

「僕が怒鳴っている時、ちょうど母さんが帰ってきたんです。その頃には母さんはもう僕のことを信用しなくなってますからね、僕が何を言っても無駄でした。それから3時間、僕は母さんに説教され、しかもつむぎに奪われた金目のものは帰ってきませんでした・・・とさ」

「耕太~~~~」小さな子をあやすように、さつきさんは僕に抱きついた。笑わせることはできなかったが、許してくれるらしい。もしかしたらこの人ならあの話ができるかもしれない。

「さつきさん、この話にはまだまだ続きがあるんですよ・・・」

「もういい・・・もう、いいんだ」某漫画の幕末時代の追憶編でのセリフのようにさつきさんは言う。男女逆だが。

「流石にこれ以上聞いたら今度から世界の恵まれない子供たちではなく耕太に募金してしまいそうになる」

「というわけで、僕の不幸話の続きは墓の下まで持っていくことになった。どうだろう、あるいは春日井さんなら爆笑しながら聞いてくれるかもしれない。」

「ところでさつきさんは何を作っていたんですか？」

僕らの感動的な触れ合いが終わった後で、けろりとしている僕は尋ねた。壊れている僕とは違ってちゃんとした人のさつきさんは精神状態を元に戻すのに少し時間がかかっているようだ。何度か深呼吸をした。

「幽霊の白装束だ。とうとう文化祭は明後日だろう？」

「実はついにもう明後日なのだ。明後日なのに僕は仕事がなくてぶらぶらしていたのだ。」

「私も実は耕太以外の人を脅かすのは初めての試みでな、今から楽しみで仕方ないのだ」

白装束に袖を通してバレリーナのように一周した。残念ながら着ていた服の上からまどっている。さつきさんの生着替えが見れると思

ったのに……。

ゴッ

顔を思い切り蹴られた。何も言っていないのに、邪な心中を見透かされてしまったらしい。やっぱり僕はサトラレなのだろうか。

しかし、やっぱりお化け役やりたいのか。まあ、ここまで来て断るとさつきさんの手によって、僕がリアルなお化けの仲間入りしそうになるので断らない。ぶっちゃけ僕もさつきさんの本気を見てみたい。

「そうだ、耕太はお化け役なのだろう？何をやるのかまだ聞いてなかったな」

さつきさんはよほど白装束が気に入ったのか、脱がないままカーペットに座った。真新しいワンピースに見えなくもない。少し糸がほつれているけど。

「そこなんですよ。お化け役という事は僕がトイレに行っている間に勝手に決められていたんですが、もう2日前なのに僕には何をやるのか決められていないんです。それでさつき春日井さんに聞いたんですけど、「話しかけないで」と言われてそれから一時間、下校時刻までたっぶりへこんでいたので結局まだわからないんです」

「……なんだ、そのセリフはそんなにトラウマなのか。それは悪いことをしたな。だがしかし、師匠も忙しかったのだろうか？」

「師匠っ!？」

「ああ、その女子のことだ。いや、女史か」

「春日井さんのこと師匠って呼んでるの!？」何の師匠だ？

「決まってる。いかに耕太をいじめるかという師匠だ。師匠は凄いで。もう本当に耕太をいじめることしか考えていない。耕太がいなるときでも周りの友人といかに貶めるかを相談している」

「超シヨックだ!」まだ僕をいじめ足りないのか？人生かけるほど足りないのか？

「しかしだな、こう考えることもできないだろうか。つまり、師匠は寝ても醒めても耕太のことしか考えていない、と」

「それはめちゃくちゃ嬉しいですけど、内容がいかに僕を生殺しにするかですからね」

ちようどその時だった。僕の携帯が鳴った。購入当時から変えていない実に面白みのない着信音。すぐ鳴り止んだので、これはメールだ。確認してみると、春日井さんだった。何てタイムリーな……。まさかこの部屋の中に潜んでいてタイミングを窺っていたりしないよな。

『ゆつて いみや おつきむ こうほ りいゆ うじとり やまあ
きらぺ ぺぺぺぺ ぺぺぺ ぺぺぺ ぺぺぺ ぺぺぺ ぺぺぺ
ぺぺぺ ぺぺ』

「最強パスワードっ!？」

説明しよう。ドラゴ クエスト2のファミコン版では、ロードにパスワードを必要とする。そこでこのパスワードを入力すると能力値がとてつもなく高い状態から始められるのだ。

でもなんで今っ!?!しかもメール本文にこれ以外の文がない!めちゃくちゃ意味がわからない!!

「………さすが師匠だな」ごくり、とさつきさんは僕の携帯を覗き込んで喉を鳴らした。どうやらさつきさんには意味がわかるらしい。

とりあえず僕は突っ込みと、当たり障りない程度の文を返信する。

「まあ、明日は前日なので、明日になれば何役をやるのか教えてくれると思います」

「ああ、耕太がどんなむごい姿になるのか楽しみだな」

「………」
「ああ、違った。どんな怖い姿になるのか、だ。あつ、違う。どんなひどい姿になるのか、だ」

「あつてるよ!!」

「ひどいが、か?」

「むごいが!……じゃない!怖い、だ!」自分で言い間違えちゃった!!

今日も今日とて僕の心はズタズタになり、明日に備えて早めに寝ることにした。
返信はなかった。

つまり、私を騙したのね。はい、じゃあ死刑 1

「今日は恐らくさつきさんも暇にはならないと思いますよ。いろんなクラスでいろんな出し物の準備してますからね」

翌日、僕とさつきさんが連れ立って学校に行っているとき、僕は言った。さつきさんはとても嬉しそうな顔をした。

「そうか！そろそろ退屈だから授業をぶち壊しにかかるうと思っただころだ」

「文化祭様様です・・・」文化祭が学校を救った瞬間だった。さつきさんなら校舎ごと壊しかねない。文化祭もこんなふうじに学校の役に立てると思ひもよらなかつただろう。

確かにもともレクリエーションの意味が大きいけど、それは生徒のためのレクリエーションで、さつきさんのためではないはずだ。

「ふん、しょせん社会はそんなものだ。大多数を中心にすえていつも私一人だけでは中心においてくれない。なぜだっ！！」

「女王様の拗ね方っ！？」多分マリー＝アントワネットでもそこまでのセリフは言わなかつたと思っただけだ。

「パンがなければ泣いて施しを乞えばいいじゃない」

「ちゃんと庶民の苦しみを理解した上での悪政だ！」性質悪い！最悪だ！

「パンがなければ人から奪えばいいじゃない」

「なにその王妃っ！？自分の国をどうしたいの！？」

「まあ、この言葉通り、王族は庶民によって地位を奪われたわけだ。つまりあの革命はマリー＝アントワネットの予想通りだったと言っただけだ。ただ彼女は王族として国と共に滅びようと心に決めていたからな」

「あの傾国の美女にそんな男気が・・・」だつたら国が傾くような

贅沢な暮らしをやめればよかったのに。・・・って、危ない危ない。さつきさんのつくり話だった。危うく信じるところだった。世界史のテストが大変な事になるところだった。

「あれもいーな、これもいーな（17）が厄（89）を呼んだ、フランス革命。1789年だな」

「好きですねえ、語呂合わせ」しかもこれは普通に使えるそう。間違えて17万1789年と覚えそうだけど・・・。

「君はどんな未来からやって来たのだった!?」
確かに果たして17万後に人類が存在しているかは微妙だ。

「まあ、そうだな。それに17万年続いたとしてもあの革命は長い歴史の中に埋もれてしまっただろうな。歴史とはそう言うものだ。平安時代の貴族は奈良文学を一生懸命勉強していたが、今の君たちにとってはどちらも遠い過去だろう?」

「そっぴいばそうですね・・・」
人類が積み重ねてきたものはただの積み重ねになっちゃってしまう。同じように僕らが生きていたという事実はただの事実になっちゃってしまう。二百年も経てばもう誰も僕のことを覚えていない。延々とそれが繰り返される。その中で、僕らは僕らの幸せをつかまなくてはならない。

「ああつ、気分が悪い!!」

最近の癖でついシリアスマードに入ってしまった僕に対してさつきさんがひどいコメントをしたところで、学校の校門が近づいてきた。

つまり、私を騙したのね。はい、じゃあ死刑 2

文化祭前日という事で、進学校なのに文化祭に異常なほど力を入れているこの学校では今日の授業は一時間で終わり。それから下校時間までクラスごとに準備に入る。中でもこのクラスはお化け屋敷と言う事で、他のクラスよりも装飾が大変だ。

そしてこの僕、文化祭委員たるこの僕が今どうなっているかと言うと、とても意外に思われるかもしれない。

……とても暇だ、ごめんなさい。

いや、ちょっと待ってくれ。言い訳を聞いてくれ。お化け役は1人ずつ衣装合わせをやっているのだが、僕の順番はまだ来ていないのだ。なんでもまだ完成していないらしい。だったら僕も手伝おうと申し出たのだが、まだ秘密だからと意味のわからない説得をされ、結局何もできずにこうしてぼんやりと外を眺めている訳だ。

「はい、漆根君、準備できたよ」

ようやくか、と僕は振り返る。振り返る途中、ちょうど90度のところまで思い止る。今声をかけたのは誰だ。春日井さんとは口調が違う。だが、確かに「漆根君」と呼んだぞ。もしかしてそれは僕の聞き違いで、本当は「苦しめ君」と呼んだのかもしれない。僕は苦しめ君というクラスメイトを寡聞にして知らないが、あだ名でならあるのかもしれない。交友関係が網状でもなく線状でもなく、点な僕は知らなくても当然だ。

「漆根君、早く！」

あれ？今度こそ聞き違いじゃないぞ。確かに僕の名前が呼ばれたぞ。そして僕はもう90度振り返り、振り返り過ぎたので30度戻った。僕に向かって手招きしていたのは衣装の責任者の人だった。ああ、これは夢か。夢なら流れるがままに任せよう。ということで招かれるままに教室の一角に向かう。

「はい、ここに入って」と言われるがままに木で作られた結構手が

込んでいる柵の中に入り、柵の外にいるみんなのほうを向いて立て膝になった。

「それじゃあじつとしててね」

何の準備か僕には皆目見当もつかないが、とにかく僕の目の前には木の台のような物が迫ってきていた。台の部分は中心が半円に削られていて、それが僕の首を絞めるようにフィットした。僕が突然の事態に驚いていると、更に背後から何か僕が僕の首の後ろ半分に着された。まるで僕のためにつくられたみたいだ。

そして思った、これは僕の夢ではない。苦しいまでの現実だ、と。どうやら「苦しめ君」というのは僕のことらしい。耳の横で力チャリ、とまるで留め金をするような音がした。要するに今の僕は処刑されそうになるルフィ状態だというわけだ・・・って処刑！？「あつはつは、漆根、似合うじゃねえか」そう言っつて、笑いながらついたての向こうから出てきたのは、もちろん及川なのだが、なんと大入道の格好だった。スキンヘッドは後頭部まで白塗りにされ、目尻に真っ赤な化粧をされていた。胸筋を強調するように胸元が開かれた装束で、一つ一つが握りこぶしくらいの大きさがある数珠を首から提げている。

「あはははは、なんだ及川、その格好。いつからお前は出家したんだよ」煩惱の塊みたいな男の癖に。

「いや、色欲の塊のお前に言われたくないっつていうか、お前のほうが絶対面白いことになってるからな」そう言っつて眉間に皺を寄せた及川は確かに怖かった。いや、素顔だけで十分怖いけど。大入道には不似合いの携帯を取り出し、僕の写メを取り、首を固定されて身動きできない僕に見せてくれた。

「ええっ！！！」

僕は、さらし首になっていた。

身体は上手く隠されていて、首だけが飛び出している。角度によっては確かに生首に見えるだろう。そして極めつけは僕の横に設置されている看板。残念ながら写メでは文字までは読めないが、罪状に

何を書いてあるかおおむね察しがつく。

「『罪人、漆根耕太。罪状、2年間に渡って1000人を超える乙女を不幸にしたその罪、許しがたく、晒し首の刑に処す』だってよ」「察しがついてるから読まなくていい！」なんだこれは、こんなものを本気で掲示するつもりなのか？僕は首だけじゃなく恥までさらさなければならぬのか？

「だいたい本番は暗がりなんだから字なんて書く必要ないじゃないか！！」

「ていうかこんなむごいこと考えるのは・・・」
世界広しと言えども一人しか心当たりがない。そう、あのさつきさんにさえ師匠と崇め讃えられているあの女性。

「よくわかったわね、もしかしてストーキングでもしていたの？」
やっぱり春日井さんですよ。

春日井さんは僕が涙目で睨んでいる事にも気づかず、悩ましい顔をして腕を組んだ。

「でも・・・どうも、リアリティが足りないのよね」

「いや、十分リアルでしょ。真実過ぎるよ」「1000人を超える、つて言う部分は若干のオブラートに包まれているけど。

本当はもっと多い。全員覚えてるかと聞かれたらちよつと厳しいけど、人数はちゃんと記録している。多分将来的に携帯の4桁の暗証番号にするだろうな、と昔は考えていたものだ。だから、そのオブラートはもしかして春日井さんなりの配慮だろうか。

「いえ、罪状のことではなく、さらし漆根のほうよ」

「さらし漆根っ！？」僕は新種の妖怪なのか？

「うん、だからここから染めた綿とか血糊とかで装飾していくんでしょ？」装飾担当の方が春日井さんに進言した。それでも春日井さんは悩み続ける。僕は突っ込みの準備として大きく息を吸い込んだ。「どうかしら、本当に首を切るといふのは？」

「え・・・」流石の僕も突っ込むことができないセリフだった。だって顔がマジなもの。明らかに周りが引いているもの。僕が告白し

て僕に多大な恨みがあるはずの方々すらも引いてるもの。

ついに春日井さんがクラスにおけるまじめな優等生としての地位を捨てた瞬間だった。

「いいな、それは。ぜひ見てみたい」

「やらねえよっ!!」僕はみんなから見て誰もいない空間にいる春日井さんの弟子に向かって突っ込みをした。さつきからさらされている僕を見て大爆笑している人だ。

春日井さんを含め大多数の人々はちよつとテンポの遅い突っ込みだと判断してくれたらしい。危ない。この格好のまま病院に行くところだった。いや、流石にここからは解放してもらえらるうけど。

「大丈夫よ、斬つてもちゃんと生えてくるから」

「本気な顔でなに言つてんの!? 生えないよ! 切つたらそこで終わりだよ!!」

「え、生えないの・・・? そんな、この間生えるところを見せてくれるって約束したじゃない!」

「言つてないよ!? 仮に言つたとしても明らかに一時のジョークだよ! 高校一年生にもなつてそんな冗談本気にするなよ!!」

そして、そんなセリフの数々を表情豊かに喋るなよ! 周りが本気にしちゃうじゃん!!」

「つまり、私を騙したのね。はい、じゃあ死刑」

「判決はやっ!!」

「それもそうね。じゃあこうしましょう。せつかく裁判員制度があるんだし、私たち高校生もその予行練習と言つ事で。では、漆根君の死刑に賛成の方・・・」

満場一致だった。さつきさんさえもわくわくした顔で手を挙げていた。なにこの無駄にノリのいいクラス・・・。僕はどこで生きればいいんだろうか。いつそのことどっかの大使館に亡命でもしようか。

「それでどうするの・・・?」ついに裝飾担当の責任者が切り出した。

そつだよね、冗談やつてる場合じゃないよね。みんな忙しいもんね。一番忙しい春日井さんが言い出し出してる辺りがおかしいけど。

「誰が斬るの？」と、彼女は言った。

「……」

ガーナ辺りにしようかなあ。

そして僕の首が乗っている台に置かれるカッターナイフ。もともと身動きの取れない僕だが、恐怖で完全に身動きが取れなくなってしまっている。せめてもの抵抗を、とカッターに息を吹きかけて台から落とそうとしたが、僕の肺活量では無理だった。

もう何回改めているか自分でもわからないが、改めて僕の罪の重さを実感した。その時だった。

「おい、春日井さん。暗幕の準備できたから取りにおいで……って何をしているの、やめなさい！！」

僕の位置からは顔は見えないが、この声とゆるい喋り方は眼鏡が素敵な委員長様だ。どうやら僕を助けてくれるらしい。救いの女神だ！

「漆根君なら殺害しても罪に問われないっていうか逆に表彰されるからべつにいいけど、斬ると片づけが面倒でしょ！明日の準備に支障をきたしちゃう。化学の先生に掛け合っただけから毒殺にしなさい！！」

「……」
「やっぱ悪魔だ！！」

とうとう面白がっていたノリのいいクラスメイトたちに哀れみの目で見られる僕。僕の罪を軽く見ていた男子も今後軽々しく女性に告白することはないだろう。

「……冗談よ」「……あは、冗談だつて」

声をそろえて言う2人。僕は首を固定されたまま、いつかこの人たちに冗談交じりに殺されるんだろうなあ、と思った。

つまり、私を騙したのね。はい、じゃあ死刑 3

そして今、暗幕を取りに行くために委員長と僕、そして及川の3人で廊下を歩いている。及川は入道のまま。そして僕は口元に血糊と頭にはちょんまげをつけられていた。及川の場合、既にメイクが済んでいて、落とすのに時間がかかるから仕方がないものの、僕はたった今慌ててメイクを施された。忙しいはずの委員長は眼鏡をきりめかせながら「別にいいよ」と笑顔で待っていてくれた。

「・・・絶対嫌がらせだ」廊下で人にすれ違うたびに異様な目で見られる。そもそも大道具の責任者で力持ちの及川は適任だが、ひよつとしたら運動部に在籍している女子よりも非力かもしれない僕が暗幕を運ぶためにかりだされた意味がわからない。

「なんか宣伝だつて言つてたけどな」及川は別に気にしていないようだ。

「いや、明らかにみんなお前にビビってるからな。しかもなんで僕まで・・・」

「それは彼と私で君にタッグ技をかけるためだよ・・・ねっ？」
他人に見えるようにわざわざ僕らが距離をとって歩いていたのに、そんな僕たちの配慮を一瞬にして打ち崩して、委員長は振り返った。眼鏡が輝いていた。流石の及川も眼鏡が似合う委員長が格闘技ファンというギャップに戸惑っているようだ。

「とりあえずロメロ・スペシャルかけといて。そこにすかさず私がエルボー決めるから」

「両手両足をきめ、身動き取れない状態でテーブルのように天に向かつて差し出されるだけでなくそこから僕の内臓を潰しかかるんですかっ!？」説明しづらい!何でそんなマニアックな関節技を選んだんだ?

そうか、マニアだからか!

「反応が鋭いなあ。でも私は観戦専門だからやらないよ」

「それは自分は手を下さないけど誰かが僕の内臓を潰すのをほくそ笑みながら見るって言う事ですかっ!？」

「あつたり〜」目の前で手をパンと合わせた。

いい笑顔だ。そしてそろそろこの会話を終わらせないとさつきから僕の横でエルボーの素振りをしているさつきさんが本気でやりかねない。

「そついえばさ、ずっと聞きそびれてただけど、お前ってクラスの行事に積極的に参加するようなキャラだったっけ？」僕は及川に尋ねる。僕が言えたことじゃないけど。

「どうでもいいだろ、そんなの。お前が告白しなくなったのと似たようなもんだ」及川は気だるそうに言った。

要するに及川は気分の問題と言いたいんだろうが、その原因は僕にとつて、地球が新たにもう1つできちゃった、くらいの大事件なので、及川に何かあつたんじゃないかと心配してしまった。

「えっ、君最近発情してないの？」

言い方つてもんがないのか!？しかもこんな廊下で。

「ああ、もう1カ月半くらいご無沙汰だ」

お前は敬語を使えよ、及川。というか委員長と喋るな。お前が余計なこと吹き込むと、今度こそ僕の命が危ないんだよ!そしてこんな廊下で人の恥をさらすな!

「いいだろ、お前は生きてるだけで恥さらしなんだよ」

「しんらつなことを言うなよ!」

「確かに辛辣なことを言ったが、ちゃんと漢字を使え!そんなに深刻じゃないみたいに聞こえるだろうが!」

深刻らしい。しんこくではなく深刻らしい。

「ああ、そっか。ついに愚かにも毒牙にかかるものが・・・」ふらりとよるめく委員長の両足。絶望を秘めた眼差し。窓から当たる陽光がスポットライトに見えた。

「いや、こいつに彼女とかありえないから」と及川。断言しやがった。

「だよね〜」とけろりとした表情の委員長。
肯定しやがった。

「当然だ」と腕を組んでいるさつきさん。
後押ししやがった。

暗幕を持って、僕と及川が教室に戻ると、僕が担当する部分だけに妙に頑丈な柵がつくられていた。いや、柵というよりも檻だろうか、これは。

「でもさ、これって場所とりすぎじゃない？」ものすごくほかのみんなに申し訳ない気がする。そして残念ながらこんな期待されても僕は人を怖がらせる自信がない。

「これでも最低限の配慮よ。どうせ漆根君のことだから暗闇に乘じてセクハラするつもりだったんでしょ。残念でした。女子全員で週末に夜遅くまで話し合っつて議論して、先回りさせてもらったわ」

「すごいこと言ったな！」しかも結構さりと。
しかし本当に僕の評価は地に落ちてる、というか地中深くに埋まっているんだなあ。

「まあ、最初から僕にそんな度胸はないけどね」

「度胸はないけどつい手が出てしまう男、漆根耕太の魔の手から世界を救おう、が今月の先生方の教育目標だそうよ」

「この学校おかしいよ・・・」ついに先生方も僕の皮膚から分泌される毒素にやられてしまったんだろうか。

とにかく、不満はありまくる役どころだが、準備してくれたみんなの手前、僕に拒否権はなかった。そして人権もない。多分拒否したらこの場で本当にさらし首になるだろう。

つまり、私を騙したのね。はい、じゃあ死刑 4

その後、全員で準備を完了して、明日の役割分担を確認。僕と及川は役柄上代役を立てるのが難しいので、休みは少ない（及川は身体的な意味で、僕は存在的な意味で）。お化け屋敷自体の休憩時間くらいしか休みがないが、特にやりたいこともないので、別にいいだろう。

春日井さんという受付係で、交代が多いので明日の仕事は少ないが、今まで頑張ってきた春日井さんなのだから当然だろう。

早め早めの準備が幸いして、僕らのクラスは早く解散することができた。というわけ久しぶりにさつきさんと家に帰ることにする。

「緊張するな、耕太。これは明日が楽しみすぎて今夜は寝付けないかもしれない」かわいい人だった。今日はいじめられすぎてさすがの僕でも心が荒んでいたの、さつきさんは何にもまさる癒しとなる。

「寝付けなくてイライラして、寝ている耕太を殴ってしまうかもしれないが、その時は許せ」

「許せるかつ！」だめだった。いじめられすぎて僕の心はもう不毛の大地だった。

「僕は楽しみというよりも怖いですね。……自分がどんな扱いを受けるのか」

春日井さんなんてさつき、被害者の会のメンバーが訪れた時のために、僕に投げ当てる用の石を本気で用意してたし。さすがにそれは良識あるクラスの面々が止めてくれたが、もう僕の肝は冷えたなんてもんじゃない、凍りついた。

「お化け役がチワワのように震えるんじゃない！」

「無茶言わないで下さいよ。明日には僕の頭が自分の胴体とこんちわしてるかもしれないんですよ」

「君はやんわりといったつもりかもしれないが、逆に怖くなってい

るからな」

「僕が感じている恐怖の100分の1でもわかっていただければ幸いです」

「やれやれ、君ほどの男が何をいまさら恐れているんだか。自分からセルを完全体にしたくせにボロボロにやられてビビってるべー夕みたいだな」

「そこまで残念なんですかっ!？」

「だって、あれは……ねえ？」

「そういうところがあるから僕はベジー 嫌いなんですよ」

「そうか。まあ、ベータも君のことは嫌いだがな」

「くっ……」さつきさんの毒舌スキルが上がっている、だと。

これが弟子入りの成果なのか？

10分ほどで家に着き、玄関のドアを開けた。いつも通りつむぎのリアクションはなし。僕は部屋に戻り、鏡を見ると、落とし忘れた血のメイクが口から顎まで滴っていた。

「だから道行く人々が僕の顔見て避けてたのか……。ていうかさつきさん気付いてたでしょ！言ってくださいよ！」さつきさんは今日一日テンションが上がっていたから疲れたのだろう、ベッドでごろごろしていた。

いや、いつもごろごろしてるけど。

「馬鹿を言うなっ！君は私の楽しみを奪うというのか！」

「そこまで言うのか……。じゃあ僕は恥をかく方を選ぼうかな。僕の恥なんていまさら安いもんだし。」

「さて、今日くらいはつむぎの手伝いをするか」

最近忙しくて夕飯はつむぎ一人で行っていたから、時間のある今日くらいは手伝おう。って、いつも僕は忙しくないし、普段からつむぎ一人で行っていたんだけど……。

とにかく、そういう後ろめたさがあったって、僕は1階に降りる。

「なに、耕兄。暇なら散歩でもしてくれば」相変わらずの出会いがしらの一撃だった。だがしかし、これくらい普通普通。どこの家で

もこんなものだろ。

「何か手伝うよ」

「キッチンには入らなくていいわ。配膳をやって」

「・・・はい」いつの間にかキッチンを聖域にしている妹だった。

主婦はキッチンに他人が入ってくるのを嫌がるって聞いたことあるけど、そんなようなものだろうか。はて、いつから僕の妹は主婦になっただんだ？

「明日からだっけ」

箸を並べている僕に突然つむぎは切り出した。明日からってなんだろう。つむぎがキッチンを聖域にする日だろうか。

「文化祭」つむぎはこちらを見ないで味見をしている。多分煮物だろう。また料理のバリエーションが増えたらしい。

シユウ君に毎日つむぎの手料理を食べていると言ったらどうなるだろうか。恨まれることは必至だ。

「ああ、そうだよ。明日は校内だけの発表。明後日は学校を開放して一般の人たちも来るよ」

「あたしも行くことになったから・・・友達が行きたいって」

「へえ、友達ね。シユウ君とは来ないの？」

と、取り皿を並べながら僕が尋ねるとつむぎはため息をついた。

「はあ・・・。耕兄は中学時代、というか人生で彼女がいらないからわからないかもしれないけど、中学生のカップルは堂々と行動できないものなの」

「・・・」戸棚から茶碗を取り出しながら、肩を震わせて必死に涙をこらえる僕。

「まあ、シユウ君も友達と行くって言ったから会うことはあるかもしれないけど」

「あ、そ」妹からノロケ話を聞かされるとは思わなかった。

まあ、つむぎとシユウ君はぜひ応援したいカップルなので、別に悪い気はしない。

「あたしはどうでもいいんだけど、それでシユウ君が耕兄の出し物

も見たいって言ってるんだけど。あたしはどうでもいいんだけどね、
耕兄の教室つてどこ？あたしはどうでもいいんだけど」

「いや、そんなに連呼しなくてもどうでもよさは伝わってるから。

・・4組だよ」来てほしくないなあ。だって、あんななもの。

「そ、わかつたわ。じゃあ、明日行くから」

「だから明日は校内の出し物だからな。金曜日の明日はちゃんと学
校に行けよ」

「言い間違えただけよ!」

つむぎは間違いを指摘されて怒ったのか、それから口をきかなかっ
たが、煮物はめちやくちやおいしかった。というわけで僕とさつき
さんは明日のために活力をもらい、がつつり寝た。ちなみにさつき
さんは僕より寝付くのが早かった。

あなたは自分の守護霊にも告白したのっ!？ 1

翌日も僕が目覚ましを止め、さつきさんの猛攻をかわした。朝に少し準備あるので、いつもより早い。つむぎはまだ寝ているようだった。さつきさんは僕がトイレに入っているほんの少しの隙をついて、白装束に着替えていた。僕は涙目でさつきさんを睨み、しかし、その新鮮な姿に見蕩れると、恥ずかしがられ、怒られた。

さすがに早すぎたのか、僕の登校ルートには僕とさつきさんしかいなかった。というわけで今日は回り道せず、堂々と学校に行くことにする。

「そもそもだ、人間を2種類に分ければ自分か他人以外に分けられないと思うのだ、私は。ゆえに自己中心であることはそれほど悪いことだとは思わない。なんせ他人の幸福を自分では感じる事ができないんだからな。他人の幸福が喜びだというのは、その他人が幸福のゆえんが自分にあり、自分に感謝を持ってくれるからだろう。それはつまり、自分のためになるからだ」

「え、なに突然言い出してるんですか!？」本当に突然だったのだ。さつきさんは哲学を語りだしたのだった。

「しかし、最近の日本ではこの自己中心の範囲が狭すぎる。他人に奉仕して、ほんの少しでも自分に返ってくれば、それはそれで自己中心といえるのではないか。そこまで自己中心の定義にはめれば、自己中心であることはむしろ推奨されることだと思っぞ」

「オチ、ありますか?」

「ない!」

「ないんかい!」じゃあ、もういいよ。つまらない会話なんて時間の無駄だ。

「よし!君もようやく笑いなしでは生きなれない体になったか」

「しまった!いつの間につ!」明らかにさつきさんの洗脳だった。

もう、僕は元に戻れそうにない。

「いいのではないか。自分が楽しいから周囲に笑いを提供する。自己中心だ」

「おお、なんか僕って捨てたもんじゃないなって思いました」こんなすがすがしい気分は久しぶりだ。

「そうだろう。だから、死んじや駄目だ!」

「えっ、いつ僕に死亡フラグが立ったんですか!？」僕は頑張つて今日を生きてるよ!

「君は今日、死んだ方がまし、と思うことになるだろう・・・」さつきさんが深刻な顔で僕を見た。

「ものすごいリアリティをはらんでいるんで一概に否定することができません・・・」なんせ全校生徒に僕の恥をさらすんだもん・・・。お客さんの懐中電灯が看板を照らさないことを祈ろう。もっとも、すでに学校の多くの人は僕の恥を知っているんだけど。生徒どころか先生まで知ってるんだけど。

「いいんです。それも含めて今の僕ですからね。僕はちゃんと生きること決めてるんですよ」後ろ向きだが、それでも前に歩いていけるのは、多分さつきさんのおかげだろう。

本当に、心の底から感謝している。

「ちっ」

「ちっ!？」なんで?なんで舌打ち!?

「君は3歩下がってそこで転ぶから面白いのに・・・」

「最悪な一言だ!」今までのいい気分を返せ!

「それはできない、私が楽しいからな。自己中心は推奨されるべきものだろう?」

「結局そうやって自己弁護に走るんですね。いいですよ、僕はそんな世間の荒波にも負けずに頑張つて生きていきますから」

僕は顔をあげて学校を見据える。大きく息を吸って、校門に足を踏み入れた。

「あら早いわね、漆根君。そんなにやる気を出してもあなたにでき

ることは首と恥をさらされることだけよ」

教室に入ると、春日井さんのほかにも数人来ていて、点検をしていた。僕も一応暗幕が破れていないかや光が入り込まないかをチェックする。異常なし。ていうか昨日手持ちぶたさに何十回とチェックしたので、誰かがいたずらでもしない限り、何かが変わっているはずがない。まあ、勝負ごとなので、その可能性も考慮しておいて損はないだろう。

お化け役といえども、まず全校で開会式なるものがあるので、まだ衣装を着たりメイクをしたりができない。教室にいても邪魔なので、ふらふらしていることにした。

「いいところに漆根君」廊下に出たとたんだった。そんなわけがないのに、まるで待ち伏せしていたように眼鏡が素敵な委員長がそこにいた。

間違いない春日井さんより大変な役職なのに、それを苦にしている様子もなく、今日もやっぱり素敵な眼鏡と笑顔だった。

「さあ、暇な漆根君は荷物運びだね」親指を立て、体操のお兄さんのように委員長は言う。

本当にぴったりなタイミングだった。まるで春日井さんと示し合わせて僕をここで待っていたみたいだ。そんなことあるわけがないからね。

「いっぱいあるよー。昨日のうちにやっておこうと思ったんだけど、どのクラスも忙しくて人が割けなくてねー。まあ、君はさらし首役だから今日は筋肉痛で腕が上がらなくなっても別にいいよね」本当はあの恰好を維持するためにさらし台の下で手をつくのだが、その設計を知らない委員長にそれを悟ってもらうのは無理というものだろう。そもそも委員長の頼みごとを断る権利など僕にはないので、おとなしく手伝うことにする。これもさつきさん流の自己中心だろうか。

「おっ、最近君力ついてきたねー。私の特訓の成果かな？」

「特訓だったんですか？」どうりで委員長に会うたびに重いものを

運ばされるわけだ。

しかし力ついたかな？昨日の暗幕だけでも今日の僕はちよつと筋肉痛来てるんだけどな。

「このままいけば君をプロレスラーにすることも夢じゃないかも」

「そんな願望があつたんですかっ!?」そつなつたら委員長が僕のファンになつてくれたりするんだらうか。

「ううん、漆根君がリングでばこほこにやられるのを楽しく観戦するんだよ」

「想像を絶するスパンの復讐だっ!!」バイオレンスだよなあ、ほんと。

眼鏡は誰でもまじめに見えちゃうから怖い。

「その映像を被害者の会に売って私は大もつけよ」

「えらく俗物的ですね・・・」

「845人だからいくらかな・・・?」

「ちよつと待て！前よりも300人以上増えてるよっ!!」あれから僕何もしてないぞ。

なんでハツカネズミのように増えてるんだ!

「そうそう、リーダーが変わつたのよ。猿からトキになつたの」

「天然記念物に告白はしていない!」トキつて・・・。最近放された二羽のどちらかじゃん。いや、確かメスは一羽だったから、テレビに映つてたあれが今のリーダーか。

「ほらほら、無駄口叩いてていいのかな？荷物はこれだけじゃないんだよ?」委員長は楽しそうだった。

いや、普段から笑顔を絶やさない人だから、判断できないけど。笑顔以外で僕が見たことある顔は会議中のまじめな顔か、前に僕を睨んでいたあの顔だけだ。

とにかく、ほかの応援を呼ぶ気はないようなので、僕は頑張る。すべて運び終えて教室に戻った頃には、僕以外のすべての人が揃つていて、僕の両腕は上がらなくなつていた。

あなたは自分の守護霊にも告白したのっ!？ 2

さて、開会式も終わり、ついに全員の衣装とメイクが完了し、配置につき、暗幕が閉められて真っ暗になった。暗い上に身動きが取れないので、すぐ横に立っているはずのさつきさんの姿が見えなくなっていました。

「これは確かに緊張しますね」ちなみに僕の周囲に人はいない。入口の及川のそばにも確かいないはずだ。僕らはメインらしい。及川はともかく僕はその期待に答えられるかは置いといて、だから小声ならさつきさんに話しかけられる。

「う、うむ。こ、耕太。トイレに行ってきたもいいだろうか？」さつきさんはめっちゃくちゃ緊張していた。残念ながら我慢してもらったことになる。なんで幽霊が人を脅かすのに緊張してんだらう。改めてさつきさんの幽霊っぽくなさを認識した。

「きゃあああ〜」

ついに、ご婦人の悲鳴とともにお化け屋敷がオープンした。お化け屋敷っぽいBGMがあたりに響いて、こっちも怖くなってしまふ。なるほど、この雰囲気なら結構いけるんじゃないだろうか。

「すまん、耕太。少し様子を見させてくれ」と、姿を見せるのを断念したさつきさんとは違って、僕は姿を隠すことなどできない。できればそうしたいのだが、こうなったら首でも恥でも何でもさらすことにした。

「この恨み、はらさでおくべきか・・・」喉から絞り出すような声を上げる。6パターンくらいセリフを用意してもらった(周りとかぶるわけにはいかないので、よほど奇抜でもない限りこのパターン以外は使えない)が、このセリフは明らかに僕が誰かから言われうべきセリフだらう。

「いやあああ!」と、気持ちのいい悲鳴を上げてくれた。

一組に一つだけ持たされる懐中電灯が向けられて眩しいが、眩しそ

うな顔はしない。そういうことすると冷めるらしいのだ。お化けが現実に屈しちゃいけないわけだ。さつきさんに教えてあげたかった。なんせビビって隠れちゃう幽霊なんだから。

5 組くらい脅かしたが、結構怖がつてくれている。脅かし冥利に尽きるものだ。どうやらこの姿、暗闇で見ると本当にさらし首に見えるらしい。

「大丈夫だって、怖くねえよ、こんなの」入口の方で声がした。おそらくカップルだろう。もうぶち壊してしまいたい僕だが、そんなカップルの雰囲気づくりに一役買ってしまうわけだ。だが、そんなかつこつきたい男には入口付近での洗練が待っている。

「うわああああ、及川だー!!」

いや、素直にお化けにビビってやれよ。なんで誰が扮装しているかわかった上でのビビりなんだよ。さすがに及川がかわいそうだった。

「きゃあああ、漆根耕太!!」

「……」今度は僕の目の前で彼女の方が腰を抜かしてしまった。

逆光で顔が見えないのはよかった。そうでもないと本気で謝ってしまいそうだ。及川を見て恐怖を植え付けられてしまった彼氏の方が彼女を必死で起こそうとしている。何とか肩に担いで、次のルートに進んでいく。ちなみに僕がちょうど真ん中の位置なので、まだまだ先がある。大丈夫だろうか。

「さつきさん。割と大丈夫そうですね。そろそろ出てきたらどうですか？」人がまだ来ていないときにさつきさんに小声で話しかけてみる。暗がりで見えないが、トイレに行っていたりしたらどうしよう。僕は一人なのに誰かに話しかけてる変人になっちゃおう。

「……あ、最近の僕に対する周りの評価か。

「君がフォローしないからだ!」

昨日よりも僕の首はしっかりと固定されているのでよくわからないが、さつきさんは僕を睨んでいるようだった。

「ほら、来ますよ。僕をじっと睨んでいる感じがいいですから出て

ください」

衝立の向こうから懐中電灯の光がやってくる。その光は僕とさつきさんを照らして止まった。

「おい、あれ誰だ？4組にあんな美人の女子がいたか？」

どうしてこいつらは男二人でお化け屋敷にやってきたんだろう。そういう関係なのだろうか。どうやら口ぶりからして同じ一年生のようだった。

「え……？」

男の手から懐中電灯が落ちた。

「お、おい、今確かに、消え……」

どうやらさつきさんが耐えかねて消えたらしい。どんだけ恥ずかしがり屋なんだ。そしてちくしょう、どんだけ僕の食指をくすぐりやがる。

「うわああああ！！」

「おい、ちよつと待ってくれよ！」

逃げ出した一人をもう一人が懐中電灯を拾って追う。ちなみに懐中電灯を持っていない一人はすぐ近くのお化けにぶつかっただらしく、もう一度大きく悲鳴を上げた。

「さつきさん……」

「仕方ないだろう。私は人見知りなのだ」さつきさんが口をとがらせてすねている姿が目に見えた。

「いえ、結果オーライです」多分トラウマものの恐怖だろう。目の前で突然女性が消えたのだ。おそらく彼らは一生涯心霊スポットに行くことはないだろう。

「本当か！？」さつきさんはうれしそうだった。人を脅かせたことに幽霊なりの喜びを見出したのかもしれない。

「ほら、次、来ますよ」

昼休みになって、1時間の休憩に入る。僕らお化け役は校内をうろろすると今後興が削げてしまう可能性があるので、メイクを落と

して衣装を脱いで外に出るか、教室の中で誰かに昼食を持ってきてもらうかを選ばなくてはならない。

僕は簡単にメイクできるが、及川の白塗りは大変なので、僕も付き合って教室で食べることにした。さつきさんはこっそりと外にある僕の鞆の中から弁当を取り出して一人で食べるそうだ。とても機嫌が好さそうで、僕もなんだか嬉しくなってしまった。僕の分は交代でお化け役をやっている男子が外の出店で焼きそばを買ってきてくれた。

「なんかお前のところ、相当ビビられてねえか？」白塗りの大入道の姿のまま、及川が僕に言った。大入道がフランクフルトを頬張っている姿はなかなか異様だった。大入道って一応仏道の人だから野菜を食べよ！って話だ。

「それを言うならお前だってかなり叫ばれてるだろ」

「まあな」及川はハンバーガーを頬張る。

そんなに気にしてはいないらしい。ちよつとうらやましかつた。何せさつき女の子が一人僕の名前を叫びながら失神しかけてたから。

ちらつと懐中電灯が彼女の顔を映して、とっさに謝りそうになったから。夜道を一人で歩くのは金輪際やめようと思った瞬間だった。

・・・万が一彼女にあつてしまつたら夜道で突然土下座されるといふ一生もののトラウマを植え付けてしまふかもしれないからな。

「ちよつと、漆根君」春日井さんが近づいてきた。

「ん、なに？」血が滴つた口元で笑顔を向ける。

春日井さんがちよつと引いていた。なんだろう、ここまで来ると脅かすのが楽しくなってきた。驚いたことが悔しかったのだろう、春日井さんは一つ咳払いをした。

「途中でさらし首を睨んでいるのは誰だ、っていう質問が十数人から来ているのだけれど、何かしたのかしら？」

心配そうな表情だった。見たものしか信じない春日井さんといえど、そう多くの人の報告を聞けば、本物の幽霊が出たんじゃないかと訝しみもするだろう。

「あ、いや、わからないよ。僕は何も知らないよ」「うーむ、僕が勝手に用意した装置とでも言えばよかったか？でも僕は嘘をつくときぐボロが出る男だし。」

「参ったわね。こういうのってお祓いとかすべきなのかしら。間違はなく漆根君を恨みながら死んだ女性の霊よね」

「僕に告白されたせいで死んだとでも！？」それはさすがにひどすぎる物言いだった。

春日井さんもそこは常識外だと思ったらしい、ちゃんと素直に謝った。

「じゃあ生霊か何かかしら。心当たりない？髪長い白い服着た人らしいのだけれど」

「うーん」心当たりはありまくる。今頃テンションあがりながら一人でお弁当を頬張っている人だ。だが、それを明かすと本当に春日井さんに引かれ、僕のお家は病院になる。

「私、かしら・・・」

「怖っ!？」

いや、確かに似てはいるけど。僕を恨んでいる点でもよく似ているけど。しかし生霊となるくらいまで僕は恨まれていたのか。久しぶりに超シヨックだ。

「たぶん僕の守護霊じゃないかな」適当に言ってみる。

「あなたは自分の守護霊にも告白したのっ!？」
「したけどね。」

「おい春日井、ほかのところは何ともないんだろ？だったら別に問題ねえよ。こいつは鈍感だからな。道端でのっぺらぼつと30分くらい会話してもそれがのっぺらぼつだと気付かないくらいの鈍感だ」「僕だって話すときはちゃんと相手の顔を見るよ!」鈍感関係ないじゃん!

「それもそうかも。そうね、何かあっても害をこうむるのは漆根君一人だし」

「・・・」悲しくなるなあ。

「僕の守護霊にはやりすぎないように言っておくよ」
僕は本気でそう言ったが、春日井さんは冗談として受け取ったらしい。ものすごく適当にあしらわれて、行ってしまった。

あなたは自分の守護霊にも告白したのっ!？ 3

午後の部。明日になると一般のお客さんが大勢来るので、生徒は今日のうちにいるいろいろな出し物を回ろうとしている。残念ながらお化け屋敷が終了してから今日の閉会式までの一時間しか僕と及川は遊べないけど、それは別にいいだろう。むしろいいだろう。何せこの学校には僕を殺そうとする被害者の会のメンバーがあふれているのだから。

さらに本物の幽霊が出る、という噂が広まってしまったらしく、なんかすごい数の人が来た。男の若い先生とかも来た。楽しんでいる感じだったが、さすがに先生にまで問題視されると中止になりかねないので、さつきさんには休んでいてもらう。

「いいんだぞ、耕太。正確に「消えてくれ」と言っても」

せっかくオブラートに包んだ僕の言い方をわざわざさつきさんは言い直した。確かに正確な言葉の使い方だが、言葉の響きがターゲットに銃を突きつけている殺し屋の一言みたいになっている。

「いやいや、無理ですよ。僕そのセリフ、トラウマですから」

言われたなあ。最近だと春日井さんに。銃ならぬシャープペンを右目のあたりに突きつけられて。ただ、気取ったような言葉づかいは萌えてしまったものだ。

前にも言っていた通り、誰にでも見える「アピールタイム」(命名さつきさん。僕ではない。断じて!!)は疲れるらしく、だいたい3回に1回くらいのペースになった。明日になるともっと大変になるので、今日中にどれくらいならいけるのか試してみるそうだ。

まじめな話をすると、試してみると言えば、今日の出し物自体がそれで。今日一日やってみて、少し改変するらしい。出し物の順位付けは来客にもらうことになっている。ようするに本番は明日だ。「破滅しろ……」

僕は言う。大多数の人からすれば、いやお前が破滅しろよ、って感

じだが、しょうがない。何せ僕に用意されたセリフはすべて謀ったように僕に跳ね返ってくるような言葉なのだから。

「きゃああああ！」

ついに悲鳴を上げつつ懐中電灯を僕に向かって投げつけてくる女子に遭遇してしまった。もちろん僕は身動き一つとることができない。1カ月たつてようやく治ってきた額の傷に当たり、血が出たのがわかる。彼女はぐったりしてしまい、一緒にいた女の子に抱きかかえられるようにしてようやく立ち上がった。

「あ、ごめん。懐中電灯持ってたね」その子を安心させるためでもないが、できる限りの笑顔を見せる僕。

額から血が滴った血の味がした。そして懐中電灯は僕の下から照らされているわけで、血まみれで笑顔のさらし首（というか漆根耕太）は相当な怖さを演出したのだろう。隣にいて、今は休んでいる（消えているのではなく、休んでいる）さつきさんさえも悲鳴を上げた。もちろんさつきさんの声はもちろん女の子たちには届かないのだが、それとは無関係に抱きかかえていた女の子も腰を抜かしてしまったらしい。2人して座り込んでしまった。

さて、ここで問題。僕は今とても助けに行きたいのだけど、僕の首は例によって南京錠でがっちり固定されている。

というわけですぐに僕は次に脅かす位置にいるミイラ男さんと呼んで、来てもらい、事情を話すと、ミイラ男さんが出口で懐中電灯の回収をしていた春日井さんと呼んできた。

そして春日井さんさえも僕を見て悲鳴を上げた。こっちがびつくりした。春日井さんがまさかあんな筆舌に尽くしがたいほどかわいらしい悲鳴を上げるなんて思わなかった。春日井さんの表情が見えなくてよかったと思う。きつと僕なんかギャップでイチコロだっただろう。さすがにもう一度告白したら殺されてしまうだろうから。

というわけで春日井さんの助けで女の子たちは泣きながら外に導かれ、僕は春日井さんに目をそらされながら血を拭ってもらい、お化け屋敷は再開された。傷は前よりは浅かったらしく、血はすぐに止

まった。

「……明日はさらし台の鍵を外してもらるように真剣に懇願してみよう。ていうかなんてぼくは当たり前のように鍵をかけられて黙っていたんだらうか。Mなのか？」

「……否定ができない！」

そんなこともあり、終わった頃には僕の疲労はピークだった。メイクは落とすだけなら簡単なので、すぐに落して、鏡を見る。血はすでに固まっていた。絆創膏をつけることはお化け役としてのプライドが許さないので、明日は軟膏でも塗っておこう。

「喫茶店でも行こうぜ、漆根」

というわけで僕と及川は地球上でもっとも非人道的な引き算の勝者である2年生が開いている喫茶店に行った。服装はそのままなので廊下を歩けば例によってじろじろ見られる。

「よくお前は平気だよな」僕なんか耐えられない。

「俺はお前と違って恥をさらしてるわけじゃねえからな」

「恥って言ったな！」

「私たちもお邪魔していいかしら？」春日井さんが友達を3人連れてやってきた。もちろん断る理由はない。

「ライバルはチェックしておきたいのよ」

喫茶店が好まれる理由は楽だから、だけではない。単純にほかの出し物よりも大人びたつくりにしやすいし、入りやすいので、票を集めやすい。去年と一昨年のグランプリは喫茶店だったそう。だから春日井さんが僕らと喫茶店に行こうと言ったのはものついでだ。僕たちは携帯ストラップのようなものだろう。

終了時間が近づいてきて食材が底を尽きかけていたので、僕らはすんなり入ることができた。春日井さんたちは内装をチェックしている。僕と及川は残されたメニューを確認して、6人がけのテーブルに座った。ちなみにさつきさんは校内をぶらぶらしてくる、と気に入っている自作の白装束のまま行ってしまった。

「うちも結構繁盛しているわ。常に人が並んでいたし、最後には断

らなければならなかったわ。明日はもつと大変になるかも。漆根君、死なないでね」

「えっ！？いつ僕に死亡フラグが！？」

「整理券は用意していなかったから、入場を断った方には入場券代わりに1人1つの手榴弾を渡しておいたわ」

「君は自分の教室を戦後の日本にするつもりなの！？」

「というより、どこで仕入れた、手榴弾！」

「まだぬるいわ。これは復讐なのよ！」

「いやいや何言っちゃってんのっ！？どうしたの突然！？」壊れちゃった。春日井さんが壊れちゃったよ！

「漆根君に脅かされるなんて、人類史が始まって以来の失態だわ・・・」
「気にしていたらしい。多分脅かしたことよりもあの悲鳴を。」

「何せかわいかったからな！。現代のツールに保存することはかなわなかったけど、僕の脳内には永久保存だぜ！でも出力はしない。あれは僕のものだ！！」

「あーあ、これから私のあだ名は3年間あの悲鳴になるんだわ・・・」
漆根君のせいよ」

「いやいや、なんでいちいち春日井さんと呼ぶたびに絶叫なんかしなくちゃいけないの！？」

「絶叫なんかしてないわよっ！！」

「キレ出した春日井さんだった。ていうか今この人確実に自分で墓穴掘ったよね。」

「はあ、私の「あいつそんなに怖くないのになんであんな気合い入れちゃってんの、恥ずかしっ」計画が・・・」

「そんな計画だったの！？」
「ていうかあの悲鳴はそこまで大失態だったの！？別に女の子っぽくてよかったと思いますぜ。」

「策士策に溺れるとはこのことね」

「いや、明らかに策自体が最初から溺れてたけどね」
「どつりで僕だけえらくしつかりと作られていたわけだ。ということは僕はみんなの期待を裏切っちゃったわけか。ああ、僕の最終チャンスが。」

「でもいいじゃん。結果的に反響よかっただからさ」

「はんつ、自慢？」

「.....」

そこまで悪いことしたかなあ。

そうこうしている間に午後の部終了の時間が来てしまい、僕らは自分たちの教室に戻る。僕が春日井さんの怒りを受けている間、及川たちも及川たちで楽しく話していたらしい。おっと、危ない。及川たち「は」だ。僕はそれなりに楽しかったけど、怒っていた春日井さんはそうでもないだろう。まったく、申し訳ない。

まいったなあ、明日には春日井さんにも楽しんでもらわなきゃ、と僕は真剣に考えながら教室に戻った。

放送で明日も頑張りましょう的なアナウンスがなされ、それから下校時間までは壊れてしまったセットを修理したり、今日一日で見つけた問題点を改善したりの時間に当てることになる。もちろん僕には改善案を考えるような頭脳はないので、及川に従って修理を手伝うことになる。僕に激情した女子生徒によって蹴破られた柵は直すのがめんどろだし、そっちの方が趣が出るというこじつけでそのままにされた。

ちなみに僕の必死の懇願によって、明日は僕のさらし台に鍵がかけられないことになった。春日井さんは最後まで反対していたけど。

あなたは自分の守護霊にも告白したのっ!？ 4

帰り道、さつきさんはいつになく上機嫌だった。もう今にもスキップをしそうなくらい。しかし、残念ながらさつきさんはスキップができないらしい。不器用な人なのだ。じゃあ代わりの僕がスキップをしようかと思っただが、周りの目が怖かったのでやめておいた。昨日と違って今日は人が多い。

「まさかこんなに私に驚いてくれるとはな」

「さつきさんが怖かったんでしょね」そりゃあね。しっかりとした雰囲気の中本物の幽霊を見れば誰だって驚くだろう。

多分幽霊っているのはそれがわかってるから心霊スポットは繁華街ではなく廃墟とかトンネルとかになるのではないだろうか。幽霊事情も結構大変だ。

「む、私が怖い？私が強面ということか、ばかもの！」全く見当違いの方向に怒りだした。

周りに人がいたし、怒りだしたさつきさんがかわいかったのでそのままにしておいた。

「ただいま」一日中低い声で唸っていたのでちよつと怖い感じのただいまになってしまった。リビングの方でどたとと音がして、しばらくしてつむぎが出てきた。

「なんだ、耕兄か」誰だと思っただらうか。

「どうかしたのか？なんか今騒がしかったけど」拾ってきた捨て猫が暴れたみたいなの。

「なんでもない。別に変な声がしたからびっくりしてつまずいたわけじゃないわよ！」

「・・・・・・・・」
言わなきゃいいのに。素直な妹だった。本当に詐欺師になれない性格だった。

「疲れたから今日は早く寝るよ。明日も早いし。とりあえず先にお

風呂に入ろうかな。お風呂洗ってくるよ」

「もう洗った」間髪いれぬ返事だった。

「あ、ありがとう。あつ、まだ洗濯物畳んでなかったら。じゃあ僕はそれを・・・」

「もう畳んだ」言葉が遮られた。

「じゃあ・・・」

「もうつくった。今すぐ食べられるから」即答だった。

「・・・」あれ？何この至れり尽くせり。

「もう済んだ」

「・・・そう」

何が済んだかわからないが、僕が思いつくよりもつむぎが思いつく家事の方が多く、それもすでに終わったらしい。メイドにでもなればいいと思う。

「では夕飯をいただきます」

そこで主人気取りになれば僕も立派な何かになれるかもしれないけど、あいにく僕にそれはできない。せいぜい執事気取りが関の山だ。というわけで、何かいつもより気合いの入った夕飯をいただき、「あたしが洗うから耕兄はお風呂に入ってきたさい」というつむぎに食器の洗い物を任せ、もしかしたらつむぎがいつの間にか誰かと入れ替わってしまったんじゃないかという不安を覚えつつも一番風呂を浴び、つむぎがお風呂に入っている間にさつきさんにご飯を食べてもらい、

「さすがつむぎだ、耕太とはレベルが違う」と妹の料理を絶賛されるついでにけなされ、なにもやることなくって寝れるようになったのはいつもより2時間早い時間だった。もちろんまだ寝るつもりはない。

「なんなんでしょう、この至れり尽くせり。こう言っちゃなんですが、若干気持悪いんですが」布団に胡坐をかきながら、白装束を脱いで寝間着姿になったさつきさんを見た。どっちのさつきさんも素敵だ。

「かわいい妹ではないか。頑張っている兄のためにこうしている
る尽くしてくれるとは」

ああ、そういうことだったのか、と僕は手を打った。てっきりこう
して飴を与えておいて最後にドン、だと思っていた。

「まったく、人の心を押し量れないというのも罪だな。君はもう手
を売ってしまうといい」

「誰が買うの!？」そういうコレクターの方がいらっしやるの!？」

「しかし私はなかなか疲れたな。だからと言って眠れそうにはない。
アドレナリンが分泌されているからな」と言いつつもさつきさんは
大きく欠伸をした。あくびも絵になる人だ。ずるい。

「僕はあれですね。目をつぶると今日僕を見て驚いた数々の人の顔
がリフレインされます」

懐中電灯の角度によってはたまに見えてしまうのだ。僕は脅かす人
の方を睨み続けなさいといけないという自己矛盾をふんだんに含んだ
キヤラなので、眼をそらすわけにはいかないのだ。現実からもな!!

「だから目はかなり疲れてますけどね」眼薬は必需品だ。普段はさ
さないで、昨日言われて夕食後に買って来た。ただ、昼と終わっ
た後の2回しかさしてない。明日も使うといっても、それも回数
が限られているので、多分僕が大人になるまで僕の手元に残ること
になる。

「では寝るまでこういうゲームをしよう。基本はしりとりなのだが、
難易度が上がる。人名で、かつ最後から2番目の言葉が次の言葉の
頭になる。だからまあ、同じ名前を何度でも使ってもいい」

「いいですね。じゃあ、僕の名前から、漆根耕太!」

「漆根耕太だから「う」だな。よし、漆根耕太!」

「むむ、いいところをついてきますね。漆根耕太!」

「漆根耕太!!」

「漆根耕太!!……って何これっ!？」何が楽しいのっ!？ただ
僕の名前連呼してるだけじゃん!確かにちよっとは楽しかったけど
!!

「今度学校でやってみるといい。10人以上がお勧めだ」

「10人以上で僕の名前を連呼するんですかっ!？」
「どんなシユールな光景だよ。」

「はいはい、もう寝ますよ」僕は電気を消して布団にもぐりこんだ。これから暑くなるからそのうち掛け布団では暑くなるだろう。そのうち夏用の毛布を出さなきゃな、と考えた。

「ちえ、これからが楽しいのに・・・」そんなありえない発言をして、さつきさんも布団に入り、3分後には寝息を立て始めた。

どうやらさつきさんのアドレナリンはやる気がないらしい。僕も疲れていたみたいで、そのうち眠ってしまった。

向こうの学校に行っても友達でいてくれるよね 1

決戦の朝はすがすがしいまでの快晴だった。カーテンを開けた僕に温かな陽光が注ぎ込んだ。眠たげに眼をこすりながらもさつきさんは機嫌がよさそうだ。今日もしつかり僕が目覚ましを止めたのに怒る気配がない。

「ついにこの日が来たのだな。私の存在を全世界にアピールできる日が！」

「いや、たくさんの人が集まるといつてもせいぜい遠くて付近の市くらいですよ」さつきさんの中では僕の学校は世界レベルらしい。

「なんだ、そうなのか。・・・がっかりだ。今日はもうやめようかな」うなだれるさつきさん。

「そんなに全世界に知らしめたかったんだ・・・」サンタクロースの変装が子供にばれた時の父さんの気分だった。要するに子供の夢を壊してしまった気分。

「あつ、でもさつきさんの頑張り次第では世界レベルになるかもしれないですよ！」

ああ、嘘をつくと良心が痛む。まあ、でも、この程度なら軽いジョークとして受け取ってくれるだろうな。

「なに、本当か！？やった！よし、私は頑張るぞっ！！」

・・・信じちゃった。ああ、良心が痛むなあ。しかしはしゃいでるさつきさんはかわいいなあ。このまま時が止まっててくれないかなあ。

「耕兄、まだいいの！？」もつとずつと見ていたかったのにつむぎの介入でそれを断念せざるを得なくなってしまった。ちなみに昨日は早く寝たので今日は早起きだ。早く学校に行くことになっているのに、さらにまだ1時間の余裕がある。

「なんでお前ももう起きてんの？」土曜日である。今日も仕事のはずの両親ですらまだ寝ている時間。それなのにつむぎはすでにパジ

ヤマからしつかり外出できる格好に着替えていた。

「は？は？別に楽しみとかじゃないし！」ばたん、とドアが閉められた。近所迷惑だ。

「180度回って逆に素直だ・・・」

やばい、こんなにつむぎをかわいいい妹だと認識したのは久しぶりだ。もう少しでときめいてしまふところだった。

「さあ、行くぞ、耕太。敵は本能寺にあり！」

「学校だよつ！！・・・つて、敵じゃない！！」

無理やりテンションをあげて突っ込みをして、なんとかときめきを未然に防いだ僕だった。

2日目は開会式がない。放送で諸注意とか、昨日の帰りと同じように頑張りましょう的な連絡がされるだけだ。だから、学校に着いてすぐにメイクをしてもらった。

「漆根。短い間だったけど、お前に会えてよかった」入道の格好のまままで及川が悲しそうに言った。

「いや、お前との付き合いはもういいよ、っていうくらい長いよ！それに僕は絶対に死なん！！」

なんか死地に赴く兵士みたいになってしまったが、この場所は確かに戦場だろう。何せ僕を恨む人々はこの町には方々に散っていて、彼女らが続々と集結するのだから。

誰ともなく円陣を組もうという声が上がリ、衝立で作られた通路の中でも一番広い（と言ってもかなり狭い）所に長い円陣ができた。

僕の右に及川、左に春日井さん。全員が左手を円陣の中心に向かって掲げる。

「漆根。早く声をかけろよ」と、及川が突然僕に言った。

「え？・・・僕？」なんで！？絶対そんなキヤラじゃないじゃん！

「早くしてよ、漆根君」春日井さんまで言い出して、周りで漆根コールが起こってしまった。僕は顔が真っ赤になるのを感じた。

「じゃ、じゃあ。絶ちやい・・・」

噛んじやった！噛んじやった、噛んじやった、噛んじやった〜！！
「絶対優勝すんぞ！！」

及川だった。まるで僕の存在など始めからなかったかのように号令をかけて「おー！」とみんなの声が揃う。正確にはみんな（マイナス）僕。

円陣が崩れてみんながそれぞれの持ちがに散っていった後も、僕はしばらくその場を動くことができなかった。うなだれている僕の肩にさつきさんの手がやさしく置かれた。

「地獄に墮ちろ！」

わかってる。わかってるよ。お前が墮ちろって言いたいんだろ。と、心の中では思いつつ、それでも僕は低い声を発した。まだ始まったばかりだけど、人が途切れることはない。混雑を避けるため、昨日よりも客同士の間隔を短くしている。僕の喉と目が持つかとても心配だった。

「っんだよ、何にも怖くねえじゃん。超つまんねえ！」

向こう側から衝立が蹴られた音がした。蹴破られてはいないみたいだが、田舎とはいえこんな感じの人も来るといふことが。街にでも行けばいいのに。

「マジだよ〜」

どうやらカップルのようだった。及川にビビらなかつたようだから、このあたりに住んでないか、それとも世代が僕らより少し上なのだろうか。

「マジ時間の無駄だわ！」男が悪態をつく。だいたい今は常時3組くらいが教室にいるので、ほか2組にしても興ざめだろう。ようするに、空気の読めないカップルがやってきちゃったわけだ。

「マジだよ〜」そのセリフとともに衝立の向こうから現れたのは、見るからに頭悪そうなカップルだった。内装の展示1つ1つに難癖つけながら僕の方へ向ってくる。

「許せん。ああいうのは許せん」僕の横でさつきさんが言った。

僕も同感だが、僕は口に出さない。出したところで、彼らを逆上させる以外何もできないだろう。さつきさんに至っては、僕以上にできることが少ない。

「行ってくる」

・・・と思つたら、柵を乗り越えて、というか飛び越えて、彼らに近付いた。

「なんだ、この看板。ふざけてんのか？」

ふざけてないよ、マジだよ。大マジだよ。

「黙って歩け」

僕が心の中で呟いている間に、男の耳元でさつきさんが囁いた。「マジだよね」と笑っていた彼女には聞こえなかったらしいが、男はきよるきよるとあたりを見回した。

「あ？おい、なんか言つたか？」

彼女は首をかしげながら否定した。この女の人「マジだよね」以外にもちゃんと日本語が話せるらしい。

「邪魔だ。早く行け」さつきさんはぶっきらぼうに繰り返す。今度は彼女の方にも聞こえたいらしいが、2人があたりを見回した時にはさつきさんはすでに消えていたらしい。僕から見ればさつきさんが常に憤慨した表情で2人の後ろに立っているのだけだ。

ドン、と男が突き飛ばされて、よろめいた。もちろん突き飛ばしたのは彼女ではない。壁に着こうとしたその手をさつきさんが掴んだ。「うわああああ」と「きゃああああ」が合唱を始めた。どうやら掴んだ手首を放して、二人を睨んだままさつきさんは消えたいらしい。2人は一目散に出口方向へ駆けていった。男は情けない悲鳴を上げながら、彼女は「マジ、マジ、マジ」と連呼しながら。

「・・・やりすぎですよ」

優雅に柵を飛び越えて僕の隣に戻ってきたさつきさんに僕は言った。さつきさんはまだ不機嫌そうだった。

「ああいう手合いは許せないんだ。私は平和主義者だからな」明らかに彼らの平和を今ぶち壊してきたさつきさんは吐き捨てるように

言った。まだよくわからない方向を睨み続けている。

「まあ、ありがとうございます」「一応礼を言っておく。衝立の向こうから中学生っぽい女の子二人組が、さっきの彼らの悲鳴を聞いてこれから何が待っているのかとびくびくしながらやって来たからだ。」

向こうの学校に行っても友達でいてくれるよね 2

「ここから消えろ」

お前が消えろ。

彼女たちは実に小気味いい悲鳴を上げてくれて、次のミイラ男にも悲鳴を上げていた。なんて素敵なお客だろう。

まずいな……。年下もストライクゾーンに入ってしまったいそうだな。まあ、入ったとしてももう僕は告白することはないんだろうけど。さつきさんがいて、それだけでいい。ほかには何もいらぬ。

そんなことを考えていたら、入口の方で聞き覚えのある声がした。

「あっ、及川さん。いつも耕兄がお世話になってます」つむぎだった。

お化けと雑談してんじゃねえ！

衝突が邪魔で及川がどんな反応をして、何を言ったかわからないが、後で聞いてみよう。

ちなみにつむぎはお化け屋敷が怖くないわけではないようだ。ほかのところでは女友達と同じように悲鳴を上げていた。確かにこういうのって正体がわからないから怖いわけで、だから僕はさつきさんは怖くないし、本物のお化け屋敷に行っても、それが知り合いだつたら絶対怖いとは思わないだろう。え、なに？お前こんなところでバイトしてたの、ってなる。

「きゃあああああ！耕兄が死んでる！！」しかし僕のところどころよりも大きな、横にいる友達がびっくりするくらいの大きな悲鳴を上げた。

「生きてるよ！！」あ、ついつつこんじゃった。ていつかつむぎの中で、高校という場所は人殺しオツケーなのだろうか。そんな暗黒街みたいな場所をイメージしていたのだろうか。それとも、僕だからオツケーか。

「なんでなんでなんでなんで！？なんで首切れてるのに生きてるの

っ!？」相変わらずだった。天然の上思いこみが激しい気質なのだ。ていうかこの場においては空気が読めない。お化け屋敷なんだから細かいことは置いといて普通に驚いてくれればいいのに。まあ、でも兄の首切りは細かいことではないのか。

「あ、そっか。耕兄前に首切っても生きてられるって言ってたもんね」

「.....」

言ったらしい。こうなるともしかしたら春日井さんにも言ったかもしれない。でもこれだけは言わせてほしい。

そんな嘘信じてんじゃねえよ!!

春日井さんはもちろん信じてはいないだろうけど、こいつはどうだろう。案外本気で僕の嘘を信じたのかもしれない。

「ちゃんと胴体と一緒に帰ってきなさいよ」

門限までに帰れ、というお母さんのようなセリフを残して僕の前を去っていくつむぎ。その背後でシュウ君が申し訳なさそうに頭を下げた。

ちなみにつむぎはちゃんと次のミイラ男では悲鳴を上げていた。

「.....嵐だったな」さつきさんが言う。どうやらここはちゃんと休んでいてくれたようだ。

「.....嵐でしたね」

家事は万能なつむぎだが、多分一人じゃ生きていけないタイプだ。兄としては危なっかしいので、目が離せないといったところか。しつかりした人とさつきさんと家庭でも築けばいいと思う。

それからも途切れることなく僕は脅かし続けたが、どうやら繁盛しているらしい。人が途切れることが決してない。それどころか並んでいる節すらある。春日井さんたちの努力も大きいのはもちろんだろうけど、何よりさつきさんの噂が大きいだろう。脅かした人が

「本当に出た〜」とか言ってるし、さつきのバカツプル以来、味をしめたのかちゃんと言葉を使って脅かしてるし。ただ、目の前で突然消えるということはしていないらしい。僕視点では常にそこにい

るんだけど、そうらしい。トラウマにしないように大人の配慮ということだ。

「タイガー&ホースだな。タイガー&ホースは恐ろしいからな。最悪それが精神疾患につながることもある」

「どっかのプロレスラーのタッグみたいですね・・・」

今度委員長にそんなレスラーがいないか聞いてみよう。そしてそんな組み合わせからは恐ろしさなど微塵も感じとれないのは僕だけだろうか。むしろかっこいいと思う。ぜひとも遭遇してみたい。

「タイガーにやられてしまえ！そしてホースに蹴られてしまえ！」

「やっぱプロレスラーだ！」いや、そうとも限らないけど。

「きゃああああ！」

あ、いつの間にか目の前に中学生っぽい女の子がいた。女の子が僕の「やっぱプロレスラーだ！」にびっくりして悲鳴をあげてしまった。なんでだ？ノリか？

「いやしかしどうだ。暗がりの中で見知らぬ男が突然「やっぱプロレスラーだ！」と叫んだら驚かないか？」

「とにかく全力で逃げます！」そんな人とは絶対関わりたくない。・・・って僕か。

その時だった。

「あはははははは！タア君だ！タア君が面白い恰好してる！」

僕は身を固めた。とても嫌な予感がしたからだ。

「なんだなんだ。お化け屋敷で笑い声とは空気が読めないな。ここは私が1つ懲らしめて・・・」そう言ったさつきさんは衝立の向こうから出てきた人を見て止まった。

「なぜだ。なぜ小学生が一人でお化け屋敷に入っているのだ・・・？」

驚きもするだろう。しかもすごく楽しそうに笑っている。展示を見てはきやはきやはと、装飾を見てはあはははと、お化けを見てはけらけらと、少女は笑う、笑い続ける。

「あーーーーー、コウタンだー！！！」

ついに懐中電灯の光が僕に当たって少女は反応する。声とともにこちらに駆け寄ってきて、柵にぶつかってものすごい音がした。壊れてないかな、どっちか。とても心配だ。

「いた〜い！コウタンのいじわる！」自分から柵に突進したくせに、僕がやったみたいになっちゃった。

何もしてないのに！何もできなかったのに！まさか今のでどうにかして僕に助けるといふことか？

「コウタン！無視をしちゃダメなんだよ！」

お化け役としてやっぱり客と雑談はできない。これはもうプライドの問題だ。さっきのつむぎに対しては突っ込みだからオツケーだ。突っ込みならなんでも許される。大統領にだって許されるだろう。なんせ優しさだから。

「絵美ちゃん。ちゃんと怖がらないとアイス買ってあげないよ！」ぼそつと、決して周りに聞こえないように僕は言う。女の子の顔がみるみるうちに青くなった。

「いやあああああ！いや、いや、いやあああ！！」教室全体に響き渡るような悲鳴がとどろいた。学校が壊れるんじゃないかと思うくらいの声だった。

「わかった。わかったから、静かに！昼休みに買ってあげるから！目の前で泣き叫ぶ見た目小5の幼女。とても犯罪チックだ。」

「ほんと!？」一瞬にして泣きやんだ。現金な娘だった。

「だからちゃんと怖がらなきゃだめだよ」

女の子は僕の忠告に4回高速でうなずいて、次のミイラ男でちゃんと悲鳴を上げた。

「耕太……。なぜ犯罪を……」

「ちがーう！」さつきさんがその単語を発した理由もちゃんとわかるんだけどこれは違う！

「君とは仲良くやっていけると思っていたんだがな。これでサヨナラだ」

「待ってください！話を聞いてください！！」

そんな僕の懇願も聞かずに去ってしまったたさつきさん。もう午前の部も終わりに近づいていたが、最後の方の人はさぞかし僕に肝を抜かしただろう。それだけの表情をしていた自信がある。

向こうの学校に行っても友達でいてくれるよね 3

昼休み。僕は急いでメイクを落としてちゃんと制服を着て、教室を出た。もちろんさつきさんを捜すためだ。しかし、さつきさんはどこにもおらず、代わりにさつきの女の子に出会った。

「コウタン！約束通りアイス買って！！」

突進だった。もう片足タツクルとかそんなレベルじゃない。むしろフライングボディアタックだ。それでも僕が後ろ向きに倒れず、受け止めることができたのは、彼女が実年齢にそぐわないくらい小柄なのと、多分委員長の教育のおかげだ。サンキュー、委員長。グツジョブだ。これならプロレスラーも悪くないと思えるよ。

「漆根君。病院に行くのと、警察に行くの、どっちが先がいいかしら。選ばなかった方に連れて行ってあげるわ」

「.....」

状況確認。見た目小5の幼女を抱えている僕（世間様でいう所の変態）。そしてそれを見た春日井さん（優等生かつ僕の被害者）。

なんてバツトタイミンゲ。

相変わらずこの超小柄な娘は僕にとって大変危険な存在だ。

「違う、違うよ、春日井さん。どんな勘違いをしているかもどれだけ引いているかも理解できるけど、その考えは全く持つて的外れだよ」僕は努めて冷静に言う。その口調とは全く無関係に、春日井さんの眉間にしわが寄って行くんだけど。ああ、きれいな顔がどんどん恐ろしい形相になっていく。

「そうなのね。そっか、その子は宇宙人じゃないのね」

「どんな勘違いっ!？」思いつき想定外だ。僕はロリコン系の勘違いを予想していたんだけど.....

「私の思考の先を行くなんて、さすが漆根君。素直に敬服するわ」
「.....」

僕に全く関係ない所で僕のランクが上がってしまった。なんだろう、

このいたたまれない気分。

「さて、では刑務所から行きましょうか」

「なんで！？せめて裁判所からにしようよ」

「だめね。先に死刑台よ」

「どこいった、法治国家！！」先に死刑台、ってなんだ？それより後がどこかにあるのか！？

「ええ。死刑になったと思われていた漆根君は改造されて、強くなつて、自分を死刑に追い込んだ組織を壊滅させに行くのよ」

「仮面ラダー！？」ヒーロー！？僕ヒーローになっちゃおうの！？

「ええ。多分あなたの前に全身タイツの黒い集団が現れると思うけど、それが全て私だからといって手を抜いちゃだめよ」

「勝てる気がしない！！」

春日井さんがヒーヒー言いながら集団で襲ってくるのか？そんなの一方的なリンチじゃないか。

「当たり前じゃない。どんなに強い人間がいたところで複数の人間でいっせいかかれば簡単に倒せるわ」春日井さんは至極当然のことを言つて、ヒーローを全否定してしまった。

「大体最初から最強の奴に討伐に行かせなさいよ。スラムじゃなくてハーゴが直接勇者を倒せばいいんだわ」

「ドラ エ2！？」

まさか、おとといの最強パスワードはこのための伏線なのか？……つて言うほど大した回収の仕方じゃないけど。

「いいえ、あれが意味を持つのはこれから。その時、漆根君はルビスの守りを手に入れて魔王に立ち向かうのよ」

「僕の将来が心配だ……」

僕が戦うくらいなら近所のおじさんが戦った方が絶対いいだろうよ。「それはそうと……」春日井さんは突然話を切り替える。これはいつものことで、こういうところもさつきさんに似ていると思う。

「……その子は誰かしら」

春日井さんはコアラのように僕の腕に抱きついていて子を指差した。

ので、釈明のために身分証明証は手放さないのだ。

絵美ちゃんはずなずいて、ハンドバックから学生証を取り出した。その時、ちらりと可愛らしいハンドバックにはそぐわない黒いものが見えたが、今は気にしない。

絵美ちゃんが春日井さんに学生証を見せる。その隙に僕は携帯のムービーをセットする。音だけ拾えれば十分なので、カメラは向けない。ばれたら多分僕の携帯は粉々になる。

「……………」

だが残念ながら、春日井さんの魔王笑いが聞けることはなかった。どうやらシヨックを通り過ぎると、いつもの5割増しで無表情になるようだ。多分今の春日井さんの顔に触れれば一瞬にして凍りつくだろう。

「えーと……………ごめんなさい」深々と春日井さんは頭を下げた。

「えっと、あの、その、二つも年上の方に失礼なことを言ってしまって……………」どこまでも律儀な人だった。なんだろう。どこか年功序列の厳しい体育会系にいたのだろうか。しかし、それは正しい反応である。ただし、それがちゃんと高校3年生相手ならば、だが。傍から見れば小学生相手に敬語で謝っている高校生という実に異様な図だ。

「うっん。全然気にしてないんだよ。絵美そういう扱い慣れてるか」

喋り方と言い、表向きの性格といい、確かに外見通りではある。ただし、忘れてはいけないのはこの子は及川の姉だということだ。

「うっん、春日井、だよ。あだ名は何がいいかな……………あっ、春日井だから、カ」

最後まで言い切る前に僕は後ろから強引に絵美ちゃんの口をふさぎ、体を持ち上げて校舎の裏まで引つ張った。これは委員長の鍛錬の成果ではなく、単なる火事場のバカ力だ。

「絵美ちゃん。今ものすごいあだ名つけようとしてなかった!？」

自然口調も強くなる。

「うっん。普通だよ。普通に、「ス」って言おうとしたもん」

「……」普通に最悪だ、この娘。

「彼女は春日井若菜っていうから。ワツカーナとかにしときなさい！」自然口調も強くなる。当たり前だ。

「うっん、とてもつまらないあだ名だけど、コウタンがそういうならそれでいいんだよ」

僕は大きく息を吐いた。寿命が縮んだ気がする。もっとも、僕は自分の寿命が何年なのか知らないで、別にどうでもいいけど。

元の場所に戻ると、春日井さんが首をかしげていた。彼女は今の状況で絵美ちゃんがつけるあだ名が思い浮かべられなかったのだろうか。まあ、この子をうわべだけしか知らないのもむりもない。正直僕は絵美ちゃんが本当に天然なのか疑っている。実は最強の毒舌キヤラだと思っているのだ。しかも、ネジが一本外れた……。

「ワツカーナになったんだよ。絵美のことは絵美ちゃんって呼んでくれればいいんだよ」

春日井さんはいまだ疑問形の顔をしていたが、時計を見てはっとして僕たちに断って戻っていった。何か仕事があるのだろう。多分僕と二人で分担するはずの仕事んだけど僕にはその存在すら知らされていないような仕事だ。

「じゃあコウタン。アイスを」

買いに行こう、と絵美ちゃんは多分言っただろうけど、最後まで聞きとることはできなかった。僕の視界、というか全感覚神経を占めていたのは、人ごみの中で僕を睨んでいるさつきさんの姿だった。「よし、絵美ちゃん。買ってあげるから、あれを出して」

こうなったらもうやつつけど。さつきさんがあれに興味を示してくれることを祈るしかない。

「むー、わかつたんだよ。コウタンはいつも変なところで厳しいんだから」ぶつぶついいながら、絵美ちゃんがハンドバックから取り出したのは、さつきちらりと見えたもの。

スタンガンだ。

説明しよう。絵美ちゃんは常にナンパその他の身の危険にさらされている。そこで護身用としてスタンガンを常備しているのだ。バチツ、と僕のすぐそばでスタンガンがうなりを上げた。僕はもう条件反射で身を引いた。

護身用ということは、危険が迫っていないときは別に使う必要はないということだ。しかし、所有者はネジ一本ぶっ飛んでいるこの子のこと。何が危険かの判断が意味わからない。もう通勤ラッシュの時間だろうが彼女がいる電車の車両にはだれ一人乗らないレベルだ。春日井さんは電車通学じゃないからこの子の存在を知らないのだろうが、実はさつきから僕らのそばを通るのを恐れてわざわざ遠巻きに歩く人がいる。

そして、なぜかわからないが、絵美ちゃんは異様にアイスにひかれている。高校3年生なんだから自分で買えばいいのに、って話なのに、いつでもアイスを買ってほしがるのだ。もう僕は餌付けされた小動物を見ている気分なのだが、その代わりに絵美ちゃんが僕といるときはスタンガンは僕が預かっていることになっている。そうしないと僕は安心してこの子の隣にいられない。

「耕太、その年でもうそんな世界に入り込んでしまったのか・・・。さつきは悪いことを言ったな。深く同情しよう。悩みがあればいくらでも私に打ち明けてくれていいのだぞ」

「さつきさんが戻ってきた。ただし、最悪の勘違いとともに。」

「ばいばい、コウタン！」

アイスを食べて、いい感じの笑顔のまま、絵美ちゃんは行ってしまった。もちろん僕がそばにいないときはスタンガンの所有者は絵美ちゃんだ。誰かが確実に犠牲になるが、僕ではない。

「最低な人間だな、君は。地割れにでも巻き込まれるがいい」

「.....」

じっと、僕はさつきさんを見る。「地割れってそんなピンポイントな」という突っ込みをこらえてじっと見る。さつきさんは「うっ」

とうなった。

「すまなかった。勝手な勘違いをしてしまったようだ。しかし君が勘違いを誘発するようなことを言うから・・・」さつきさんは口をとがらせた。

「いいですよ。それよりももうすぐ午後の部が始まりますから、急ぎましょう」

そりゃあ確かに傷ついたけど、傷はいえるものだ。それよりも遅刻して春日井さんに新たに傷をつけられることの方が大問題だ。

それからのさつきさんはなんていうか、手がつけられなかった。もとも僕は台にくくりつけられているような状態なので（鍵はかけられていないが、固定はされているので、台から自分の体を開放するのに時間がかかるのだ。なぜだ）、手なんて出せないんだけど。とにかく、制限時間があることでリミッターを外してしまったのだろう。もちろんタイガー&ホースが出現しないように気をつかっていたが、風紀を乱す奴には容赦はしない、くらの漫画にしかないな。さそつな風紀委員よろしくやっていた。僕の目の前で人が本気で泣き叫ぶのだ。なんだか僕が悪いことをしているような気になる。少なくとも、この状況が見えず、悲鳴だけしか聞こえない僕のクラスメイト達にとつて、僕は鬼畜ということになるだろう。

僕なんて所詮『畜』なのに・・・。
「今日の夕飯はなんだ」

とか、低い声で言ってみる。それでも聞こえてくるのは悲鳴。ようするに圧倒的な恐怖の前では脳は言語を把握できないということなのだろう。途中からなんか面白くなって、「将来お兄ちゃんのお嫁さんになる」とか言ってみたら、火傷した。

さつきまで悲鳴上げてた人に「は？」って言われた。さらし首なのに平謝りした。そしてさつきさんに怒られた。風紀を乱すのは絶対にだめらしい。

「ラストのお客さんです」

入口の方から受け付けの人の妙に明るい声が聞こえた。ただし、それでお客さんが怖がらなくなるかといったらそんなことはない。最後と聞けば僕らは張り切る。もう、出口はないぞ、みたいなレベルで脅かす。

「死んでわびろ！」
お前がな。

これが、僕の最後の言葉となった。いや、最期じゃないよ。なんで「死んでわびろ」って言いながら死ななくちゃならないんだ。最高のザコキャラじゃないか。

最後の人が悲鳴を上げながら出ていってからしばらくして、受付の人が入ってきて暗幕を開けた。眩しい光で思わず目を閉じる。

「良かった、生きてた・・・」冗談抜きで涙が出そうだった。絶対今日中に死ぬと思ってたもん。ちなみに僕の顔に懐中電灯が3回投げつけられた。内2回は幸運にも外れたが、一回をもろ左頬に受けてしまった。そんなに強くなかったが、多分腫れてしまっているだろう。

まあ、いいさ。こうして無事に終わったわけだし。

「さあ、急ぐわよ、漆根君」

春日井さんだった。メイクも落とさず、衣装もそのままの僕の背中をぐいぐいと教室の外に押し出した。確かにもう終わったんだから、お化け役で出歩いてもいいんだろうけど、周りの目がちよつと・・・。

「今更そんなこと気にしてどうするの？」

春日井さんはまじめな顔で、ひどいけれども正論を言い、僕はなるほど確かにそうだと納得してしまった。

廊下に出て、春日井さんが僕の手を引いた。僕はドキツとしてしまう。今までも何度か交通事故的な感じでの肉体的接触はあったが、こうして意図的に触れるのは初めてのことだ。僕は頬を思いつきりつねった。馬鹿なこと左頬をつねってしまったので、涙が出てきた。しかし、そんな僕のことなんて気にも留めず、春日井さんはぐいぐいと僕を引っ張った。

「いや、ちよつと春日井さん、どこ行くの？」

「それは、ほら・・・言えないわよ」

「ほんとにどこ行くのっ!？」

え、なに?口にできないような恥ずかしい場所に行くの?学校内でそんな場所あったかな・・・。

そして、春日井さんが立ち止ったのは、とある教室の前だった。僕らのクラスがお化け屋敷をやっていたように、このクラスでは縁日をやっていた。

「さ、入るわよ」春日井さんは僕から手を離して、やっぱり淡々とした口調で入っていった。僕は困惑が止まらない。もう僕の困惑は法定速度をぶつちぎっていた。

「ほら、早く」春日井さんに急かされて僕はあわてて入る。内装もしっかり凝っていて、昭和、って感じだった。なんて言うか懐かしさを思わせる風景だ。もつとも、平成生まれの僕は昭和時代を知らないんだけど。

春日井さんはお団子屋さんでお茶とお団子を1つずつ頼んで（時間的に残り少なかったようだ）、僕を木製の、上から布を敷いた椅子に座らせて、自分も横に座った。

「あ、ありがとう」困惑がそろそろ音速を越えようとしているが、お礼を言って、お茶とお団子を受け取った。

「間に合ってよかったわ」春日井さんは安心したように息を吐いた。時計を見ると、終わりまであと30分しかない。どうやらこのオーダーストップも30分前だったようだ。本当にぎりぎりだったよ。うで、人もまばらになっていく。というわけで、春日井さんの友達らしいお団子屋の店員さんが、余ったお団子をおまけしてくれた。そういえば僕は結局お昼ごはんを食べ損ねたので、お団子にかぶりつく。空腹は最高のソースというけれど、それを抜きにしてもおいしかった。

「無事、終わったわね」春日井さんが言って、僕から反対方向の夕焼け空を見た。

赤く輝く黒髪は本当にきれいだ。

「うん。やっぱりどれもこれも春日井さんのおかげだよ」「この一ヶ月間を思い出しながら僕は言う。

おかげで殺されかけたけど、なんてことは言わない。それを別に恨んでもいない。やっぱりそれは僕が悪いのだから。それに、そんな

ことどうでもいいと思えるくらい、春日井さんには感謝している。

「確かに大変だったわ。漆根君は何もしないし、漆根君は何もしないし、漆根君は何もしないし、漆根君は何もしないしね」

「ごめんなさい・・・」

土下座したいなあ・・・って何このセリフ！

「でも、漆根君のおかげで昨日も今日も盛り上がったのよ」春日井さんの表情には変化がない。それでもその言葉がからかっているわけでもなく、本心だということはわかった。

だてに2ヶ月以上同じクラスで過ごしているわけじゃない。

「照れるな・・・」僕は感情が顔に出ちゃうんだから。まあ、夕焼けのおかげでわからないかもしれないけど。

「ところで、妹さんに告白されたいという願望があるのかしら？」

「聞いてたのっ!？」

なぜここでオチを持ってきた！落とさなくてもいいじゃないか！ていうかそんなこと蒸し返すな！！まだお客さんの「は？」の顔が脳裏に焼き付いてるよ・・・。

春日井さんはこほん、と咳ばらいをした。

「ごめんなさい。なんだかやっぱり漆根君を見てるとなんていうか、こう、いじめたくなっちゃうのよね。前世からの因縁かしら」

「何でもかんでも前世のせいにするな！」占いなんていつもそうだ。今生きてる人間はとりあえず自分だけでどうにかしようぜ。

「では生き別れの姉弟かしら？」

「なんでっ!？」現世での因縁なら何でもいいのか？

ていうか春日井さんの中では姉弟間はいじめオツケーなのだろうか。「うーん、なんというか。漆根君はたたくとへこむから最高に面白いのよ」

「そこまで今の自分を全肯定するな！」なんて純粹ないじめっ子なんだ。

「ハリセンボンを取ってくるのは大変だったわ」

「お前の仕業かあ!!」掴みかかろうとする両手を必死に抑える僕。

しかし、当時は春日井さんが僕を恨んでいた全盛期だったからな。今は・・・どうだろう。怖くて聞けない。

「だから、こうして今、罪悪感もなく漆根君をいじめられるのだと思うと、4月に漆根君に告白されてよかったと思ってるわ」

「・・・・・・・・」

わからない。僕はなんて言えばいいんだろう。ていうかなんだ、この今から今生の別れみたいな感じ。まるで春日井さんが転校する、みたいなの。

いや、考えられなくもないな。そうだとすれば、ここまでして春日井さんが文化祭を成功させたかった理由にもなる。全員でできる最後の行事だから最高の思い出として終わらせたくて・・・。

「えっと、その、向こうの学校に行っても友達でいてくれるよね」「あれ？なんでだろう。涙が止まらないや・・・。

「あつ、この後は閉会式で結果発表があるわ」

無視された！！しかも完璧に！！・・・ああ、でも、転校じゃないということか。よかった・・・。

ピーンポーン　ピーンポーン

タイミング良く、各教室にあるスピーカーから音が漏れる。

「ただいまより、体育館で閉会式を行います。生徒は全員制服に着替えて体育館に集合してください」

言われて、僕は自分が大変面白い恰好をしているのに気がついた。

縁日にはそこそこふさわしい恰好かもしれないけど、こんなので閉会式出れるわけがない。

「あつ、やばい！早く戻って着替えなきゃ！！」

僕は急いで立ち上がる。その衣裳の袖を春日井さんが掴んだ。

「ん？どうしたの、春日井さん？」

振り返ると、春日井さんは言い淀むように唇を結んでいた。少しだけ目を泳がせると、顔をあげて僕を見た。やはりいつもの無表情のままだ。

「文化祭が終わっても、その・・・友達で、いてくれるかしら・・・

「？」

夕日を背にしている彼女の表情は変わらない。それでもそう言ってくれた彼女はとてもきれいな人だと思った。見た目だけじゃなく、心の底まで、本当にきれいな人だと思った。

「「こちらこそ、よろしく!!」」

多分、いつもよりは気の効いたことが言えたんじゃないかな。

閉会式。興奮冷めやらぬ感じで、体育館は騒がしい。おかげで委員の方の開会の辞が聞こえなかった。まあ、これから結果発表があるので無理もない。ただ、僕は周りのみんなとは違ってそわそわすることができなかった。それどころじゃなかった、というのが正しい。「こ、耕太。トイレだ、ここにトイレを持ってこい」

緊張のあまり、さつきさんが混乱していた。そわそわを通りこして、軽く震えていた。というわけでさつきさんをなだめるために、僕はどっしり構えてますよアピールをしていた。

ついに、眼鏡の素敵な委員長が壇上に現れた。発表と表彰は彼女の役目だ。騒がしかった生徒たちがしんと静まり返る。

「それでは、結果発表します。第3位、892点……」
点数がどうやって付けられているのか僕には全く分からないので、それが高いのか低いのかもわからない。

「1年2組、縁日」
隣の隣のクラスから歓声上がる。狂乱だった。3位とはいえ入賞だ。

その歓声が鎮まった頃、再び委員長の声がスピーカー越しに聞こえた。

「第2位、1004点……」
さつきさんは両手を組んで何かに祈っていた。祈ってどうにかなるものではないが、そうせずにはいられない気持ちは痛いほどわかる。

「2年3組、喫茶店」
今度は遠くの方で大歓声。遠いのになんか吹き飛ばされそうだった。さつきさんが隣で安堵の息を漏らした。僕なんかは無難に2位でいいんじゃないか、とか思っちゃう小市民んだけど、彼女はビックだ。

「続いて、第1位を発表します第1位、1240点……」

結構ダントツだった。どこがそんなに人気だったのかときよるきよろしてみるが、みんな下を向いて祈っていたので、僕一人だけ場違いな感じだった。仏教徒なのに教会でミサを受けている気分。まあ、ミサに参加したことなんてないけどさ。

「1年4組、お化け屋敷」

「きゃあああああああああああああ」

「よっしやあああああああああ」

だった。

「え？え？」僕はあたりをきよるきよる見回して見せる。

何かの聞き間違えかと思っただが、周囲で狂喜乱舞しているのはクラスメイトのはずだから（違ったらこの2ヶ月間僕は何をしていたんだろう。ほかのクラスに紛れ込んで授業を受け続けていたことにならぬのだろうか）、聞き間違いではなさそうだ。じゃあ夢かと左頬をつねってみる。悶絶。相変わらず馬鹿みだいだったが、夢ではないようだ。

「ってことは・・・」まさかまさかの・・・？

「やった、やったぞ、耕太！！これで私の存在を全世界に知らしめることができたぞ！！飛べる！今なら私は飛べるぞ！！」

隣でさつきさんがめちゃくちゃぴよんぴよん跳んでいた。飛ばれるとさすがに僕の心臓が持たないので、さりげなく白装束（まだ着てる）の裾を掴んでみる。もしかしたら僕も飛べるんじゃないかという淡い期待も込めて見たが、残念ながら僕もさつきさんも飛べなかった。

抱き合う女子たち。ハイタッチしあう男子たち。運動会でも中学の合唱会でも1位を取ったことのない僕にとってはもしかしたら生まれて初めてかもしれない、これが勝利というものらしい。

「やったな、漆根」突き出された及川のこぶしを殴り返してみる。

「いたっ！」

思いっきりやりすぎていたかった。及川は何ともない。なんだこいつは。こぶしに神経が通ってないのか！？

「それでは2位と3位のクラスは1名、1位のクラスは2名、壇上に上がってください」

委員長から指示が出た。いまだ現実感のない僕はとりあえず座り込む。2名なら春日井さんと及川だろう。

「なんでだよ、お前が行けよ！」蹴られた。蹴られて、「ああ、そうだ。僕は文化祭委員だった」と思いだし、先に行ってしまった春日井さんの後を追う。

ちなみに壇上上がるのは小学校と中学校の卒業式を除けば初めての経験。緊張でガツチガチだ。

「おめでとう、よく頑張ったわね。・・・ところで漆根君、その口元、流行ってるの？」春日井さんに賞状を、僕にトロフィーを渡しながら委員長は言った。僕は意味もわからず、「うわあ、トロフィー重いなあ」とか思いながら首をかしげた。

「ま、いつか。じゃあ振り返ってアピールして」
言われるがままに振り返る。ここで人生初の称賛なるものを受けられるのかと思いきや、僕に降りかかったのは全校生徒分のどよめきだった。

「漆根！口元！血糊！！」

及川の重低音が体育館に響いた。実に楽しそうな声である。そして僕は口元をぬぐってみる。＼シャツの裾が赤く染まっていた。

「ああああああ！！」

そういえば血のり落とすの忘れてた！急いで着替えたから確認する間もなかったし！

「なんで言ってくれなかったの！？」隣の春日井さんに文句を言うてみる。

「え、ああ。そういう口なのかと思って」

「僕は君と同じ人類じゃないのか！？どんな口だよ！」

「もうそのままでもいいわ。ほら、写真部がカメラを構えてるわよ。漆根君、トロフィーを掲げて笑顔よ」

・・・酷な。でもちゃんと笑う僕。もちろん全校生徒に引かれたわ

けだが。

向こうの学校に行っても友達でいてくれるよね 6

全てが終わってしまえば後片付けなるものをやらなければならない。僕もその例にもれずダンボールを回収場所まで運んでいた。

「はあ・・・」

ため息交じりにもなる。まさに全校生徒に恥をさらしてしまったわけだ。それもお化け屋敷に来なかった生徒たちにまで強制的に。これで落ち込まないやつがいたらそいつは真正のMだ。

「君ではないかっ!!」

「ちやうわい！」

関西弁になってしまった。そういえば関西人でもないやつが関西弁を無理して使うのって結構ださいよな。まあ、今の僕なんだけど。

「まあそう落ち込むな、耕太。おもしろかったぞ」

さつきさんなりに慰めてくれているらしい。ならば僕も大人にならなければならぬのかもしれない。

「君の慌てふためく様子がこう、な？」

「本人に同意を求めるなっ！」相変わらず。

しばらく忙しかったので距離感を忘れかけていたけれど、たしかこんな感じだった。

「やれやれ、マンガース並みの脳みそだな。この私の性格を忘れるなど」

「・・・」

マンガース。沖縄のハブ対策に持ち込まれた哺乳類だ。

「蛇と言えば私はヤマカガシが好きだな。あの毒々しい色は一度見たら忘れられん。かなり前の話になるが私に向かって鎌首をもたげられた時はさすがにビビったな」

「アウトドア派だったんですね・・・」回収場所にダンボールを置き、再び教室に戻る。

「耕太、先に帰っていいか？私はさすがに疲れたぞ」

疲れるらしい。幽霊なのに。これも相変わらず。

「いいですよ。今日は片付けだけです」

ちなみにこの学校には後夜祭がない。何年前に延焼事件があつてなくなつてしまつたらしい。火を使わなければいいだけなんじゃないかと思うのだが、そこはそれ、お堅い大人たちの考えることである。そして当日の打ち上げはだめ、とかいう意味のわからない校則まである。当日のセッションで行かれると事件になりやすいということだろうか。というわけで僕は片付けが終わつたら家に帰らなくてはならない。

さつきさんは白装束を翻して行つてしまった。これが彼女の白装束姿を見る最後だと思つと後姿だけでも凝視しておこうと思う。それとも来年のクラスでもお化け屋敷にしようか……。

そこまで考えてふと思う。来年は僕らにあるのだろうか？ さつきさんと過ごしてもう2カ月が経つ。この幸せはいつまで続くのだろうか。前に50年くらいかけて捜すと言つたが、あれが冗談なのはお互い承知の上だ。来年もこの幸せは続いているのだろうか。そして、僕にとってのこの幸せは、彼女にとっての本当の幸せなのだろうか……。

「蛇の道は蛇つて感じでほかの幽霊さんとかがいれば何かわかりそうなんだけどな」

霊媒師の方にも相談してみようか。いやだめだ。さつきさんが強制的に成仏させられてしまつたらどうする。

「蛇か。ヤマカガシが好きつてどんな女だよ……」別にいいのか。あれ？ そういえば……。

僕以外の存在。人間だけではなく犬も猫も鳥もさつきさんには反応しない。僕はそれを知っている。それなのに蛇は鎌首をもたげたのか。かなり前の話になると言つていた。だとしたらそれは生前の話になるのではないだろうか。

「漆根君。そこに立っていられると非常に邪魔なのだけれど」

「あ、ごめん」春日井さんは相変わらず忙しそうに指示を出してい

る。できる女性だ。

「春日井さん、ヤマカガシって好き？」なんとなく聞いてみたが、どんな質問だこれは。

「そうね。漆根君よりは存在を許せるかもしれないわね」

「・・・・・・・・」

知ってた。僕こうなるって知ってた。まさに藪蛇。

「そもそも見たことないわ。昔は田んぼに結構いたらしいけどもうこのあたりにいないんじゃないかしら」

一応ちゃんと答えてくれた。

「環境が変わってしまったせいね。つまりは漆根君のせいよ」

「何でもかんでも僕のせいにするな！」

春日井さんはそんな突っ込みを無視してまた忙しそうに歩きだした。結局何も分からずじまいだ。さつきさんがこのあたりに住んでいた人なら結構昔ということになるが、そもそも出身がわからないのでどうしようもない。

ふと顔を上げると春日井さんが立ち止って深く考え込むしぐさをしていた。

「どうしたの・・・？」あまりにも神妙な面持ちだったので、僕もつい恐る恐る尋ねてみる。

「漆根君もなんていうか、板についてきたっていうか。まさか鞆にヤマカガシを入れてほしいなんて自分から言ってくるなんて・・・」
「言っただけええ！」どんな拷問だ！

え？なに？フリだと思っただの？僕ってそんなこと突然ふるようなキヤラの位置づけだったの！？

「そうよね、もし漆根君に6の力でジャブを入れられたら私としては10000の力でロードローラーを持ちだすしかないわね」

「全力投球過ぎる・・・」何倍返しだ？

「目にはナイフを、歯には砲丸を、よ」

「それじゃただの拷問法の紹介だ！」何ムラビ法典だよ！！

「そう言えば拷問と言えば・・・」

「やめてやめて！春日井さんの口から『拷問と言えば・・・』から
続く言葉を聞きたくない！」

「聞いてちゃいけない気がする。多分呪いのビデオよりも怖いだろうよ。
「そう、残念ね。ぱふぱふとは一体どのような行為なのかについて
考察を深めていこうと思っていたのに・・・」

「・・・」

「なんだろう、この若干残念な感じ。しかしぱふぱふって春日井さん
の中では拷問に入るのか？」

「あれってかっこよさが上がるじゃない？私は実は顔を思いつきり
殴って逆に色男にする妙技のことだと思っのよね」

「ドラ エの主人公全員DMかつ！？」

「あの人たち魔物にやられて気持ちよさのあまり1ターン何もできな
いんだよ！？やだよ、顔変形するくらい殴られて喜ぶ勇者は！そん
な奴に世界を救ってほしくない。」

「結局自分を救えるのは自分だけっていう教訓ね。さすがスクア
エニックス。奥が深いわ・・・」

「なぜそんな大事なメッセージをぱふぱふに隠したんだ・・・？」

「ま、それはそれ。あんまり鶏呑みにしないように。」

「ああ、そうそう、漆根君。明日は日曜日だけど予定開けておいて
ね」

「ん？」

「どういうこと？・・・ってあれ？説明もせずに行っちゃうの？せめ
て時間とか言っておいてほしい。なんか用事があるってことはわ
かったんだけど、どうするんだよ、その用事が夜9時くらいに電話
をするっていうものだったら。僕の一日が大変もったいないこと
になるよ。」

「まあ、日曜日はだいたいいつも暇だけど。」

向こうの学校に行っても友達でいてくれるよね 7

一人で夜道を帰ってもまだ実感がわかない。全てが終わってしまったなんて今だに信じられない。あれ？文化祭の準備が始まるまで僕って何して過ごしてたんだっけ？だっけ？学校終わるのって4時くらいなわけだ。それで最近は何時まで学校だったし……。あれ？一日って22時間だっけ？ああ、それなら納得。

「そんなわけないだろう。人生をなめるのもたいがいにする」

さつきさんは疲れた感じで家の前に座り込んでいた。格好は白装束のまま。

「あれ？月光浴ですか？」

三日月なのに……。なんて中途半端な月光浴だ。

「そんなわけないだろう。締め出しをくらったに決まっている。まったく。君の部屋の窓にも鍵がかかっているし、つむぎはどこへ行ったのだ！」

くらったに決まっているのか。ちょっと気の毒だった。しかし、学校まで近いんだから一回戻ってきて僕から鍵を受け取ればいいのに。

「居候の身でそんなことができるかっ！」

「いまさらっ!？」

散々僕から搾取し続けていたのはこの銀河の刈谷さつきだ！

「うん、いや、それはもう冗談なのだが。私が耕太に向かって殊勝な気分になることなど決していないのだがな……」

言わなくていい、そういうことは。しかし気兼ねないということではちょっと嬉しい。

「疲れたのだよ、私は。今日のはしゃぎすぎた。そりゃ普段君といえるのも楽しい。褒めてやる」

やった~~~~!!

「だがな、私はこうして幽霊となってから、こんな風にリミッターを外したことはなかったし、それに、私の力でみんながあんなに喜

んでくれたことはなかった」

「あ……」

そっか。みんなは知らないけど、さつきさんがいなければ賞を取ることはできなかったかもしれないんだ。いやどうだろう。結構ダンツだったから春日井さんの力も多大だったけど、さつきさんの働きが決め手となったのには間違いがない。

「嬉しかった。本当に嬉しかったのだよ、私は……」

さつきのはしゃぎようは何も賞が取れたからだけではないのだ。世界になにも干渉できないさつきさんの力で世界が動いた。生きていなくても、ここに意味があるということだ。

「本当にありがとう、耕太。君のおかげだ」

「なんですか。当然あらたまって」

さつきさんは座り込んだまま僕を見上げる。さすがにあたりは暗くなっている。もうすぐ夏とはいえまだまだ春だ。

「いや、こういうときに言わないと言えない気がしてな。私は君には本当に感謝しているのだよ。何せ君がいなければ私はいまだに退屈な放浪生活だ」

自嘲気味にさつきさんは笑う。

「やだな、やめてくださいよ。それを言うならお礼を言うのは僕のほうですよ」

本当に。さつきさんがいなければ僕は今頃どうしていただろう。きつとまだ間違いを続けていて、被害者の会に追い込みをかけられている。いや、ホントにあればの話だけど。春日井さんと友達になるなんてもってのほかだ。

「さつきさんが僕を通して周囲に関われるように、僕だってさつきさんのおかげで今ここにいられます。普段恥ずかしくて言えないですけど、だから僕はさつきさんと暮らし始めた2か月前に生まれたようなものですよ。いうならばさつきさんは第2の母です」

「はははっ、君のような子供はやだな」

「僕の母さんに全力で謝れっ!!」

なんなんだよ。なんで今のいい雰囲気にわざわざ水を指すんだよ！
「いや、人の話は最後まで聞け。子供はやだ、が、君のような恋人
ならば面白いと思う」

うわお……。

「願わくば君にもいつかそう言ってくれる恋人ができるといいな。
私は真剣に言ってるんだぞ」

ちよつと話の流れがわからなくなって、首を傾げた。僕の目の前で
さつきさんは立ち上がる。やっぱり変わらず僕より背が高い。

「大方つむぎは友達の家でも行っているのだろう。そろそろ中に入
ろうか。5月の終わりとはいえこの薄着ではまだ寒いな」

荷物を置いて、さつきさんが着替えている間に簡単な夕飯をつくる。
フライパンでチャーハンを炒めながら僕は考えていた。やはりさつ
きさんは寂しいのだ。世界に一人きりであることが。僕という曇り
ガラスを通してしか世界を見れないことが。

大きく息を吸って、吐いた。僕はいつまでもさつきさんと一緒にい
たいと思う。けれどそれはやっぱり僕のエゴでしかないのだろう。

それに、それ以上に僕はさつきさんに幸せになってほしいと思うの
だ。僕を生きさせてくれたさつきさんに恩返しをしたいと思うのだ。
文化祭は終わった。だからそろそろ動かなくてはならない。探し人
が見つかっても見つからなくても僕にとってはハッピーエンドとは
いかない。でも、ベターエンドであってほしいとは思うから。たと
え僕にとってはバッドエンドになったとしても、さつきさんにはハ
ッピーエンドであってほしいから。

チャーハンを2枚の皿に盛り付ける。さつきさんのほうが少しだけ
多い。今日のところは、これが僕にできる最大限の恩返しだった。

だから焼却炉ですよ！僕のようなごみを燃やすのに効率のいいやつです！

1

翌日、アラームはかけていなかったが、携帯に朝7時半に起こされた。メールの着信だった。春日井さんから「8時半に学校に来てほしい」というものだった。

さつきさんは目覚めない。よっぽど疲れていたのだろう。僕は書置きを残して、一人学校に行くことにした。

「おはよー、漆根君。女の子よりは早く来ようよ」学校にはなぜか春日井さんと、そして委員長がいた。集合時間の1時間前に連絡が来て、しかも10分前に着いたんだからむしろ褒めてほしかったが、まあ、無理な期待はするまい。

呼び出した理由は何だろうか。出し物優勝したからなんかおごつてくれる的な感じだろうか。いや、それならわざわざ学校に呼ばれたわけがわからない。それよりも文化祭を成功させたんだからなんかおごつて的な話をされそうだ。

「荷物があるの、運んで」

「……………やっぱり」知ってたよ、こつなることぐらい。

文化祭運営のための資料とかその他もろもろを昨日片付けるのを忘れていたらしい。そこで1年4組ルール発動というわけだ。ごめん、春日井さん。

「ほんとよ。いい加減にしてほしいわね。まだ私に迷惑をかけ足りないのかしら……………と言いたいところだけど、今日に限っては言えないわね」

ん？どういうこと？

「残念ながらおまけは漆根君のほうよ」

「うん、春日井さんをね、来年の委員長に推薦しようと思って」委員長は相変わらず素敵な笑顔だ。

「えっ、春日井さん普段眼鏡外してるしデフォルトが真顔なのに！？」

やべつ、勢いでつい言っちゃった！

やめて、やめてやめてやめて！そんな目で僕を見ないで！！

「こんな屈辱初めて・・・」肩を震わせる春日井さん。

うわあ、やっちゃった！昨日友達確認が済んだばっかなのに！死ぬ、僕死ね！！

「委員長！焼却炉！この学校焼却炉どこでしたっけ！？」必死に聞く僕。さすがに委員長も笑っていなかった。

そりゃ今僕は委員長と春日井さんという二大巨匠を同時にバカにしたようなものだから・・・。

「だから焼却炉ですよ！僕のようなごみを燃やすのに効率のいいやつです！」

「ま、まあまあ・・・。ほら、大気汚染の影響とかで焼却炉は数年前に撤去されたから」

「っ！・・・じゃ、じゃあ、大きめのごみ袋を！早く！明日のごみの日にちゃんと出されますから！！」

「あつ、ごめんなさい、漆根君。そこまで怒ってないからあんまり卑屈になりすぎないで・・・。その必死さが胸に痛いわ」

僕の首がからくり人形のようにぎちぎちと音を立てながら春日井さんのほうを向く。かなり心配そうに僕を見ていた。

「・・・ていうか怖いわ」

その言葉をきいて、秒速10回くらいを記録していた僕の動悸が収まり始めた。ああ、よかった。僕はまだ死ななくていいのか。

「仲良くね。で、漆根君。その打ち合わせを私たちするから、その間に資料の片づけをお願いね、っていう話」

ほんとおまけだな、僕。くそっ、いろいろと期待をしながらここに来たのに。まあいいや。せめてもの罪滅ぼしだ。しっかりと働こう。

鍵を受け取って、事務室から校舎内に入る。団体によってはまだ片付けが済んでないところもあるので、今日だけは学校が開放されているのだ。

言われたとおりの部屋に行き、こんなにたくさんあって何に使うんだ、というレベルの資料やらが入っているダンボールをキーホルダーに書かれている部屋まで持っていく。

「ていうかいつも思うけどキーホルダーって別にキーをホルドしてないよな」むしろ掴みやすくって奪うにはいい感じだ。

というわけで(？) 4階の資料室。僕は今まで入ったことはない。普通はなんの関係もなく3年間の学校生活を終わってしまうような部屋だが、とにかくそこまでダンボールを運ぶ。資料室の棚が所々開いていて、そこに資料を並べていく。ここまでやらなくてもいいのかもしれないが、漆根家の性というやつだ。実際かなり気になる。僕は本屋で本が順序よく並んでいないと直したくなるタイプだ。

「あ………」

茶色の背表紙を見て、ふと手が止まった。資料室には歴代の卒業アルバムがずらりと並んでいた。

そういえば花山さんに頼まれていたんだ。えっと、花山さんは20回生だったな。同時に年齢までわかってしまった。まあ、だいたい思った通りだったけど。中2のところならともかく、今の僕は女性の年齢を見抜くのは得意だ。

よし、これで資料の整理も終わった。多分この機会を逃したら永久にこの部屋に入ることはない。最初で最後のチャンスということだ。これをうまく委員長に隠しながら花山さんに見せに行かなくては。別に盗もうつてわけじゃない。ちょっと借りようと言うだけだからばれなきゃいいだろう。良心がかなり痛むけど。

その前に確認しといたほうがいいな。これで違いましたじゃ笑い話にもならない。

「えっと、花山……じゃなかった、片岡だ」

さすがに年季が入っている。写真も白黒だし、制服も今とは全然違う。昔ながらのセーラー服といった感じだ。男子は変わらないな。

今も昔も変わらず学ランのままだ。おっ、あった。片岡……。あった。ずいぶん若いけど、確かに面影がないでもない。多分

これで間違いないだろう。

「あれ……」

目の端を何かがよく見る。なんだろう。何か見覚えがあるものだ。僕の親戚でもいたのかな。だとしたら、ずいぶんな奇縁があるもんだ。いや、でも田舎つてのはそんなもんかな。

ポトリ、と僕の手からアルバムが落ちる。

あれ？なんで……？なんで……？

手から落ちたアルバムは開いてあったページのまま。片岡という女子生徒の顔写真。そして、そして、その横。同じ「か」から始まる名前。

刈谷さつきがそこにはいた。

見間違いのはずがない。この僕がこの顔を見間違えるはずはない。そんなことはあり得ない。白黒とはいえ、さつきの顔を誰かと間違えるなんて、そんなことはあり得ない。

アルバムを落としたのはさつきの制服姿に衝撃を受けたからじゃない。いや、全くそれがなかったかと問われたら嘘になるけど、それよりももっと大事だからだ。

「相変わらず遅いねー。こっちはもう終わっちゃったよ」

はっとして振り返ると、委員長が立っていた。

「あ、いえ、これは……」

「あれ？昔の卒業アルバム？そんなのあったんだ。え、なに？まさかそっから探してるの……？」

「勝手な憶測で勝手に引かないでください！」心外だ、極めて。

「じゃあなんなのかな？」

「いや、偶然目の前に落ちてきただけです。近所のおばちゃんに持って来て見せてなんて決して頼まれてません」

嘘が駄々漏れだっ！馬鹿か、僕は！！

「ふ……ん」委員長はジト目で僕を見て、戸に差しっぱなしにしていた鍵を下し投げで僕に投げた。何とかそれをキャッチする。

「明後日までには返してね」

なにもなかったように行ってしまふ。器の大きな人だった。

だから焼却炉ですよ！僕のようなごみを燃やすのに効率のいいやつです！

2

僕は春日井さんと委員長に断って、先に学校を出た。本当は委員長に抜擢された春日井さんのお祝いをしたかったのだけど、それはまたの機会になりそうだ。それよりもアルバムのことが気になってどうしようもない。僕はそのまま花山さんの家に向かった。

「あらあら、本当に持ってきてくれたの？ありがとう。さ、上がった」

お言葉に甘えてお邪魔させてもらう。家の中はきれいで、庭も大きい。春日井さんの家に匹敵しそうだ。いや、春日井さんの家の中は知らないから、外見的な大きさでの比較になるけど。

おいしい紅茶と洋菓子を出してもらって、ソファに失礼する。花山さんは僕の正面で「懐かしいわあ」と連呼していた。しばらく水を差すまいと黙っていた僕だが、ついに待ち切れずに切り出した。

「すみません、この刈谷さつきさんについて教えてほしいんですけど……」

花山さんは機嫌がよさそうに僕を見上げたが、さつきさんの名前をきいて少し表情が曇ったようだ。

「さっちゃん？さっちゃんか……」
ぷっ。

ちよっと笑いそうだった。そうか、さつきさんはさっちゃんと呼ばれていたのか。あれ？でもなんで表情が曇ったんだ？いじめっ子だったのか。

いや、違う。気付けよ僕。この写真のままさつきさんが変わっていないということは、この時期に亡くなったということに決まっているじゃないか。

「この学校、昔はお嬢様や御曹司が結構いてね。さっちゃんもその一人だったの。そういう子たちってあんまり私たちとは関らなくて、なんだか雲の上にいるみたいだったわ。確かに雲の上にはいたのかも

しれないわね。

でもさつちゃんは、お嬢様だったけど、気づったところがなくてね。・・・しゃべり方は男の人みたい、というか舞台役者みたいだったけど、実際その影響だって言ってたけど・・・驕ったところもなく、明るくて、面白い子だったわ」

納得。今も昔もさつきさんは変わらないらしい。わがままなところ以外は。あるいはその部分だけは級友には隠していたのかもしれない。

「クラスの中心にいて、優しい子だったわ。でも、病気でね、それが何の病気かは私にはわからないんだけど、卒業式には出て来れなかったの。亡くなったのはその一年後・・・」

「・・・なんか許嫁がいたみたいですけど」

僕が聞きたいのはそこなのだ。僕がさつきさんを唯一救える方法。さつきさんの探し人。

花山さんは訝しげに僕を見た。

「知ってるの？・・・いつもさつちゃんが話してくれたわ。年が上の方でね、今はもうないけど、当時は有名な会社の御曹司だったわ。とっても面白くて優しい方だと自慢していたからよく覚えているわ」

「その人は今どこに・・・」

花山さんは暗い顔になる。

「私はもちろんその人には会ったことはないけど、名前は聞いていたし、有名な会社だったから、そのことは報道で知ったわ」

ほかの誰かと結婚してしまったということだろうか。さつきさんが亡くなって・・・いや、そんなこと僕が責めるべきではないだろう。誰も責めることはできないだろうし、さつきさんだって責めたりしないに違いない。

「・・・交通事故、だったそうよ」

視界が暗転する。次いで目の前が真っ白になる。見えない何かに後

頭部を抑えつけられているかのように顔を上げることがかなわない。何かを見ることができない。

これが、結末。これが……。

「そう、ですか……。」

死んでいる。さつきさんの探し人はもうすでにこの世にはいない。

それがこの話の結末。ハッピーエンドなんてとんでもない。バッドエンドですらない。どう進んでも悪くなる。ワーストエンド。

どうしてだ。どうしてそんなにうまくいかない。いいじゃないか、別に。あんなにいい人がどうして不幸にならなくちゃいけない……。

これが運命だつて言うなら、確かにこれじゃ神様だつて仕事がなく
なるはずだ。

「お墓もね、その方のお父様がさっちゃんのそばで眠りたいだろう
つて……。」

「その場所を教えてください！」

何かを考えてというわけでもなく、僕は声を上げた。突然声を上げ
た僕に花山さんは首をかしげた。

「いいけど……。知つてどうするの？あなた、どうしてさっちゃん
を知っているの？」

「とにかく、教えてください！」

ぐっと頭を下げる僕。その剣幕に、花山さんは引いてくれた。何か
あると思つたのだらう。それでいい。僕とさつきさんの関係は人に
話せるものではない。

「わかつたわ、ちょっと待っててね」

花山さんは住所をメモしてくれ、アルバムと一緒にくれた。

「わざわざ持ってきてくれてありがとう」

花山さんの家を出て、僕は大きく息を吐く。もう夏も近いのに体が
勝手に震える。まるでさつきさんと再会したあの日みたいだ。ただ
違うのは震えているのは体ではなく心のほうで。

頭の中で鳴り響く時計の音。僕とさつきさんの終わりを告げるカウ

ントダウン。人生は唐突に全てが変わる。こんなに早く終わりは訪れてしまう。それでも僕は止まらない。止まるわけにはいかない。

「馬鹿もの！どこへ行っていたのだ！私を暇死させるつもりかっ！」

すでに起きていたさつきさんは僕が帰ってくるなり声を上げた。いつも通りの愛しい声、愛しい姿。それでもこの愛は成就することはありません。そんなことするわけにはいかない。2年以上好きだった相手。いや、きつと僕は死ぬまでさつきさんを好きであり続ける。たとえ僕に彼女ができて、結婚しても、子供ができて、孫ができて、ちゃんと天寿を全うしても。それでも僕はさつきさんが好きだろう。僕はそれを誇りに思う。この人に出会えて、この人を好きでいられる僕自身を生まれて初めて誇りに思う。

それでも、そんな風に日々変わって、日々進んでいく僕と違ってさつきさんは変わらない。変わることができない。今まで変わらずに来たんだろう。そしてこれからも変わらないんだろう。

変わらない、変わらない。それはどれほどの退屈なのだろうか。名前も顔さえも覚えていない相手を探しながらさつきさんは生きてきた。死んでいるけど、一人ぼっちで生きてきた。それは、一体どれほどの苦痛だったのだろうか。

「さつきさん、明日は振替休日なんです。それで、僕とデートしてくれませんか？」

僕の唐突の発言に、さつきさんはまだ少し怒った目で僕を見た。

「む？・・・それは楽しいのだろうか？」

「ええ、もちろん。保証します」

「そうか、ならいいぞ」

さつきさんは笑い、僕は笑わなかった。笑えなかった。それがどうしようもなく悲しい。

それでも、僕は止まらない。

いつもと変わらない。いつもどおりさ 1

家の近くを流れる川。

僕とさつきさんが最初に出会った場所。そして再会を果たした場所。どんなにいい夢を見ているのかと思っていたけれど、これは夢じゃない。ちゃんとした現実だ。現実離れしてるけど現実だ。

「水というのは循環しているな、耕太。重力に従って川を流れ、蒸発し、雲となり、雨となってまた川に戻る。実に壮大な旅だ」

などと、さつきさんは突然哲学めいたことをつぶやいた。とりあえず乗ってみる。

「あるいは命というのもそうなのかもしれませんね。なんかこう、生まれ変わり、みたいな」

輪廻転生？・・・だっけ。よく知らないけど。

「ふむ・・・そうか。耕太が重力に従って流れ、蒸発し、雨となって降り注ぐのか・・・」

「怖いわっ！」ホラーだ。無駄に想像力なんて持つもんじゃないな。

「おっと、耕太にできるのは蒸発くらいか」

「・・・」

事件だ。確かにできるかもしれないけど、それを言うなら僕にだって重力に従って流れられるぞ！

「自慢にらん！！」

うん、その通り。本当に自慢にならない。

「ホラーと言えばこの前実に恐ろしいと思った言葉がある。「首を長くして待つ」という慣用句だ。妖怪だ！」

「それを言うならもっと恐ろしいのは「首が回らない」ですよ。逆に首が回るってどういう状態なんだって話です」

ばか話中。

「その通りだ！つまり人間というのは生まれながらにしてやりくりができないことを意味しているのだな。首が回るような奴はもはや

人間ではない！底辺を基本においた実に弱者に優しい言葉ではないか」

さつきさんはうむうむとうなずいた。

「春日井さんは決して使わない言葉ですね・・・」

彼女の足切りラインの高さは異常である。なんせとつさの返答がでないだけで人間失格呼ばわりだ。少なくとも彼女にとって僕は人間ではない。

「ひとでなし、という言葉もあるな。ヒトデなしではないぞ。人で無し、ということだ。つまり、「ひと」というのは外見や遺伝子ではなく、心が重視されているというわけだ。もしかしたら教育というのは「ひと」になることを目的としているのかもしれない」

「えー、でも普通はそこまで考えませんよ。少なくとも僕は考えたことないです」

「君はひとでなしだな！」

「いきなりひどい!!」

一気に来た！・・・確かに論理的にはそうなるけども、あんまりだ。

海。

ここで僕はさつきさんに思いをぶつけた。あの時は本当に悲しかったけど、今となっては忘れてしまっている。ここで覚えているのはかわした言葉と、誓った思いと、唇の感触だけ。

「そういえば君はウミウシになりたいと言っていたな・・・さあ」

「さあ、ってなんだっ!？」

「こつこつというのはタイミングが大事なのだぞ。そしてできるだけ早い方がいい。だから、ほら」

ほら、ってなんだっ!？

「・・・えつと、つまり僕にどうしろと？」

こんなにひどい無茶ぶりもいまだかつてない。まるで春日井さんとしゃべってるみたいだ。

「丸くなるだけでも許してやるぞ。私は笑いに関して寛容な女だ」

「やらせておいて大爆笑ですか!!」

鬼だ!

「あたりまえだ!私をあまりなめるなよ!!」
なめねえよ。

「早くやつて見せてくれ。この通りだ!」さつきさんは腕を組み、
胸を張った。

どの通りだ・・・?

「そこは普通頭を下げるところじゃないんですか?」いや、下げられても困るけど。

「はあ?君なんか私に私が頭を下げるわけがないだろう。ばかもの!」
「逆切れも甚だしい!!」極まるるところまで極まったという感じだ。
もしくは落ちるところまで落ちたというか。

「うむ・・・。わかった、頭を下げることはできないが、手は合わせてやる。頼む。一度だけでいいんだ。なつ、なつ?」

「なぜにそんな必死な・・・」そこまでして見たいのか?

しょうがないな。やれやれ、周りに人はいないみたいだし。ほかでもないさつきさんの頼みだ。それにすねられたら今日一日大変なことになるし・・・。

よし!いつも通り僕の恥を大盤振る舞いしますか。

「一発芸やります!!」

拍手喝采。・・・いや、さつきさんしかいないけど。

とにかく僕は砂浜の上にならずにまいった。

「ウミウシ!」うわあ、すぐはすかしい。僕もう16歳なのに・・・。

あれ?さつきさんから反応がない。おかしいな。シーンとしている。多分僕の心臓ごと止まってしまっている。顔をあげて見ると、しっかりと引いているさつきさんがいた。

「ああ、うん・・・。」じゅめん

本気で謝られちゃったっ!!

「いや、まさか本気でやるとは・・・。」

「ウミウシになりたいっ……！」

いつもと変わらない。いつもどおりさ 2

気を取り直して僕とさつきさんは電車に乗る。平日の昼前だから人は少ない。車両を1つ貸しきってしまった。

「そういえばさつきさんって僕が誰かと話してる時って大概黙ってますよね。あれが大人の配慮ってやつですか？」前々から気になっていたの聞いてみる。もっとも、僕が誰かと話している時に話しかけられても応対できないんだけど。

「まあ、それもなくてはないが、基本的にわたしは人見知りなのだ。だから何となく知らない者が近くにいと居たたまれなくて、な」「うわあ、かわいい。・・・あれ？でも僕ときは普通でしたよね？」そういえばそうだった。まあ、あのときは橋の上に僕一人しかいなかったのだけど。人見知りというのなら僕は知っていたのだからうか。

「ん？まあな。しかし耕太、私の話を聞いていたか？私は人見知りと言ったのだぞ」

「ええ、ですけど僕に話しかけてきたときは普通だったなあ、ってうん、そうだ。確かに覚えてる。」

「君は自分のことを人だと思っていたのか？」

「そこからっ!？」僕は人だと認識されてなかったのか？しかも初見でっ!？」

「君は「僕は人間じゃないですよ」オーラが全身からみなぎっているのだぞ。知らなかったのか？」

「マジすか・・・」

「実はな、あの時の私はかなり勇気を振り絞っていたのだ」さつきさんは突然話を戻す。これもいつものこと。実に慣れたものだ。

「そう考えると今からでも萌えてきます」もじもじしながらああ。。。

「ああ、燃えてしまえ。今からでも燃えてしまえ」

「人体発火だー！大事件だ！」叫ぶ僕。

車両を貸し切りしててよかった。

「発火じゃない、放火だ」

「人体放火っ！？燃やす気なのっ！？」

「そして、これはどうしようもない私のくせのようなもののだが、私は突っ込みを我慢する事が出来ないのだ」

「ああ、何となく分かります。僕もたまたま電車の中で見知らぬ会話に突っ込みそうになりますから」

この前もあつたなあ。「いやそこは鍵かけるだろっ」て本気で言いそうになった。

「そこで我慢してしまうところが君の限界だろうな」

「その限界を超えた僕に一体何があるというのだろうか・・・」ただの変質者だ。

「だから普段は人に見えないようにして突っ込むのだが、あの時は間違えて姿を現したまま突っ込んでしまったのだ。まあ、どちらでも関係なかったんだがな」

「ですね・・・しかし何で僕にだけ見えるんでしょうね。靈感？みたいなのも生まれてこの方感じたことはありませんし・・・」皆無である。もしかしたら幽霊を見ていたにもかかわらず、気付いていなかったのかもしれないけど。

「さあな。君は人間じゃないからじゃないのか？」

「結局そこに落ち着くのか・・・」
僕はひとでなしということである。でも、僕はひとでなしで本当に良かったと思う。

いや、なんか人間捨てたみたいだなセリフだが、この2ヶ月間があったのはそのおかげだというのなら、僕は人間でなくていい。

「そうそう、そういえばつむぎとシユウ君はどんな感じだ？付き合つて一カ月以上たつが、そろそろ血みどろの関係になっているのか？」

「あんた中学生に何を求めてるんだよ！！」あんなの昼ドラにしか

ねえよ！

「・・・うーん、どうですかね。僕はあんまりあいつに干渉しませんから」

「シスコンのくせに・・・」

「それに関しては断じてノーと言わせていただきます！！」100人がいて100人がシスコンと言っても僕だけはノーという。尊厳がありますから。

「おとこの夜に家にいなかったのは、文化祭をシュウ君と一緒に回って、そのまま夕飯と一緒に食べたからだそうです」

「・・・中二の分際で。」

「お、おい、耕太。またジェラシーモードに入ってるからな」

おっと危ない。自粛自粛。

「シュウ君とはたまに会いますよ。いい子ですよね、やっぱり。つむぎの中学での伝説をいろいろと聞かせてもらってます」

「伝説！？そんなものをつくっているのか!？」

つくっているんです。

いろいろありすぎて話すと長くなってしまつので、1つだけ簡潔に話そう。

つむぎは中学校　つまり、僕の母校にあたるのだが、そこでは有名人であるらしい。らしいというのは僕もシュウ君づてに聞いたからだ。断っておくが、つむぎは特別に優等生であるわけでも逆に不良であるわけでもない。ただの家事が必要以上にできる普通の女子中学生だ。そんなつむぎが有名である原因はただ一つ、僕こと漆根耕太の妹であるということ。

ようはすべての原因は僕にあるわけで、ここで語っている暇があったら今すぐ帰って土下座しろ、という話だが、それは後にさせてほしい。とにかく、僕のせいですつむぎの名まで知れ渡ってしまっているわけだ。それに関しては全く申し開きができない。考えて見れば、去年1年間は同じ学校に通っていたのだから、僕は気付くべきだったのに、全く気付かなかつた僕の盲目さ加減は笑うしかない。

つむぎ本人にしてみれば全く笑えない話だが、とにかくそういう理由でつむぎは有名人なのである。しかし、だからと言って「あいつ調子乗ってんね」などと絡んでくる上級生などいない。何せみんながみんなつむぎは一番の被害者であることを知っている。むしろ廊下ですれ違った初対面の上級生に「大変だね。けど頑張ってるね」と言われちゃうくらいだ。

しかし、それだけの理由で同級生だけでなく、上級生、下級生、ひいては校長を含めた教職員全員にまで名前が知れ渡るものだろうか。その理由、というか事件こそがつむぎの伝説である。

ある日のことだった。新任の先生が愚かにも、つむぎのことを名字で呼んだのだった。いや、だからなんだよ普通じゃねえか、と言っではいけない。僕と同じ名字である。つむぎはキレた。研磨したてのダイヤモンドカッターのように瞬時にキレ、先生に掴みかかった。
・・・らしい。

うん、何してんのあの子・・・。
「よほどいやなのだろうな。耕太と同じ血筋であるということが・・・」

実はめっちゃくちゃショックな僕であるが、それよりきついのは間違いない。つむぎの方なので、それを表に出すことはできない。

「それと、つむぎとシュウ君の共通の話題として、僕がよくやり玉に挙げられる話とか・・・」

「ははっ、愛されてるではないか」
随分と勝手なポジティブシンキングだ。

「いや、僕はそこまで楽観的に人生を見れませんけどね」
シュウ君もさつきさんと同じようなことを言っていたが、じゃあ僕の立場になってみるか？という話だ。

「ところで耕太、てつきり私は映画でも見に行くのかと思っていたのだが違うようだ。シュウ君のデートコースをそのままパクるのではないかと思っていたのだが・・・」
「
どんだけ残念なキャラなんだ、僕は。」

「いったいどこへ向かっているのだ？」

「それは行つてのお楽しみです」僕は満面の笑みを浮かべた。心に反する笑みを浮かべた。

「そうか。まあ、面白いのならば私はどこでもかまわないのだがな」さつきさんは窓の外を眺める。ちょうどトンネルに差し掛かって、窓には僕が映る。さつきさんも映る。でも、それが見えるのはこの世界で僕一人。

行ったこともないような無人駅に僕らは降りる。さつきさんはいぶかしげな視線を僕に向けたが、それに対して僕は何も答えなかった。車のない、木造建築ばかりの町並み。駅を出れば、正面の坂を登ったところに目的地がある。だからこの坂が、僕とさつきさんの最後の道。

「だいぶ暑くなってきたな。しかし、私は暑いのが結構好きだ。熱いバトルも好きだがな」

「僕はプロレスラーにはなりません!!」

なりそうで怖い。委員長の圧力とかで。

「無理だ、君には。私に任せておけ」

うん、絶対最強。KIDよりも速く相手を瞬殺できる

「理由は特にない。いや、あつたのだが忘れてしまったというのがきつと正しいんだろうな」

「前に言っていた、唯一覚えている光景が夏だからなんじゃないですか？」探し人の唯一の記憶。自分が生きていたことを立証できる唯一の記憶。それは幸せだったからこそ覚えていられたんだろう。

「うん？ああ、そうか。そういうことなのかもしれないな」さつきさんは初夏の太陽を見上げてつぶやいた。

「基本的に僕は暑いのが寒いのが苦手です」

「ふん、軟弱者が」

「えーえー、僕はどうせ軟弱で脆弱で最弱ですよ」

僕は弱い。ただ言い訳をさせてもらうなら僕の周りのさつきさんとか春日井さんとか及川とかが強すぎるんだ。軸がぶれないというか「僕は春が好きですね」

「ああ、なるほど。脳天春男か」

誰がだ！

「私もまあ、春は好きだがな。秋も好きだ。だが、どうしても冬だ

けは嫌いだ。別に寒いのが苦手というわけでもないのだがな、とにかく好きになれない。なぜだろうな。これはどうしてもわからんが、なんとなく気持ち沈んでしまうのだ」

「それは」

きつとさつきさんがなくなったのが冬のことだったからだろう。頭では忘れていても、しっかりと刻まれているのだ。魂に刻まれているのだ。

「しかしだ、私としては一年の4分の1以上が嫌いというのは実にもつたない気がする。今年の冬は頼んだぞ、耕太！」

「……」僕は答えない。答えるわけにはいかなかった。嘘でも答えてしまつたら、きつと僕は揺らいでしまつだろう。それほどまでに僕は弱い。

坂道は長い。けれど、それは残された時間としてはあまりに短いカウントダウンだった。

古めかしい寺。それでもさびれているという印象は受けない。手入れはしっかりとなされている。

「ここは……?」さつきさんは立ち止る。僕は合わせて止まることなく、足を進めた。詳しい場所も聞いている。大きな道をまっすぐ行つて、3つ目を曲がり、そこから4つ目のお墓。そして5つ目のお墓。

足を止めた。足を止めて、愛しい人の名前を見た。隣に眠る人の名を知った。

残酷な現実。それをさつきさんに突き付けたことは自分でもわかっている。でも、このまま答えもなくさまよひ続けるよりはきつといふことだと思うから。さつきさんにはちゃんとつながっていてほしいから。

僕は大きく息を吸った。もう夏も近いというのに喉が震える。そして、肺にいつぱいにたまつた空気を吐き出し、さつきさんを見る。さつきさんは驚いた顔のまま、微動だにしない。

「ここが、あなたのお墓、そしてあなたのお嫁の……お墓

です」

「・・・・・・・・」

さつきさんは何も言わない。そして自分のお墓にも目をくれない。ただ、何年も探し続けた相手、自分の許嫁のお墓だけをあっけにとられたように見ている。

本当にうまくいかない。どうしてこんなにいい人が幸せになっちゃいけないのか。どうしてハッピーエンドじゃないのか。神がいるなら問い詰めてやりたい。意味などなくても殴ってやりたい。

「そうか、待っていてくれたんだな・・・」

「え・・・・・・・・？」

じっと、許嫁のお墓を見た後、さつきさんはつぶやいた。そしてその目が僕に向く。その顔はどんな芸能人よりどんな絵画よりどんな彫刻よりどんな女神よりこの世界よりも美しい、微笑みだった。

「呼んでいる。呼んでいるんだ。だから私は行くことにするよ」その微笑みのままさつきさんは言った。

そうか、そういうことか。さつきさんはこうして幽霊としてさまよっていた。許嫁はそうではなく、ここでずっと待っていた。許嫁の姿は僕には見えない。だが、そんなことはどうでもいい。なんて、素晴らしいんだ。僕は運命を祝福する。神様、あなたに感謝する。

「君を一人残していくのは少し心配だがな・・・」さつきさんは僕に手を伸ばした。2ヶ月間一緒にいて、決して繋がらなかったその手。僕はその手を握り返した。

「大丈夫です」

僕は言う。

「大丈夫です。さつきさんのおかげで僕はもう大丈夫です」どれだけ感謝しても足りないくらい、さつきさんは僕を導いてくれた。だから、大丈夫だ。

「そうか」さつきさんは笑う。僕も頑張って笑い返した。

さつきさんは、許嫁のお墓に向かって手を伸ばした。初夏の陽光がさつきさんの指先に降り注ぐ。そしてそのまま光に包まれるように

してさつきさんは消えてしまった。

音がない。僕は一人、ここに立つ。

「さよなら、さつきさん……」

大きく息を吸って吐く。喉が震える。さつきさんが行ったたであろう
天を見る。雲ひとつない青空が眩しかった。

いつもと変わらない。いつもどおりさ 4

携帯のアラームを止め、即座に目覚ましを止めた。

「ああ、もういいんだった」

一人きりの部屋で僕は独り、つぶやく。体を起してベッドを見る。そこには誰もいない。目覚めのいいさつきさんが不機嫌に僕に攻撃をしてくることもない。ただ、真っ白なシーツが平らになっているだけ。この部屋には僕一人だ。

今まで通り、僕一人だ。

昨日はなんとなくベッドで眠る気になれずにまた布団で寝た。家族をごまかすためにしばらくは布団で寝よう、とか自分で言い訳を考えてみたが、何の気休めにもならなかった。ただ空しいだけだ。

「お前の限界を見ることはないんだな」目覚まし時計に話しかけて見る。目覚ましの時刻はいつもと同じ。ゆっくりと学校に行く準備をした。それでもいつもよりずっと早い。学校に行くまで暇になっってしまう。なにもやることがない。

「なんだよ、僕ってこんなつまらない人間だったのか」せつかくさつきさんに鍛えてもらったのに。

しょうがないから早くに家を出た。昨日はあんなに晴れていたのに今日は雨が降っている。いじめかよ、思った。

弁当を二つどころか一つも作る気にはなれない。昼ごはんは後で考えよう。

傘を差しながら、なんとなく遠まわりをしようとして毎朝さつきさんと通っていた道を覗いてみる。もちろんそこには何もなし。ただの通りが少ない道にいるのは僕一人。

いつの間にか学校の前にいた。どこをどう歩いたかなんて全く記憶にない。それどころか歩いて学校に来た覚えさえなし。もしかして僕は家の前で宇宙人にさらわれて、学校の前で下してもらったのだろうか。

そんなタクシーみたいな・・・。

昼ごはんは適当な理由をつけて、及川におごってもらうことにした。「なんだよ、漆根、今日は元気ねえな。またフられたのか？」及川は二人前の学食を目の前に並べて聞いてきた。このデリカシーがない明るい感じこそがデリカシーなんだろう。僕にだってそれくらいはわかる。

「うん、まあそういうことになるのかな」

「でもよ、いつものお前なら落ち込む・・・つか泣き叫んで発散してるだろ？そんで告白周期がさらに短くなって、俺にしてみりゃさらに面白いことになる、と」

「泣かないよ」

うどんを一本すすって、笑って見せた。

「・・・だって、これは悲しいことじゃない。むしろ喜ぶべきことなんだ」僕は言う。自分自身に言い聞かせるように。

「何言ってるかさっぱりなんだが・・・。お前本当にフられたんだよな？」

「うん。・・・でも大丈夫だ。僕は大丈夫」

「・・・そうか。まあ、詳しく聞くんもりはないけどよ」及川は言って、目の前の定食×2にかぶりついた。

放課後はごくごくあっさりと訪れた。普段はさつきさんとルーズリーフ攻防戦があったものだが、もちろんそれもない。だからと言って授業に集中できたと言えはそんなこともない。

「どうしたの、漆根君。今日は雨にぬれた捨て猫みたいに元気がないわね。始めから落ち込まれているとこちらとしてもいじめがないのだけだよ」

春日井さんが現れた。そしてまだ僕をへこませるつもりなのか？

「うっくん、元気がないなら私の大事なストラップ・・・」

くれるのだろうか、そんな大事なものを。でももらっても今日の僕

じゃいつもの5割増しで気のきいたこと言えないと思うけど。

「……………にしてあげるわ」

「リンチか!? ボコボコにして吊し上げようとしているのか?!?」
とんだ慰め方である。あ、でも突っ込んだらなんか元気が出てきた
気がする。

「ありがとう、春日井さん」

「ストラップにしてももらえるのが嬉しいのっ!?!」

「じゃなくて! ……あつ、でもこの文脈だとそうなっちゃう!?!」
とんだDM発言だった。さすがにどれだけ落ち込んでもそこまで落
ちるつもりはない。

春日井さんと別れて家路に就く。雨脚は朝よりは弱まっている。傘
に落ちる雨音もどことなくやる気がない。

さつきさんがいなくなっても世界は変わらない。ただ僕だけ
がいつもと違うだけで、世界は容赦なく回り続ける。休むことなく
巡り続ける。

悲しくても終わりはない。苦しくても終わりじゃない。僕の人生は
終わらない。僕の人生は止まらない。それはきつと誰にとっても同
じことで、そんな苦しみを背負いながら誰もが生きている。

だから僕も生きていこう。ちゃんと胸を張って生きてやろう。だっ
て世界はこんなにも広い。世界はこんなにも美しい。そして、そう
やって生きていくことで僕はきつと彼女と過ごした日々を誇れると
思うから。

「ただいま」

いつも通りつむぎのリアクションはない。キッチンで何かを炒める
音が聞こえる。とりあえず着替えは後にして、料理を手伝おう。部
屋に戻っても誰もいないんだし。

「耕兄、今日なんか元気くない?」夕飯の席で箸を進めながら唐
突につむぎが言った。そんなに落ち込んで見えるのか、今日の僕は。
「いや、大丈夫だよ。いつもと変わらない。いつもどおりさ」

変わらない。何も変わらない。ただ、少しばかり非日常が日常に戻っただけだ。幸せは長くは続かない。だからこっちが本当だ。

「そう？なんか・・・まあいいや」つむぎは食器を洗って2階に行ってしまった。

うん、こんな感じだ。

天井を見上げると小さなしみがあった。大事にしているこの家でも4年もたてば汚れてくる。同じように、僕のこの大事な記憶もいつか薄れてしまうのだろうか。

「母さん、週末に頑張るだろうな・・・」多分相当必死になる。僕が駆り出されないことを祈るばかりだ。

そんな僕のつぶやきに答えてくれる人はいない。だけどこれが正常。思えば僕は幸せすぎた。何のとりえもない、それどころか生きていくことが周囲にとつての不調和だった。最近になって周囲はそ

こまで考えていなかったんじゃないかと思えるようになってきたが、そんな僕のそばにさつきさんはいてくれた。こんな幸せなことはほかにないだろう。こんなことを面と向かっていえばさつきさんは「私はただ君が面白いからいるだけだ、勘違いするな、ばか者！」と、声を上げるに違いないけど。

さつきさんを思い出して思わず顔がほころんだ。思い出はどれも楽しいものばかりだ。

階段を上って部屋のドアを開ける。

「ほう、おはへり」

そうやってお菓子を頬張りながら僕を迎えてくれた人はもういない。買い置きのお菓子が開けられる日は来るのだろうか。

「一人ってこんな退屈だったんだな」

カーペットの上に胡坐をかいて僕はひとりごちる。沈黙が耳に痛いという感覚。それも久しぶりのものだった。

僕は幸せだった。さつきさんはどうだったのだろうか。僕と一緒にいて、よかったと思ってくれただろうか。どちらにせよ、彼女にとっては今が一番いいはずだ。それが彼女にとっての正常で、日常のは

ずだ。

宿題をやって風呂に入って、歯を磨いて、いつもより相当早い時間に僕は布団を敷いて横になる。まだベッドで寝る気にはなれないけど、携帯のアラームは切つてある。きっとそのうちベッドが使えるようになるだろう。

おやすみ、今日の僕。明日はきっと晴れるだろうさ。

なんて、僕は根拠もなく自分に言い聞かせて目を閉じた。

ドカン、と爆撃でも起こったんじゃないかと思うほどの轟音が耳元でして、僕は目覚めた。顔に何か固いものがあたって悶絶する。

なんだ、何が起きた・・・？ま、まさか、ついに日本でもテロが起きたのか。でもなんでこんな田舎町に。それとも僕の命を狙う被害者の会の仕業か・・・？とにかく逃げるんだ！携帯と上着だけいい。まずは命を守るんだ！！

そう思つて顔を上げた。瞬間、僕の思考が停止した。

「ふふん。ようやく私の勝ちだな、耕太。このねぼすけめ！」

まだ顔が痛いから夢なんかじゃないはずだ。彼女はちゃんとここにいる。

現実にはここにいる。

「さつきさん・・・どうして・・・？」

ちなみに轟音の正体を見て見ると、僕の枕もとで目覚ましが大破していた。つまりさつきさんの腕力がビル10階分の高さの位置エネルギーを凌駕したということだ。ほんの少し右にずれていたら僕の頭は今頃地球上になかっただろう。床にダイレクトではなく布団越しに叩きつけたのはさつきさんなりの配慮だろうが、あまり意味をなしてはいなかった。床はしっかりとへこんでいる。僕は実の母親の手によつてミンチになるだろう。

そんな僕の心配をよそにさつきさんは唇を尖らせた。

「そう、それなんだ、聞いてくれ、耕太。昨日の夕飯なんだがな、ありえないことにやつは白味噌のみそ汁にニンジンを入れたのだ。白味噌は赤みそと違って野菜の味がダイレクトに出してしまうではないか！みそ汁なのにニンジンの甘い味がするのだぞ！！」

個人的には別にいいというか、どうでもいいと思うが、さつきさん的にはアウトらしい。そういえば漆根家では出てこない組み合わせだな。

さつきさんはプリプリ怒っていた。超可愛い。人妻相手にかわいいという形容はどうかと思うけど、かわいいものはかわいいんだもの。「だから実家に帰らせていただくことにしたんだ！しばらくここにいることにするー！ー！」
思わず、顔がほころんだ。

どうやら、僕とさつきさんの非日常はもう少し続くことになりそうだ。

END

いつもと変わらない。いつもどおりさ 5 (後書き)

ありがとうございます！

これにて完結です。

続編は考えてはいますが、掲載は未定です。

続編や別作品の作品への参考にしたので、評価をつけていただけると大変うれしいです。

では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6490s/>

エキセントリック・ビューティ

2011年5月12日00時29分発行